ス、我ガ州ニハ、但斷頭將軍アリテ、降將軍ナシト」

【檀特山】（ダンダクサン）　中天竺健馱羅國に在り、また彈多落迦（ダンタラクカ）といふ「西域記に「彈多落迦亦曰二訛也一」普賢菩薩證明功德經に「於二――一六年苦行」

【膽斗ノ如シ】（ダンノ）　膽の大なるに喩ふ、蜀志に「姜維死スル時、剖カル、膽斗ノ大サノ如シ」斗とは酒を酌む器、唐書に「膽大於身」また十升を容るる「マス」

【檀那】（ダンナ）　檀越に同じ、韻府に「梵語陀那鉢底（ダナバダイニフ）、唐言施主、稱二一者、訛陀那（ダナ）一檀（ダン）」

【談何ゾ容易ナラン】（ダンナンゾヨウイ）　漢書東方朔の非有先生論中の語、易林にも「君子服之談何容易」

【單ナレバ折レ易ク衆ナレバ摧ケ難シ】（タンタヤスクシュタガタ）　北史吐谷渾傳に「阿豺母弟慕利延ニ命ジテ曰ク、汝一隻ノ箭ヲ取リ之ヲ折レト、延即チ之ヲ折ル、汝又十九隻ヲ取リ之ヲ折レト、延折ル能ハズ、阿豺曰ク、汝ガ曹知ルヤ否ヤ、單則易レ折、衆則難レ摧、戮力一心、然ル後ニ社稷固カルベキナリト」毛利元就が箭を折りて諸子を戒めし語、これと暗合せり、

【難ニ臨ミテ兵ヲ鎩ル】（ナンニノゾミテヘイヲホコヲサカシマニス）　難は兵亂なり、兵亂にのぞみて兵器を鎩りつくるも、まにあはざるをいふ、諺に「ヌスビトヲ捕ヘテ縄ヲナフ」といふに同じ、晏子春秋に「臨二難而遽鎩一兵、噬而遽掘一井、雖二速亦無一及已」

【丹ノ藏スル所ノ者ハ赤シ】（ダンノゾウスルトコロノモノハアカシ）　（丹之所藏者赤）人は善惡の友によりて、善ともなり、惡ともなるに喩ふ、家語に「善人ト居レバ、芝蘭ノ室ニ入ルガ如シ、久クシテ其ノ香ヲ聞カズ、即チ之ト化スレバナリ、不善人ト居レバ、鮑魚ノ肆ニ入ルガ如シ、久クシテ其ノ臭ヲ聞カズ、亦之ト化スレバナリ、丹ノ藏スル所ロノ者ハ赤ク、漆ノ藏スル所ロノ者ハ黑シ、是ヲ以テ君子ハ、必ズ其ノ與ニ處ル所ロノ者ヲ愼ム」

【斷梅】（ダンバイ）　梅雨の節雷鳴して「ツユ」の「アガル」をいふ、梅雨を斷盡する義なり、陸游の句に「輕雷轢轢――初」自註に「鄉人梅雨ニ雷アルヲ謂ツテ――トイフ」

【暖房】（ダンボウ）　「ヤウツリノサカモリ」輟耕錄に「今ノ宅ニ入ルト、居ヲ遷ス者ト、隣里金ヲ醵シ、具ヲ治シテ主人ニ過リテ飲ム、之ヲ暖屋トイヒ、又――トイフ、王建ガ宮詞ニ、大儀前日――來ト、則チ暖屋ノ禮ハソノ來ルコト尙シ」

【暖飽】（ダンポウ）　あたたかく衣を著、飽くまで食ふこと、飽食暖衣を見よ、

【潛泊】（ダンパク）　私慾なく心しづかに無爲なる貌、長楊賦に「人君以二玄默一爲レ神、――爲レ德」諸葛武侯の戒子書に「非レ

――無二以明レ志、非二寧靜一無二以致一遠」淡泊に同じ、

【膽ハ大ナランコトヲ欲シ、心ハ小ナランコトヲ欲ス】（ダンハダイショウ）　（膽欲大、心欲小）この語は、唐書の隱逸傳に出づ、孫思邈の言なり、下に「智欲圓（チエンナラン）行欲方」とあり、膽大とは敢爲をいひ、心小とは畏敬をいひ、智圓とは變に通ずるをいひ、行方とは守るところあるをいふ、この語は、淮南子主術訓に「凡人之論、心欲小、而志欲大、知欲圓、而行欲方」文子に「心欲小志欲大」とあるに本づく、

【斷髮文身】（ダンパツブンシン）　斷髮は、頭髮を斷つをいひ、文身は、針を以て肌膚を刺し、丹青を以て之を湟し、龍文を爲すなり、左傳哀七年に「仲雍嗣之――――、嬴以爲飾、豈禮也哉」嬴は裸に同じ、この語史記の周紀にも見ゆ、

【擅板漢】（ダンバンカン）　佛經の語、板をになひたる人夫の、一方のみは見ゆるも他方は見えざる如く、一を知りて二を知らざる迂人に喩ふ、

【潭府】（タンフ）　高官の家をいふ、韓愈の符讀書城南」と題する詩に、「一爲二公與一相、潭潭府中居」とあるに本づく、潭潭は奥深き貌、

【貪夫ハ財ニ殉ズ】（タンプハザイニジュンズ）　（烈士ヲ見よ、

【短兵】（タンペイ）　刀劒をいふ、楚辭に「車錯二轂兮一、――接」また史記匈奴傳に「長兵則弓矢、――則刀鋋」

【貪兵】（タンペイ）　敵の「タカラ」を「ムサボル」兵をいふ、後漢書の臧洪傳の注に「人ノ土地貨ヲ利スル者、之ヲ――トイフ」

【談柄】（タンペイ）　話の「タネ」をいふ、傳燈錄に「棲雲寺ノ大朗法師談論スル毎ニ、手ニ松枝ヲ執リ、以テ談柄トナス」

【短兵接戰】（タンペイセッセン）　短兵は刀劒をいふ、刀劒にて近接して戰ふ義、史記項羽紀に「令二騎皆下一レ馬步行一持二短兵一――」

【簞瓢】（タンペウ）　簞は小さき「ハコ」小筒なり、飯をいる器、瓢は「ヒサゴ」酒をいるべし、論語雍也篇に「一簞食一瓢飲」

【旦暮】（タンボ）　朝夕をいふ、轉じて急迫の義に用ふ、史記晉世家に「君老矣――之人、曾不レ能レ待而欲レ弒レ之」また戰國策に「魏且――亡矣」

【貪墨】（タンボク）　墨は、黑色にてけがれたる義、――は貪りて汚れたるをいふ、左傳に「貪以敗二官爲一レ墨」

【澶漫】（タンマン）　縱逸（ホシイママ）の貌、莊子馬蹄篇に「――爲レ樂」また遠き貌、司馬相如の子虛賦に「案衍――」また川原の貌、張衡の西京賦に「――靡迤」

【丹磨クベカラズ、其ノ赤ヲ奪フ可カラズ】（ダンマカ）　呂氏春秋に「丹可二磨而不一可一奪二其赤一、石可二破而不一可一奪二其堅一」とあり、丹と石とは、その形こそ變ぜしむべけれ、その赤と堅との質をば奪ふべからず、

【端門】宮中の正門をいふ　漢書五行志に「王宮——」

【貪婪】財を愛むを貪といひ、食を愛むを婪といふ、列子に「衆皆競進以——」——韓愈の順宗實錄に「韋執誼性——詭賊」貪惏と同義にも用ふ、

【貪惏】貨を貪り人を殘ふなり、又人を殺して財を取るを惏といふ、揚子方言に「河之北謂貪曰惏」左傳に「爾以讒慝——事君而多殺不善」

【圍繞】繞は圍に作るを正とす、相聚まりて娛む意「マドキ」傳燈錄に「有男不婚、有女不嫁、大家圍繞頭、共說無生話」また趙孟頫の詩に「相呼——坐」

【椌林】一に叢林ともいふ、布施によりて衆僧の棲居する處をいふ、

【煖媼】歲時雜記に「京人十月朔、酒炙糯肉ヲ爐中ニ沃シ、圍坐シ飲啗ス、之ヲ——ト謂フ」夢華錄に「十月一日有司——炭ヲ進ム、民閒皆酒ヲ置キ——會ヲ作ス」

【睡面】(面ニ睡ス)を見よ、

【帖木兒】(——)を見よ、

【袂ヲ投ズ】(投袂)袖を振ふ義、奮起の形容をいふ、左傳宣十四年に「楚子聞之、——而起」淮南子には、投を奮に作る、同じ、

【老聞】博聞なり、多識なり、无量壽經鈔註に「釋迦阿難足者、雖富而貧」

同時發心、阿難常樂——、故未成佛道」法華經に「——有知慧所說无所畏能令衆歡喜」——天は毘沙門なり(——)を參看せよ、

【貝多】(貝葉)を見よ、

【墮落】惡道惡事に陷りたる義、法華經に「或當——爲火所燒」

【他力】淨土門に說くところにして、彌陀如來の本弘誓願力に乘じ、極惡の凡夫も愚痴の衆生も極樂に往生することを得るは全く自力にあらず、彌陀願力の回向なりとの義、敎行信證に「言——者如來本願力也」

【墮涙碑】晉の羊祜、字は叔子、嘗て襄陽に守たり、遠近を綏懷し、甚だ民の心を得たり、卒するに及び民之が爲めに市を罷め、哭聲相接す、襄陽の百姓、峴山の祜が平生游憩せし所に於て碑を建て、廟を立て、歲時嘗祭す、その碑を望む者、流涕せざるなし、杜預因つて名づけて——と爲す、晉書の傳に「祜與鄧潤甫、登峴山、歎息曰、自有宇宙、便有此山、因立此碑、後人名——」

【足ルヲ知ル者ハ富ム】(知足者富)老子の語なり、足るを知りて心に滿足するときは、富者に同じ、されば莊嚴論偈にも、知足第一富」とあり、又遺敎經には、「不知足者、雖富而貧」

【足ルヲ知レバ辱メラレズ】(知足不辱)足ることを知りて分に安んずる者は、垢辱を受けざるをいふ、老子に「——知止不殆可以長久」漢書疏廣傳に「——、知止不殆、功遂身退、天之道也」

【達磨】具には菩提——といふ、南天竺國香至王の子、梁の大通二年近く、これ支那禪宗の第一祖たり、法脈を二祖に傳へし時、袈裟を付して信となし、且つ曰く、わが滅後二百年に衣は止まりて傳はらず、法は沙界に周からんと、偈に曰く「吾本來玆土傳法救迷情、一花開五葉、結果自然成」と、唐の代宗の時圓覺大師と諡す、

【誰カ烏ノ雌雄ヲ知ラン】詩の小雅の「具曰予聖誰知烏之雌雄」に註に「烏ノ雌雄ハ、相似テ辨シ難キ者ナリ、皆自ラ聖人ト爲スモ、亦誰カ能ク其ノ言ノ是非ヲ別タンヤ」予思の衞侯を諫むるにも、この語を引けり、

【誰カ知ラン僞言巧賛ニ似タリ云云】太平記卷十二に見ゆ、白氏文集卷三に出づる詩の句なり、賛は筆の中の金葉をいふ、筆には十三賛あり、調子によりて何れの賛にも移るなり、僞言も巧にいふときは賛の如くに美しく、人その僞たるを知らずとなり、詩經にも「巧言如賛」とあり、掩鼻とは、韻府に「魏王遺楚美人、夫人

鄭袖愛之、謂於王、鄭知王以己爲不妬、因謂美人曰、王惡子之鼻、見王必掩之、美人從之、王謂鄭曰、美人見我必掩鼻何也、對曰、似惡聞王之臭、王劓其鼻」また參商とは二つの星の名、その相去ること隔遠にして近つかざるなり、杜甫の詩に「人生不相見、動如參與商」またいふ「各在天一涯、又如參與商」また掇蜂とは、韻府に「尹伯奇母取蜂去毒、緊衣上、伯奇前欲去之、母大呼曰、伯奇牽我、父吉甫見疑之、伯奇自殺」ここに母とあるは繼母なり、繼母その子を嗣となさんと欲す、故に伯奇を讒せしなり、尹吉甫は周の宣王の賢大夫なり、孔子家語の弟子解を見よ、

チ

【知】「サトリ、ワキマフ」荀子に「—莫大乎無過」また認識する義、易の繫辭に「百姓日用而不—」また記憶する、論語に「父母之年、不可不—」また、シリアヒ」左傳昭二十八年に「遂如故—」

【智】釋名に「智ハ知ナリ、知ラザル所ロナキナリ」孟子に「是非之心、—之端也」荀子の正名に「知而有所合謂之—」經典に或は知と通じ用ふ、淮南子に「有—而無爲、與無—者同道、有能而無事、與無能者同德」又同書に「一過萬人者謂之英、千人者謂之俊、百人者謂之豪、十人者謂之傑」晉書張載傳に「—無所運其籌、勇無所奮其氣、則勇怯一也、才無所騁其能、辯無所展其說、則頑鈍鈞也」

【質】人質（ヒトジチ）なり、左傳に「周鄭交—」「ニ—」の義のときは音シ數に通ず、

【置郵】シテ命ヲ傳フルヨリモ速カナリ】（速）於置郵而傳命置は驛なり「シュクバ」郵は馹なり「ツギウマ」驛馹に由りて命を傳ふるよりも速かなりとは、傳達すること の極めて迅速なるをいふ、孟子に「德之流行—、—、—、—」風俗通に「漢、郵ヲ改メテ置ト爲ス、置モ亦驛ナリ、ソノ遠近ヲ度リテ之ヲ置クナリ」增韻に「馬傳ヲ置トイヒ、步傳ヲ郵トイフ」置郵は置驛ともいふ、

【之罘島】之は今芝に作る、同じ、山東省登州府福山縣に屬す、芝罘港は、北黃海に面し、東南西の三面は、丘陵連亙し、海岸を北に距る凡二里にして、一島恰も靈芝狀を爲して、北より東南に灣出し、海面に聳立す、之を芝罘山といふ、外人は錯りてこの地の總稱と爲し、港名に用ふれども、港の本來の名は、烟臺といふ、之罘の名は、最も舊くより史上に顯はる、秦始皇紀に「三十八年之罘ニ登リ石ヲ立ツ」とあり、又漢武帝紀にも「東海ニ幸シテ之罘ニ登ル」とあり、

【知音】己の心を善く知れる人をいふ、列子の湯問に「伯牙善ク琴ヲ鼓ス、鍾子期善ク聽ク、伯牙琴ヲ鼓スルニ、志、高山ニ在レバ鍾子期曰ク、善哉峩峩トシテ泰山ノ若シト、志、流水ニ在レバ、鍾子期曰ク、善哉洋洋トシテ江河ノ若シト、伯牙ノ念フ所ロハ、鍾子期必ズ之ヲ得」とあるに本づく、揚雄の解難に「師曠之調、鐘、嶔、知音者在後也」呂氏春秋に「鍾子期死シテ伯牙琴ヲ破リ絃ヲ絕チ、終身復琴ヲ鼓セズ、以爲ラク世ニ知音ノ者ナシト」

【忠】「スナホ」にして敬み深し、また正直にして詐なしまた君に事へて誠を盡すをいふ、說文に「忠ハ敬ナリ」孝經に「爲下克忠」禮記に「善則稱君、過則歸己、則民作忠」左傳に「趙孟曰、臨患不忘國忠也」孝經に「君子之事上也、進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡」史記樂毅傳に「忠臣去國、不潔其名」左傳に「忠ヲ令德トナス」管子に「忠者臣下之高行」（忠臣）を參看せよ、

【仲由】孔子の弟子、字は子路、卞の野人、孔子より少きこと九歲、性鄙にして勇力を好む、志伉直にして孔子を陵暴す、孔子禮を設けて稍く之を誘く、子路後ち儒服して質を委ね請ひて弟子となる、子路問ふ、君子勇を尙ぶか、孔子曰、義之爲上、君子好勇而無義則亂、小人好勇而無義則盜と、詳しくは史記の仲尼弟子傳を見よ、

【中陰】人死して後七七日即ち四十九日間をいふ、佛經の語、大藏法數に「此色身死後、未托生前、名爲—」と、一に中有ともいふ、現世と冥途との間に在る暗き界をいふ、佛祖統記に「人死七七、然後、免—之趣」

【細繹】その端緒を引くなり、漢書谷永傳に「燕見—、以求容忽」

【中葉】中世の義、詩の商頌に「昔在—、有震且業」震は懼、業は危なり、

【衷ヲ誘フ】（誘）衷は偏倚する所ろなきをいふ、誘は啓きみちびくなり、中心を開き導きて、善を爲さしむるの意、左傳に「天誘其衷」

【忠ヲ盡シ國ニ報ズ】（盡忠報國）宋の忠臣岳飛が背に刺せし語、宋史本傳に見ゆ、

【柔ヲ守ルヲ強トイフ】（守柔曰強）老子の語、註に「強ヲ守ルハ強ナラズ、柔ヲ守ル乃チ強ナリ」

【中夏】（中華）を見よ、

【中賀】（中謝）を見よ、

【中行】行は道なり、中道にして過不及なきをいふ（狂狷）を見よ、

【忠孝】善く君に事ふるを忠といひ、善く親に事ふるを孝といふ、書經に「惟忠惟孝、孝經に「資于事父以事君而敬同」また曰く「君子之事親孝、故忠可移于君」漢書劉向傳に「奉安君父——之至也」（陽城）を參看せよ、

【中繩ノ言】中繩は、宮中の結構深奥の處にて、隱祕猥

裏の言をいふ、猶ほ閨中の言といふが如し、詩經邶風匏有苦に「中𡨴之言不可道也、所可道也、言之醜也」

【忠孝兩全】 父母に孝をつくし、君に忠をつくして兩ながら全うする義、李義山集に「貴忠孝之兩全、則忠可移孝、正文武之二道、則武可輔文」

【裏甲】 衣の下に甲を被る義、左傳襄二十七年に「楚人ーー」通鑑の漢紀に「呂布與張遼等卓ーー不入」註に「胡三省曰ク、ーーハ甲ヲ内ニ被テ、衣ヲ甲上ニ加フ」

【中饋】 婦人は專成する所ろなく、ただ室中に在りて、飯食を主るのみ、よりてまた妻の稱とす、易の家人に「在ーー貞吉」また張衡の詩に「綢繆主ーー、奉禮助蒸嘗」

【仲弓】 孔子の弟子、冉雍の字、家語に「伯牛ノ宗族、孔子ヨリ少キコト二十九歲」史記の仲尼弟子傳に「仲弓政ヲ問フ、孔子曰ク、出門如見大賓、使民如承大祭、在邦無怨、在家無怨ト、孔子、仲弓ヲ以テ德行アリト爲ス、曰ク雍也可使南面ト、云云」

【酎金】 酎は醇酒なり、初めて熟して之を宗廟に嘗むる時、諸侯を廟中に會し、金を出し祭を助けしむるをーーといふ、史記平準書に「列侯坐ーー失侯者百餘人」

【忠經】 一卷、舊本漢の馬融撰、鄭玄註と題すれども隋唐二志に著錄せずして、宋の崇文總目に初めて出づるを見れば後人の僞作なるべし、孝經に擬して十八章に分ち、人臣たる者君に事へて忠を盡すべきことを述ぶ、明和三年の和版あり、

【中和】 人の性情の中正にして和げるをいふ、中庸に「喜怒哀樂之未發、謂之中、發而皆中節謂之和」

【中華】 支那人自ら其の國を稱して中華又は中夏と云ふ、華は榮なり、また文華なり、夏は大なり、故に中華また中夏と稱するは、世界の中央に位する文明國、又は大國といふ義なり、中國・中州皆同じ、

【抽黃對白】 黃を描き白に對する義にて、四六駢儷文の巧みなるを稱す、柳宗元の乞巧文に「ーーーー、喁喁飛走」喁喁は鳥聲、

【中浣】 一月中にて中の十日をいふ、中澣に同じ（上浣）を見よ、

【中經】 詩・儀禮・周禮をいふ（大經）を見よ、

【中扃外閉】 扃は閉なり「トザス」ーーーーは心中の欲を外に出さず、外部の邪惡を心中に入れざる義、文子に「中欲不出、謂之扃、外邪不入、謂之閉、ーーーー何

【中堅】 上中下三軍の中軍をいふ、中軍は、最も堅固を貴ぶ、故にいふ、後漢書光武紀に「光武與敢死者三千人衝其ーー」

【中元】 陰暦七月十五日の節句をいふ、この日盂蘭盆の供をなし、百味百果を盛りて佛に供す、父母長養慈愛の恩を謝しその冥福を祈るなり、

【忠賢】 忠實なる賢臣なり、漢書元帝紀に「明王在上、ーー布職、則蔡生和樂、方外蒙澤」

【中權後勁】 中軍と後殿となり、中軍は將軍ありて謀を制し、後殿は精兵を用ふるによりていふ、左傳宣十二年に「ーーーーー」と見ゆ、

【中原ノ鹿】 鹿を以て天子の位に喩ふ、史記淮陰侯傳に「蒯通曰ク、秦ノ綱絕エテ而シテ維弛ブ、山東大ニ擾レ、異姓竝ビ起リ、英俊烏集ス、秦其ノ鹿ヲ失ヒテ天下共ニ之ヲ逐フ」また北史に「徐光、趙ノ石勒ニ謂ッテ曰ク、陛下ハ神武謀略、漢高ニ過ギタリト、勒笑ッテ曰ク、朕若シ漢高ニ過ハバ、當ニ北面シテ之ニ事フベシ、若シ光武ニ過ハバ、當ニ中原ニ竝ビ驅ルベシ、未ダ鹿ノ誰ガ手ニ死スルヲ知ラズト」一說に、鹿祿音通ず、天下の大福をいふと、後世利を爭ふを逐鹿といふ、

【忠言ハ耳ニ逆フ】 忠實の言は却て聞くに快からざるをいふ、孔子家語六本篇に「良藥苦於口而利于病、忠言逆於耳而利于行」史記留侯世家にも類語あり、

【中興】 盛に興る運にあたる義、詩經の序に「周室ーー」通鑑「周宣王成ーー之名」の註に「中ハ當ナリ」中は去聲にて「アタル」なり、平聲に讀みて「ナカゴロ」興ると解するは非なり、宋史筆斷に「ーーハ理ニ中リテ復タ興ルヲ謂フナリ、今皆平聲トナスハ誤レリ」

【中國】 支那人自ら己の國を稱していふ、華夏、または中華といふに同じ、蓋し天下の中央に位する文明國の義、歐陽修の日本刀の歌に「徐福行時書未焚、逸書百篇今尚存、今嚴不許傳中國云云」

【忠告】 誠心を盡して告げ諭す義、論語顏淵篇に「子貢問友、子曰、ーー而善道之、不可則止、無自辱焉」

【悲想夜夢】 些の思が夜の夢となる義、列子の周穆王篇の語、また潛夫論に「豈有所思、夜夢其事」

【籌策ヲ帷幄ノ中ニ運ラシ、勝ヲ千里ノ外ニ決ス】 謀計のすぐれたるをいふ、帷幄は幕なり、史記の高祖本紀に「高祖曰、夫運籌策帷帳之中、決勝於千里之外、吾不如子房」と子房は張良の字、

【仲氏】 なかの兄をいふ（伯氏ハ壎）を見よ、

【曾子】 曾は長なり、天子より卿大夫に至るまての嫡子なり、書經の舜典に「嚚命汝典樂、教ヘ——ニ華族の子弟を華曾といふはこの義に本づく、曾は胃と別なり、

【中秋】 夢梁錄に「八月十五日ハ、中秋節ナリ、此ノ日ハ三秋恰モ半ナリ、故ニ之ヲ——トイフ、此ノ夜月色ノ明ナル、常時ヨリモ倍ス、マタ之ヲ月夕トイフ」白樂天の詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心」

【仲秋】 陰暦八月の異名、中秋とは異り、

【中秋賞月】 林羅山の說に、此の夜月を玩ぶこと李唐の世より盛んにして詩人文人其の詠多しと雖も古樂府に嫦娥怨の曲あり漢人の中秋の月なきによりて此の曲を作るとある時は、漢の世よりもあることにやと、

◎鶴林寺中秋翫月　唐　許　渾

待月東林月正圓、庭無樹草無煙、中秋雲盡出滄海、半夜露寒當碧天、輪彩漸移金殿外、鏡光猶挂玉樓前、莫辭達曙殷勤望、一度西嚴又隔年、

【仲尼再生ス】 隋書に「隋ノ陳果、幼ニシテ孝經尚書ヲ受ク、一タビ覽レバ誦ヲ成ス、八歳ニシテ能ク文ヲ屬シ、十三ニシテ偏ク諸史ヲ讀ム、時人皆謂フ、仲尼再生スト、年甫メテ十八ニシテ、監察御史ヲ授ケラル」仲尼は孔子の字、

【中人】 賢ならず、愚ならざる尋常の人をいふ、論語の雍也に「——以上、可以語上也、——以下、不可以語上也」また富まず、貧しからざる家産を有する人をいふ、漢書文帝紀に「文帝欲作露臺、召匠計之、直百金、曰百金——十家之產也、遂罷之」またなみなみの力ある人をいふ、最錯の論貴粟に「數石之重、——弗勝」

【沖人】 幼者なり、書經の金縢に「昔公勤勞王家、惟予——弗及知」の註に「沖ハ幼也」

【忠臣】 史記魯仲連傳に「——不先身後君」列女傳に「——與孝子不爲昭信節、不爲冥冥墮行」文中子に「——之事君也、盡忠補過、君失於上則臣補於下、臣諫於下則君從於上」宋史司馬光の言に「——之事君也、責其所難、則其易者不勞而正、補其所短則其長者不勤而遂」忠經に「忠也者一其心之謂也、爲國之本在忠、忠能固君臣、安社稷、感天地、動神明」唐書魏徵傳に「徵嘗テ太宗ニ謂ヒテ曰ク、臣願クハ陛下、臣ヲシテ良臣タラシメヨ、忠臣タラシムルコト無カレト、帝曰ク忠良異レル乎、曰ク良臣ハ稷契咎陶ナリ、忠臣ハ龍逢比干ナリ、良臣ハ身美名ヲ荷ヒ、君顯號ヲ都ベ、子孫傳承シ、祚ヲ無疆ニ流ス、忠臣ハ、己

禍誅ニ罹リ、君骨惡ニ陷リ、國ヲ喪ヒ家ヲ夷シ、祇空名ヲ取ル、此レソノ異ナリト」魏徵のこの語、故に忠良を別ちて諷諫の資とせしなれば必ずしも字義に拘泥すべからず、

【稠人】 「オホゼイノヒト」稠は多なり、却掃編に「——廣衆ノ中、愼ンデ臧否スル所ロアル可カラズ」

【忠信篤敬】 論語衛靈公篇に「子張問行、子曰、言忠信行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉」忠信とは、言ふところは中心より出でて信實にして虛妄なきなり、篤敬とは、行ふところ深厚敬愼にして少しの浮薄怠忽なきなり、

【忠臣ノ勇】 勇には種種あれども、忠臣の勇を最も貴しとするなり、臣軌に「夫レ高棟ニ登リ、危檐ニ臨ミテ目眴カズ、心懼レザルモノハ、コレ工匠ノ勇ナリ、深泉ニ入ッテ蛟龍ヲ刺シ、蠆蜧ヲ抱イテ出ヅルモノハ、此レ漁夫ノ勇ナリ、戰ニ臨ンデ先登シ、骨ヲ暴ラシ血ヲ流シテ辭セザルモノハ、此レ武士ノ勇ナリ、廣廷ニ居テ、色ヲ作シ辨ヲ端シテ以テ君ノ嚴顏ヲ犯シ、前ニ乘軒ノ賞アリト雖モ、未ダ之レガ爲メニ動カズ、後ニ斧鉞ノ誅アリト雖モ、未ダ之レガ爲メニ懼レザルモノハ、此レ忠臣ノ勇ナリ、君子此ノ五ノ者ニ於テ、忠臣ノ勇ヲ以テ貴シトナス」

【忠臣ハ畎畝ニ在リト雖モ猶ホ君ヲ忘レズ】（忠臣雖レ在二畎畝一、猶不レ忘レ君）漢書の劉更生の封事の語、在畎畝は仕へずして野に在るをいふ、

【忠臣ハ二君ニ事ヘズ】 齊の晉邑の人、王蠋の語、燕の將樂毅、齊を破る、蠋の賢を聞き請ひて、將たらしめんとす、蠋固く謝して曰く「忠臣不事二君一、烈女不更二夫一云云」事は史記の田單傳に出づ、また戰國策の齊策にも見ゆ、

【中謝】 乘燭譚に「先輩表文ノ內ニ、中謝ト云フコトアリテ、分註ニワリテ書ケリ、人多クソノ義ヲ會セズ、翰墨大全第二卷ニ出ヅ、誠惶誠恐頓首頓首コレヲ中賀ト云フ、賀表ニコレヲ用フ、誠惶誠懼頓首頓首コレヲ中謝トイフ、陳述ノ表ニ之ヲ用フ、但上ヘ上ル表ニハ直チニコノ八字ヲ書クコトナリ、文集等ニ畧シテ中謝中賀等ノ二字ヲ分註ニスルナリ、又按ズルニ中慰トイフコトアリ、コレハ慰表ニ用フ、上ノ凶事ノ時ニ上ル表ヲ慰表ト云フ、慰ハ弔慰ナリ」

【中傷】 人の過失を射り之に中てて傷くる義、漢書尹翁歸傳に「屬縣長吏雖——莫有怨者」

【沖讓】 沖は、沖と同じ、虛なり、和なり、己をむなしく

して譲るなり、柳文の筆子の碑に「——居レ禮ニ」

【中酒】 酒酣なる義、酔はず醒めず、故に中といふ、史記樊噲傳に「項羽既ニ殺二軍士一、——、亞父謀欲レ殺レ沛公一、また酒に「アテラルル」義にも用ふ、韋荘の詩に「近來中酒起常遲、臥見南山改舊詩」

【中壽】 八十歳をいふ(上壽)を見よ、

【中宿】 「フタバンドマリ」左傳の僖二十四年に「命二女三宿一、女——至レ雖レ有レ君命、何其速也」林註に「三宿ヲ待タズ次宿即チ至ル、蓋シ二宿ナリ」

【遡出】 死して葬らざるをいふ、史記田叔傳に「臣等當——ニまた漢書陳萬年傳に「自絞死者歳數百千人、久者——腐爛」

【忠恕】 己を盡すを忠といひ、己を推すを恕といふ、恕は「オモヒヤリ」論語里仁に「夫子之道——而已矣」

【中書君】 筆の異名、韓愈の毛穎傳に「穎、中書令ニ拜セラル、上嘗テ呼ビテ——ト爲ス、進見ニ因リテ、上將ニ任使スル有ラントシテ、之ヲ拂拭ス、穎因リテ冠ヲ免シテ謝ス、上其ノ髪ノ禿ナルヲ見、マタ摸畫スル所ロ、上ノ意ニ稱ハズ、上笑ヒテ曰ク、中書君老イテ禿ス、吾ガ用ニ任ゼズ、吾レ君ヲ中書トイフ、而シテ今ハ得ニ中ラザルカト」

【中正ニシテ私ナシ】 人の君たる者は至中至正の道を守りて偏私することなしとの義、管子に「爲二人君一者、中正而無レ私、爲二人臣一者、忠信而不レ黨」また曰く「如レ地如レ天何私何親如レ月如レ日唯君之節」

【啁嘵】 (——)を見よ、

【嚆昔】 嚆は發語の辭、昔は猶ほ前の如し、左傳の宣二年の註に「嚆昔ハ猶ホ前日ノゴトシ」禮記の檀弓の「——之夜」は前夜なり、

【中說】 (文中子)を見よ、

【抽籤】 神佛に祈りて「クジ」を引き吉凶を判斷する義、幸蜀記に「抽レ籤得二逆一天者殃 四字一」

【中堂】 宰相の政を行ふ處をいふ、また直ちに宰相の異稱とす、事物紀原に「唐制、宰相常ニ門下省ニ於テ事ヲ議ス、之ヲ政事堂ト謂フ、永淳中、中書令裴炎移シテ中書省ニ在リ、開元十一年張説奏シ改メテ中書門下トイフ云云」

【中道】 事の「ナカバ」をいふ、論語雍也に「力不レ足者——而廢一今女畫一」

【蟲豸】 爾雅に「足アルヲ蟲トイヒ、足ナキヲ豸トイフ」

【忡忡】 憂ふる貌、詩經草蟲に「未レ見二君子一憂心——」憬憬と義同じ、

【蠢蠢】 「ムシアツシ」詩經の雲漢に「旱既ニ大甚一蘊隆——」註に「——ハ熱氣ナリ」蘊は蓄隆は盛なり、

【憧憧】 仲仲に同じ、心憂ふる貌、楚辭九歌に「極勞心兮——」

【惆悵】 「ウラミイタム」惆は失意なり、悵は望恨なり、楚辭に「——兮獨自憐」後漢書に「情——以增レ傷」白居易の題慈恩寺の詩に「——春歸留不レ得、紫藤花下漸黄昏」

【幬帳】 「カヤ」南史に「夏日無二——一、而夜臥未レ嘗有レ蚊蚋一」

【譸張】 譸は誕なり、張は誕なり「タブラカス」義、書の無逸に「民無レ或譸二——一爲レ幻」幻とは名を變へ實を易へ、幻覩して人を惑はすをいふ、

【仲長統】 漢の高平の人、少くして學を好み、書記に博渉し、文辭に贍なり、尚書郎となる、論じて時事に及ぶ毎に、恒に憤發嫉息す、因つて著論し、名づけて昌言といふ、卒する年四十一、著すところの樂志論、古文眞寶に載す、

【蹲踆】 進まんとして進まざる貌、ためらひて決せざる貌、博雅に「猶豫ナリ」前漢李夫人傳の「哀徘徊以——」の註に「師古曰ク、——ハ住レ足也」

【中庭地白クシテ樹鴉ヲ栖マシム】 王建の十五夜望月に「中庭地白樹栖レ鴉、冷露無レ聲濕二桂花一、今夜月明人盡望、不レ知秋思在二誰家一」起承二句月明の景を描きて清氣骨に透る、轉結、この清夜に對し人人月を望み秋思を動かすこと、誰家か最も多きぞ、自己の悲を說かずして他人の心を想像し自ら凄涼秋に感ずるの意を見る、

【啁哳】 (——)を見よ、

【种放】 字は明逸、宋の洛陽の人、七歳にして文を能す、母と終南山に隱れ、講習を以て業となす、從學する者衆し、太宗之を召せども起たず、錢を賜ひ母を養はしむ、母卒し復錢帛を賜ひ喪を助く、召して左司諫を授け龍賚甚だ厚し、尋て山に歸らんことを乞ふ、後ち數召して諮問せらる、乃ち經に據りて以て對ふ、禕益するところ多し、汾陰に從ひ祠り、工部侍郎に拜す、徙りて嵩山に居る、祥符八年、一日晩く起きて道衣を服し諸生を要めて共に飲み、平生作るところの文藁を取りて之を焚き酒數行にして逝く、壽六十、娶らずして子なし、工部尚書を贈らる、

【冲漠無朕萬象森然】 天地の空漠にして何の「キザシ」もなき中に萬物の將に生ぜんとする形象の森然とし

に連りたるをいふ、即ち無中に有あり、靜中に動ありとの意なり、沖漠は空しく靜かなる義、朕は兆朕と熟し「キザシ」なり、程子遺書に「——、——、——已具、未應不是先、已應不是後」高象森然の四字は證道歌にも見ゆ、

【綢繆】「モツレアフ」猶ホ纏綿の如し、一に密合なりとも解く、詩の唐風に「——束薪」とあるは、散りたる薪をまとひ合せて束と爲すを以て、異姓の男女を合せて、婚を成すの意に喩ふ（關戸ヲ）を參看せよ、

【中庸】中は偏よらず、過不及なきなり、庸は不易にして平常の理なり、中庸に「君子——小人反——」また賈誼の過秦論に「材能不及——」とある——は、常人の義なり、

また書名、四書の一、魯の孔伋（字ハ子思）の著、伋は孔子の孫なり、業を曾子に受け、その精微を極めたり、當時老子の學盛なりしかば、伋深く之を憂ひ、この書を著し、天人一貫の眞理を說き、孔子の學の中庸にして偏せず倚せず、その大を極めその小を盡して決して感淺ならざる旨を辨せり、この書もと大學と同じく禮記中の一篇なりしが、六朝の世、宋の戴顒、之を表章して中庸傳を撰せしも今は傳はらず、宋に至りて諸儒之を講說し、程子に及びて大學論語孟子に配し、朱熹之が註釋を加ふ、今傳ふるところの中庸章句二卷是れなり、——釋解二卷（皆川愿撰）——原解二卷（太田元貞撰）——欄外書二卷（佐藤坦撰）等參考の資とすべし（大學）を參看せよ、

【中霤】卿大夫の家、土神を祭る所、上古は穴居し、その上を開きて明を取る、故に雨之に霤る、故に後世室に名づけて——といふ、猶ほ諸侯に社稷といふが如し、禮記の郊特牲に「家主——而國主社、示本也」——は猶ほ中室といふが如し、

【中流ニ舟ヲ覆シテ一壺ノ浪ニ漂フ】太平記卷二十一に見ゆ（中流船ヲ失ヘシ）を見よ、

【中流ノ砥柱】砥一に底に作る、一說砥音テイ成語考に「獨立シテ移ラザルヲイフ」註に「砥柱山ハ、禹之ヲ鑿チ、以テ河ヲ通ズ、河水分流、山ヲ包ミテ過グ、山ハ水中ニ在リテ柱ノ若ク然リ、故ニ名ツケテ砥柱トイフ」また文苑に「昌國縣ノ海中ニ砥柱アリ、中流ニ屹立ス、之ヲ望メバ人ノ拱立スルガ如シ」砥柱は河南省河南府陝州の東、四十清里、黃河の中に在る石にして形柱に似、平かなること砥に似たり、激流の中に屹立して動かず、以て亂世に處して毅然節義を厲ます者に喩ふ、書經禹貢に「底柱析城至于王屋」とある底柱は即ち是れなり、日知錄十八に、孫承澤が王陽明の學を論ずる文を載せて「困知之記學部之編、固今日中流之砥柱矣」なほ砥柱の事は水經にも見え、明の都穆の遊名山記には詳記を載せ、書經の蔡傳竝に州志に、三門山即ち底柱といへる說を誤謬なりといへり、參看せよ、

【中流船ヲ失ヘバ一壺千金】（中流失ノ船一壺千金）壺は「フクベ」「ユフガホ」の屬、瓜冠子の語、流一に河に作る、物は常の貴きことなく、一壺は價貴からざる物なれども、難船したる場合には、これによりて浮ぶことを得、千金にも價すべき品となる義、註に「壺ハ瓠ナリ、之ヲ佩ビテ以テ濟渉スベシ、南人之ヲ腰舟ト云フ」

【中立】兩者の閒に立ちて、何れにも親疎する所ろなき義、戰國策に「請令魯——」また中庸に「——而不倚」

【中呂】四月の律の名、史記の律書に出づ（十二律）を見よ、

【倚倨】「タグヒ」「ナカマ」「トモガラ」杜甫の句に「石根青楓林、猿鳥聚——」倚類倚匹皆同じ、

【中論】二卷、後漢の徐幹撰す、幹字は偉長、北海の人、

陳琳・阮瑀・王粲・曹植・應瑒・劉楨と共に建安七子の稱あり、この書、治學・法象・修本等すべて二十篇、大抵經訓に原本して人事を指陳し、聖賢の道に歸す、故に前史皆儒家類に列せり、

【智慧アリト雖モ勢ニ乘ズルニ如カズ】（鑑基）を見よ、

【智慧出デテ大僞アリ】人人智巧を出すに及びて忠信の道はすたれて、大なる詐僞生ずとの義（六親和セズ）を見よ、

【澄釋】宿場（シユクバ×置郵シテ）を見よ、

【智慧ノ鋭モ曇ル】俗諺なり、人貧しくなれば智者も思ひなるの義、朝野僉載に「人貧、智短、馬疲、毛長」また古諺に「福至心靈、禍來神昧」などとあるに本づくか、

【智慧ノ劍】鋭くして良き智力を、利劍に喩へていふ、維摩經に「以——慧劍破煩惱網」

【質ヲ委ス】（委質）質は體なり、身體を君に委かする義、一解に、委は置なり、質は贄なり、贄を君前に置き、初任の禮を行ふをいふと、左傳に「策名——委質、二乃辟也」

【地ヲ得ル千里ナルハ、一賢ヲ得ルニ如カズ】呂氏春秋に「得地千里不如得一賢也」地を得る廣しと雖も、

賢人なければ永く保ら難ければなり、

【治ヲ爲スハ多言ニアラズ】（爲）治者、不」在」多言」國を善く治むる道は、多くしやべりて說くを要せずとの義、漢書武帝紀に「爲」治者不」在」多言、願」力行如何耳」魯の申公の言、史記儒林傳にも見ゆ、

【地ヲ扱キ天ニ倚ル】（扱）地倚」天）詩文などの雄大なるを評していふ、錦字箋に「孫樵云、玉川月蝕詩、退之進學解、莫」不」扱」地倚」天、句句欲」活、讀」之如」赤手搏」長蛇」不」施」控勒」騎」生馬」」

【持ヲ秪リ車ヲ得】（秪）持得」車行益」卑く下る者は、利を得ること益」多きをいふ、莊子に「桑王有」病召」醫、破」癰潰」疽者得」車一乘、舐」痔者」得」車五乘」所」治愈下」得」車愈多」子豈治」其痔」耶何得」車之多也」

【地ヲ掃フ】（掃」地）地上の塵芥を掃除し盡したるが如く、物の皆無になりたるをいふ、漢書の魏豹傳贊に「秦滅」六國」上古遺烈掃」地盡矣」

【血ヲ喋ム】（喋」血）喋は喋なり、まさに蹀に作るべし、人を殺して血を流し、之を蹀みて涉るをいふ、兵亂の義なり、史記孝文紀に「今已誅」諸呂」新」」京師」漢卑には、喋を喋に作る、また淮陰侯傳に「新」」關與」」關與は地名、

【血ヲ喋ム】（喋」血）前條を見よ、

【血ヲ以テ血ヲ洗フ】唐書の源休傳に「可汗使、謂」休曰、汝國已殺」突蒸等」吾又殺」汝猶」以」血洗」血、污益甚爾」可汗は同紘王の號、突蒸は可汗の叔父なり、

【持戒】菩薩修行六度の一、諸の戒法を護持して犯すことなきをいふ、法華經に「」」清潔如」淨明珠」」

【雉膏食ハレズ】（雉膏不」食）雉膏は甘美の物なり、以て祿位に喩ふ、易の鼎卦に見ゆ、不」食とは祿位を得ざるをいふ、

【地行仙】人の長壽を祝していふ、「張安道生日、東坡以」拄杖」爲」壽、有」詩云、先生眞是」」、住」世因循五百年」

【知客】僧徒にして賓客に接することをつかさどる者をいふ、禪林寶訓音義に「知」典」賓客」、細白相遇、應對迎請務令」整濟」」

【癡漢】「バカモノ」北史齊文宣紀に「李集强諫不」屈、帝笑曰、天下有」如」此」」」

【力ヲ勞スル者ハ人ニ治メラル】農民の如く體力を勞する者は人に治められる義、孟子の語（通義）を見よ、

【力ソノ任ニ勝フレバ即チ舉グル者重カラズ】文子に「力勝」其任」即舉者不」重、能勝」其事」爲者不」難」力ある者は重物を舉ぐるも重しとせず、能ある者は雜事を爲しても難事とせざるをいふ、

【力ハ貧ヲ貴ブ】劉勰新論に諺を引きて「力貴」貧、智貴」卒」とあり、卒は急遽に閒に合ふをいふ、

【力ハ貧ニ勝ツ】說苑に「力勝」貧、謹勝」禍、愼勝」害、戒勝」災」とあり、この語の上に「衆正ノ積ム、福及バザルコトナク、衆邪ノ積ム、禍見レザルコトナシ」とあり、即ち力謹愼戒の四者は、衆正を積みて貧禍害災にうち勝つを得るなり、

【力山ヲ拔キ氣世ヲ蓋フ】（力拔」山兮氣蓋」世）力つよく、氣大なるをいふ（四面楚歌）を見よ、

【知己】善く己の心を知れる人をいふ、史記刺客傳の豫讓の語に「士爲」知」己者」死、女爲」說」己者」容」とあり、又晉書傳にも「越石父曰ク、吾聞ク君子ハ己ヲ知ラザルニ詘シテ、己ヲ知ル者ニ信ブト」詘は屈なり、信は伸なり、知己は容易に遇ひ難し、今人相識を一一といふは非なり、

【地久】（天長地久）を見よ、

【治强】治りて强きこと、韓非子に「一一易」爲」謀、亂弱易」爲」計」

【池籞】「イケス」明の彭大翼の山堂肆考に「池籞ハ、池中ニ竹籬ヲ編シ、以テ魚ヲ養フ者」とあり、

【池魚ヲ畜フ者ハ必ズ猵獺ヲ去ル】淮南子に「畜」池魚」者必去」猵獺」養」禽獸」者必去」豺狼」」猵は獺（カハヲソ）の屬、

【池魚ノ殃】意外の所に災の影響を及ぼす義、呂氏春秋必己に「宋ノ桓司馬、寶珠アリ、罪ニ抵リ出亡ス、王、人ニ珠ノ所在ヲ問ハシム、曰ク之ヲ池中ニ投ズト、是ニ於テ池ヲ竭シテ之ヲ求ム、曰ク之ヲ池中ニ投ズト、是ニ於テ池ヲ竭シテ之ヲ求ム、得ルトコロナクシテ魚死セリ」風俗通に「俗云城門失」火、殃及」池魚」舊說宋城門失」火、自汲」取池中之水」而空」竭魚池」也」と轉じて火災の義にも用ふ（殃」池魚」を參看せよ、

【池魚籠鳥】自由にならざる身の上をいふ、文選の潘安仁の秋興賦の序に「譬猶」池魚籠鳥有」江湖山藪之思」」

【鰞鰞】魚の腸の「シホカラ」宋書に「明帝嗜」」」

【竹院】庭に竹を栽ゑたる「ザシキ」白居易の酬」皇甫賓客」の詩に「」」君閑銷」永日」花亭我醉送」殘春」」

【逐疫】「ヤクハラヒ」代醉編に「後漢季冬、先」臘一日、大儺、之ヲ」」」イフ」

【竹葉】酒の異名、古詩に「竹葉淸香好、何妨飮」數杯」」また白居易の詩に「甕頭竹葉經」春熟」國語に、酒を「ササ」といふは、此に本づくか、尺牘雙魚の注に「釀酒」」ヲ

以テ其ノ中ニ雑ユ、極メテ清潔ナリ、故ニ酒ヲ謂ッテ——トナス」

【竹葉舶】 韓鄂の歳華紀麗に「人日飲竹葉之一觴、粧梅花之満面」

【竹竿ニ願絲ヲ懸ク】 太平記巻一に見ゆ（願絲）を見よ、

【竹外ノ桃花三兩枝】 竹むらの外に出てたる二枝三枝の桃花をいふ、蘇東坡の書惠崇春江曉景圖に「——————、春江水暖鴨先知、蔞蒿滿地蘆芽短、正是河豚欲上時」

【竹溪六逸】 類聚全集に唐書を引きて「唐ノ李白、魯中ノ諸生ト徂徠山ニ隠レテ沈飲ス、人——————ト號ス」逸は隠逸の義なり、六逸は、李白・韓準・裴政・張叔明・陶沔・孔巣父なり、

【竹工】 「タヽザイクシ」王元之の黄州竹樓記に「吾聞——云竹之爲瓦蓋十稔、若重覆之得二十稔」

【竹杠】 爾雅に「杠ハ竿ナリ」楊基の詩に「——兜子一肩斜」——は駕籠をかく竹の棒なり、陸游の詩に「輿似雞棲寄兩竿」この兩竿は即ち二本の竹杠なり、詳しくは葛原詩話を見よ、

【竹枝】 土地のはやり歌なり、卓氏藻林に「劉禹錫、阮湘ニ在リ、俚歌鄙陋ナルヲ以テ、乃チ騒人ノ九歌ニ依リテ、竹枝新詞ヲ作リ、里中ノ小兒ヲシテ、之ヲ歌ハシム、本ト巴渝ノ歌ナリ」渝一に歈に作る、巴渝は地名（巴渝ノ舞を見よ、

【畜生】 畜の音「キウ」を正とすれども俗に從ひて「チク」と讀む「チク」の音の時は「タクハフ」「トドム」の義なり、——は牛馬、犬豕の屬をいふ、隋書文帝紀に「帝悲抵牀曰、——何足付大事耶」また佛敎の六道の一、法華經に「受地獄——餓鬼之苦」韓非子解老に「民産絶則——少」

【竹書紀年】 書名、晉の太康元年、汲郡の人、冢を發して之を得、夏殷より起り、魏の哀王に至る、竹簡を以て之を寫す、故に竹書といふ、武帝その書を祕閣に付し次第を校綴し今文を以て之を寫さしめたりといふ、晉書束晳傳を參考せよ、今傳ふるところの——————二卷はその一部なりといへども、諸書引くところを以て證するに、今の本と多く合せず、梁の沈約の註も亦宋書符瑞志を勦取せり、蓋し依託の僞書なり、

【竹酔日】 陸機の詩疏に「五月十三日、謂之——」郭璞種樹書に「竹ヲ種ウルハ、酔日アリ、卽チ五月十三日ナリ」また范致明の岳陽風土記に「五月十三日之ヲ龍生日トイフ、以テ竹ヲ種ウベシ」齊民要術にいふ所ろの——なり、山家清事には「八月八日爲——」

【竹笑】 說文に「竹、風ヲ得テ其ノ體、大ニ屈スル、之ヲ——ト謂フ」

【悤然】 悤は忙に同じ、悤づる貌、小爾雅に「心愧ヅルヲ悤トナス」

【竹素】 竹は簡、素は絹、竹帛に同じ、晉の張協の詩に「游思——園」

【忙怩】 心に愧づる貌、書經の五子之歌に「顔厚有——」

【竹中兒アリ】 淵鑑類函巻四百十七に「華陽國志有竹王者興于遯水、先是有女子浣于水濱、有三大竹流入足閒、推之不去、聞竹中有兒聲、持歸破竹、得男、長有武才、遂雄夷狄、以竹爲姓、植所破竹于野、遂成林、今王洞竹林是也」また異苑に「建安箕箔竹節中有人長尺許、頭足皆具」

【逐逐】 繼續して厭くことなき義、易の頤卦の六四に「其欲——」

【竹竹】 高く直く立つ貌、司馬相如の上林賦に「崇山——」

【逐電】 わが國にて人の逝亡して跡かたなきをいふ、

龍生日トイフ、以テ竹ヲ種ウベシ」齊民要術にいふ所ろの——なり、山家清事には「八月八日爲——」

【竹笑】 說文に「竹、風ヲ得テ其ノ體、大ニ屈スル、之ヲ——ト謂フ」

【悤然】 悤は忙に同じ、悤づる貌、小爾雅に「心愧ヅルヲ悤トナス」

【竹素】 竹は簡、素は絹、竹帛に同じ、晉の張協の詩に「游思——園」

【忙怩】 心に愧づる貌、書經の五子之歌に「顔厚有——」

【竹中兒アリ】 淵鑑類函巻四百十七に「華陽國志有竹王者興于遯水、先是有女子浣于水濱、有三大竹流入足閒、推之不去、聞竹中有兒聲、持歸破竹、得男、長有武才、遂雄夷狄、以竹爲姓、植所破竹于野、遂成林、今王洞竹林是也」また異苑に「建安箕箔竹節中有人長尺許、頭足皆具」

【逐逐】 繼續して厭くことなき義、易の頤卦の六四に「其欲——」

【竹竹】 高く直く立つ貌、司馬相如の上林賦に「崇山——」

【逐電】 わが國にて人の逝亡して跡かたなきをいふ、

王子淵の聖主得賢臣頌に「追奔電、逐遺風」これは馬の駿足なるを形容したるなれども逐電の字の本づくところならんか、

【竹頭木屑】 竹の伐り落したる「キレハシ」木をひきたる鋸屑（オガクヅ）晉書陶侃傳に「造船木屑及竹頭悉令聚掌之、咸不解所以、後正會積雪始晴、廳事猶濕、于是以屑布地、及桓溫伐蜀、又以所貯竹頭作釘裝船」

【畜德錄】 二十卷、門を分つ二十有一、清の席文輿撰す、周秦より元明に至るまでの嘉言善行の模範と爲すべき者を類輯せり、康熙二十三年汪琬の序あり、安政三年の和版あり、文輿名は啓圖、震澤の人なり、

【竹柏】 和名「ナギ」松柏科の樹、高サ二三丈、老ゆれば皮自ら落ちて紅膚となる、葉は竹に似て厚く、縦理ありて對生す、面は深綠にして、背は淺綠なり、兩面滑美にして甚だ強し、材は淡黄赤なり、東坡の記「承天夜遊」文に「何夜無月、何處無——」

【竹帛】 書籍をいふ、竹は竹簡（タケフダ）帛は繒帛（キヌ）なり、古代は紙無し、故に竹帛に書す、史記の孝文本紀に「祖宗ノ功德、竹帛ニ著シ、萬世ニ施シ、永永窮リ無ケン」淮南子の本經訓にも見ゆ、

【竹帛ノ功】 史上に書きのせられて、後世に傳はるべき功をいふ、後漢書鄧禹傳に「禹見二光武一曰、但願公威徳加二于海内一、禹得効二其尺寸一、垂二功名于竹帛一耳」

【竹馬ノ好】 幼時の親友をいふ、晉書に「殷浩既ニ廢セラル、桓溫人ニ語リテ曰ク、少時吾レ之ト共ニ竹馬ニ騎ル云云」また「卿故復憶二竹馬之好一不」ともあり、書敘指南に「七歳ノ戯ハ竹馬ノ戯トイヒ、五歳ノ戯ハ鳩車ノ戯トイフ」後漢書郭伋傳に「兒童騎二竹馬一迎拜」

【竹夫人】 竹の「ヨリカカリ」(寄兒)東坡志林に「俗以竹几爲二一一一

【遲日】 春の日をいふ、日長くして暄かなる義、詩經豳風七月に「春日遲遲」杜甫の句に「——江山麗、春風花草香(須日)」を見よ、

【知十】 論語公冶長篇に「回也聞一而知十(一ヲ聞テ)を見よ、

【癡人ノ前ニ夢ヲ說ク】 伊藤東涯の秉燭譚に「癡人ノ前ニ不可說夢達人前不可言」命ト、人人覺エタルコトナリ、丹鉛總錄ニ、宋人ノ就月錄ニ、陶元亮ガ語トス、何ニ由ルコトヲ知ラズト云ヘリ」とあり、參學門に「癡人面前不得說夢」癡は愚なり、無門關鬚子無鬚にも「癡人面前不可說夢」とあり、夢はあはせやうに由りて色色に判斷せらるるものなれば、癡人はさもなきことを夢の告と思ひ迷ふものなればなり、黃山谷題跋に「觀淵明貴子詩、想見其人豈弟慈祥、俗人便謂淵明子皆不肖、可謂癡人前不得說夢也」

【智者】 智慧のすぐれたる者、淮南子に「——離道而得道、愚者守道而失道」史記商君列傳に「——作法、愚者制焉、賢者更禮、不肖者拘焉」

【智者有リト雖モ其ノ後ヲ能クセズ】 (雖有智者不能其後)前計を誤り、紛亂を極むるときは、後に智者の出づるあるも、回復の功を成すこと能はざるをいふ、孫子に「諸侯乘其弊而起、——矣」淡書趙充國傳には、能を善に作る、

【智積菩薩】 南齊の人、僧智寶の智積記に「梁ノ天監甲申吳縣ノ砰石山ニ寺ヲ造ク、僧アリ自ラ梵相ヲ殿壁ニ畫ク、後チ西僧アリ、見テ云フ、此レ——ナリト」

【智者大師】 (天台大師)を見よ、

【智者ハ惑ハズ】 (勇者ハ懼レズ)を見よ、

【知者ハ水ヲ樂ム】 (知者樂水)知者は事理に通達して周流滯ることなきは水に似たるあり、故に水を樂むなり、論語雍也篇の語(仁者ハ山)を見よ、

【智者ハ未萌ニ見ル】 (智者見於未萌)事の未だ發せざるに先だちて之を察するをいふ、戰國策に「愚者暗於成事、——また史記司馬相如傳に「明者遠見於未萌、而智者避危於無形、禍固多藏于隱微、而發于人之所忽也」

【智者モ千慮ニ一失アリ】 (智者千慮有一失)智すぐれたる者も、多くの考の中には、稀に過失なきことを免れざるをいふ(愚者モ千慮)ヲ見よ、

【置酒】 「サカモリ」するをいふ、史記高祖紀に「高祖置酒前殿、奉玉巵、爲太上皇壽、殿上群臣、皆呼萬歲」

【笞棰】 杖にて撃つをいふ、鞭笞に同じ、轉じて攻伐の義にも用ふ、荀子に「——暴國」

【貧錐ノ地】 僅はたておく義なり、立錐の地に同じく、少許の地をいふ、莊子に「竊鉤有誅、天下、子孫無——之——」

【智小ニシテ謀大ナリ】 易の繫辭下傳に「德薄而位尊、智小而謀大、力小而任重(中略)言不勝其任也」

【知足】 足は給足の足にて「有餘也」と正字通に註せり、知足の二字は、老子の「知足之足、常足」の語に本づく、(足ヲ知ル者)(足ヲ知レバ)を參看せよ、また——天は兜率天なり、龍龍六帖に見ゆ、

【地大】 五大また四大の一、堅固を性とし、能持を用とす、大厩法數に「地以堅礙爲性、開眼耳鼻舌身等名爲——、若不假水則不和合、經云、髮毛爪齒皮肉筋骨等皆假於地是也」

【馳道】 天子の御成道をいふ、史記秦始皇紀に「是歲賜爵一級治——」

【池塘春草ヲ生ズ】 南史謝惠連傳に「族兄謝靈運云フ、篇章アル毎ニ、惠連ニ對スレバ、輒チ佳語ヲ得營テ永嘉西堂ニ在リ詩ヲ思ヒテ就ラズ、忽チ弟惠連ヲ夢ミ、卽チ池塘生春草」ノ句ヲ得タリ大ニ以テ工トナス」

【遲日】 早朝をいふ、遲は待なり、尙黑くして明を待つの義、淡書南越傳に「——城中皆降伏波」

【遲遲】 緩かにして迫らざる義、禮の孔子閒居に「威儀——」また徐行する貌、詩の邶風谷風に「行道——」また詩經に「春日——」卓氏藻林に「日長而暄也」

【池中ノ物ニ非ズ】 (蛟龍)を見よ、

【致知格物】 (格物致知)を見よ、

【地軸】 臨濟正宗記に「天輪ヲ轉シ、地軸ヲ回ラス」また谷響集に「地軸亦名坤軸」また河圖括地象に「地下有四柱、廣十萬里、有三千六百軸」

【父父タラズト雖モ子ハ以テ子タラザルベカラズ】 (君ハ君タラズ)を見よ、

【父ノ讐ハ與ニ共ニ天ヲ戴カズ】 必ず讐に報い、誓つて讐と俱に生きず、これ共に天を戴かざる所以なり、曲禮に「父讐弗與共戴天」

【父ノ王ヲ失フ例】 父王を弑する前例なり、觀無量壽經に「劫初以來、有諸惡王、貪國位故、殺其父一萬八千人云云」

【父ハ子ノ爲メニ隱ス】 論語子路篇に見ゆ、父子互にその惡を忌みかくすは自然の人情なるをいふ(子ハ父ノ爲ニ)を見よ、

【地著】 土著に同じ、人民他に移らずして、一定の地に常居する義、淡書食貨志に「理民之道、——爲本」

【踟躕】「タメラヒサマヨフ」躊躇と同じ、行きて進まず、また去ること能はざるなり、詩經邶風靜女に「愛而不見、搔首ーー」踟躕または徘徊と同義、荀子禮論に「踟躕焉ーー焉」

【嗟就】嗟は近なり、親なり、親附に同じ、左傳に「ーー寡人ニ」

【執徐】爾雅に「太歲在ニ辰曰ーーニ」史記の索隱に「李巡イフ、伏蟄ノ物、皆振舒シテ出ヅ、故ニーートイフ、執ハ蟄ナリ、徐ハ舒ナリ」

【秩宗】秩は叙なり、宗は祖廟なり、百神を叙次することを司るの官なり、書經の舜典に「咨伯汝作ーーニ」周の宗伯に同じ、

【秩秩】秩序のよくととのへる貌、荀子の仲尼に「貴賤長少ーー焉」また倣ひて序ある貌、詩經の賓之初筵に「左右ーー」また常ありてうつくしき貌、詩經の假樂に「德音ーー」

【紺服】婦人の肌に近く著くる服、襦袢なり、左傳宣九年に「陳靈公與ニ孔寧・儀行父ニ通ス於夏姬ニ皆衷ニ其紺服ヲ以戲ニ于朝ニ」

【窒欲】貪りねがふ心をふさぐ、易經に「君子以懲ニ忿ーー」

【馳騁】馬をはしらす、轉じて「カケマハル」奔走に同じ考工記に「終日ーー」

【雉堞】鮑昭の蕪城賦に「板築ーー之殷」とあり、板築は築城なり、一雉は長さ三丈高さ一丈、堞は城上の短牆なり、

【地頭】地面なり、唐書食貨志に「大歷元年、有ニーー錢一毎畝二十」

【遲鈍】性質の「ニブキ」をいふ、三國志孫奐傳に「吾初憂ニ其ーー、今治軍、諸將少能及者、吾無ニ憂矣」

【智囊】一身に有する所ろ、皆是れ才智にして囊の物を盛る如きをいふ、史記の樗里子傳に「滑稽多智、秦人號曰ニ智囊ニ」また漢書の鼂錯傳に「錯、其ノ辯ヲ以テ太子ニ幸セラルルヲ得、太子ノ家、號シテ智囊トイフ」釋氏要覽に「吳支讖字恭明號ニーーニ云云」

【呢喃】(ーー)を見よ、

【癡ナラズ聾ナラザレバ阿家翁トナラズ】(不ニ癡不ニ聾、不ニ作ニ阿家翁ニ)郭子儀の子、曖、公主に尚し、公主と反目す、公主代宗に訴ふ、子儀曖を執へて罪を請ふ、帝この言を以て慰めたること唐書に見ゆ、陔餘叢考に「北史及ビ隋書ニ、大都督郎紹朝政ヲ非毀スト告グルアリ、文帝將ニ之ヲ誅セントス、長孫平曰ク、癡ナラズ聾ナラザレバ、大家翁ト作ラズト、則チ六朝ノ時、早クコノ語アリ」

【治ニ居テ亂ヲ忘レズ】易の繫辭に「君子安而不ニ忘ニ危、治而不ニ忘ニ亂、是以身安而國家可ニ保」

【地ニ墜ツ】(墜ニ地ニ)滅亡の義、論語に「文武之道、未ニ墜ニ於地ニ」

【血ニ噉ク】(噉血)を見よ、

【地ニ擲テバ當ニ金石ノ聲ヲ作スベシ】(擲ニ地當ニ作ニ金石ノ聲ヲ)文選に「博學善屬文、居會稽ニ遊ニ放山水ニ十餘年、絕ニ重ニ張衡左思賦ニ、每云ニ三都二京、五經之鼓吹也、當ニ作ニ天台山賦ニ、辭致甚工、初成、以示ニ友人范榮期ニ云、卿試擲ニ地當ニ作ニ金石聲ニ、莊子に「聲滿ニ天地ニ、若出ニ金石ニ」とあるは、歌聲の巧妙なるをいふ、(五經ノ)を參看せよ、

【地ノ利ハ人ノ和ニ如カズ】(天ノ時)を見よ、

【地方】その方面の土地をいふ、晉書孝懷帝紀に「蒲子ーー馬生人」

【智ハ囘ナランコトヲ欲シテ行ハ方ナランコトヲ欲ス】(膽ハ大)を見よ、

【智ハ藏レ瘚ハ在リ】瘚は病なり、智者は退き藏れ、民を病ましむる者は位に在るをいふ、書經に「厥終ーー

【智ハ囘ナランコトヲ欲シテ行ハ方ナランコトヲ欲ス】(膽ハ大)を見よ、

【智ハ藏レ瘚ハ在リ】瘚は病なり、智者は退き藏れ、民を病ましむる者は位に在るをいふ、書經に「厥終ーー馬生人」

【智ハ崇ク禮ハ卑シ】(智崇禮卑)易の繫辭傳に「夫易聖人所ニ以崇ニ德而廣ニ業ニ也、知崇禮卑、崇效ニ天、卑法ニ地ニ」程伊川曰く「知ハ則チ崇高、禮ハ則チ卑下、高卑理ニ順ヒ、天地ノ道ニ合スルナリ」

【智ハ非ヲ飾ルニ足ル】說苑に「智足ニ飾ニ非、辯足ニ行ニ說、此レ譏臣也」

【智萬人ニ過グ】(智過ニ萬人ニ)淮南子に「ーーーーニ」者、謂ニ之英、千人者謂ニ之俊、百人謂ニ之豪、十人者謂ニ之傑」

【智比目ニ如カズ】(智不レ如ニ比目ニ)比目魚は鰈なり、一眼あり必兩片相合ひて乃ち行くことを得、江東の人呼んで王餘ニ爲し亦版魚といふ爾雅に「東方有ニ比目魚ニ不ニ比不ニ行」また戰國策に「比目之魚不ニ相得ニ則不ニ能ニ行、故古人命ニ之ニ以ニ其合ニ兩而如ニ一也、今山東合ニ弱而不ニ能ニ如ニ一ニ是山東之智、不ニ如ニ魚也」

【知不足齋叢書】清の鮑廷博がその書庫知不足齋に藏するところの珍書中最も精確なるもの一百九十七種を二十八集に分ちて輯む、廷博字は以文、藏書家を以て名あり、嘉慶十九年卒す、後知不足齋叢書は五十三種を八函に分つ、この書の遺を補ひたるものにて、同人の編するところなり、

【癡物】 愚人をいふ、五代史盧程傳に「莊宗曰、朕憒相ニ此ノ癡物ニ取ラル于九卿ニ」

【治兵振旅】 治兵は、號令を習はせ兵を練る義、振旅は、衆を整へて還る義、左傳隱五年に「三年而治兵、入而振旅」非經の大禹謨にも「班師振旅」

【智謀短淺】 智慧ハカリゴト」の淺く劣れる義、漢書孔光傳に「臣光ノ——云云」

【智謀ノ士ハ見ル所ヲ略同ジ】 三國志に「吳ノ周瑜、孫權ニ上疏シテ曰ク、劉備ハ人シク屈シテ人ノ用ヲ爲ス者ニアラズ、恐ラクハ蛟龍雲雨ヲ得レバ、終ニ池中ノ物ニアラザラント、備之ヲ見テ歎ジテ曰ク、天下ノ智謀之士所見略同」と、己の考と瑜の考との暗合せしを故にいふ、

【池北偶談】 二十六卷、清の王士禎撰す、賓客と偶談せし事どもを談故（朝廷ノ典章及ビ衣冠等ヲ記ス）談藝（文藝ヲ說ク）談異（神怪ヲ記ス）の四類に分ちて錄せり、

【持滿】 十分の地位にのぼりてそを失はざるやうに維持する義、韓詩外傳に「子路曰、敢問——有道乎」また弓を十分に引きしぼる義、漢書に「設弓弩——滿ヲ」を見よ、

【魑魅魍魎】 魑魅は山林の異氣の生ずるところ、魍魎は水の神、皆怪物にて人の害をなす、左傳の宣三年に「螭魅罔兩、莫能逢之」螭魅通ず、罔兩は魍魎に同じ、

【地脈ヲ縮ス】 （縮地脈）神仙傳に「費長房遇壺公、有神術、能縮地脈、千里聚在目前、放之復如舊」

【睒】 我なり、古は上下共に通じて用ふ、史記始皇本紀に「李斯議スラク、天子自ラ稱シテ——トイハン」と、これより和漢共に天子の自稱に限りて用ふることとなれり、書經堯典に「帝曰、咨四岳、——在位七十載」また皐陶謨に「皐陶曰、睒言惠、可底行」

【椿】 本草に「李時珍曰ク、——栲ハ長ジ易クシテ壽考多シ、故ニ——栲ノ稱アリ、——栲栲ハ乃チ一木ニシテ三種ナリ、一ハ木皮細質ニシテ赤ク、葉ハ香甘ニシテ茹フベシ」莊子に「古有大——以八千歲爲春、八千歲爲秋」長壽の木なるよりして人の長壽を祝するに、靈——仙——老——等の語あり、わが國にて「ツバキ」に充つるは和字なり、

【鴆】 一種の毒鳥、その羽を浸したる酒を飲めば忽ちに死す、その雄を運日、その雌を陰諧といふ、太平御覽に「——肉在翅、餓徒不食」またその酒を飲ましめて毒害する義とす、國語に「使醫——之」

【陳維崧】 字は其年、迦陵と號す、江蘇宜興の人、康熙十八年、年五十六鴻博に舉げられ翰林院檢討を授けらる、時にその四六を稱して國朝第一と爲す、朱竹垞と朱陳村詞を合刻す、詩は古今體皆場を擅にす、康熙二十一年卒す、年五十九、著すところ湖海樓全集あり、

【珍ヲ識ル者ハ濁水ノ明珠ヲ拾フ】 抱朴子に「識珍者、必拾濁水之明珠、貴氣者必採穢藪之芳蘭」蘭は香草、蘭の爲、一莖に數花開く「カヲリグサ」

【珍ヲ論ズレバ細疵ヲ以テ巨美ヲ棄テズ】 （論珍則不以細疵棄巨美）抱朴子の語、

【沈香】 熱地に產する香木の名、樹は「モチノキ」に似たりといふ、材を舶來す、その節、木心、堅くして水に沈むが故に名づく、香料とす、色は黑、赤等あり、一名沈水香、略しては「ヂン」といふ、法華經に「栴檀復沈水」翻譯名義集に「其心堅者沒水則沈、曰沈香」

【沈香亭北欄干ニ倚ル】 李白の淸平調詞の結句なり、曰く「名花傾國兩相歡、長得君王帶笑看、解釋春風無限恨、沈香亭北倚欄干」名花は牡丹、傾國は美人、これは沈香亭にて玄宗皇帝が楊貴妃と牡丹を賞する時、李白を召して作らしめたる詩にて、もと三首あり、大意、名花と傾國とが兩ながら共に時を得て歡ぶやうすあり、それを君王が笑を帶びて看たまへり、美人は兎角春風の時節には限りなき恨あるものなれども、今は「サツバリ」とその恨を解釋（トキ スツル）して快く沈香亭の欄干に倚りて在りとの趣をいへり、

【陳孝婦】 漢書に「漢ノ陳孝婦、年十六ニシテ嫁ス、其ノ夫遠ク北邊ヲ戍ル、發スルニ臨ミテ其ノ婦ニ囑シテ曰ク、我ガ生死ハ未ダ知ル可カラズ、吾レ若シ還ラズンバ、汝肯テ吾ガ母ヲ養フヤト、婦應ヘテ曰ク、固ヨリ其ノ職ナリ、敢テ命ヲ奉ゼザランヤト、後、夫果シテ死シテ還ラズ、婦喪ニ居リ、姑ヲ養ヒ、紡織ヲ業トス、父母其ノ少クシテ未ダ子アラズ、而シテ寡居スルコトヲ哀ミ、切ニ再醮ヲ勸ム、婦可カズシテ曰ク、夫發スルニ臨ミ、囑スルニ老母ヲ養フヲ以テス、妾之ヲ許諾セリ、然ルニ今、養ヲ卒フルコト能ハズ、諾シテ信ナルコト能ハズンバ、將タ何ヲ以テ世ニ立ンヤト、自殺センコトス、父母懼レテ復敢テ勸メズ、其ノ姑ヲ養フコト二十八年、姑八十餘歲ニシテ終ル、婦盡ク田宅ヲ賣リテ之ヲ葬リ、終ニ祭祀ニ奉ズ、淮陽ノ太守、其ノ孝ヲ稱シ、奏シテ黃金四十斤ヲ賜ヒ、其ノ差役ヲ免シ」號シテ孝婦ト云フ」

【陳紀】 字は元方、後漢の人（兄タリ難ク）を見よ、

【陳駿】（チンシュン）字は叔通、宋の臨海の人、紹興中、春官に試みられ第一たり、將作少監に累官し、贛秀太平・袁州に歴知たり、光宗の時、吏部侍郎兼侍講となる、詔に應じて三十條を疏す、皆時病に切なり、寧宗の時知樞密院事兼參知政事たり、卒して少傅を贈り文簡と謚せらる、

【陳希夷】（チンキイ）（陳摶（チンタン）を見よ、

【陳其年】（チンキネン）（陳維崧（チンイスウ）を見よ、

【沈吟】（チンギン）深く意を味ひ徴に聲を發するをいふ、また憂思して舒びざる義、古詩に「——聊躑躅（シチョク）」

【沈魚】（チンギョ）わが國にて美人を形容して——落雁といふ、莊子の齊物に「毛嬙麗姫、人之所美也、魚見之深入（ニュウ）、鳥見之高飛」とあるに本づくか、宋之問の浣紗篇に「鳥驚入松黯、魚畏沈荷花」

【陳禾】（チンクワ）劉氏人譜に「宋ノ陳禾、右正言タリシトキ、徽宗童貫ヲ龍任ス、禾上疏シテ、貫ガ權ヲ弄スル罪ヲ劾奏ス、徽宗衣ヲ拂ヒテ起ツ、禾帝ノ衣ヲ引キテ、其ノ說ヲ畢ヘント請フ、衣裾爲メニ落ツ、帝曰ク、正言朕ガ衣ヲ碎クト、禾言フ、陛下衣ヲ碎クヲ惜マズ、臣豈首ヲ碎クヲ惜マンヤト、言愈〻切ナリ、帝曰ク、卿此ノ如クンバ朕何ゾ愛ヘント、內侍帝ニ衣ヲ易ヘント請フ、帝之ヲ卻ケテ曰ク、留メテ以テ眞臣ヲ旌ハサント」

【陳宏謀】（チンクワンボウ）字は汝咨、榕門と號す、廣西臨桂の人、清の雍正癸卯の進士、甘肅・江西・湖南・陝西・河南・福建・江蘇の巡撫に歴任す、至る所る久暫に論なく、凡そ事業の當に興すべき者は、必ず次を以て之を圖る、官東閣大學士に至り、工部尚書を兼ね、文恭と謚せらる、意を經術に留め、著すところの書多く己を修め人を治むるの要に切なり、大學衍義輯要・訓俗遺規等あり、

【陳璉】（チンレン）字は瑩中、宋の沙縣の人、進士に登り、徽宗の時、右正言となる、蔡京・蔡卞を論ずるを以て連りに通台楚州に謫せらる、その京卞を論ずる皆その情愿を發露す、最も忌恨せらる、故に禍を得る最も酷し、後ちに諫議大夫を贈り、忠肅と謚せらる、自ら了翁と號す、著すところ尊堯集あり、

【塵寰】（チンクワン）俗人のすめるうるさき場所をいふ、蘇軾の句に「不（ル）知門外有（リ）——」

【枕經藉書】（チンケイセキショ）經を枕にし、書を藉く、讀書に耽るをいふ、班固の答賓戲に見ゆ、

【陳繼儒】（チンケイジュ）字は仲醇、眉公また麋公と號す、明の松江華亭の人、幼にして穎悟、諸生たりし時、董其昌と名を齊うす、年二十九、儒衣冠を取りて之を焚き崑山に隱る、經史百子に通じ、又、詩文綺事に工なり、人と爲り然諾を重んじ、智略多し、崇禎十二年卒す、年八十二、輯むるところ寶顏堂祕笈あり、

【陳堯佐】（チンギョウサ）宋の閿中の人、字は希元、省華の次子、堯叟の弟、進士に及第し、官參知政事平章事に至り、太子大師を以て致仕し、卒して文惠と謚せらる、人と爲り寬厚儉約、學を好みて輟まず、古隸を善くし尤も詩に工なり、自ら知餘子と號す、著すところ文集三十餘卷あり、

【陳女】（チンジョ）墨の異名、韓愈の毛穎傳に「穎、絳人——弘農ノ陶泓（すずり）會稽ノ楮先生ト友トシ善シ、其ノ出處必ズ偕ニス」唐の世、絳州より墨を貢す、故に絳人といふ（楮先生（チョセンセイ））を參看せよ、

【椿萱】（チンケン）類書纂要に「父母ヲ稱シテ椿萱トイフ」父を椿といふは、莊子逍遙遊に「上古大椿樹アリ、八千歲ヲ以テ春ト爲シ、八千歲ヲ秋ト爲ス」壽を有つの義に取る、母を萱と云ふは（萱堂（ケンダウ））を見よ、成語考に「父母俱ニ存スルヲ——并ニ茂ルトイフ」

【陳默章】（チンモクシャウ）字は公市、石齋と號す、廣東新會の人、明の正統十二年の舉人、鹿を以て翰林檢討を授けんとす、仕へず、白沙に隱れ、性命の學を講ず、門人白沙先生と稱す、涵養深く熟し、德器粹完、道風義槩以て天下を欽動するに足る、章楓山嘗て天下の人物を謂つて、陳白沙

を以て第一流となす、緒餘詩畫を善くす、弘治十三年卒す年七十三、著す所ろ白沙集十二卷あり、萬曆中文廟に從祀し、文恭と追謚す、劉氏人譜に「明ノ陳白沙、嘗テ舟行シテ盜ニ遇フ、盡ク同舟人ノ財物ヲ劫ス、白沙舟尾ニ居リ、呼ンデ曰ク、我ニ行李アリ、此ニ在リ、取リ去ル可シト、盜問フ、誰ゾト、答ヘテ曰ク、我ハ陳白沙ナリト、盜訝リテ曰ク、小人無知ニシテ、君子ヲ驚動ス、舟中ノ人ハ、卽チ公ノ友ナリ、其ノ財ヲ取ルニ忍ビンヤト、悉ク還シテ去リヌ」

【鎭江】（チンコウ）「チンキャン」といふ、江蘇省——府丹徒縣に屬す、南京條約によりて開きし河港にして楊子江口を汎ること百五十六英里、大運河と楊子江との會するところに在り、地勢は四方山岳多く、而して河流縱橫水利に富む、人口凡そ十四萬あり、この地、禹貢の揚州の域に屬し、春秋の時、吳に屬し、その後、越に屬せしが越敗れて楚に屬す、秦には會稽郡に屬し、漢に至り會稽郡丹陽縣となす、三國の時、孫權吳郡より徙りて此に都し、號して京城といふ、後ち都を建業に遷すに及び、此に京口鎭を置く、晉以後毘陵といひ、南除といひ、潤州といふ、宋開寶八年始めて——と名づく、明初江淮府と改めしが尋て復た——府と稱す、江寧府に

接し、且つ安徽・江西・湖南・湖北・四川等の諸省に至る必經の地にして所謂四通八達の便あり、

【塵劫】 物と時との義、轉じて世閒の義とす、頭陀寺碑に「功濟ーーニ」

【陳殺】 古き穀物、呂氏春秋不苟に「新穀熟而ーー虧」

【鎭國】 國を鎭定すること、元倉子に「賢可ニ以鎭ニ國一、亦可ニ以理ニ國一」

【陳後山】 (陳師道)を見よ、

【沈窳】 蠧ヲ産ス】 蠧は蛙の古字、沈窳とは水攻に逢ひて窳も水中に在るなり、通鑑の趙紀に「沈窳産ニ讖一、民無ニ叛意一、城は水にて灌がれ、沈窳に蛙を生ずるまで久しきを經たれども、民叛かずとなり、國語にも「褒子走ニ晉陽一、晉師圍而灌之、沈窳産ニ蠧一、民無ニ畔意一」

【塵滓】 「ホコリ」と「ヲリ」とをいふ、轉じて汚れたる心、または事をもいふ、許彦周の句に「無ニ一點ーーニ」

【沈周】 (沈周)を見よ、

【珍羞】 「メヅラシク、ウマキモノ」南史に「家貧、養ニ母常得ニ珍羞ーーニ」

【陳子昂】 (ーーニ)を見よ、

【陳師道】 字は無己、一の字は履常、後山と號す、彭城の人、少くして刻苦問學し、高介にして節あり、貧に安んじ道を樂む、諸經皆訓傳あり、詩禮に於て尤も邃し、その文を爲るには曾鞏を師とし、詩を爲るには黃庭堅を師とす、平淡雅奧自ら一家を成す、元祐中蘇軾等その文行を薦めて本州の敎授に除し、祕書省正字に累遷す、建中靖國元年卒す、年四十九、著すところ後山集三十卷あり、

【疾疢】 疢は熱病なり、ーーは猶ほ災患の如し、孟子盡心上篇に「人之有ニ德慧術知一者、恒存乎ーーニ」

【椹質】 「キリダイ」椹は莖椹、質は剉刃にて、皆刑具なり、周禮に「翦ニ屛ーー一用ニ人一」また史記范雎傳に「臣之胸不ニ足一以當ニ一ーニ一而腰不ニ足一以待ニ斧鉞一ニ」一解に質も亦「キリダイ」なりと從ふべし、

【陳人】 陳腐無用の人の義にて、自ら謙遜していふ、莊子の寓言篇に「人無ニ人道一是之謂ニ陳人一」

【陳振孫書錄解題】 (直齋書錄)を見よ、

【枕藉】 相枕として重なりあふさま、漢書酷吏傳に「一發視皆相ーー死」また「マクラ」「シキモノ」の義、白樂天の詩に「芳艸供ニ一ーニ蘇軾の前赤壁賦に「相與ニ一ーニ乎舟中ニ」

【陳情表】 晉書に「晉ノ李令伯、父早ク亡ス、母更ニ人ニ適ク、令伯年數歲ナリシモ、母ヲ思ヒテ疾ヲ成ス、祖母劉氏躬自ラ撫養ス、祖母疾アリ、令伯帶ヲ解カズ、愛護具ニ至ル、武帝徵シテ太子洗馬ト爲サントス、令伯辭スルニ祖母老イテ、侍養人ナキヲ以テシ、乃チ陳情表ヲ上リテ職ニ就カズ、帝其ノ誠孝ヲ嘉シテ、奴婢二人ヲ賜フ」陳情表は、古文眞寶後集に出づ、

【陳壽】 字は承祚、晉の巴西安漢の人、少くして學を好み、孝廉に擧げられ、著作郎に除す、三國志を撰す、時人その善く事を叙す、良史の才ありと稱す、また者舊傳十餘篇を著し世に行はる、元康七年歿す、年六十五、

【椿壽】 高齡を祝する語、莊子逍遙遊に「上古有ニ大椿一、以ニ八千歲一爲ニ春、八千歲一爲ニ秋」とあるに本づく、

【陳淳】 宋の龍溪の人、朱熹の潭を守る時、淳從ひて郡齋に游ぶ、熹曰く、南來吾が道、一の安卿を得たりと、安卿とは淳の字なり、淳嘗として謁まざるなく、物と辨じて格めざるはなし、義理貫通して條緒を洞見す、學者稱して北溪先生と爲す、著すところ北溪字義二卷あり、

また明の進士にーーあり、字は道復、白陽山人と號す嘉靖甲辰卒す、年六十二、

【砧杵】 砧は布帛を擣つに用ふる石「キヌタ」杵はその「ツチ」をいふ、何遜の句に「ーー鳴ニ四隣一」白居易の句に「月明ーー動、夜夜搗ニ秋練一」また張翰の詩に「長安一片月、萬戶擣衣聲、秋風吹不ニ盡一、總是玉關情」

【陳書】 三十六卷、梁書と同じく唐の姚思廉の撰なり、五本紀六卷、三十列傳三十卷、志表なし、志は隋書に具す、初め思廉の父察この書を撰せんとし、僅に二卷を成して卒す、思廉その業を繼ぎて補撰す、體例秩然として梁書の如く雜ならず、

【陳勝】 字は涉、陽城の人なり、少き時嘗て人と傭耕す、耕を輟めて悵恨すること久し、曰く、苟も富貴ならば相忘るること無けんと、傭者笑ひて曰く、汝傭耕をなす、何ぞ富貴なることあらんと、勝大息して曰く、嗟呼燕雀安ぞ鴻鵠の志を知らんやと、秦の二世元年秋七月、閭左を發して漁陽を戍らしむる者九百人、陳勝と吳廣と皆屯長たり、行きて蘄の大澤鄕に至り、亂を起す、詳しくは史記のーー世家を見よ、

【陳勝吳廣】 前條に說きたる如く、この二は首として秦に叛せり、それより事の端を發するを「ーーーーヲ爲ス」といふ、

【陳寔】 字は仲弓、後漢の潁川許の人、少くして縣吏となり、學を好みて坐立誦讀す、縣令之を奇とし聽し

て業を太學に受けしむ、後ち太丘の長に除す、德を修めて清靜、百姓以て安し、吏白して訟ふる者を禁ぜんとす、寔曰く訟は以て直を求むるに在り、之を禁ぜば理將に何れに申びんとすと、官を去りて吏人之を追思す、鄉閭に在りて平心物を率ゐる、爭訟あれば輒ち判正を求む、曲直を曉喩するに、退いて怨む者なし、乃ち歎じて寧ろ刑罰の加ふる所となるも、陳君の爲めに短とせられざらんといふに至る（梁、上ノ）を見よ、

【陳子昂】　字は伯玉、唐の梓州射洪の人、家世世富豪、進士に擧げられ、右拾遺となる、少くして善く文を屬す、編纂にして威儀なし、然れども文詞宏麗、甚だ當時の重んずる所ろとなる、著す所ろ陳拾遺集十卷あり、

登幽州臺歌　陳子昂
前不見古人　後不見來者　念天地之悠悠　獨愴然而涕下、

【枕席ヲ拂フ】　（拂枕席ニ衾ヲ同じくして臥すといふ讒詞なり、戰國策に「今以臣之凶惡而得爲王——」凶惡は貌の醜きなり、

【陳然】　陳は覘（ウカガフ）なり「ニョット」頭をつき出す貌、公羊傳哀六年に「陳之則——」

【沈船破釜】　（船ヲ沈メ）を見よ、

【沈淳】　淳は「ヌカルミ」にて行くに難む、——は蔑徵の義、楚辭怨世に「世——而難論兮」

【陳陶】　字は嵩伯、鄱陽劍浦の人、工に詩を賦す、一點の塵氣なし、晩唐諸人中に於て、最も平淡を得たり、要するに時流の能く企及する所ろにあらず、文錄十卷あり、

【椿堂】　父を稱して——又は椿府といふ、莊子の逍遙游に「上古有大椿樹、以八千歲爲春、八千歲爲秋」と、父を稱して椿となすは壽をたもつの義に取る、

【踸踔】　跛者の行く貌、踸は一に跧に作る、莊子の秋水に「吾以一足跧踔而行」また猋かに長ずる貌、楚辭七諫に「馬蘭——而日加」馬蘭は惡草なり、小人に喩ふ、また常なき貌、定りなきなり、陸機の文賦に「故——於短韻」

【沈沈】　宮室の深邃の貌、史記陳涉世家の註に見ゆ、また夜のふけゆく貌、夜——などと用ふ、また茂れる貌、文選の謝元暉の註に「衰柳尚——」

【陳陣】　「ヒトシキリ」颯と吹く風が續きて來る貌、涼風——などと用ふ、「ヒトシキリ」の風は、一陣といふ、

【陳陳相因ル】　米がふるくなりて、積みかさなれるを

いふ、漢書食貨志に「大倉之粟、——」

【珍重】　大切にする義、多く尺牘に用ふ、釋氏要覽に「釋氏相見、將退、即口云——、如此方俗云安置也、言——即是囑云善加保重也云云」また物を賞贊する辭、朱子の感興詩に「——無極翁、性理大全の註に「——贊美之詞ナリ」

【陳重】　字は景公、漢の宜春の人、少くして鄱陽の雷義と友たり、時人語して曰く、膠漆自謂堅不如雷與陳、後ち孝廉に擧げられ郎となる、同署の郎あり息錢數十萬を負ひ資主日に至る、重密かに爲めに代り還し、終に惠を言はず、義と俱に尚書郎に拜す、義黜けられ、重も亦病を以て免す、復茂才に擧げられ、細陽の令となる、政異化あり、會稽の太守に遷る、

【沈溺】　濕疾なり（重腿）を見よ、また沈み溺るる義にも用ふ、淪溺に同じ、

【鴆毒】　鴆は、玉篇に「毒鳥、蛇ヲ食フ、其ノ羽ヲモテ酒ヲ盡キ、之ヲ飲ムトキハ即死ス」鴆は酖に通用す、左傳閔元年に「安安酖毒、不可懷也」

【沈德潛】　（沈德潛）を見よ、

【陳圖南】　（陳摶）を見よ、

【鎭南浦】　朝鮮の地名、大同江の河口に在る港、本邦領事館の所在地、

【闖入】　闖は覘（ウカガフ）なり、うかがひ入るなり、說文に「闖ハ馬ノ門ヲ出ル貌」公羊傳莊六年の註には「出頭貌」

【陣亡】　「ウチジニ」陣沒に同じ、文獻四裔考に「閻忠寺本唐太宗爲征遼——士所造」

【陳摶】　字は圖南、宋の眞源の人、華山に隱居し、寢處すること百餘日起たず、嘗て白驢に乘じ汴中に入らんと欲す、途に太祖の登極を聞き、大笑して驢より墜つ、曰く天下此れより定まらんと、太宗召して羽服を以て延英殿に見えしむ、宋琪修養の道を問ふ、摶曰く、たとひ白日天に昇るも何ぞ世に益せん　今君臣德を同うし化を與し行を勤む、修煉此に出るなしと、帝益之を重んじ、號を希夷先生と賜ふ、

【陳伯玉】　（陳子昂）を見よ、

【陳白沙】　（陳獻章）を見よ、

【陳蕃ガ慨然トシテ天下ヲ廓清スル志アリ】　本朝傳記の松平定信の條に見ゆ、後漢書陳蕃傳に「陳蕃字ハ仲擧、汝南平輿ノ人、年十五、常ニ一室ニ閒處シ、庭宇蕪穢ナリ、父ノ友、同郡ノ薛勤來リテ之ヲ候シ、蕃ニ謂ツテ曰ク、孺子何ソ洒掃シテ以テ賓客ヲ待タザルト、蕃曰

ク大丈夫ノ世ニ處ル、當ニ天下ヲ掃除スベシ、安ンソ一室ヲ事トセンヤト、勤ソノ清世ノ志アルヲ知リ、甚ダ之ヲ奇トス」とあるをいふ、廓は大なり、開なり、天下を開きて清からしむる義、

【陳蕃榻ヲ下ス】　事文類聚續集卷の十一に「陳蕃爲豫章太守、不接賓客、唯徐孺子來、特設一榻、去則懸之」と、それより特に賓客を敬するに用ふ、

【陳眉公】　(陳繼儒)を見よ、

【鎭撫】　安んじ慰めて有つ義、左傳文十二年に「——其社稷ニ」

【陳平】　漢の陽武の人、少くして家貧し、讀書を好む、容貌甚だ美なり、後ち高祖を佐けて天下を定め六たび奇計を出す、初め微なりし時、里中の社に宰となり、肉を分つこと甚だ均し、父老曰く善いかな、陳孺子の宰たるやと、平曰く予をして天下に宰たらしめば亦この肉の如くせんと、遂に高祖に任用せられ、官丞相に至り、曲逆侯に封ぜられ、孝文帝の二年卒す、獻侯と謚せらる、

【陳編】　古書をいふ、韓愈の進學解に「窺陳編以盜竊」また謝莊月賦に「沈吟齊章、殷勤——」とある——は、詩の陳風月出皎兮の詩をいひ、齊章は齊風東方之月兮の詩をいふ、

【陳北溪】　(陳淳)を見よ、

【陣沒】　「ウチジニ」陣亡に同じ、宋史の理宗紀に「——者、趣上姓名、贈恤其家」

【陳無己】　(陳師道)を見よ、

【沈湎】　酒に溺るるなり、書經の泰誓に「沈湎冒色敢行暴虐」の註に「——ハ、酒ニ溺ルルナリ、冒色ハ女色ニ冒亂スルナリ」

【沈約】　字ハ休文(沈約)を見よ、

【陳與義】　字は去非、洛陽の人、天資卓偉、宋の政和閒仕へて太學博士に至る、徽宗その賦する所ろの墨梅の詩を見て、見ること晩かりきの歎あり、紹興中、翰林學士參知政事に拜す、その出處氣節文章翰墨卓然として稱すべし、著すところ簡齋集あり、世に行はる、

【陳雷膠漆】　後漢書列傳に「陳重字ハ景公、豫章宜春ノ人、少クシテ鄱陽ノ雷義ト友タリ、義字ハ仲公、太守重ヲ孝廉ニ舉グ、重以テ義ニ讓ル、太守聽カズ、義明年孝廉ニ舉グラル(中略)義後チ茂才ニ舉グラル、重ニ讓リテ、命ニ應ゼズ、鄉里之ガ語ヲ爲シテ曰ク膠漆自謂堅不如陳與雷ト、三府同時ニ俱ニ辟ス、竝ニ御史ニ至ル」(膠漆ノ)を參看せよ、

【帖木兒】　元の太祖成吉思汗の裔孫にして、略あり、中央亞細亞を一統し、大蒙古王國を立てて、その威至世界に震ふ、西曆千三百三十年に生れ千四百〇五年に歿す、年七十六、俗に「タメルラン」と訛稱す、

【枕腕】　(懸腕)を見よ、

【治命】　生前のたしかなる時の命令をいふ、左傳宣十五年に「魏武子有嬖妾無子、武子疾命顆曰、必嫁是、疾病則曰、必以爲殉、及卒顆嫁之、曰疾病則亂、吾從其治也」とある杜註に「言人疾重則神昏亂、我所以嫁此妾者、從吾父之一時也」

【知名】　我が名を世人に知らる「ホマレ」ある人、魏書に「以才秀知名」また單に人の名を知る、禮記に「男女非有行媒、不相知名」

【遲明】　黎明に同じ、漢書高帝紀に「——圍宛城三匝」と、註に「遲ハ未ナリ、天未ダ明ケザル頃ナリ」一解に遲は遲つなり、明を待つ義にて、未明の意とす、

【知命ノ年】　五十歳をいふ、論語爲政篇に「五十而知天命」とあるに本づく、文選の潘安仁の閑居賦に「自弱冠涉乎知命之年、八徙官而一進階」

【茶】　一音サまたタ茶經に「一ニ荼トイヒ、二ニ檟トイヒ、三ニ蔎トイヒ、四ニ茗トイヒ、五ニ荈トイフ」博物

【塵勞】　煩惱の異名、塵は汚れ積もる義、勞は身心を使役するの義、玄記に「物體名爲塵、憂惱名爲勞」金剛經註に「有大智慧光明出離——」

【陳琳檄ヲ草ス】　魏志に「廣陵ノ陳琳、字ハ孔璋、太祖(曹操)ソノ才ヲ愛シ記室ヲ管セシム」典略に曰く「琳詔書及ビ檄ヲ作リ、草成リテ太祖ニ呈ス、太祖先ヨリ頭風ヲ苦ミ、是ノ日疾發ス、臥シナガラ琳ガ作ル所ロヲ讀ミ、翕然トシテ起チテ曰ク、此レ我ガ病ヲ愈スト、數々厚賜ヲ加フ」琳は建安七子の一人なり、

また宋の韮人に陳琳あり、字は仲美、珏の子、山水人物花鳥倶に古人を師とし、妙に臻らざるなし、論者謂ふ南渡二百年この手筆なしと、

【陳亮】　字は同甫、龍川と號す、宋の婺州永康の人、人と爲り才氣超卓、喜で兵を談じ議論風生す、筆を下せば數千言立ろに成る、常に天下を經綸するを以て自ら任ず、紹熙四年狀元及第、建康僉判を授けらる、年五十五歿す、文毅と謚せらる、詳くは宋史卷の四百三十六を見よ、

【陳龍川】　(陳亮)を見よ、

【陳烈】　字は季慈、福州侯官の人、傳は、宋史卷の四百五十八、隱逸傳に出づ、

志に「飲其茶令人少眠」錦字箋に「茶ノ品ハ龍鳳團ヨリ貴キハ莫シ、蔡君謨始メテ之ヲ造ル云云」又いふ「茶始メテ芽ヲ生ズル、槍ト旗トノ號アリ、又之ヲ名ツケテ雀舌トイフ云云」又いふ「茶錄ニ云フ、建人團茶ヲ謂ツテ茗戰ト爲ス、水痕先ヅ退ク者ヲ以テ負ト爲シ、久シキニ耐フル者ヲ勝ト爲ス」盧仝(茶經)を參看せよ、

茶煙　一元　謝　宗　可

玉川爐畔影沈沈　淡碧縈空杳隔林　蚓竅聲微松火暗　鳳團香煖竹窓陰　詩成禪榻風初起　夢破僧房雪未深　老鶴遲歸無俗客　白雲一縷在遙岑

【長安】　支那陝西省の西安府の古名、周の鎬京の地、秦漢唐時代の帝都たりし地なり、

【長安一片月萬戸擣衣聲】　李白の子夜呉歌の句なり、曰く「——————、秋風吹不盡、總是玉關情、何日平胡虜、良人罷遠征」この詩は樂府の體なり、子夜は東晉の女子なり、大意は、征戍せる人の婦が砧を打ちつつ良人を思へる情を寫したるなり、即ち長安萬戸の壯丁が、征戍中に在りて、空房を守れる婦人は、月下に衣を擣ちて寒衣を製することにいそしめり、さて秋風は砧の聲と共に靣さず、この砧聲の中には、玉關萬里の遠方に在る夫を思ふ切なる情が含まれてあり、嗚呼何の日にか、夫が胡虜を平定して無事に歸り來るならんと無限の情をのべたるなり、玉關は、班超の傳に「但願生入玉門關」とある地にて沙州燉煌郡の西北にあり、

【長安志】　二十卷、宋の宋敏求撰す、敏求字は次道、趙州平棘の人、この書は總敘・分野・土産・土貢・風俗・四至等十六目に分ち、長安の城府第宅山川道里風俗物産等を詳敘し、極めて精博となす、

【長安志圖】　三卷、元の李好文撰す、漢唐に於ける長安の沿革制度を圖によりて詳說す、

【張安世】　字は子孺、杜陵の人、父の湯、官御史大夫に至る、安世父の任を以て郎となる、武帝その才を奇とし尚書令に擢き、光祿大夫に遷る、昭帝即位し、富平侯に封ぜらる、宣帝の時定策の功を以て大司馬に拜す、

【長安近シ】　劉昭幼童傳に「晉ノ明帝五歲ノ時、元帝ノ膝上ニ坐ス、曾テ人アリ長安ヨリ來ル、元帝問フ、日ト長安ト孰レカ近キト、明帝便チ答ヘテ曰ク、長安近シト、元帝問フ汝何ヲ以テ之ヲ知ルト、答ヘテ曰ク、只人ノ長安ヨリ來ルヲ聞ク、人ノ日邊ヨリ來ルヲ聞カズト、帝之ヲ異トス、後群臣復タ之ヲ問フ、答ヘテ曰ク、

シト、元帝之ヲ問フ、何ソ昨日ノ答ニ同ジカラザルヲ得ンヤト、曰ク、頭ヲ擧グレバ日ヲ見ルモ、長安ヲ見ザレバナリト」

【長拱】　兩手を拱きて上より垂れて下に極まる義、禮の郷重ならざるもの、漢書鄒食其傳に「——不拜」

【張羽】　字は來儀、字を以て行はる、更に附風と字し、靜居と號す、明の烏程の人、鄉薦を領して安定書院山長となり、徙りて呉郡に居る、洪武の初、徵されて太常寺丞となる、韶は米氏の雲山を法とし、著述を好む、文辭典雅行事を紀載するに、詳にして體あり、楷書は王右軍を法とす、詩は高啓・徐賁・楊基と四傑と稱せられ、以て唐の王楊盧駱に配す、太祖その文を重んず、後ち事に坐して嶺南に竄せられ、未だ半道ならずして召還せらるゝ、羽自ら免れざるを知り、龍江に投じて死す、元の至治癸亥に生れ、明の洪武乙丑卒す、年六十三、靜居集四卷の著あり、

【張翥】　字は君翼、成都の人、公羊春秋を治め、書史に博渉す、漢の昭烈益州を定め、翥を以て太守となす、後ち丞相亮の參軍となる、翥少くして楊恭と友とし善し、恭早く死し、遺孤未だ數歲ならず、翥、恭の母を迎へて之に事へ、恭の子長ずるに及び爲めに婦を娶り田宅を買ふ、時人咸その義を重んず、後ち輔漢將軍を加へらる、

【張英】　字は敦復、樂圃と號す、清の安徽桐城の人、康熙六年の進士、官文華殿大學士に至り、禮部尚書を兼ぬ、同四十七年卒す、年七十二、文端と謚す、著すところ篤素堂文集易書裏論あり、淵鑑類函はその敕を奉じて撰せしところなり、

【張益】　字は士謙、恭菴と號す、呉の人、明の永樂十三年の進士、侍讀學士に官す、松竹を寫すこと夏昶と同じ、文章雄健なり、昶その石渠閣賦を見て己が上に出づるとなし、遂に復文を作らず、益、昶の竹の絶妙なるを見てまた竹を寫さず、各所能を以て世に名あり、楷書に工なり、人と爲り清醇端謹、內閣に入りて機務を典る、正統の末、土木の難に死す、景帝立ちて翰林學士を贈り、文僖と謚す、著すところ盡法あり、

【長ヲ絕チ短ヲ補フ】　(絕長補短)絕は截なり、長き所ろを截ちて短き所ろを補ひ、幅員を正しくするをいふ、孟子に「今滕——將五十里也」また史記楚世家に「西周之地、——不過百里」

【杖家】　五十歲をいふ(杖朝)を見よ、

【張楷】　霸の子、嚴氏の春秋古文尚書に通ず、門徒常に

百人、五府連辟し、賢良に舉げらるるも就かず、後漢の順帝詔して曰く、楷は行原憲を慕ひ、操夷齊に擬すと、性道術を好み、能く五里霧をなす（五里霧中ニ）を見よ、

【長庚】「ヨヒ」の明星をいふ、太白星の一名、詩經に「東有啓明、西有ー」ーニ

【張綱】（豺狼路ニ）を見よ、

【長夏江村事事幽】杜甫の江村と題する律詩の句にて唐宋詩醇、杜工部集等に出づ、

清江一曲抱村流、長夏江村事事幽、自去自來堂上燕、相親相逐水中鷗、老妻畫紙爲ー棋局、稚子敲針作ー釣鉤、多病所須惟藥物、微軀此外復何求、

【張翰 章ヲ思フ】晉書文苑傳に「張翰字ハ季鷹、吳縣ノ人、清才アリ、善ク文ヲ屬ス、齊王冏、辟シテ東曹ノ掾ト爲ス、洛ニ在リテ、秋風ノ起ルヲ見テ、因リテ乃チ吳中ノ菰菜・蓴羹・鱸魚膾ヲ思ヒテ曰ク、人生適志ヲ貴ブノミ、何ゾ能ク官ニ數千里ニ羈セラレ、以テ名爵ヲ要センヤト、遂ニ翫ヲ命ジテ便チ歸ル」章 蓴を見よ、

【張機】漢人、字は仲景、長沙の太守、時に大疫流行し、治法襍出す、機傷寒論・金匱方を著し、世に行はる、

【張儀】張老の後、戰國の時の魏の人、鬼谷子の術を學び、遊說を以て名を顯す、楚の相、誣ゆるに金を盜むを以てし、笞撃せられ體に遍くして歸る、その妻に謂ひて曰く、吾が舌を視よ、尚ほ在りや否やと、妻曰く在りと、曰く舌在れば足ると、後ち連衡の說行はれて秦の相となる、

【張九齡】字は子壽、父韶州の別駕となり、任に卒す、遂に曲江に居る、七歲にして能く文を屬す、後ち進士に擢てられ、中書舍人となる、時に號して文場の元帥となす、左拾遺に遷る、玄宗の千秋節に、群臣皆寶玩を獻ず、九齡乃ち前世興廢の源を述べ、書五卷を爲りて之を千秋金鑑錄といひ、以て諷諭を仲ぶ、中書侍郎に累遷す、嘗て李林甫を抑へて反つて擠せられ、相を罷め家居して卒す、時に開元二十八年、年六十八、天下稱して曲江公と爲して名いはず、文獻と追謚す、

【杜鄉】六十歲をいふ（杜 朝）を見よ、

【張季鷹】（張 翰 章）を見よ、

【張旭】字は伯高、唐の吳の人、特に草書に巧なり、酒を嗜み、大に醉へば叫呼狂走す、乃ち筆を下し、或は頭を墨に濡して書す、醒後自ら視て神となす、世に張顚といふ、

【長吁】吁は歎き嘆く聲にて、長嘆の義、宋史の鄭俠傳に「俠見ル所ロヲ繪キテ圖トナシ、疏シテ奏ス、神宗反覆、圖ヲ觀、ーースルコト數四、袖ニシテ以テ入ル、是夕寢ヌレドモ寐ネラレズ、翌日、十有八事ヲ罷ム、民閒謹叫シテ相賀ス」白居易の詩に「夜深吟罷一ーー」

【長驅】遠方の道を疾驅して留まらざる義、史記秦紀に「造父爲穆王御、ーー踰周以救亂」戰國策に「輕卒銳兵、ーー至國」

【張華】字は茂先、晉の范陽方城の人、學業優博、圖緯方伎の書、詳覽せざるなし、吳を伐つの功によりて廣武侯に封ぜらる、華儀禮憲章に於て損益する所ろ多し、一時の詔誥草定するところ多し、進んで侍中と爲り忠を盡して匡輔す、後ち趙王倫の怨む所ろとなりて害せらる、年六十九、卒するの日、家に餘貲なし、惟文史の几篋に溢るるあるのみ、著すところ博物志十卷あり、晉書の本傳に「初メ吳ノ未ダ滅セザルヤ、斗牛ノ閒ニ常ニ紫氣アリ、道術者皆オモヘラク、吳方ニ强盛ナリ、未ダ圖ルベカラズト、惟張華以テ然ラズトナス、吳平グルニ及ビテ紫氣愈明カナリ、華、豫章ノ雷煥ガ絳衆ニ達スルト聞キ、乃チ煥ヲ要シテ宿セシメ、人ヲ屏ケテ共ニ天文ヲ尋ネ、樓ニ登リテ仰グ、煥曰ク惟斗牛ノ閒ニ、異氣アリ、寶劒ノ精上リテ天ニ徹スルノミト、華何ノ郡ニ在ルト問フ、曰ク豫章ノ豐城ニ在リト、華乃チ煥ヲ署シテ豐城ノ令トナス、煥縣ニ到リ獄屋ノ基ヲ掘リ一石函中ニ雙劒竝ニ刻題アルヲ得タリ、一ヲ龍泉トイヒ、一ヲ太阿トイフ、コノ夕、氣マタ見エズ、煥使ヲ遣シ、一ヲ送リ華ニ與ヘ、一ヲ留メ自ラ佩ブ、或人曰ク、二ヲ得テ一ヲ送ル、張公ヲバ欺クベケンヤト、煥曰ク本朝將ニ亂レントス、張公當ニソノ禍ヲ受クベシ、コノ劒當ニ徐君ノ墓樹ニ繫グベキノミ、靈異ノ物當ニ化シ去ルベシト、華劒ヲ得テ煥ニ書ヲ報ジテ曰ク、詳ニ劒ノ文ヲ觀ルニ、乃チ干將ナリ、莫邪ハ復タ至ルベキヤ否ヤ、然リト雖モ、天、神物ヲ生ズ、終ニ當ニ合スベキノミト、華誅セラレテ劒ノ所在ヲ失フ、煥卒シテ子ノ華、州ノ從事タリ、劒ヲ持シ行イテ延平津ヲ經、劒忽チ腰閒ヨリ躍出シテ水ニ墮ツ、人ヲシテ水ニ沒シテ之ヲ取ラシム、但兩龍ノ蟠繞シテ文章アルヲ見ル、須臾ニシテ光彩水ヲ照シ波浪驚沸ス、華嘆ジテ曰ク、先君化去ノ言、張公終合ノ論此レ其ノ驗乎ト」

【頂光】圓光に同じ、佛菩薩の頭首に於ける常光なり、大阿彌陀經に「諸佛ーー」

【張皇】 皇は大なり、をしひろめて、宏大ならしむる意、書經康王之誥に「——一六師ニ」

【貞觀政要】 十卷唐の吳兢撰す、太宗と群臣と政事を論ぜし語を四十門に分ちて類編す、この書を讀まば貞觀の至治の偶然ならざるを知る、我國にても古く王朝の頃より傳來し、殊に德川家康の如きは藤原惺窩をして之を講ぜしめて施政の參考となせり、

【長鯨】 「オホクヂラ」吳都賦に「——吞航」また貪りて飽くことなき「フルモノ」に喩へていふ、韓世能俘斬雲南叛夷露布に「長鯨既戮、封豕戡屠、數年鴟張之寇、倏爾氷摧、千里波濤之區儼然山峙」

【張繼】 字は懿孫、唐の兗州の人、天寶十二年の進士第に登り、大曆の末に檢校戶部員外郎を授けらる、詩集一卷あり(絕句)を參看せよ、

【長慶集】 (白氏——)を見よ、別に元氏——六十卷補遺六卷あり元稹(字ハ微之、詩ニ長ジ、白居易ト名ヲ齊ウシテ元白ト稱セラル)の詩集なり、長慶は唐の穆宗の年號、

【町畦ナシ】 人に接するに隔なきに喩ふ、莊子人間世に「彼且爲嬰兒亦與之爲嬰兒、彼且爲無町畦亦與之爲無町畦」云云」田の畔なりと、町濞音テイ

【暢月】 陰曆十一月をいふ、仲冬の月なり、禮記の月令の註に「陽八シク屈シテ、而シテ後ニ伸ブ、故ニ暢月トイフナリ」呂氏春秋の註には「陰氣上ニ在リテ民人空閒事作スル所ロナキヲイフ」

【張協】 晉の人、字は景陽、少くして儁才あり、兄載と名を齊うす、河閒内史となる、郡に在りて清簡寡默、治績あり、時に天下已に亂れ所在盜起る、協遂に人事を棄絕して草澤に屛居し、道を守りて世と競はず、屬詠を以て自ら娛みとす、永嘉の初め、復た黃門侍郎に徵さる、疾に託して就かず、協詩を善くし、尤も鍛鍊を以て稱せらる、然れどもその文は兄載に及ばず、載の詩は弟に及ばず、

【長鋏歸來】 史記孟嘗君傳に「馮驩、孟嘗君ノ客ヲ好ムト聞キテ之ニ見ユ、孟嘗君之ヲ傳舍ニ置ク、驩ソノ劍ヲ彈ジテ歌ヒテ曰ク長鋏歸來乎、食無魚ト、孟嘗君之ヲ幸舍ニ遷ス、食ニ魚アリ、復タ劍ヲ彈ジテ歌ヒテ曰ク長鋏歸來乎、出無輿ト、孟嘗君之ヲ代舍ニ遷ス、出入ニ輿車アリ、又劍ヲ彈ジテ歌ヒテ曰ク長鋏歸來乎、無以爲家ト云云」詳しくは同傳を見よ、

【張燕】 河内の人、漢の武帝の時、郎となり、募に應じて月氏に使し、西南夷を開く、去つて十三年にして始めて還る、後ち匈奴を擊ちて博望侯に封ぜらる、

【郟玄】 字は康成、後漢の高密の人、關に入り馬融に從ひ學ぶ、後ち鄕に歸り徒に授く、從學する者數百千人、國相孔融深く之を敬す、玄嘗て道にして黃巾の賊數萬人に遇ふ、玄を見て皆拜し、敢て縣境に入らざりき、著す所ろ周禮・禮記の註あり、

【長劒斷ニ期ス、鎩鉾ニ期セズ】 呂氏春秋に「長劒期乎斷不期乎鎩鉾、良馬期乎千里不期乎驥驁」吳越春秋に、鎩鉾は干將の妻なり、夫妻鍛して二劒を作る、陽を干將といひ、陰を鎩鉾(一ニ莫邪ニ作ルと名づくる由を載せたり、干將鎩鉾は吳の名劒なり、

【張公藝百忍字ヲ書ス】 唐書に「唐ノ張公藝九世同居ス、北齊・隋・唐皆其ノ門ニ旌表ス、麟德中、高宗泰山ニ封ジ、其ノ宅ニ幸シ、族ヲ睦シクスル所以ノ道ヲ問フ、公藝紙筆ヲ請ヒテ忍ノ字百餘ヲ書シテ以テ進ム、其ノ意ニ以爲ラク、宗族ノ協ハザル所以ハ、尊長ノ衣服或ハ均シカラザルコトアリ、卑幼ノ禮節、或ハ備ラザルコトアレバ、更ニ相責望シ、遂ニ乖爭ヲ爲ス、苟シクモ能ク相與ニ之ヲ忍ベバ、則チ家道雍睦セント」

【長江天塹】 天然の險要をいふ、隋の陳を伐つや、孔範曰く「——古以爲限、虜軍豈能飛渡」塹は城のまはりの堀をいふ、

【張弘範】 字は仲疇、元の易州定興の人、行軍總管となり、宋を攻めて之を滅し、石を厓山の陽に立て、功を紀して歸る、入朝して宴を賜ひ慰勞甚だ厚し、卒する年四十三、淮陽王を加封し、獻武と諡す、

【杜國】 七十歲をいふ(杜ハ朝)を見よ、

【長恨歌】 唐の白樂天が楊貴妃の一生を敍し、玄宗帝別離の恨を述べたるものなり、敍述巧妙白詩中の傑作と稱せらる、白氏文集または古文眞寶等に出づ、

【張載】 字は孟陽、晉の安平の人、性閑雅、博學にして文章あり、太康の初め蜀に至り、道、劒閣を經、蜀人の險を恃みて亂を好むに感じ、因つて銘を作る、益州の刺史張敞見て之を奇とし、乃ち表してその文を奉る、武帝使を遣はして之を劒閣山に鐫せしむ、官弘農太守となる、長沙王義請うて中書郎に拜す、世の方に亂るるを見て、復た仕進の意なく、遂に病と稱して家に歸り、詩文を以て自ら樂む、儀容貌極めて醜し、嘗て洛陽の市に游ぶや、群女瓦石を以て之に擲つ、二弟協・亢皆文名あり、時に三張と稱す、

【張戩】 字は子厚、宋の關中の人、進士に擧げられ、累遷して崇文殿校書、同知太常理院となる、人と爲り志氣不羣なり、初め喜みて兵を談ず、また釋老の書を讀み、その說を窮む、得る所ろなきを知り、反りて之を六經に求む、嘉祐の初、二程子を見、盡く異學を捨てて道學に歸しぬ、神宗立ち召して治道を問ふ、對ふるに漸く三代の制に復すべきことを以てす、執政と合はず、病を移して橫渠に歸る、常に一室に危坐して潛心精思す、其の學は易を以て宗とし、中庸を以て體とす、人に敎ふるに禮を以てし、知禮性を成し氣質を變化するの道、及び學は必ず聖人の地位に至るべきを以てす、關西の士、翕然として景仰し、稱して橫渠先生といふ、熙寧十年十二月歿す、年五十八、明と諡せらる、著す所ろ東銘西銘正蒙等あり、淳祐の初、郿伯に封ぜられ、孔子の廟庭に從祀す、

【張茂】 陽武の人、秦に仕へ御史となる、後ち漢に歸し、從つて滅秦を攻め、功を以て北平侯に封ぜらる、孝文の初、丞相となり、年百餘歲にして卒す、書十八篇を著し、專ら陰陽律曆の事をいふ、

【長策】 善き謀計なり、六代論に「觀五代之存亡而不用其一一」また長き鳥の觜、過秦論に「振一一而御」

【長鎚】 鎚は鋤の先の鐵をいふ、一一は長き「スキ」廣韻に「吳人云犁鐴」杜甫同谷縣歌に「一一一一白木柄、我生託子以爲命」とあり、清の方苞の左忠毅公逸事にも「背筐手一一」ことあり、

【張三李四】 張氏の三男、李氏の四男の義にて、俗物をいふ、わが國にて、權兵衛八兵衛といふがごとし、傳燈錄に「佛法ヲ會セント欲セバ、但ダ張三李四ニ問取セヨ、世法ヲ會セント欲セバ、則チ古佛叢林ニ參取セヨ」王安石の擬寒山詩に「張三痴口窄、李四幅巾長」侗庵筆記に、全唐詩の「曉來犬吠張三婦、日暮猿啼呂四妻」とあるを引きて古は呂四を以て張三に對せしを後世呂を李に作れる由をいへり、

【張芝】 字は伯英、池に臨み書を學ぶに、池水盡く黑し、凡そ衣帛必ず書して而る後ちにくろくす、靈帝の朝太尉となる、

【張耳】 大梁の人、嘗て亡命して外黃に游ぶ、後ち漢の高祖に從ひて天下を定む、功を以て趙王に封ぜらる、子の敖嗣いで立ち、高帝の長女魯元公主に尙す、

【長袖善ク舞ヒ、多錢善ク賈フ】 資財多き者は事を爲すに巧なり易きをいふ、韓非子の五蠹に「鄙諺曰、長袖善舞、多錢善賈、此言多資之易爲工也」史記范蠡傳の贊にも引けり、勢に乘じて事を爲すときは、成功し易きに喩ふ、

【張網岐】 字は稷若、嵩菴と號す、清の山東濟陽の人、明の諸生たりしが、兵亂後棄て去る、經學に邃く、尤も三禮に精し、顧炎武に敬服せらる、儀禮鄭注句讀、易說略、詩說略、老子說略、嵩菴文集等の著書あり、

【娘子軍】 圓機活法に「唐ノ平陽公主、柴紹ニ嫁ス、初メ高祖ノ兵興ルヤ、紹家貲ヲ發シテ亡命ヲ招キ河ヲ渡ル、主精兵萬人ヲ引キ秦王ト渭北ニ會ス、紹及ビ公主對シテ幕府ヲ置キ、京師ヲ分定ス、一一ト號ス」

【張思叔】 宋の河南の人、名は繹、程伊川の門人、年長じて未だ學を知らず、伊川涪陵より歸り始めて從ひ游ぶ、伊川嘗ていふ、吾晩に二士を得たりと、繹と尹焞とをいふなり、作るところ座右銘、小學卷の八に出づ、

【張之洞】 字は孝達、香濤また無競居士と號す、直隸天津府南皮縣の人、同治二年の進士、夙に文名あり、兪樾(曲園ト號ス)と竝稱して、南兪北張の稱あり、現に湖廣總督の重任に居り、弊政を一洗して、振作自强せんとする意ありといふ、勸學篇書目答問の著あり、

【張子ノ馬ヲ懷ニスルガ如シ】 「うづら衣」の長短解に見ゆ、淵鑑類函に「張果老、常騎白驢、日行千里、休則疊之、其厚如紙、致之于巾箱中」とあるをいふ、

【張子房】 史記留侯世家に「留侯張良者、其先韓人也、良少時、游下邳圮上、遇一老人、墮履圮下、顧謂良曰、孺子下取履、良愕然欲毆之、爲其老、乃下取履、老人以足受之、曰、孺子可敎、後五日、與我期於此、良如期往、老人已先在、怒曰、與長者期、後何也、復約五日、及往、老人又先在、怒、復約五日、良半夜往、老人至、乃喜、授以一編書、曰、讀之可爲帝者師、異日見濟北穀城山下黃石、即我也、旦視之、乃太公兵法、良異之、盡夜習讀、既佐高祖定天下、乃封爲留侯、後經穀城、果得黃石、爲奉祠之」とあり(張良)を參看せよ、

【張子布】 張昭字は子布、彭城の人、少くして學を好み左氏春秋に通ず、漢末大に亂れ、昭、江を渡る、孫策命じて長史撫軍中郎將と爲す、策亡するに臨み、弟權を以て昭に託す、昭容貌矜嚴威風あり、權より以下皆之を憚る、卒して文と諡せらる、

【丈人】 長老の稱、易の師卦に「師貞、一一吉」また杖人に通ず、老を尊むの稱、老人は杖を持つ、故にいふ、論衡氣壽篇には「人形一丈、正形也、尊公嫗爲一一」史記

匈奴傳に「自謂我兒子、安敢望漢天子、漢天子、我ー行也ま」た漢書疏廣傳に「宜從ニ一所ニ勸說君ニ買ニ田宅ヲ」

【長者】 漢書に「寬大ー」とあり、ーは、もと年長の人を指す、少者に對していふ、孟子の「爲ニーノ一折枝」の類、これなり、史記に「陳平門外、多有ニーノ車轍ニ」とあるは、顯貴の人を指していふ、また後世の史傳には多く重厚の人を指していふは、皆假轉して稱するなり、ただ佛經には豪富の民を稱してもいふ、翻譯名義集に「富商大賈、積財鉅萬、咸稱ニーニ之」

【張稱之】 南陽堵陽の人、貲を以て騎郎となる、十年まで調せらるるを得ず、後ち廷尉と爲り、天下に寃民なしと、景帝の時、出でて淮南王の相となる（酈夫ノ）を參看せよ、

【長者ノ車】 貴人の車なり、史記の陳丞相世家に「家負郭窮巷ニ、以ニ弊席ニ爲ニ門ト、然門外多有ニ長者車轍ニ」

【長者ノ爲メニ枝ヲ折ル】 （爲ニ長者ニ折枝）事の爲し難からざる例としてあげたるなり、孟子の牽牛章に見ゆ、長者の命を以て、草木の枝を折ることは、左まで難からざることなり、古註に「折枝ノ枝ハ、肢ト通ズ、折枝ハ、欵手屈膝折腰ノ類ノ如シ、只コレ卑幼日常ノ禮貌ノミ」とあり、從ふべし、一說に折枝は、按摩の類なりと、亦通ず、

【長髮】 僕の別稱、韓愈の寄ニ盧仝ニ詩に「玉川先生洛城裏、破屋數閒而已矣、一奴長髮不ニ裹ニ頭、一婢赤脚老無ニ齒ニ」と、玉川は盧仝の號、髮は須に同じ、赤脚は鞋を穿たざるなり、

【張巡】 鄧州南陽の人、群書に博通し、戰陣の法を曉る、氣志高邁にして、細節を略す、交る所ろ必ず大人長者、開元の末進士の第に擢てられ、清河の令となり、眞源の令に調す、安祿山の反、巡吏士を率ゐ玄元の廟に哭し、兵を起し賊を討ち、睢陽に至り、大守許遠と合す、賊睢陽を圍むこと四十日、城陷り屈せず、遂に害に遇ひ、南霽雲等と死する者三十六人なり、詳しくは唐書卷の一百九十二、舊唐書の一百八十七の下の忠義傳または韓愈の張中丞傳後序を見よ、

【長春菊】 學圃餘疏に「花ノ四季ニ開ク者、蘭桂ノ外、月桂アリ、ーーアリ、即チ金盞花ナリ」

【張舜民】 字は芸叟、浮休居士と號す、宋の邠州の人、進士に第し、徽宗の時、吏部侍郎たり、元祐の黨錮に坐し商州に貶せらる、平生畫を嗜み題評精確なり、初め玉安石の新法を倡ふるや、舜民上書してその不便を極言す、時人之を壯とす、司馬光その才氣秀異剛直敢言なるを嘉めて、監察御史と爲す、後ち諫議大夫に擢かれ、方に七日、上るところの事已に六十章、言多く剴切なり、文詩を善くす、著すところ畫墁集あり、紹興の初、寶文閣直學士を追贈せらる、

【張志和】 年十六、明經に擢てられ、翰林に待詔し、左金吾衛錄事參軍を授けらる、善く山水人物舟梁烟波風月鳥獸を畫く、皆その文を以て之を寫す、致仕して塵外に高棲す、人之を嚴光に比す（玄眞子）を見よ、

【張栻】 字は敬夫、宋の廣漢の人、穎悟夙成、古の聖賢を以て自ら期し、朱熹と友とし善し、孝宗の朝、仕へて荊湖北路安撫使に至り淳熙七年卒す、年四十八、卒して宜と謚し、淳和の初、孔子の廟廷に從祀す、學者稱して南軒先生と號す、著すところ南軒易說・南軒集等あり、

【張瑞圖】 字は長公、二水と號す、明の泉州晉江の人、萬曆丁未の殿試第三人たり、仕へて建極殿大學士に至り、召されて內閣に入る、山水は大癡を法とし蒼勁にして骨あり、書法奇逸、鍾王の外別に蹊徑を闢出す、

【張世傑】 南宋の忠臣、范陽の人、崖山の敗に水に赴いて死す、宋史卷の四百五十一、忠義傳に詳かなり、

【長生樹】 「モチノキ」晉の稱舍に——賦あり（冬青）を參看せよ、

【長生殿】 錦字箋に「七月七日夜半貴妃獨リ上ニーニ侍ル、上肩ニ倚リテ密カニ相誓フ、願クハ世世夫婦ト爲ラント、白樂天ノ長恨歌ニ、七月七日——、夜半無ニ人私語ノ時ノ句ハ蓋シ此ヲ謂フナランカ」と、慶滋保胤の天子萬年の詩に「——裏春秋留、不老門前日月長」

【長嘯】 嘯は、ウソブク」ーーは口をつぼめて長き音調の聲を出すをいふ、後漢書に「不ニ好ニ言語ヲ而好ニーニ嘯といふも同じ、

【張劭】 後漢の汝陽の人、范式と友たり、式、劭に謂ひて曰く、後ち二年當に過りて尊親を拜すべしと、期に至りて劭母に白し、雞黍を具して之を待つ、その日に至りて式果して至る、堂に升り母を拜し歡を盡して別る、劭死す、夢に式に見えて曰く、吾某日に於て死すと、式卽ち素服して會葬す、式至りて棺起つ、世に之を死生交といふ、

【張昭】 （張子布）を見よ、

【張籍】 字は文昌、唐の烏江の人、古詩及び書翰行草を

善くす、貞元十五年進士に挙げられ、官、國子司業に至る、簡性狷直にして物を容れず、この時韓愈文衡を以て天下の士を輕重す、而して籍は愈の客となり、且つ朝に謗めらる、足より名人口に播く、一時賢士爭ひて之と游ぶ、著すところ張司業詩集八卷あり、

【長舌】 婦人の多言するをいふ、詩の大雅、瞻卬篇に「婦有長舌、維厲之階、亂匪降自天、生自婦人、匪敎誨之、時維婦寺」をいふ、階は梯なり、多言を以て能く禍亂の階梯たるをいふ、書言故事に「婦人ノ多言スル者ヲ謂ツテ、長舌トイフ」

【帳前】 「トバリノマヘ」梁簡文帝の詠籠燈詩に「動煽翠帷裏、散影羅帳前」錢起の雪の詩に「萬點瑤臺雪、飛來錦帳前」

【張船山】 (張問陶)を見よ、

【長將主簿】 羊の異名、成語考に「羊曰柔毛、又曰長髯主簿、裦豹の古今注に「羊一名ハ、髯主簿」

【張僧繇】 梁の呉中の人、善く雲龍人物故實を盡く(盡龍)を參看せよ、

【長孫無忌】 唐の名臣、字は輔幾、晟の孫、博く書史に渉る、皆て隋志を撰す、太宗を佐けて天下を定め功勳第一たり、齊國公に封ぜられ太子大師に累遷す、後ち

褚遂良と同じく顧命を受く、高宗の初め武昭儀を立つるを諫めしを以て、爵を削られ黔州に流さる、

【長大息】 「ナガキタメイキ」をつく、轉じて深く愛ひなげく意に用ふ、賈誼の文に「臣竊惟事勢可ㇾ——ㇾ者六」

【張湯】 漢の杜陵の人、兒たりし時、父長安の丞たり、父出づ、湯をして舍を守らしむ、鼠、肉を盜めり、父歸り、怒りて湯を笞つ、湯掘りて鼠及びその餘肉を得、鼠を劾して掠治し之を堂下に磔す、父その判決文を視て驚いて曰く、これ即ち老吏の斷案なりと、武帝の朝仕へて御史大夫となる、詳しくは史記の酷吏傳を見よ、

【長短ノ說】 事を長からしめんと欲すれば長く之を說き、短からしめんと欲すれば短く之を說くことにて、戰國策士の說をいふ、史記田儋傳に「蘭通者善爲長短說ㇾ」

【長枕大衾】 長き枕、大いなる衾(フスマ)は同じく寢ぬるに便なり、因りて親密の交をㇾㇾㇾㇾの交情といふ、唐の玄宗ㇾㇾㇾを爲り諸王と同寢せしこと唐書に見ゆ、

【恨恨】 「ウラミナゲク」宋玉の句に「ㇾㇾ自失」

【倀倀乎】 倀は狂なり、狂行して如く所ろを知らざる貌、禮記の仲尼燕居に「若若無ㇾ相ㇾㇾ其何之」荀子にも「人主無ㇾ賢、如瞽無ㇾ相、何倀倀」と「メクラ」の「テビキ」を失ひて途方に暮るる貌、

【長汀】 ながくつづく「ミギハ」謝靈運の句に「萬里瀉ㇾㇾ」

【張廷玉】 字は衡臣、清の安徽桐城の人、康熙三十九年の進士、官保和殿大學士となり三等勤宣伯に封ぜらる、世宗の軍機處を置くや、廷玉を以てその大臣となす、朝に在ること五十年、三朝に歷事し、深く信任せられ、凡そ國の大事與らざるものなし、乾隆二十年卒す年八十四、文和と謚し大廟に配享せらる、明史三百三十六卷は、その勅を奉じて撰せしところなり、

【長汀子】 祖庭事苑に「布袋時ニㇾㇾト號ス、定應大師ト謚ス」

【杖朝】 八十歲をいふ、禮記王制に「五十杖於家、六十杖於鄉、七十杖於國、八十杖於朝」とあり、朝廷の上にて杖を用ふることをゆるさるる義、

【張顚】 (張旭)を見よ、

【杖頭錢】 晉書に「阮宣每ニ百錢ヲ以テ、杖頭ニ挂ケ、酒肆ニ至リ便チ酣暢ヲ爲ス」

【張南軒】 (張栻)を見よ、

【長年】 「センドウ」をいふ、杜詩に「ㇾㇾ三老遙憐汝增績韶府に「ㇾㇾ舟師ナリ、峽人、船頭ノ篙ヲ把リテ水道ヲ相スル者ヲ以テ、ㇾㇾトイヒ、正梢ヲ三老トイフ」

【張方平】 字は安道、宋城の人、少くして穎悟絕倫なり、書一閱すれば再讀せず、參知政事南京留守、知陳州に累官し、太子少師を以て致仕す、卒して文定と謚せらる、初め蜀を守りし時、蘇洵とその子軾轍とを得て深く之を器異す、晩に神宗の知を受く、王安石方に事を用ふるにあたり、凝然として少しも屈せず、是を以て望一時に高し、

【張伯英】 (張芝)を見よ、

【張飛】 字は益德、涿郡の人、喜んで美人を盡さ、草書を善くす、人と爲り雄壯威猛、關羽に亞ぎ萬人の敵と稱せらる、蜀の劉備拜して右將軍となし、西鄉侯に封ず、

【長婦】 「タケ」高き大女房をいふ、馮衍傳に「自恥ニ短陋ニ、恐ニ子孫似ㇾ己、爲ㇾ子娶ㇾㇾ」

【張溥】 字は天如、明の太倉の人、崇禎四年の進士、同十四年卒す、年四十、編著するところ漢魏六朝百三名家集、詩經註疏大全あり、

【丈夫】 韻會に「周ノ制八寸ヲ以テ尺トナシ、十尺ヲ丈トナス、人ノ長八尺、故ニ丈夫トイフ」孟子の滕文公下

に「富貴モ淫スル能ハズ、貧賤モ移ス能ハズ、威武モ屈スル能ハズ、此レ之ヲ大丈夫ト謂フ」唐書の尉遲敬傳に「丈夫以氣相許、小嫌不足芥胸中」

【丈夫生キテ五鼎ニ食セズンバ、死シテ五鼎ニ烹ラレン】（丈夫生不五鼎食死卽五鼎烹）五鼎に食ふとは、牛・羊・豕・魚・麋を食ふ義、富貴の相なり、五鼎に烹らるるとは、罪によりて鍑にて烹らるるをいふ、漢書主父偃傳の語、

【長風】遠くより吹き來りて、斷えざる雄風なり、南史宗慤傳に「宗慤年少、叔父少炳問其所志、答曰、願乘ー破萬里浪」

【長物】長は餘なり、冗なり、物長ければ餘りあり、故にーーは、無用の物なり、世說新語に「平生無ーーに書敘指南に「照物ヲーートイフ」贅は物の餘なり、

【丈夫涙ナキニ非ズ、濕ガズ離別ノ閒】大丈夫の目には涙なきにあらねども離別の如き一小事には涙を流さずとの義、唐の陸龜蒙（字ハ魯望）の離別の詩に曰く、

丈夫非無涙、不灑離別閒、仗劍對樽酒、恥爲游子顏、蝮蛇一螫手、壯士疾解腕、所思在功名、離別何足歎、

【丈夫ハ當ニ雄飛スベシ】（雄飛）を見よ、

【場圃】「ハタケ」荀子の大略に「大夫不ー圃」

【長ホノ鼈ル漂タザル無シ】（長木之鼈無不漂）漂は擊なり、長木の地に蹄るる時は、物を擇ばずして擊つ、以て强暴なる大國の亡びんとするときは、所を擇ばずして攻伐するに喩ふ、左傳哀十二年に「ーーーーーー也、國狗之瘈無不齧也」瘈は狂なり、

【張本】「マヘオキ」なり、豫め後の地を爲すをーーといふ、杜預の左傳隱五年の註に「晉內相攻伐、不告亂、故不書、傳具其事、爲後晉事張本」轉じてわが國にては、事を起せる發頭人、卽ち首謀者をーー人といふ、

【長眠】人の死をいふ、太平廣記に「鄭友路逢一塚、有二竹、鄭爲詩曰、塚上雨竿竹、風吹常嫋嫋、塚中人底曰、下有百年人、ーー不知曉」

【長命富貴】壽命長くして富み且つ貴きをいふ、唐書姚崇傳に、佛經を引きて「求長命得長命、求富貴得富貴」また泉志に「唐中宗出降睿宗女荊山公主、特錄撒帳錢、其形五出、文曰長命守貴富」

【長命縷】風俗通に「五月五日ニ、五綵ノ絲ヲ以テ繫クレバ、兵ヲ辟ケ、人ヲシテ瘟ヲ病マザラシム、一名ハ一名ハ辟兵縷、一名ハ五色縷、一名ハ綵索」クスダマ」はこれに本づく、一に續命縷ともいふ、

【暢茂】長じて盛なるをいふ、孟子滕文公上に「草木ーー」

【聰明】聲の耳に達するを聞といひ、その善惡好醜を了知するを聰といふ、平等覺經に「樂ーー世尊敎」

【張間陶】字は仲冶、船山と號す、清の四川遂寧の人、乾隆庚戌の進士、檢討に官す、詩酒に豪に、青蓮再生の目あり、並くところの山水深く古法を得たり、嘉慶十九年卒す、年五十一、著すところ船山詩集あり、

【長夜】埋葬をいふ、長夜は復た明けず、人一たび死すれば復た生ぜざるに喩ふ、左傳襄十三年の「春秋窓寥之事」の杜註に「窓ハ厚ナリ、寥ハ夜ナリ、厚夜ハ猶ホ長夜ノ如シ、春秋ハ祭祀ヲ謂フ、長夜ハ葬埋ヲ謂フ」

【長夜ノ飲】夜すてに明くるも猶ほ窓戸を閉ぢ、燭をつけて宴を張るをいふ、韓非子に「紂爲ーーの飲」史記の殷紀にも「爲長夜之飲、百姓怨望」（酒池肉林）を參看せよ、

【長夜ノ室】墓をいふ、東坡の贈章默詩に「願求不毛田、親築ーーー」

【頂禮】印度古代の最敬禮なり、圓覺經疏に「以己最勝之頂、禮佛最卑之足、敬之至也」

【長老】年と德と並に高き人をいふ、金剛經新註に「稱ーー者、以其能長年老也」祖庭事苑に「今禪宗住持之者、必呼ーーまた廣く年老いたる者の稱、漢書外戚傳に「近世之事、語尙在ーーの耳に」

【張良】字は子房、その先は韓人なり、秦韓を滅す、良五世韓に相たりし故を以て、秦王を擊ちて韓のために仇を報いんとす、事成らず、秦王怒つて良を求むること甚だ急なり、良乃ち姓名を更めて下邳に匿る、後ち沛公兵を起すに及び遂に之に屬す、數〻太公の兵法を以て沛公に說く、沛公之を善とし、常にその籌策を用ひぬ、遂に天下を定め留侯に封ぜらる、ついで世事を棄て赤松子に從ひて遊ぶ（張子房）を見よ、

【張魯】字は公期、三國の時、沛國豐の人、漢に仕へて漢中太守となる、鬼道を學び自ら師君と稱す、符法を以て病を治す、米一斗を致すものは病立どころに愈ゆ、久之して米を積むこと鉅萬なり、曹操將を遣して漢中を攻めしむ、克つこと能はず、操自ら大軍を領し往いて之を擊つ、魯降る、封じて征南大將軍閻中侯と爲す（張橫渠）を見よ、

【張載】（張載）を見よ、

【著鞭】人に先だちて事を爲すをいふ（先鞭ヲ）を見よ、

【茶博】（——）を見よ、

【地檢】一種の草なり、本草に「ソノ葉檢ニ似テ長シ、初メ生ズルヤ、地ニ布ク、故ニ名ヅク」古詞に「寧得一把——、不用明月貨珠」和名「ワレモカウ」「エビスネ」

【柱下ノ史】老子をいふ、史記の老子傳に「老子ハ、姓ハ李氏、名ハ耳、字ハ伯陽、諡シテ聃トイフ、周ノ守藏室ノ史ナリ」とあり、註に「守藏室ノ史ハ、即チ藏書室ノ史ナリ」漢書張湯傳に「老子柱下ノ史トナル、即チ藏室ノ柱下、因リテ以テ官名トナス」

【誅求】誅は責なり、嚴しく責めて貨財を貪り取る義、左傳襄三十一年に「——無時」

【注脚】注解に同じ、本文の閒に注入するを注といひ、本文の下に置くによりて脚といふ、困學紀聞に「林艾軒云、日用是根株、文字是——」また陸象山の語に「六經皆我——」

【柱國】家に柱あるが如く、國を支持すべき要地をいふ、戰國策に「安邑者魏之——也、晉陽者趙之柱國也、鄢郢者楚柱國也」

【柱石】柱は梁下の柱、石は柱を承くる礎をいふ、家は柱石によりて建つ、以て國家の重任を負ふ大臣大將に比す、漢元后傳に「位歷將相、國家——臣也」また霍光傳に「將軍爲國——」

【注錯】措置といふが如し、荀子に「是——習俗之節異也」

【住持】寺の主をいふ、敎法を護持し、世閒に住在せしむるの任を負ふ義、陸游の老學菴筆記に「小院——名臨濟」

【柱ニ膠シテ瑟ヲ鼓ス】（柱ニ膠シテ）を見よ、

【駐蹕】駐は「トドムル」なり、一音チユ　蹕は天子の行幸に行人をとどめ道を清むるをいふ、——は、天子行在の所をいふ、任昉の表に「——長陵、輟軒不知所適」また唐書に「太宗克遊東、登北山、更曰——山」今の盛京省遼陽府首山なり、

【株ヲ守リテ兎ヲ待ツ】（株ヲ守リ）を見よ、

【黜陟】黜は「シリゾクル」なり、陟は「アグル」なり、進退といふが如し、書の舜典の「三載考績、三考黜陟幽明」の註に「三考ハ九載ナリ、九載ナレバ則チ人ノ賢否、事ノ得失見ルベシ、是ニ於テ其明ヲ陟ゲテ、其ノ幽ヲ黜ク、賞罰明信ナレバ、人人事功ヲ力ム」とあり、幽は暗の義、

【怵惕】驚き動く貌、孟子公孫丑上に「皆有——側隱之心」また恐るる義、書の冏命に「——惟厥

【怵迫】怵は恐るる義、脅迫に同じ、一解に怵は誘に通ず、音ジユツ利をもていざなはるる義、漢書の賈誼の傳に「——之徒分、或趨西東」

【屯困】艱難困苦なり、屯は易の卦名「ナヤミクルシムの象なり、困屯とも用ふ、

【窀穸】葬埋の義、窀は厚なり、穸は夜なり、厚夜は、猶ほ長夜の如し、一解に、窀は長く埋むるなり、穸は長夜なりと、または、棺を穴に下すをいふと、左傳襄十三年に「唯是春秋——之事、所以從先君於祕廟者、請爲靈若厝」春秋は祭祀の義、

【屯竇】一に迍邅に作る、行きて進まざる貌、易の屯卦に「屯如邅如」

【地輿】地は方にして萬物を載するの義に由りていふ、淮南子に「以天爲蓋、以地爲輿」

【女夷】風神の名、淮南子 天文訓に「——鼓吹、以司天和」

【懲惡】惡をこらし戒むる義、漢書張敞傳に「無以勸善——」

【懲羹吹韲】（羹ニ懲リタル者）を見よ、

【重寄】重き責任を寄託せらるる義、魏書に「明公荷國——」

【重九】九月九日の節句をいふ、月日竝に九の陽數に應ずる故なり、重陽に同じ、

【重熙累洽】文選東都賦に「至於永平之際、重熙而累洽」註に「熙ハ光明ナリ、洽ハ合ナリ、言フハ光武既ニ明ニシテ、明帝之ニ繼グ、故ニ——ト曰フナリ」

【重光】明主相繼ぎて立ち、明德をかさね布く義、書經の顧命に「昔君文王武王宣——」また爾雅釋天に「太歲辛ニ在ルヲ——トイフ」（十干）を參看せよ、

【重慶】「チョンキン」と呼ぶ、四川省東南の一都府にして嘉陵江と楊子江との會合するところに在り、楊子江口を泝ること凡そ一千二百五十英里とす、地勢西部は平敞なれども、東部は山嶺起伏頗る峻嶮なり、人口凡そ二十五萬、この地周代の巴國の地、秦に巴郡といふ、晉宋齊皆之に由る、梁以後或は楚州といひ、渝州といひ、羅州また南平郡といふ、宋淳熙十六年始めて——府といふ、現に通商場たり、

【重繭】足傷れ皮皺だち、蠶繭の如きなり、戰國策に「足——而不休息」莊子の註に「——ハ胼胝ナリ、皮ノ厚キナリ」

【重五】五月五日の節句（端午）を參看せよ、

【家宰】家は長、宰は治なり、治官の長をいふ、今の總

理大臣の如し、周禮卷一に「乃チ天官ーーヲ立テ、其ノ屬ヲ帥キテ、邦治ヲ掌リ、以テ王ヲ佐ケ、邦國ヲ均ウセシム」

【懲創】 二字共に「コラス」とよむ、自ら戒めて再びその事なからんと期す、韓愈の句に「生還眞可喜、剋己自ーー」また人をこらして過を再びせしめざること、尙書の疏に「聖人之制刑罰、所以ーー罪過」

【重三】 三月三日の節句をいふ、山本北山の孝經樓詩話に「上巳ヲーートイフコト、野客叢書に張說ガ詩ノ葬卷三月日重三ヲ引ク、始テ此ニ見ユ、又古、上巳トイフハ三月中第一ノ巳ノ日ヲ用フ、三月三日ヲ上巳トスルコトハ北魏ヨリ始マレリ云云(上巳)を參看せよ、

【家子】 本妻の腹に生れたる長男、また太子をいふ、左傳閔二年に「太子奉二冢祀一社稷之粢盛一、以朝夕視二君膳一者也、故曰ーー」禮記の內則に「ーー則大牢」

【徵士】 卓氏藥林に「德高クシテ官ニ就カザルヲ、ーートイフ」

【重耳ハ狐ニ奔ル】 太平記卷二に見ゆ、重耳は晉の獻公の子なり、獻公驪姬を愛す、驪姬重耳を譖す、重耳恐れて蒲に走る、獻公怒つて蒲を伐つ、重耳遂に母の本國なる翟に奔る、重耳時に年四十三、後に五霸の隨一となり、文公といふ、詳しくは國語の晉語、史記の晉世家等を見よ、

【重賞ノ下ニハ必ズ勇夫アリ】 褒美を多く與ふれば勇夫があらはれ出づる義(香餌ノ)を見よ、

【韜絞】 韜は愛なり、絞は安なり、愛み安んずる義、書の泰誓に「惟其克相二上帝一ーー四方一」

【澄清】 「スミテキヨシ」またすまし清む、後漢書に「慨然有ーー天下之志」

【重舌】 蠻夷の言をいふ、東京賦に「ーー之人、九譯貢稽首而來王」

【家中ノ枯骨】 無能の人をいふ、蜀志先主傳に「孔融謂二先主一曰、袁公路豈憂二國忘一家者一耶、ーーー何足レ介レ意、今日之事百姓與レ能、天與不レ取、悔不可レ追」

【徵逐】 招きたり、招かれたりすること、猶ほ往來の如し、韓愈の柳子厚墓誌銘に「酒食遊戲相ーー」

【重趼】 足の胝るをいふ、左傳成六年に「獻子曰、民愁則盜隘、於是乎有二沉溺一ーー之疾一」註に「沉溺ハ濕疾、ーーハ足趼」

【澄渟】 水が清らかにすみてたまれる義、清き淵などをいふ、水經の注に「其水ーー」

【重鼎】 重さ「カナヘ」禮記儒行に「引ーー不レ稱二其力一」

【重聰】 「ツンボ」をいふ、漢書の黃霸傳に「黃霸潁川ノ太守タリ、許丞長史ト爲ル、多病ニシテ耳聾ス、郡ノ錄事霸ニ稟シテ之ヲ逐ハント欲ス、霸曰ク、許丞ハ廉吏ナリ、重聽スルモ何ゾ傷マント」

【澄澈】 水のさよくすむこと、關尹子の九藥篇に「論道者、或曰ーーニ」

【重曀】 兩眸子(フタツノヒトミ)をいふ、史記項羽紀の贊に「吾聞之周生、曰舜目蓋ーー子、又聞項羽亦ーー子、羽豈其苗裔耶(八彩)を見よ、

【重德】 「オモオモシキ」德をいふ、漢書車千秋傳に「千秋居二丞相位一謹厚有ーーニ」

【重寄ヲ懷ク者ハ夜行セズ】 戰國策に「懷二重寄一者、不レ以夜行一、任二大功一者、不レ以輕敵一」蘇秦が秦王に語る言なり、

【懲毖】 懲は傷む所ろありて戒むるをいひ、毖は愼むなり、詩の周頌に「予其ーー而ーー後患」また朱熹の語に「懲毖ーー」

【徵辟】 王侯より官に任ぜんとて招く義、晉書王裒傳に「三徵七辟皆不レ就」

【重明】 日月雙び懸りて、光明をかさぬる義、易經に「日月麗二乎天一ーー以麗二乎正一」

【重聰】 「ツンボ」をいふ、漢書の黃霸傳に「黃霸潁川ノ太守タリ、許丞長史ト爲ル、多病ニシテ耳聾ス、郡ノ錄事霸ニ稟シテ之ヲ逐ハント欲ス、霸曰ク、許丞ハ廉吏ナリ、重聽スルモ何ゾ傷マント」

【澄澈】 水のさよくすむこと、關尹子の九藥篇に「論道者、或曰ーーニ」

【重曀】 兩眸子(フタツノヒトミ)をいふ、史記項羽紀の贊に「吾聞之周生、曰舜目蓋ーー子、又聞項羽亦ーー子、羽豈其苗裔耶(八彩)を見よ、

【重德】 「オモオモシキ」德をいふ、漢書車千秋傳に「千秋居二丞相位一謹厚有ーーニ」

【重寄ヲ懷ク者ハ夜行セズ】 戰國策に「懷二重寄一者、不レ以夜行一、任二大功一者、不レ以輕敵一」蘇秦が秦王に語る言なり、

【懲毖】 懲は傷む所ろありて戒むるをいひ、毖は愼むなり、詩の周頌に「予其ーー而ーー後患」また朱熹の語に「懲毖ーー」

【徵辟】 王侯より官に任ぜんとて招く義、晉書王裒傳に「三徵七辟皆不レ就」

【重譯】 譯は通辯なり、兩國の語を通ずる義、重譯は、通辯を重ぬる義、史記三王世家に「遠方殊俗ーーニ而朝」

【重雍襲熙】 太平の世の長くつづくこと、崔駰の東巡頌に「盛哉大漢既ーー而ーー」

【女誡】 一卷、後漢の曹昭(班氏、曹世叔ノ妻、班彪ノ女、班固ノ妹、號ヲ大家ト賜フ)の撰、卑弱・夫婦・敬順・婦行・專心・曲從・和叔妹の七篇に分ち、女子の心得を說けり、

【儲欣】 字は同人、清の宜興の人、康熙庚午の舉人、經史に博通して東南の文望を負ふ、唐宋十大家文錄・春秋指掌・在陸艸堂文集あり、

【濁惡ノ世】 佛教の語、濁りてきたなき世といふ義、濁漫香はダク 法華經の方便品に「諸佛出於五濁惡世、所謂劫濁・煩惱濁・衆生濁・見濁・命濁如是云云」

【勅額】 天子の「ミコトノリ」によりて寺を建つるときは、額を賜ふ、之を——といふ、名物六帖に「通鑑周紀ニ世宗、天下ノ寺院ニ勅シテ、——ニ非ル者ハ悉ク之ヲ廢ス、註ニ胡三省曰ク、——トハ、寺額ヲ勅賜ス、慈恩安國興唐ノ類ノ如シト、按ズルニ、勅許シテ寺ヲ建ツレバ則チ額ヲ賜フ、之ヲ——ト謂フ、宸筆ノ扁額ニハ非ルナリ」

【直躬父ヲ證ス】 あまり直に過ぐるは反りて直道に合はずとの義、論語子路篇に「葉公語ニ孔子ニ曰、吾黨有ニ直躬者、其父攘ニ羊而子證之、孔子曰、吾黨之直者異ニ於是、父爲ニ子隱、子爲ニ父隱、直在ニ其中ニ矣」また莊子に「直躬證父、尾生溺死、信之患也」直躬とは身を直くして行ふをいふ、

【直絃ノ如キハ道邊ニ死ス】 後漢書の五行志に、順帝の時、京都の童謠とあり、曰く「直如絃、死道邊、曲如鉤、反封侯」反一に乃に作る」天下無道にして君子は不遇に終はり、邪曲の小人のみ重く用ひらるるを嘆ずるなり、

【陟岵】 岵は草木の茂れる山、——は詩經の魏風の篇名、孝子役にゆきて父母を思念するなり「陟ニ彼岵ニ兮、瞻ニ望父ニ兮、陟ニ彼屺ニ兮、瞻ニ望母ニ兮」と、屺は草木なき、ハゲヤマ」

【直齋書錄解題】 二十二卷、宋の陳振孫撰す、振孫字は伯玉、直齋と號す、仕へて侍郎に至る、この書原本久しく佚せしが、永樂大典に載するありて、略その舊を窺ふに足る、歷代の典籍を五十三類に分ちて解題し、別に經史子集の目を立てざれどもその次第を見るに仍ほ四部を以て先後を爲す、その解題は晁公武の郡齋讀書志と相類せり、馬端臨の經籍考は此の書及び讀書志を以て藍本となせば、その精核なること知るべし、

【勅旨】 勅一に敕に作る、天子の命をいふ、宋史に「雖有——不レ得レ過ニ三十萬」

【直情徑行】 徑も亦直なり、己の情を卑まにして、徑ちに事を行ふ義、心をまぐることなく、直ちに行ふをいふ、禮記の檀弓に「有ニ——一而——者ニ」

【陟方】 猶ほ升遐といふが如し、帝王の死をいふ、書經の舜典に「舜生三十徵庸、三十在レ位、五十載——乃死」陟は昇なり、天に昇るの義、一解に、——は、殂落の義

なりと、

【直方大】 正直方正巨大なり、これ地道の純德なり、因りて君子柔順の德とす、易經坤卦に「六二——不レ習、无レ不レ利」——は孟子の所謂至大至剛、直を以てするなり、地道の純德は內直に外方にして又盛大なり、學習を待たずして利あらざるなきなり、

【直木先ヅ伐ラレ、甘井先ヅ竭ク】 淮南子の語、虎豹は皮の美くしきために殺され、象は牙のために屠らるる如く、良材は先づ伐られ、靈泉は先づ汲み竭さる、物類の如き散材はいつまでも斧斤を免るとの意、

【儲君】 太子をいふ、晉の中興書に「安皇帝ハ孝武帝ノ長子ナリ、再ビ太子トナル、爾ニ命ジテ以テ儲貳ニ登ラシム」成語考に「君ノ儲、國ノ貳ハ、皆太子ヲ稱ス」儲は副なり、國君の副たる義、一に東儲ともいふ、

【直隸】 州郡に屬せずして京師に直轄せらるるをいふ、宋の趙普傳に「普與ニ帝謀、令節鎭所領州郡、皆直隸京師、得自奏事、不屬諸道、于是節度使之權始輕」また支那十八省の一、

【女媧】 淮南子 湯問に「昔者——氏鍊ニ五色石ニ以補ニ蒼天ニ」

【儲光羲】 兗州丹陽の人、開元の進士、太祝に官し、監察御史に轉ず、安祿山の僞官を受け、賊平ぎて後貶せられて死す、唐詩別裁に「いふ、太祝の詩、陶を學びてその眞樸を得たり、王右丞と道を分ちて鏕を揚ぐと、集七十卷ありたれども今はただ五卷のみ存ず、

【除官】 官に任ずる義、漢書景帝紀の註に「凡ソ除トイフハ、故官ヲ除キテ、新官ニ就カシムルナリ」

【女兄】 姉をいふ、正字通に「弟呼ニ女兄ニ爲ニ姐ト」と姐は「アネ」なり、女弟は妹なり、

【女紅】 女の「シゴト」をいふ、漢書の景帝紀に「夏四月詔シテ曰ク、雕文刻鏤傷ニ農事ニ者也、錦繡纂組害ニ女紅ニ者也、農事傷則飢之本也、女紅害則寒之原也」の註に「紅讀ンデ功トイフ」とあり、工と通ず、婦功に同じ、——はもと周禮春官に見ゆ、

【猪狗臭】 「ワキガ(狐臭)を見よ、

【椶散】 用に當らざるをいふ(椶櫚ノ材(散人)を見よ、

【儲貳】 太子をいふ、晉書の禮志に「太子ノ禮、君ニ同ジ、——ヲ重ンジ正嫡ヲ正ス所以(儲君)を見よ、

【女史】 卓氏藻林に後漢書皇后紀を引きて「皇后有ニ女史之官、用ニ彤管ニ以記ニ功書ニ過ニ形管ニ赤管筆也」とあり、轉じては女子の文學あるものの稱、

【女子ト小人トハ養ヒ難シト爲ス】 (女子與ニ小人ニ爲ニ難

簒小人は僕隷下人をいふ、婦人僕隷の類は、多くは道理を解せざるを以て、簒ひ難しと爲す、論語陽貨に「子曰、唯ー・ー・ー・ー・ー・ー也、近レ之則不レ遜、遠レ之則怨」君子の臣妾に於ける、莊以て之に涖み、慈以て之を畜ふときは、則ち二者の患なし、

【女牆】「ヒメガキ」なり釋名に「城上ノ垣ヲ睥睨トイフ、其ノ孔ニ於テ非常ヲ睥睨スルヲイフナリ、マターイフ其ノ卑小ナル之ヲ城ニ比スル女子ノ丈夫ニ於ケル若キヲイフ」杜甫の句「樓高望ー・ー・ニ

【著述ヲ務ト爲ス】魏志文帝紀に「初メ帝、文學ヲ好ミ、著述ヲ以テ務ト爲ス、自ラ勒成スルトコロ、百篇ニ垂ントス」

【褚遂良】字は登善、亮の子、博く文史に渉り楷隷に工なり、唐の貞觀中歷官して諫議大夫乘起居注に至り、高宗の朝尚書右僕射に遷る、性直言を好むを以て、後ち累りに愛州ノ刺史に貶せられ、竟に憂を以て卒す、

【女倩】壻をいふ、揚子方言に「東齊之間、壻謂ニ之ー・ー・ニ

【褚先生】紙の異名、韓文の毛穎傳に「穎與ニ絳人陳玄、弘農陶泓及會稽褚先生ー・友善」漢の世、史記を補修せし褚少孫が、史記中に褚先生と書せしに擬していふ、毛穎は筆なり、陳玄は墨なり、陶泓は硯なり、

【舒遲】「ユッタリ」として閑雅なる貌、禮記に「君子之容ー・ー」

【女中ノ堯舜】宋史に「高太后哲宗ノ冲幼ナルヲ以テ、皇猷ヲ親臨ス、故臣ヲ召シ、新法ヲ罷メ、私恩十餘事ヲ絕ツ、後チ史臣贊シテ曰ク、太后眞ニ女中堯舜ナリ」

【杼軸】杼は機の緯絲を卷ける竿を入れて行るもの「ヒ」をいふ、軸は機の經を受くる者、由りて文章を組み立つる義とす、文賦に「雖ー・ー於予懷、悵他人之我先ニ

【女貞】「ネズミモチ」といふ樹の渋名、冬青くして凋まず、女の貞操に似たり、故に名づく、群芳譜に「一名貞木、一名蠟樹處處有之」（貞木）を見よ、

【女奴】猫の異名、採蘭雜志に「猫一名ー・ー」

【豬突豨勇】豨は豕なり「キノシシ」武者をいふ、漢書の食貨志に「匈奴侵寇スル甚シ、莽大イニ天下ノ囚徒人奴ヲ募ル、名ヅケテ豬突豨勇ト曰フ」

【女二四行アリ】（四行を見よ、

【女ハ華丹ノ窈窕ヲ亂ルヲ惡ム】揚子に「女惡ニ華丹之亂窈窕ー・也、書惡ニ淫辭之扇ニ法度ニ窈窕は幽閑貞靜なり、

【女ハ美惡トナク宮ニ入レバ妒マル】史記留侯世家「女無美惡、入レ宮見レ妒、士無賢不肖、入レ朝見レ嫉」

【女ハ冶容ニシテ淫】禁邕の釋誨に「女冶容而淫、士背道而辱、人毀其滿、神疾其邪」冶容を參看せよ、

【枒杈】博奕なり「バクチ」晉書陶侃傳に「ー・ー者牧豬奴戲耳」一解に雙陸をいふ、

【除夜】一年の最終の日の夜なり、一年の除かるる夜といふ義「オホミソカ」呂氏春秋季冬紀の注に「前歲一日旣ヲ撃チ疫癘ノ鬼ヲ驅ル、之ヲ逐除トイヒ、亦儺オニヤラヒ)トイフ」と、この説によれば惡鬼を驅除する義となすに似たり、一解に、除は易なり、新舊歲の交易之を歲除といふ、杜審言の句に「季冬ー・ー接ニ新年ニ

除夜宿石頭驛　　戴叔倫

旅館誰相問、寒燈獨可レ親、一年將レ盡夜、萬里未レ歸人、客路悲ニ前事ー・、支離笑ニ此身ー・、愁顏與ニ衰鬢ー・、明日又逢レ春、

除夜作　　高適

旅館寒燈獨不レ眠、客身何事轉悽然、故鄉今夜思ニ千里ー・、霜鬢明朝又一年、

【渚雅】戊の異名（十干）を見よ、

【女蘿】「サルヲガセ」また「ヒカゲノカツラ」深山の松樹などの幹に著きて生ず、皮に著ける處は一條にして太く、末は多く枝を分ちて長く垂れ下ること總の如し、白くして綠を帶ぶ詩經小雅に「蔦與ー・ー施ニ于松柏ー・」に松蘿ともいふ、菟絲と同じといふ說あれども非なり、

【女郎】白居易の李勢ノ女の詩に「色爲ニ天下ー・ー艷、心卽女中郎ー・ー」女子にして男子の如き才氣あるものをー・ーといふ、木蘭の詩にも「不レ知ニ木蘭是ー・ー」

【女郎花】木蘭（モクレン）の異名、白樂天の詩に「怪得ニ獨饒ー・ー脂粉態、木蘭曾作ニ女郎ー・ー來」また題「冷狐家木蘭」詩に「從レ此時時春夢裡、應ニ添ー・ー一樹女郎ー・ー花」また辛夷（コブシ）の異名、陸放翁の春晩雜興に「笑穿ー・ー居士屨、閑看ー・ー自註に「唐人辛夷ヲ謂ッテー・ー木爲ス、園中ニ一ノ花アリ、一叢二百朶」木蘭も辛夷も花相似たれば兩者ともにいふなるべし、わが國にては敗醬（ヲミナヘシ）にあてたれども非なり、

【佇立】「タダズム」佇は久なり、久しく一所に立つなり、詩の邶風燕燕に「瞻望弗ニ及ー・ー、ー・ー以泣ニ」楚辭疾世に「ー・ー兮忉怛」

【楞檶ノ材】やくにたたぬ材をいふ、書言故事に「自ラ謙シテイフニ楞檶ノ材トイフ」莊子の逍遙遊に「吾有ニ大樹ー・、人謂ニ之ー・ー樗、其大本擁腫、而不レ中ニ繩墨ー・、其小枝卷曲、而不レ中ニ規矩ー・ー、立ニ之塗ー・ー、匠者不レ顧云云」また人間世に「匠石之齊、見ニ櫟社樹ー・ー、其大蔽ニ牛ー・ー（中略）是不材之木也、無

所可用、故能若是之惹」とあるに本づく（散木）を參看せよ、

【地鎖】　猶は猶なり、地上のすべての音響をいふ、莊子齊物に「——則衆竅是已（天籟）を參看せよ、

【治亂】　治りたり亂れたりする義、呂氏春秋に「——存亡、如可知、如可不知、如可見、如可不見、故智士賢者、相與積心愁慮以求之」

【治亂興亡】　天下の治り亂れ、また興り亡ぶる義、歐陽修の朋黨論に「嗟呼夫——之迹、爲人君者可以鑒矣」

【地利】　地勢險峙城池堅固にして要害よきをいふ、孟子公孫丑下に「天時不如——、地利不如人和」

【地理】　方位高低山川等土地に關する事柄をいふ、易の繫辭上傳に「仰以觀於天文、俯以察於——」

【堆積リテ山トナル】　（土積リテ）を見よ、

【蟠龍】　廣雅に「角ナキヲ——トイフ」

【知禮成性ノ說】　張橫渠の說に「知崇天也、形而上也、通晝夜而知、其知崇矣、知及之而不以禮性之、非己有也、故知禮成性而道義出、如天地位而易行」とあり、知と禮とによりて性を陶鎔するをいふ、

【痴聾痞痼ハ家豪富ナリ】　痴は「オロカ」聾は「ツンボ」痞は「ヲシ」なり、これ等の不具なる人はその家かへりて富める者多し、之に反して賢きものに、貧しきものあり、これ皆天命によるなり、明心寶鑑順命篇に「列子曰、痴聾痞痼家豪富、智慧聰明却受貧」

【持論】　一家の說を立てて、これを執持するをいふ、抗論に同じ、漢書の儒林傳に「趙賓——巧慧ナリ、易家難ズル能ハズ」とあり、轉じて一己の主張にかかる議論をいふ、

竹裡常怡無事福、花開熟讀快心書（傳家寶）

竹樓數間、頁レ山臨レ水、疎松脩竹、詰屈委蛇、惟石落落、不レ拘二位置一藏二書萬卷一其中一長几軟榻、一香一茗、同心互友、朗日過從、坐臥笑談、隨二意所一レ適、不レ營二衣食一不レ問二來歷一不レ叙二寒暄一不レ留二朝市一近塵分斯極矣（五雜組）

ツ

【追遠】　曹大家の東征賦の字面、註に「追溯往事也」とあり、また論語の「愼終追遠」の——は祖先の德を追思するなり、

【追憶】　過ぎ去りたる事を、あとからおもひ出す義、鮑照の句に「——宿昔時」

【追孝】　追とは、已往にさかのぼる義、父母の沒後に孝を盡すをいふ、詩の大雅に「聿追來孝」禮記に「祭者所以追養繼孝也」

【對句】　兩句對偶して虛字實字共に相應じて作る、六朝時代の文には最も——を多く用ふ、例へば歸去來辭に「既窈窕以尋壑、亦崎嶇而經丘」といひ「木欣欣以向榮、泉涓涓而始流」といふが如し、詩に於ては最も多く——を用ひ、殊に律詩の前聯（第三句第四句）及び後聯は必ず——ならざるべからず、例へば、李白の送友人入蜀の、前聯に「山從人面起、雲傍馬頭生」といひ、後聯に「芳樹籠秦棧、春流遶蜀城」とあるが如し、

【魋結】　魋は椎なり、結は謎みて髻と爲す、髻の形椎の如きをいふ「サイヅチマゲ」漢書陸賈傳に「尉佗——、箕踞見賈」

【縋シテ出ヅ】　繩を城に懸けて、之に縁りて出づるなり、左傳僖三十年に「夜縋而出」また「使師夜縋而登」

【追蹤】　人の行跡を追ふなり、應璩書に「——丈人、畜雞種黍、潛精墳籍、立身揚名、斯爲可矣」

【追隨】　相伴ひて遊ぶなり、江淹の詩に「月出照園中、冠珮相——」

【追善】　死者の忌日などに佛事供養するをいふ、追福に同じ、无量壽經の疏に「孝子——」

【追儺】　（驅儺）を見よ、

【追背】　「セナカヲタタク」白居易の詩に「小奴搥我足、小婢搥我背」

【椎埋】　人を椎にてうち殺して之を埋むるをいふ、史記酷吏傳に「王溫舒者陽陵人也、少時——爲姦」一解には、塚を發くをいふと、蘇老泉の高帝論に「百歲之後——屠狗之人云云」屠狗を參看せよ

【墜露】　おつる「ツユ」離騷に「朝飮木蘭之——」

【痛飮】　甚しく酒を飮むをいふ、康熙字典に「凡ソ事、力ヲ盡シテ之ヲ爲ス者皆痛トイフ」世說新語に「痛飮酒熟讀離騷」便可稱名士」痛快・痛切の痛、皆同じ、

【通家】 父祖の代より親しく交る家をいふ、後漢書孔融傳に「漢ノ孔融十歳ニシテ李膺ノ門ニ造リテ曰ク、我ハ是レ李君ノ通家ノ子弟ナリト、膺問ヒテ曰ク、高明ノ祖父ハ、僕ト舊恩アルカト、融曰ク、先君孔子ハ君ノ先人李老君ト、德ヲ同ジクシ、義ヲ比シテ相師友タリ、融ト君トハ累世ノ通家ナリト、膺異トシテ之ヲ見ル」李老君とは老子なり、成語考に「舊好曰ク——」

【通雅】 五十二卷、卷首三卷明の方以智撰す、二十五門に分ち、音韻訓詁天文地輿身體稱謂姓名官制禮樂器用衣服飲食算數勤植等を考證す、卷首三卷は音義攗論・讀書類略・小學大略・詩說・文章薪火の五篇を收む、文化二年の翻刻本あり、

【通考】 三百四十八卷、元の馬端臨撰す、この書は杜佑の通典の八門を析ちて一十九門となし、又增すに經籍・帝系・封建・象緯・物異の五門を以てし、共に二十四門となす、その述ぶるところの事蹟は、上、通典を承け下、南宗の寧宗に至り、分條排纂は通典の剪裁鎔鑄して一家言を成すが如きこと能はずと雖も、鄭樵の通志に比すればこの書を優れりとす、別に清の乾隆三十二年の敕撰なる續通考二百五十二卷、及び皇朝通考二百六十六卷あり

【通義】 普く天下に通ずる所ろの義理をいふ、孟子滕文公上に「或勞心或勞力、勞心者治人、勞力者治於人、治於人者食人、治人者食於人、天下之——也」

【通貨】 通用貨幣をいふ、管子輕重篇に「黃金刀布、民之——也」

【痛快】 極めて快きをいふ、法書苑に「吳皇象善行草書、世稱沈著——」

【通侯】 列侯に同じ(徹侯)を見よ、

【通國】 一國の人をこぞりてなり、舉國に同じ、孟子離婁下に「——皆稱不孝焉」

【痛哭流涕長太息】 國家のためにいたく嘆きて泣き入り、涙を流しため息をつく義、漢書賈誼傳に「誼上疏曰、方今事勢、可爲痛哭者一、可爲流涕者二、可爲長太息者六、云云」また宋の胡詮の上高宗封事に「此滕一屈、不可復伸、國勢陵夷不可復振可爲——也」

【通士】 物事によく通じたる人、荀子不苟に「可ノ謂——」

【通志】 二百卷、宋の鄭樵(字ハ漁仲)撰す、帝紀十八卷皇后列傳二卷、年譜四卷、略五十一卷、列傳一百二十五卷、三皇より隋に至る歷代の事を通じて誌せり、故に——と名づく、紀傳及び譜は皆舊史を删節して挂漏多けれども、二十略は氏族・六書・七音・天文・地理・都邑・禮・謚・器服・樂・職官・選擧・刑法・食貨・藝文・校讎・圖譜・金石・災祥・草木昆蟲に分ち、この書の精華とす、明刻本通志略二十卷單行本あり、別に清の乾隆三十二年の敕撰なる續通志五百二十七卷皇朝通志二百卷あり、

【通州】 唐五代のは今の四川綏定府達縣の治、宋・元(河南省ニ屬スル州)明のは今の江蘇通州の治、遼のは今の盛京奉天府開原縣の地、金・元中書省大都路ニ屬スル州)明のは今の直隸順天府通州の治これなり、地理部編による、

【通志堂經解】 清の納蘭成德がその師徐乾學の傳是樓中に藏するところの唐宋元明諸儒の經解に關する書を易・書・詩・春秋・三禮・孝經・論語・孟子・四書・總經解の十類に分ちて彙輯す、一名を傳是樓經解といふ、その書凡そ壹百四十餘種に及べり、彼の清儒の經解をあつめたる皇清經解と共に經學を修むる者の參考の資とすべし、成德は字を容若といふ、遼陽の人、進士出身を賜はり三等侍衞を授けらる、康熙二十四年卒す、年三十一、その著書合訂删補大易集義粹言・禮記陳氏集說補正は收めてこの經解中に在り、通志堂とは成德の書齋の名なり、

【通宵】 「ヨドホシ」杜甫の詩に「鶴怳——鳳葆備」終宵・徹宵皆同じ、

【通昔】 昔は夕なり、通宵に同じ、莊子に「蚊虻噆膚、——不ノ寢矣」

【痛切】 極めて深切なる義、漢書に「其言多——、發于至誠ニ」また苦痛の切なるをいふ、吳質の書に「可爲——」

【通塞】 通は仕合よきなり、塞は仕合惡しきなり、北史に「雖久滯小官、深體——、無孜孜之望、儒者以是尙」

【通典】 二百卷、唐の杜佑撰す、食貨・選擧・職官・禮・樂・兵刑・州郡・邊防の八門に分ち、上は黃虞に溯り下は唐の天寶に至る、包括宏富にして義例嚴精なり、宋の鄭樵の通志、馬端臨の文獻通考皆この書を以て藍本と爲せども、精博は終にこの書に遜ばざるなり、別に清の乾隆三十二年の敕撰なる續通典一百四十四卷、皇朝通典一百卷あり、

【通人】 「モノシリ」世說の註に「牟子ニ曰ク、漢ノ明帝、夜、神人ヲ夢ム、身ニ日光アリ、明日博ク群臣ニ問フ、——傅毅對ヘテ曰ク、天竺ニ道ノ者アリ、佛トイフ、殆

ド共ノ神ナラント」

【通儒】（ツウジュ）博學多聞にして、萬事の理に通達せる學者、後漢書杜林傳に「博洽多聞、時稱（ニス）——（ト）ニ風俗通に「儒ハ區ナリ、其ノ古今ヲ區別シ、居レバ則チ聖哲ノ詞ヲ玩ビ、動ケバ則チ典籍ノ道ヲ行ヒ、先王ノ制ヲ稽ヘ、當時ノ事ヲ立ツ、是レ——也」

【通書】（ツウショ）一卷、宋の周敦頤撰す、誠・誠幾德・聖・愼動・道・師・以下凡そ四十篇に分つ、その說大極圖說と相表裏し、圖說は理論を說き、この書は應用を示せり、大意人閒修身の眞諦は中正仁義に在り、之を誠と名づく、誠は至善純一、天と等しき者なり、然れどもその外物に應ずるに當りて善惡の生ずるを免れず、故に君子は意を此際に注ぎて戒愼せざるべからず、之を全くするには無欲恬淡常に心を安靜にすべしといふに在り、注解書には、朱子の——解二卷、明の曹端の——述解一卷等あり、

【通明殿】（ツウメイデン）四機活法に「通明ハ玉帝ノ殿名ナリ、常ニ紅雲アリテ之ヲ擁ス」と、蘇東坡の詩に「侍臣鵠立（ス）——、一朶紅雲捧（ゲ）玉皇」

【痛撻】（ツウタツ）痛は「イタム」撻は「カユシ」痒に同じ、禮記內則に「疾痛苛撻（ノ）」また心に苦痛を感ずる義、晉書范宏之傳に「於（ニ）下官之身、有（ン）何（ノ）——」

【通俗】（ツウゾク）清の高僧、密雲の法嗣、閩の福清の人、姓は何氏、密雲和尙に謁して心印を傳へられ、順治七年請に應じて徑山に住し、大に宗風を振張す、順治十八年寂す、五燈嚴統の著あり、嗣法の門人、隱元隆琦等二十餘人あり、

【通歷】（ツウレキ）歷たる年を通算する義、史記梁孝王世家に「梁王自（ヨリ）初王（メタリン）——已（ニ）十一年矣」

【杖】（ツエ）器物談に「杖ハ持ナリ、扶持シテ傾跌ヲ防グ所以ノ者ナリ、然レドモ古者杖ヲ設クルハ將ニ以テ老ヲ優セントスルナリ、蓋シ五十ハ家ニ杖ツキ、六十ハ鄕ニ杖ツキ、七十ハ國ニ杖ツキ、八十ハ朝ニ杖ツク」拾遺錄に「老子居（ル）山中、與（レン）世絕（ツ）跡（チ）、唯有（リ）黃髮老五人、手持（チ）青筠杖（チ）入室與（ズ）老子談」漢書孔光傳に「平帝詔シテ曰ク、太師孔光ハ聖人ノ後、德行純淑ナリ、太師ニ靈壽杖ヲ賜フ」錦字箋に「費長房壺公ニ從ヒ道ヲ學ブ、壺公予フルニ一杖ヲ以テス、長房此ノ杖ニ騎シテ即チ家ニ到リ、之ヲ葛陂ニ投ズレバ、龍ニ化シテ去リヌ」藏凱之の竹譜に「竹ノ杖ニ堪フル者、筇ヨリ尙キハ莫シ、砲碯ニシテ凡ナラズ（中略）一ニ扶老トイフ」

【杖ヲ舉ゲテ狗ヲ呼ブ】（ツエヲアゲテイヌヲヨブ）（舉杖呼狗）說苑に「衞君田讓ニ

間ヒテ曰ク、寡人侯ヲ封ズルニ千里ノ地ヲ盡クシ、賞賜スルニ御府ノ綵帛ヲ盡セリ、而ルニ士至ラザルハ何ノ故ゾト、田讓答ヘテ曰ク、君ノ賞賜ハ、功ヲ以テ及ブベカラザル也、君ノ誅罰ハ、理ヲ以テ避クベカラザル也、猶ホ杖ヲ舉ゲテ狗ヲ呼ビ、弓ヲ張リテ鷄ヲ祝スルガ如シ、香餌アリト雖モ、致スコト能ハザルモノハ、害ノ必スレバナリト」

【圈ヲ按ジテ駿ヲ索ム】（圈索駿）至愚の喩なり、齊林伐山に「伯樂ノ子、父ノ著シシ相馬經ヲ執リテ、馬ヲ求メタルニ、カヘッテ悍馬ヲ得タリ、伯樂其ノ子ノ愚ナルヲ知リ、怒ヲ轉ジテ笑トナシテ曰ク、馬跳ルコトヲ好ム、御スルニ堪ヘズ、所謂圈ヲ按ジテ駿ヲ索ムルナリ」とあり、此の事に本づく、漢書の梅福傳に「三代ノ選舉ノ法ヲ以テ、當世ノ士ヲ取ラント欲セバ猶ホ伯樂ノ圈ヲ案ジテ、騏驥ヲ市ニ求ムルガ如シ」とあり、

【堠】（コウ）正韻に「音后、土堡ナリ」また「土ヲ封ジ壇ヲ爲リ以テ里ヲ記スルナリ、五里ニ一堠、十里ニ雙堠」わが國にて一里塚といふに同じ、韓愈の路傍堠の詩に「堆堆路傍堠（ソウコウ）、一堠復一堠」

【通鑑】（ツガン）書名、次條、竝に（資治通鑑）を見よ、

【通鑑綱目】（ツウガンカウモク）五十九卷、司馬光の資治通鑑に據り、綱目に分ちて撰す、宋の朱子の作と題すれどもその實は門人趙師淵が朱子の凡例によりて修編したるものなりといふ、周の威烈王二十三年より後周の世宗の顯德六年に至る、千三百六十二年閒の事を載す、朱子の手定を經ざるを以て、書中舛誤少からず、書法發明など理窟に偏する論多し、されども德川時代には學者必讀の書となせり、慶安四年の翻刻本あり、續編は、宋元は明の商輅の訂成する所ろ、明は乾隆中張廷玉等の編する所ろなり、

【通鑑纂要】（ツウガンサンエウ）三十七卷、清人姚培謙・張景星二人同編、分ちて前編（伏羲氏ニ起リ、周考王十五年ニ終ル、凡二卷）正編（周威烈王二十三年ニ起リ、周世宗顯德六年ニ終ル、凡十九卷）續編（宋太祖建隆元年ニ起リ、元順帝至正二十七年ニ終ル、凡八卷）明史（太祖洪武元年ニ起リ、懷宗崇禎十七年ニ終ル、凡八卷）の四となす、

【月】（ツキ）淮南子に「月ハ太陰ノ精ナリ」釋名に「月ハ闕ナリ、滿ツレバ則チ缺クルナリ、晦ハ則チ灰ナリ、月死シテ灰トナル、月光ノ盡クルコトヲ之ニ似タリ、朔ハ蘇ナリ、月死シテ復タ蘇生スルナリ、弦ハ半月ノ名ナリソノ形一旁ハ曲リ、一旁ハ直シ、弓弦ヲ張ルガ若キナリ、

望ハ月満ツルノ名ナリ、日月遙ニ相望ムナリ」漢書禮樂志に「月穆穆以金波」注に「月光金波ノ流ルルガ如シ」東坡の詩に「氷輪横海闊、香霧入樓寒」李白の詩に「小時不識月、呼爲白玉盤、又疑瑤臺鏡、飛上青雲端」白居易の詩に「背燭共憐深夜月、踏花同惜少年春」蘇轍の詩に「浮雲捲盡流金九、衣上白露三更寒」宋之問の詩に「桂子月中落、天香雲外翻」天寶遺事に「唐ノ明皇、月宮ニ遊ヒテ天府ヲ見ル、榜シテ廣寒清虚ノ府ト曰フ、素娥十餘人皓衣シテ白鸞ニ乘リ、桂樹ノ下ニ舞フ」月令廣義に「燕都ノ士庶、中秋ニ月餅（つきみだんご）西瓜ノ屬ヲ餽遺シテ看月會ト名ヅク」（中秋賞月（中庭月））を參看せよ

春月　　金呂中孚

柳塘漠漠暗啼鴉、一鏡晴飛玉有華、好是夜闌人不寐、半庭疎影在梨花（疎一作寒）

八月十四夜　　宋孫復

銀漢無聲露暗垂、玉蟾初上欲圓時、清樽素瑟宜先賞、明夜陰晴未可知、

【月明カニ星稀】　魏の武帝の短歌行に「――――、烏鵲南飛繞樹三匝、無枝可依」の句あり、文選の六に出づ、李善の註に「喩客子無所依託也」と、蜀先主の奔走を譏るなり（短歌行）を見よ、

【月ヲ愛シテ燈ヲ撤ス】　（愛月撤燈）唐書に「蘇頲李乂ト綸詰ヲ對掌セリ、八月十五日ノ夜、禁中ニ於テ宿直ス、諸學士月ヲ翫ビ酒ヲ飲ム、時ニ長天雲ナク、月色晝ノ如シ、蘇曰ク、清光愛スベシ、何ゾ燈燭ヲ用ヒント、乃チ左右ニ命ジテ撤去セシム」轉じて物を愛玩するの甚しきをいふ、

【月落チ烏啼イテ霜天ニ滿ツ】　唐の張繼の句（絶句）を見よ、

【月ヲ握リ風ヲ擔フ】　（握月擔風）風月を愛するの深きをいふ、書言故事に「八卜約シ、春遊スルヲ、相與ニ月ヲ握リ、風ヲ擔フトイフ」春宴錄に「虞松、春ニ方リテイフ、月ヲ握リ風ヲ擔フハ、且ツ後日ヲ留メ、花ニ呑ミ酒ニ臥スルハ、時ヲ過ス可カラズト」

【月笑ニ麗ル】　（月麗于箕）月の箕星に麗かるは風吹くなり、詩經に「月麗于箕、風揚砂矣」

【月ニ喘グ】　（喘月）（吳牛月ニ）を見よ、

【月ニ隨ヒテ書ヲ讀ム】　（隨月讀書）南史に「南齊ノ江泌少キ時學ヲ力ム、家貧シクシテ油ナシ、常ニ月ニ隨ヒテ書ヲ讀ム、月ノ斜ナルニ及ビテ乃チ屋ニ上リ、以テ其ノ餘光ヲ盡シ、而ル後寢ニ就ク」

【月ノ初ノ如シ】　黄瑯傳に「瑯ガ祖父瓊、魏郡ノ太守タリ、日食ス、狀ヲ以テ聞ス、詔シテ食スル所ロノ多少ヲ問フ、瓊ソノ對ヲ思ヒ、而シテ未ダ以テスル所ロヲ知ラズ、瑯年七歳、傍ニ在リ、曰ク何ゾ日食ノ餘ハ、月ノ初ノ如シト言ハザルト」

【月ノ都】　月宮をいふ（霓裳羽衣）を見よ、

【月ハ花影ヲ移シテ欄干ニ上ル】　王安石の夜直と題する詩の結句なり、曰く「金爐香盡漏聲殘、剪剪輕風陣陣寒、春色惱人眠不得、月移花影上欄干」夜直とは、禁中に宿直したるなり、第一の句は、自ら富貴の相あり香閨に「香爐ハ、塗金ニテ狻猊・麒麟・鳧鴨ノ狀ヲツクリ、以テ香ヲ然ヤス」と、結句七字最も風趣あり、起句富貴の相と照映して禁中夜直の狀況、宛然目に在る心地す、

【月畢ニ麗ル】　（月麗于畢）月の畢星に麗かるは、雨ふる兆なり、詩經に「月麗于畢、俾滂沱矣」麗一に離に作る（雨）を見よ、

【月滿ツレバ則チ虧ク】　（月滿則虧）易の豐の彖傳に「日中則仄、月盈則食」史記蔡澤傳に「語曰、日中則移、――物盛則衰」天地之常數也」

【頭巾】　頭に被り寒氣を防ぐもの增輝記にその製法を說くこと詳かなり、修驗道にては兜巾と通用して「トキン」と讀む、事物紀原に襆頭、孔氏雜說に蓋頭とあり、

【几】　坐してよりかかる具、又「フミヅクエ」書案、俗に机に作るは非なり、器物叢談に「古者坐スルニ必ズ几ヲ設ク、依凭スル所ロノ具ナリ、然レドモ尊者ニ非レバ之ヲ設ケズ、皆優寵ヲ示ス所以ナリ、軒轅黄帝ヨリ創始ス」杜甫の句に「拂拭烏皮几」また「隱几亦無心」張平子の詩に「美人贈我錦繡段、何以報之青玉案」蘇軾の句に「細甁淨几讀文史」淨几は清く拂拭せし「ツクエ」明窓淨几と對用す、

【杜撰】　撰述の錯誤多きをいふ、野客叢書に「杜默、詩ヲ爲ルニ、多ク律ニ合ハズ、故ニ事ノ格ニ合ハザルモノヲ言ッテ杜撰トナス」

【杜多】　僧をいふ、同覺要覽に「梵云――、漢云抖擻、今訛爲頭陀」

【頭陀】　僧をいふ、文選の――寺碑の註に「――抖擻也、言――去煩惱也」

【傳フル者久シケレバ論略ス】　傳ふるもの久しきと、近きとに由りてその論の詳略同じからず、大小畢るところ異るをいふ、荀子に「傳者久則論略、近則論詳、略則舉大、詳則舉小」

【土】　說文に「地ノ物ヲ吐生スル者ナリ」易經の彖傳に「百穀草木麗乎土ニ」書經の禹貢に「冀州厥土惟白壤、兗州厥土黑墳、青州厥土白墳、徐州厥土赤埴墳、揚州荆州厥土惟塗泥、豫州厥土惟壤下土墳壚、梁州厥土青黎、雍州厥土惟黃壤」壤とは塊なく柔かなる土をいふ、墳は「ウゴモッ」土脈墳起するなり、埴は「ネバッチ」黏土なり、壚は「アラシ」疏なり、黎は黑なり、壤土は耕すべき土、沃土は肥えて物の生長の善き土、瘠土は「ヤセッチ」后土は土の神、冢土ともいふ、

【土ヲ捧ゲテ孟津ヲ塞グ】　己の力量を知らずして到底成し能はざる大事を爲さんとするに喩ふ、朱浮の與彭寵書に「奈何ソ、區區ノ漁陽ヲ以テ而シテ怨ヲ天子ニ結バン、此レ猶ホ河濱ノ人、土ヲ捧ゲテ孟津ヲ塞ガントスル如シ、多ニ其ノ量ヲ知ラザルヲ見ルナリ」【土ヲ煮ル】（煮土）隋書の食貨志に「百姓業ヲ廢シ、以テ白ラ給スル無シ、初メ皆樹皮ヲ剝ギ、以テ之ヲ食ヒ、漸クニシテ葉ニ及ブ、皮葉皆盡ク、乃チ土ヲ煮、或ハ藁ヲ擣キ末トナシ、之ヲ食フ、其ノ後、人乃チ相食ス」【土積ッテ山ト成ル】　小を積みて大となるに喩ふ、說苑の建本篇に「人才雖高、不務學問、不能致聖、水積成川、則蛟龍生焉、土積成山、則豫樟生焉、學積成聖則富貴尊顯至焉」

【恙ナシ】　（無恙）人相問ひて恙無しやといふ、爾雅に「恙ハ憂ナリ」とあり、史記の匈奴列傳に「漢匈奴ニ書ヲ遺リテ曰ク、皇帝敬ンデ問フ、匈奴ノ大單于、恙無シヤト」また神異經に「北方大荒ノ中ニ、獸アリ、人ヲ咋メバ、則チ疾ム、名ヲ獌トイフ、獌ハ恙ナリ、嘗テ人ノ室屋ニ入ル、黃帝之ヲ殺ス、人憂疾ナシ、之ヲ恙ナシト謂フ」とあり、この說附會に近し、

【踵蹟】　（一一）を見よ、

【鼓】　古今樂錄に「鼓ハ動ナリ、冬至ノ音萬物陽ヲ含ミテ動クナリ」周禮に「韓人鼓ニ冒スルニ必ズ啓蟄ノ日ヲ以テス」註に「雷ノ聲ヲ發スルニ象ドル、革ヲ以テ鼓ニ蒙ラシムルヲ冒トイフ」帝王世紀に「黃帝蚩尤ヲ殺シ、ソノ皮ヲ以テ鼓ト爲ス、聲百里ニ聞ユ」六帖に「唐堯ノ時、敢諫ノ鼓アリ」羯鼓錄に「唐ノ明皇イフ羯鼓ハ八音ノ領袖ナリ、嘗テ琴ヲ聽キテ未ダ終ヘズ、遽ニ之ヲ止メテ曰ク、速ニ花奴ヲシテ羯鼓ヲ持シ來リ、我ガ爲メニ穢ヲ解カシメヨト」開元遺事に「唐ノ明皇春日花苑ニ遊ビ、羯鼓ヲ取リ縱擊ス、一時花柳皆發ス」【鼓ヲ鳴ラシテ之ヲ攻ム】　（鳴レ鼓而攻レ之）罪を聲らして攻むるの意、論語に「非吾徒也、小子鳴レ鼓可也」

【堤ハ蟻穴ヨリ潰ユ】　（堤潰蟻穴）大事の破るるは多く小事を愼まざるに由るに喩ふ、後漢書に「堤ハ蟻穴ヨリ潰エ、氣ハ鍼芒ヨリ洩ル」（千丈ノ堤）を參看せよ、

【夙ニ興キ夜ニ寐ヌ】　あさ早く起き、夜、おそく寢に就きて事にいそしむをいふ、詩經の語、また弟子職に「夙興夜寐、衣帶必飭」漢書武帝紀にも「詔曰、今朕獲レ奉宗廟、夙興以求、夜寐以思」

【勤ハ無價ノ寶タリ】　明心寶鑑順命篇に「太公曰、勤爲無價之寶、愼是護身之符」

【繫ガザルノ舟ノ若シ】　（若不繫之舟）眞人の心、趣向無きに喩ふ、莊子の列禦寇篇に「巧者勞而知者憂、無能者無所求飽食而遨遊、汎若不繫之舟、虛而遨遊者也」

【夷ノ思フ所ロニアラズ】　（匪夷所思）夷は平常なり、常人の能く思ひ及ぶ所ろにあらざるをいふ、易經の渙の六四に「渙有丘、匪夷所思」とあり、渙散せし所の者を聚めて、丘の若くならしむるは、常人の思慮の及ばざる所ろなりと、贊美せし辭なり、

【恒ノ産】　定まれる產業なり（恒產ナキ）を見よ、

【椿】　椿は和字なり、春日、花あるによりて作る、正しくは山茶花と書く「サザン花」は、茶梅、又海紅と書く、

白居易

燕詩示劉叟（並序）

叟有愛子、背レ叟逃去、叟甚悲念レ之、叟少年時、亦莊子に所謂大椿は、仙木にて和訓の「ツバキ」にあらず、郝經詩注に「山茶、大ナル者ヲ月丹トイフ、マタ大ナル者ヲ照殿紅トイフ」群芳譜に「山茶一名ハ曼陀羅、花ニ數種アリ、十月ニ開キ二月ニ至ル、中ニ就テ寶珠ヲ佳トス」西溪叢話ニ「曼陀羅ヲ惡客ト爲ス」三柳軒雜識に「月丹ヲ豪客トナス」

【翼ヲ生ジテ天ニ上ル】　（生レ翼上レ天）囘機活法に「陶侃夢ニ八翼ヲ生ジ、飛ビテ天ニ上ル、天門九重ヲ見テ、比リニ其ノ入ニ登ル、唯ダ一門入ルヲ得ズ、閽者杖ヲ以テ之ヲ擊ツ、因リテ地ニ墜チ、其ノ左翼ヲ折ル、寤ルニ及ビ左腋猶ホ痛ム」

【燕】　禮記の月令に「玄鳥ハ春分ニ至リ、秋乃チ歸ル」毛詩の注に「燕ハ乙鳥ナリ、二種アリ、紫胸ニシテ輕ク小ナル者ハ越燕ナリ、胸斑ニ、聲大ナル者ハ胡燕ナリ、色白キ者ハ、數百歲ノ燕ナリ」淮南子に「大廈成而燕雀相賀、廣雅に「燕一名ハ鷰鷁、齊ニハ燕トイヒ、梁ニハ鳽トイフ」武瑾の詩に「花開蝶滿枝、花謝蝶還稀、惟有舊巢燕、主人貧亦歸」杜詩に「落花游絲白日靜、鳴鳩乳燕青春深」

燕詩示劉叟（並序）

白　居　易

叟有愛子、背レ叟逃去、叟甚悲念レ之、叟少年時、亦

皆如是、故作燕詩以諭之、

梁上有雙燕、翩翩雄與雌、啣泥雨椽間、一巢生四兒、四兒日夜長、索食聲孜孜、青蟲不易捕、黃口無飽期、銜爪雖欲弊、心力不知疲、須臾十往來、猶恐巢中飢、辛勤三十日、母瘦雛漸肥、喃喃教言語、一一刷毛衣、一旦羽翼成、引上庭樹枝、隨風四散飛、雌雄空中鳴、聲嗚呼不歸、却入空巢裏、啁啾終夜悲、燕燕爾勿悲、爾當返自思、思爾爲雛日、高飛背母時、當時父母念、今日爾應知、

【燕ノ幕上ニ巢フガ如シ】　至つて危きなり、身の安からざるに喩ふ(猶燕ノ)を見よ、

【終ニ池中ノ物ニアラズ】　(蛟龍雲雨ヲ得バ)を見よ、

【妻死シテ娶ラズ】　(妻死シテ)を見よ、

【審カニセズ】　(不ノ審)審は詳なり、一一は詳かならざる義、戰國策に「一一君之聖孰與堯也」

【罪ヲ開ク】　(開ノ罪)罪を得る義、我より之を啓くをいふ、戰國策に「開ノ罪於先生」

【罪ヲ待ツ】　(待ノ罪)官に就くことを謙していふ、不肖にして失職の罪を得べけれども、それまで官をつとむとの意なり、史記衞青傳に「臣幸得待罪行閒」行閒とは臣位の列なり、

【罪死ニ容レラレズ】　(罪不容於死ノ)罪の極めて大なること、死に至ると雖も、猶ほ以て之を容るるに足らざるをいふ、孟子に「此所謂率土地而食人肉」一一ーーこれ漢書王莽傳に「罪不容誅」とあるも同じ、

【積ミテ江海ヲ成ス】　(積而成江海ノ)鹽鐵論に「水積ミテ而シテ江海ヲ成シ、行積ミテ而シテ君子ト成ル」

【罪ニ抵ル】　(抵罪)抵は至なり、當なり、罪の輕重に隨ひて相當の刑に處する義、韓非子內儲說、史記趙世家等の字面、

【露】　說文に「一ハ潤澤ナリ、雨ニ从ヒ路ノ聲」玉篇に「天ノ津液下リテ萬物ヲ潤ス所ロナリ」大戴禮に「陽氣勝テハ則チ散ジテ雨露ト爲ル」白虎通に「一ハ霜ノ始ナリ」禮記の月令に「孟秋白露降ル」屈原の離騷に「朝飲木蘭之墜ーニ」班固の西都賦に「抗仙掌ニ以承露、擥雙立之金莖」金莖は銅柱なり、漢武帝故事に「上ニ承露盤仙人掌ヲ作リ、玉盃ヲ擎ゲテ以テ雲表ノ露ヲ取ル」周處風土記に「白鶴性警ム、八月ニ至リ、白露降リテ草葉ノ上ニ流レテ滴滴トシテ聲アレバ即チ鳴ク」開元遺事に「大眞妃宿酒初メテ消シテ肺熱ヲ苦ム、晨ニ後苑ニ遊ビテ、口ニ花露ヲ吸ヒテ以テ肺ヲ潤ス」曹植の秋思賦に「四時更代分秋氣悲、高雲靜分露凝衣」(甘露)を參看せよ、

【釣ヲ垂ル】　(垂釣)史記に「太公渭ニ釣ル、周ノ西伯將ニ獵セントシ、トシテ曰ク、獲ル所ロハ龍ニアラズ、螭ニアラズ、熊ニアラズ、羆ニアラズ、霸王ノ輔ナラント、是ニ於テ西伯獵シ、果シテ太公ニ渭陽ニ遇ヒ、與ニ語リテ大ニ悅ブ、また中論に「文王、太公ニ渭濱ニ遇フ、曉然皓首、竿ヲ持シ釣ヲ垂ル、文王之ヲ得テ灼トシテ雲ヲ披キ日ヲ見ルガ若ク、霍トシテ霧ヲ開キ山ヲ觀ルガ若シ」(釣臺)を參看せよ、

【鶴】　相鶴經に「鶴ハ陽鳥ナリ、而シテ陰ニ遊ブ、金氣火精ニ乘ズルニ因リテ以テ自ラ養フ、金ノ數ハ九、火ノ數ハ七、故ニ七年ニ小變シ、十六年ニ大變シ、百六十年ニ變止マリ、千六百年ニシテ形定ル、體潔ヲ尙ブ、故ニ其色白シ、聲天ニ聞ユ、故ニ頭赤シ、水ニ飲ム、故ニソノ喙長シ(中略)陸ニ棲ム、故ニ足高クシテ尾凋ム、雲ニ翔ル、故ニ毛豐カニシテ肉疎ナリ、大喉以テ故ヲ吐キ、修頸以テ新ヲ納ル、故ニ天壽量ルベカラズ(中略)蓋シ羽族ノ宗長ニシテ、仙人ノ馭ニ職ナリ」鮑照の鶴賦に「朝戲於芝田夕飲於瑤池」續搜神記に「遼東ノ城門ニ華表柱アリ、白鶴アリ、ソノ上ニ集ル、詩ヲ言ヒテ曰ク、有鳥有鳥丁令威、去家千年今來歸、城郭如故人民非、何不學仙塚纍纍ト」晉書に「嵇康在刑人中、昂然若野鶴之在雞群」風土記にいふ「鳴鶴露ニ戒ム、鶴ノ性警ナリ、八月ニ至リ白露降リ滴滴トシテ聲アレバ、則チ高鳴シテ相警ム」

失鶴　唐陸龜蒙

養汝由來歲月深、籠開不見意沈沈、想應只在秋江上、明月蘆花何處尋、

【鶴九皐ニ鳴キテ、聲天ニ聞ユ】　(鶴鳴九皐聲聞于天)詩經小雅鶴鳴に見ゆ、皐は澤中の水溢れ出でて坎を爲す所、外より數へて九に至るは、深遠の義なり、賢者は隱居すと雖も、人咸之を知るに喩ふ、

【鶴軒ニ乘ズ】　左傳に「衞ノ懿公、鶴ヲ好ム、鶴軒ニ乘ズル者アリ、狄人衞ヲ伐ツニ及ビ、甲ヲ受クル者、皆曰ク、鶴ヲ使ヘ、鶴實ニ祿位アリ、余焉ゾ能ク戰ハント、遂ニ衞ヲ滅ス」とあり、史記の衞世家にも見ゆ、陸放翁の讀隱逸傳詩に「終南處士入都門、少室山人補諫垣、畢竟只供千歲笑、石封三品鶴乘軒」

【鶴ニ騎リテ揚州ニ上ル】　(騎鶴上揚州)一人の身にて、多くの快樂を兼ね受けんとするをいふ、事類全書に「客アリ相從ツテ各志ス所ロヲ言フ、或ハ揚州ノ刺

史タランコトヲ願フ、或ハ鶴ニ騎リテ上昇セント願フ、其ノ一人曰ク、腰ニ十萬貫ヲ纏ヒ、鶴ニ騎リテ揚州ニ上ラント、三者ヲ兼ネント欲スルナリ」揚州は、唐詩にも「烟火三月下揚州」ことある地にて、古より繁華を以て聞ゆ、東坡綠筠軒の詩にも「若對此君仍大嚼、世間那有揚州鶴」

【鶴ノ雛群ニ立ツガ如シ】 成語考に「出人羣而獨異、如鶴立雞羣」と、註に「晉ノ嵇康丰度人ニ過グ、人之ヲ美メテ曰ク、康ヲシテ衆人中ニ處ラシムルハ、正ニ鶴ノ雞群ニ立ツガ如シト」

【鶴ノ脛長シト雖モ之ヲ斷タバ則チ悲マン】 (鶴脛雖長斷之則悲)(凫ノ脛)を見よ、

偶因抱琴出　夜汲潤底泉　落掲水中月
水定光復圓　圓レ水水不レ語　圓レ月月不言
倚レ樹一長嘯　萬壑松風寒　山中元于石
曼レ曉乘レ涼　偶獨來　不レ因二魚躍一見二萍開一
卷荷忽被レ微風一觸　遠下清香露一杯

野塘　元　薩都剌

老去曾看相鶴經　暫從二華亭一試二唳傳一
幾年養就丹砂頂　筧日閑梳白雪翎
萬里壯心原自許　九霄清唳好誰聽
神仙苦侶知何在　欲レ遣二羣遨一蓼一點青

和レ詠レ鶴　元　李　冏

【帝】 說文に「一ハ諦(あきらか)ナリ、天下ニ王タルノ號ナリ」爾雅釋詁に「君ナリ」白虎通に「德、天ニ合スル者ヲ一ト稱ス」呂氏春秋に「帝者天下之所適、王者天下之所往」もと造化の稱、上帝・天帝の如し、轉じて造化に代りて天下を主宰する人の稱、史記高帝紀に「乃即皇帝位」汜水之南」註に「蔡邕曰ク、上古天子ハ皇ト稱シ、ソノ次ハ帝ト稱ス」五帝は少昊・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜をいふ、また五行の神の稱、孔子家語に「季康子問五帝之名孔子曰、天有五行、金木水火土、分時化育以成萬物、其神謂之五帝」

【楴】 枝弱く葉細くして絲の如き一種の柳「ギヨリウ」爾雅に「一ハ河柳」罪芳譜に「一名雨師、一名河柳、一名人柳一名三眠一名觀音柳、一名長壽仙、人柳即俗所稱三春柳也、春前以枝插之易生」爾雅翼に「天ノ將ニ雨フラントスルヤ、楴先ヅ之ヲ知リ、氣ヲ起シテ、以テ應ズ、又霜雪ヲ預ヒテ凋マズ、乃チ木ノ聖ナル者ナリ、故ニ字聖ニ從フ、又雨師ト名ヅク」

【鼎、足ヲ折ル】 (鼎折足)鼎、足を折れば、鼎中の物を覆して鼎の用に堪へず、以て大臣その任に堪へず、國家を覆すに喩ふ、

易經鼎卦に「鼎折足、覆公餗」餗は音ソク鼎の中の「モリモノ」この易の語によりて三公の任務を鼎餗といふ、傅咸の語に「安能任鼎餗」

【蹄涔ノ內、蛟龍ヲ生ゼズ】 (蹄涔之內不生蛟龍)劉勰新論の語、蹄涔とは牛馬の蹄の跡の凹さところなり、この句の下に「培塿之上不植松柏」とあり、つまらぬ土地には大人物の生ぜざるに喩ふ、

【廷尉】 わが檢非違使判官の唐名に用ふ、もと——とは秦漢の世の官、刑事を司る、後漢書光武紀の注に「獄ヲ聽クニハ必ズ朝廷ニ質シ、衆ト之ヲ共ニス、尉ハ平ナリ、故ニ——ト稱ス」史記張釋之傳に「張——釋之者堵陽人也」また「——天下之平也」

【程頤】 字は正叔、河南の人、明道(顥)の弟なり、少くして高識あり、禮にあらざれば動かず、年十八、仁宗に上書し、世俗の論を斷け、王道を以て心と爲さんことを欲す、大臣屢薦ぐれども起たず、後ち哲宗に仕へ、崇政殿說書に至る、文彥博稱して眞の侍講となす、兄明道と斯文を以て自ら任ず、晩に龍門伊水の上に居る、學

者伊川先生と稱す、大觀元年卒す、年七十五、正公と諡し、伊陽伯に封じ、孔廟に從祀せらる、兄弟著す所ろ收めて二程全書といふ、

【程頤宰相ノ遺線ヲ辭ス】 宋元通鑑に「呂大防宰相タルトキ、百緡ヲ以テ程頤ニ遺ル、頤之ヲ辭ス、時ニ族兄ノ子座ニ在リ、頤ニ謂ヒテ曰ク、甚シキコトヲ爲スルコト勿レ、姑ク之ヲ受ケヨト、頤ガ曰ク、公ノ頤ニ遺ル所以ノ者ハ、頤ガ貧ナルヲ以テナリ、公ハ宰相タリ、能ク天下ノ賢ヲ進メ、材ニ隨ヒテ之ニ任ゼバ、則チ天下ソノ賜ヲ受ケン、何ソ獨リ頤ノミ貧ナラン、天下ノ貧者亦衆シ、公ノ帛固ヨリ多キモ、恐クハ公周クスルコト能ハザラント」

【程伊川】 (程頤)を見よ、

【停雲】 親友を思ふをいふ、陶潛に停雲篇四首あり、その序に曰く「——思親友也、罇酒新湛、園列初榮、願言不從、歎息彌襟、その詩に曰く、

靄靄停雲、濛濛時雨、八表同昏、平路伊阻、靜寄東軒、春醪獨撫、良朋悠邈、搔首延佇、

停雲靄靄、時雨濛濛、八表同昏、平陸成江、有酒有酒、閒飲東窗、願言懷人、舟車靡從、東園之樹、枝條再榮、競用新好、似招余情、人亦有言、日月于征、安得促席、說彼平生、

翩翩飛鳥、息我庭柯、斂翮閒止、好聲相和、豈無他人、念子實多、願言不從、歎、抱恨如何、

【程嬰】 趙の大夫屠岸賈、趙朔の族を滅す、朔に遺腹の子武あり、賈之を索むれども得ず、朔の客程嬰・公孫杵臼相與に謀りて曰く、孤を立つると死するとは孰れか難きと、嬰曰く、死は易く孤を立つるは難きのみと、杵臼曰く、子はその難きことを爲せよと、杵臼他の兒を取り山中に匿る、嬰出でて謬りて曰く、我に千金を與へば、吾趙氏の孤の處を告げんと、賈喜ぶ、乃ち人をして嬰に隨はしめ、杵臼及び兒を殺す、而して趙氏の眞の孤は在り、嬰後ち武と賈を滅し武を立て、而して自殺し、以て下宣孟及び杵臼に報ず、武、啼泣し齊衰三年、奉祀絕たず、宣孟は朔の父宣子盾なり、孟はその字、

【聽熒】 熒は惑なり、聽さて疑惑するをいふ 莊子の齊物に「黃帝之所——也」火の光る義のときは、熒音ケイ、

【鄭衛桑閒】 鄭衛は春秋の世の二國の名、鄭は今の河南開封府新鄭縣に都す、衛は今の河南省衛輝府淇縣に都す、二國の音は淫猥にして人心を亂す、桑閒も亦

淫靡の音にて亡國の樂なり、李斯の逐客上書に「——韶虞武象者異國之樂也」韶虞は舜の樂、武象は周の武王の樂なり(桑閒濮上)を參看せよ、

【提要】 要領を「ヒッサゲ」出す義、韓愈の進學解に「記事者、必提其要、纂言者、必鉤其玄」

【鼎ヲ扛ク】 (扛鼎)を見よ、

【鼎ヲ定ム】 (定鼎)周の成王、九鼎を郟鄏の地に奠き、王都と定めたることを、左傳宣三年に「成王——于郟鄏」とあり、これによりて都を定むるの義とす、郟鄏は洛陽の地、

【酲ヲ解ク】 (解酲)を見よ、

【鼎ヲ列ネテ食ス】 多く美味を食ふ義(鼎食)を見よ、

【提衡】 衡は平なり、二人相與に等しき義、漢書杜周傳に「和與——」

【程頤】 字は伯淳、宋の大儒、その先世、中山に居る、曾祖よりして河南に遷り、洛陽に移る、生れて秀爽なり、弟頤と共に、業を周茂叔に受く、進士に擧げられ、鄠上元主簿、晉城令に歷任し、專ら德化を尙ぶ、熙寧の初め、御史裏行と爲り、新法を論じ合はずして去る、哲宗立ち、召して宗正丞とせんとし、命至りて卒す、時に元豐八年なり、年五十四、明道先生と稱し、後ち

純公と諡し、河南伯に封じ、孔廟に從祀す、兄弟著す所ろ收めて二程全書といふ、

【締交】 締は結なり、交をむすぶ義、柳宗元の封建論に「——合從」

【鄭康成】 (鄭玄)を見よ、

【定額】 定まれる數の義、愼夏漫筆に「舊額原額等ノ額字ハ定例ヲ謂フナリ、然レドモ字書ヲ探索スルニ、斷ジテ定ノ義ナシ、按ズルニ詩ノ召南、麟之定ノ注ニ、定ハ額ナリトアリ、額ヲ以テ定ト爲スハ恐ラクハ此ニ出ヅ」

【棣鄂之情】 兄弟の情のうつくしくして愛すべきをいふ、詩經の小雅常棣に「常棣之華、鄂不韡韡、凡今之人、莫如兄弟」常棣は「ニハザクラ」子は櫻桃の如くにして食ふべし、鄂は鄂然として外に見はるる貌、韡韡は光明の貌、兄弟の情の美くしきを花の美くしきに比していへるなり、

【禘祫】 禮に「三年一祫、五年一禘」とあり、祫は合なり、王者の大祭の名、昭穆を以て太祖の廟に合食するをいふ、禘は諦なり、その尊卑を審諦して之を祀るをいふ、韓愈に禘祫議あり、唐宋八家文に載す、

【貞幹】 貞は楨なり、墻の兩頭の立木なり、幹は根幹な

り、猶屋宇に於ける棟梁の如し、書經に「峙乃楨幹」とあるは、版築に供する材を謂へよといふ義、莊子に「以仲尼爲楨幹」、國其有瘳乎」易の乾卦に「貞者事之幹也」禮記の月令の註に「幹者器之本也」以て事の主要、根據の義とす」

【楨幹】　樹の幹なり、物の根本となる義、漢書匡衡傳に「朝廷天下之——」前條を見よ、

【偵騎】　「モノミ」の騎兵、偵は敵の「ヤウス」を伺ふなり、明史に「迅——盡殺之」

【鄭義宗ノ妻】　唐書に「唐ノ鄭義宗ノ妻盧氏、甚婦道ヲ得タリ、嘗テ強盜數十人アリ、夜垣ヲ踰エテ入ル、家人盡ク奔竄ス、唯姑ノミ室ニ在リ、盧氏白刃ヲ冒シテ姑ノ側ニ至ル、盜ニ擊セラレテ、殆ド死セントス、盜去リテ後、人其ノ故ヲ問フ、何ゾ獨リ懼レザルト、盧氏曰ク、人ノ禽獸ニ異ナル所以ノモノハ、其ノ仁義アルヲ以テナリ、隣里急アルモ、尙ホ相救フ、況ヤ、姑ニ在リテ、之ヲ委棄ス可ケンヤト、人之ニ欽服ス」

【帝鄉】　天子の鄉里、後漢書劉隆傳に「河南帝城多近臣南陽——多近親」また天帝の都をいふ、莊子に「乘彼白雲、至於帝鄉」また「天下無道、則厥俗上仙、乘彼白雲、至于帝鄉」虛無の上をもいふ、

【鄭漁中】　（鄭樵）を見よ、

【庭訓】　家庭の敎訓なり、論語の季氏篇に「陳亢、伯魚ニ問ヒテ曰ク、子モ亦異聞アリヤト、對ヘテ曰ク、未ダシ、嘗テ獨リ立テリ、鯉趨リテ庭ヲ過グ、曰ク詩ヲ學ビタルカト、對ヘテ曰ク、未ダシト、詩ヲ學バザレバ、以テ言フコトナシト、鯉退イテ詩ヲ學ブ、他日又獨リ立テリ、鯉趨リテ庭ヲ過グ、曰ク禮ヲ學ビタルカト、對ヘテ曰ク、未ダシト、禮ヲ學バザレバ、以テ立ツコトナシト、鯉退イテ禮ヲ學ブ、斯ノ二者ヲ聞ケト、陳亢退イテ喜ンデ曰ク、一ヲ問ヒテ三ヲ得タリ、詩ヲ聞キ、禮ヲ聞キ、又君子ノ其ノ子ニ遠ザカルヲ聞クナリト」あるに本づく、孔子の其の子を敎ふること、他の門人に異なることなし、故に陳亢以て其の子に遠ざかるとなすなり、晉書孫盛傳にも「盛性方嚴、有軌憲、雖子孫班白、而——愈峻」

【低回】　低は俯なり垂なり、頭を垂れて回らす義、たちもとほりて去る能はざる貌、楚辭九章に「——夷猶宿北姑兮」また延びやかにめぐれる貌、揚雄解難に「大味必淡、大音必希、大語叫叫、大道——」の注に「——ハ紆衍也」低一に祇また祇に作る、同一に徊に作る、玉篇には「猶ホ徘徊ノ如シ」とあり、

【貞晦】　心をかたく正しくして、才能をくらまして、外にあらはさざる義、舊唐書に「從少以——恭謹自處」

【帝紘】　紘は綱維（オホヅナ）——は帝道の義、班固の答賓戲に「方今大漢、滋掃群穢、夷險変夷、廓——恢皇綱」

【鼎鑊】　漢書刑法志の註に「鼎ノ大ニシテ足ナキヲ鑊トイフ、以テ人ヲ煮ルヤリ」古は魚又は肉を煮るに用ひたること、周禮天官享人に「掌共——」とあるにて知るべし、これを刑具に用ひたるは後世の事なり、史記の廉頗藺相如傳に「臣請就——」文天祥の正氣歌に「——甘如飴」

【丁寬】　漢の梁の人、田何に從ひ易を受け、學成りて東歸す、何門人に謂つて曰く、易已に東すと、景帝の朝、梁の孝王の將軍となり、易說三萬言を作る、後ち寬、同郡の田王孫に授く、

【町畦】　（——）を見よ、

【提攜】　互に率さ行く義、禮記の曲禮に「長者與之——則兩手奉長者之手」また相扶助する義、史記の張耳陳餘傳に「況以兩賢王、左提右攜而責殺王之罪、

滅燕易矣」

【提挈】　互に相扶持する義、漢書張耳傳に「以兩賢王、左提右挈、面責殺王之罪、滅燕易矣」提攜と義通ず、また說文に「——ハ縣持ナリ」禮記王制に「班白不——」

【啼血】　「ホトトギス」の啼く聲の切なるをいふ、羅鄴の詩に「蜀魄千年尙怨、誰、聲聲——滿花枝、滿山明月東風夜、正是愁人不寐時」

【鄭玄】　（——）を見よ、

【鄭虔ノ三絕】　人の畫山水を稱していふ、唐の鄭虔、善く山水を畫く、嘗て自らその詩竝に畫を寫し以て帝に獻ず、帝その尾に大署して鄭虔三絕といふと、虔は鄭州の人、玄宗その才を愛して廣文館の博士となす、三絕とは詩畫書の三ッの絕藝を有する義、

【亭午】　正午の時なり、孫綽の游天台山賦に「義和——游氣高褰」義和は日氣なり、游氣は、海氣なり、亭は至なり、午は日中なり、一に亭は直（アタル）なり、丁に通ず、午時にあたる也、杜子美の詩に「亭午頗和煖」柳子厚の詩に「獨遊亭午時」

【牴牾】　猶ほ違戻と言ふがごとし、漢書の司馬遷傳に「至於采經摭傳、分散數家之事、甚多疏略、或有牴

牾この註に「牴ハ觸ナリ、牾讀ンデ迕トナス、相觸迕スルナリ」と、抵梧に作る同じ、

【鄭谷】 字は守愚、唐の袁州の人、父は司空圖と官を同うす、幼時、圖見て之を奇とし、嘗てその背を撫して曰く、當に一代風騷の主たるべしと、光啓三年登第し、都官郎中を歷、詩名時に盛んなり、人多く傳へ誦す、號して鄭都官と爲して名いはず、

【鄭國ノ渠】 漢書の溝洫志に「韓聞秦之好興事、欲罷レ之無レ令東伐、迺使水工鄭國閒說秦、令鑿涇水自中山西邸瓠口爲渠、並北山東注洛三百餘里、欲以溉田、中作而覺、秦欲殺鄭國、鄭國曰、始臣爲閒、然渠成亦秦之利也、臣爲韓延數歲之命而爲秦建萬世之功、秦以爲然、卒使就渠、渠成而用溉注填閼之水、溉舄鹵之地四萬餘頃、收皆畝一鍾、於是關中爲沃野無凶年、秦以富彊、卒幷諸侯、因名曰鄭國渠」

【鼎湖ノ雲ヲ瞻望ス】 太平記卷二十一に見ゆ、帝王の崩御をかなしみ思ふ義、朗詠集の下にも「秋風悵望鼎湖雲」とあり、史記の封禪書に「黃帝采首山銅、鑄鼎於荊山下、鼎既成、有龍垂胡髯下迎黃帝、黃帝上騎、群臣後宮從上者七十餘人、龍乃上去、餘小臣不得上、乃悉持龍髯、龍髯拔墮、墮黃帝之弓、百姓仰望黃帝既上天、乃抱其弓與胡髯、號故後世因名其處曰鼎湖」

【帝閽】 天帝の宮門なり、張衡の賦に「叫ニ閽帝一使開レ扉兮、覩ニ天皇于瓊居一」轉じて天子の宮闕をもいふ、

【丁祭】 孔子のまつり、輟耕錄に見ゆ(釋奠)を見よ、

【貞操】 ただしくして、變らざる「ミサヲ」晉書に「親松竹、則思ニ一之賢一」

【鼎鐺モ尙ホ耳アリ】 (鼎鐺尙有レ耳)鐺は釜の屬、兩耳三足あり「アシガナヘ」鼎鐺でさへなほ耳あり、而るに人でありながら之を聞かざるかといふ意、宋史に「太祖叱ニ雷德驤一曰、——、汝不レ聞ニ趙普吾之社稷之臣乎一」

【定策ノ功】 (定策功)天子をたすけ立てたる功なり、策は竹簡、帝を立つることを簡に書して宗廟に告ぐ、故にいふ、漢書杜延年傳に「宣帝即位、延年以ニ定策安宗廟一、益ニ戶二千三百一、詔有レ司ニ論ニ——一、自ニ霍光一至ニ史樂成一、皆封ニ侯益ニ土一」張安世傳にも「宣帝立、有ニ定策功一、拜ニ大司馬一」宋史韓琦傳に「琦薨、年六十八、帝篆ニ其碑一曰、兩朝顧命、定策元勳」

【底止】 底は至なり、猶ほ定限といふが如し、詩の小雅に「靡ニ所ニ——一」こまた左傳に「天祚ニ明德一有レ所ニ——一」底正音はチ今俗讀によりてここに出す、

【弟子】 幼年の者をいふ、論語學而に「子曰、弟子入則孝、出則弟」また門人をいふ、師に事へて父兄の恩あり、故にいふ、禮記の曲禮の疏に「師ヲ謂ツテ先生ト爲ス者ハ、彼レ己ニ先ダチテ生レ、ソノ德多厚ナルヲ言フナリ、自ラ稱シテ——ト爲ス者ハ、己レ自ラ處ルコト弟子ノ如クスレバ、則チ師ヲ尊ブコト父兄ノ如クスルヲ言フナリ、故ニ公西華子夏ノ徒、孔子ニ答フル皆自ラ——ト稱スルナリ」孟子公孫丑上に「若是則——之惑滋甚」

【姊妹】 姒は姉なり、姊は妹なり、爾雅釋親に「女子同出、先生爲レ姒、後生爲レ姊」また兄の妻を姒といひ、弟の妻を姊といふ、同書に「長婦謂ニ稚婦一爲ニ姊婦一、稚婦謂ニ長婦一爲ニ姒婦一」

【涕泗】 涙なり、目より出づるを涕といひ、鼻より出づるを泗といふ、詩の陳風澤陂に「——滂沱」

【聖耳】 「ミミダレ」本草に「小兒——燕脂浸レ汁、滴ニ耳中一」

【弟子入ッテハ則チ孝出デテハ則チ弟】 (弟子入則孝出則弟)論語學而篇、孔子の語、下に「謹而信、汎愛レ衆而親レ仁行有レ餘力、則以學レ文」の十七字あり、孝とは善く父母に事ふるを謂ひ、弟とは善く兄長に事ふるをいふ、

【第宅】 邸宅をいふ、邸には甲乙の次第あり、故にいふ、漢書高祖紀に「爲レ列侯食レ邑皆佩ニ之印一賜ニ大——一、吏二千石、徙ニ之長安一受ニ小第室一」

【庭實】 實は品物なり、庭中に陳する貢物をいふ、左傳莊二十二年に「——旅百」註に「庭之所ニ實陳一、有ニ百品一、言ニ物備一也」

【蹄涔】 物の微少なるに喩ふ、莊子の字面、類書纂要に「蹄涔ハ、牛馬ノ脚跡中ノ水ナリ」淮南子に「牛蹏之涔、不レ能レ生ニ鯨鮪一、而蜂房不レ容ニ鵠卵一、小形不レ足レ包ニ大體一」また晉書載記に「劉曜曰、——不レ容ニ尺鯉一(牛蹏)を參看せよ、

【提耳面命】 耳を提げて面前にて之を命ずるなり、訓諭の詳にして切なるなり、詩經大雅抑に「匪ニ手攜之一、言示ニ之事一、匪ニ面命一、言提ニ其耳一」

【亭榭】 「ウテナ」「チン」榭は屋宇ある臺をいふ、劇談錄に「——清峻」

【定情】 男女情交を通ずる義、また夫婦となる義、曹植の詩に「與君初定レ情、結髮恩愛深」

【抵掌】 「タナゴコロ」をうつなり、盛んに談笑するさま、(掌ヲ抵チ)を見よ、

【帝者ノ師】 漢の張良、上に從ひて關に入る、遂に道引

して食はず、曰く、今三寸の舌を以て、帝者の師と爲り、萬戸侯に封ぜらる、これ布衣の極なり云云、

【程朱】 二程子及び朱子なり、程顥字は伯淳、河南の人、神宗の熙寧の初、御史裏行となる、時に王安石新法を行ふ、顥之を論じて合はず、遂に去る、元豐八年卒す、年五十四、世に明道先生と稱す、程頤は顥の弟なり、字を正叔といふ、召されて崇政殿說書となる、文彥博稱して眞の侍講となす、性嚴毅方正、蘇軾等と相容れず、大觀元年卒す、年七十五、世に伊川先生と稱す、朱熹字は元晦、業を李侗に受く、好んで書を讀み躬行實踐を務む、敬の一字は最も工夫の要たり、寧宗の慶元六年三月卒す、年七十、程朱の詳傳は伊洛淵源錄、宋史の道學傳等を見よ、

【貞淑】 淑は善なり、俶に作る、同じ、——は「ミサヲ」正しく堅固にして心の善良なるをいふ、漢書に「能致其——不貳其操」

【程式】 式は法なり、猶ほ模範の如し「テホン」管子に「法者天下之——也、萬事之儀表也」

【鼎食】 多く美味を食するをいふ、家語に「從車百乘、積粟萬鍾、累茵而坐、列鼎而食」また史記貨殖傳に「郅氏——」漢書主父偃傳に「生不食五鼎、則死烹五鼎」

【程邃】 字は穆倩、垢區と號し、また垢道人と號し、自ら江東布衣と稱す、清の江南歙縣の人(圖繪寶鑑續纂ニハ新安ノ人トナス)江都に居る、明の諸生、金石の學に精しく、篆刻に妙に、善く山水を畫き、巨然に法る、詩に工なり、會心吟あり、家收藏に富む、人と爲り端慤にして氣節を尙び、虛懷善く下る、

【泥酔】 泥は正字通によれば、一種の蟲にして、東海に生ず、水を得れば活し、水を失へば泥の如しとあり、大酔して骨なき泥蟲の如くグタグタとなるをいふ、杜甫の詩に「先拚一飮酔如泥」また李白の詩に「傍人借問笑何事、笑殺山翁酔如泥」佩文韻府に五色線を引きて曰く「南海蟲アリ、骨ナシ、名ヅケテ泥トイフ、水中ニアレバ活シ、水ヲ失ヘバ、酔ヒテ一堆泥ノ如ク然リ」と、この說、異物志にも見ゆ、

【鄭聲】 鄭國の音にて、淫聲をいふ、論語衞靈公篇に「放——遠佞人鄭聲淫、佞人殆」(鄭衞桑閒)を參看せよ、

【鼎盛】 (春秋——)を見よ、

【定省溫凊】 禮記の曲禮に「凡爲人子之禮、冬溫而夏凊、昏定而晨省」註に「溫ハ以テ其ノ寒ヲ禦ギ、凊ハ以テ其ノ凉ヲ致ス、ソノ衽席ヲ定メ、其ノ安否ヲ省ミルナリ」

【鄭磐雅ヲ破ル】 太平記卷十三に見ゆ、禮記の樂記に「魏文侯曰、敢問溺音何從出也、子夏對曰、鄭音好濫淫志、衞音趨數煩志、皆奸於色而害於德、是以祭祀弗用也」と、正義に「鄭衞之音即靡靡之樂」とあり、論語の陽貨に「惡鄭聲之亂雅樂也」

【鄭成功】 初の名は森、父芝龍我が國に來りて平戸に寓し、田川氏を娶りて之を生む、明の崇禎十一年明に歸りて大學に入る、隆武元年芝龍太祖の遠孫唐王を立てて恢復を謀る、唐王之を封じて平虜侯と爲し、又成功を以て御衞中軍都督に拜し忠孝伯に封し、朱姓を賜ふ、因りて國姓爺と號す、尋で芝龍淸に降り、唐王亦殺さる、成功哭泣して儒服を焚き、永明王を奉じて明祚を繼がしめ淸に抗す、淸芝龍をして書を爲りて成功を招かしむ、從はず、永曆十二年延平王に封ぜられ、招討大將軍に拜す、大擧して南京を襲ひ、克たず、永曆帝亦淸人に擒せられ、明の世統盡く、成功乃ち臺灣に據り、猶ほ明の正朔を改めず、時に明の遺臣朱舜水亡命して水戸侯の賓師たり、二人相謀りて兵を我が國に借りて明室を恢復せんとす、事成らず、淸の康熙元年病んで卒す、年三十九、子孫繼で臺灣を保ち、康熙二十二年遂に淸に入る、

【鄭正叔】 (程頤)を見よ、

【鄭樵】 字は漁仲、宋の興化軍莆田の人、好みて名山大川に遊び、奇を搜りて古を訪ひ、藏書家に遇へば借留讀盡して去る、博學强記にして經史禮樂天文地理蟲魚草木に至るまで講究せざるなし、紹興中薦を以て樞密院編修を授けらる、著書數十種あり、通志略最も著る、嘗て夾漈山に隱る、學者稱して夾漈先生といふ、紹興三十二年卒す、年五十九(通志)を參看せよ、

【鄭昭】 淸の人、漢人なり、遲羅の緬甸に破らるるや、同志を募りて海濱の地を固守せしが、緬甸と淸との攻戰を機とし、安南東浦塞の後援を得て遲羅國を再興し、始めて國都を盤谷に定む、時にわが紀元二千四百二十七年なり、

【鄭燮】 字は克柔、板橋と號す、淸の江蘇興化の人、人と爲り疏宕灑脫天性極めて厚し、乾隆元年の進士、濰縣に知たり、惠政あり、疾を以て歸る、寫意に長ず、蘭竹を畫くに草書の法を用ひ、時習を脫盡す、石を畫く尤も妙なり、書は別致あり、詩詞は熟語を作ることを屑しとせず、板橋雜著あり、

【挺然】 すぐれてぬきいでたる貌、晉書劉毅傳に「方正亮直——不群」

【丁仙芝】 唐の曲阿の人、進士に擧げられ、餘杭尉となる、詩に工なり、郡人に陶翰・殷遙・張潮といふあり、皆能詩を以て時に聞ゆ、

【遞送】 「ツギオクリ」明律に「若シ隣境官司、囚到リテ稽留シ、即チ——セザル者ハ、罪モ亦之ノ如シ」

【鼎鍊】 鼎の中の「モリモノ」また台輔の任務をいふ（鼎足ヲ）を見よ、

【鼎足】 鼎は多く三足なり、よりて三人相須つて功を立つるをいふ、管子に「吾三人者之於齊國也、譬之猶鼎之有足也、去一焉、則必不立矣」三人は、管仲・鮑叔・召忽、また三方に分立する義、史記淮陰侯傳に「三分天下——而居」

【泥鄉人】 「ツチニンギャウ」謝顯道曰く「程明道如——及接人、渾是一團和氣、泥人に同じ、

【鼎俎ニ免レズ】 （不免於鼎俎）鼎に煮られ、俎に盛らるるを免かれざる義にて、殺さるるを免かれざるをいふ、淮南子に「雞知將旦、鶩知夜半、而——」

【程大昌】 字は泰之、宋の休寧の人、十歳能く文を屬す、紹興中の進士、數州に歷知し、龍圖閣直學士を以て致仕す、大昌篤學古今の事に於て考究せざるなし、著すところ、禹貢論易原雍錄易老通言攷古編演繁露北邊備對等あり、

【剃刀】 「カミソリ」義楚六帖に「——天降」剃頭刀・薙髮刀皆同じ、

【定陶】 縣の名、漢晉隋の濟陰郡、今の山東曹州府——縣西北四清里、明の——縣は山東省兗州府曹州に屬す、即ち今の——縣治、

【棣棠】 「ヤマブキ」の類、群芳譜に「——花ニ單葉ナル者アリ金盃ト名ヅク」と、また西溪叢語に「——ヲ俗客トナス」三柳軒雜識には改めて和客となす、

【程端禮】 字は敬叔、元の鄞縣の人、年十五、能く六經を記誦し、大義を曉析す、當時學者多くは陸氏の學を尊尚す、端禮獨り史蒙卿に從ひて游び、以て朱子の明體適用の旨を傳ふ、學者門に及ぶ者甚だ多し、著す所ろ文集及び讀書分年日程あり、仕へて衢州路學の敎授となる、弟の端學（字ハ時叔）春秋に通じ、進士に第し、太常博士に至る、著す所ろ、春秋本義辨疑等あり、

【鼎峙】 峙は高く「ソバダツ」——は鼎の足の如く、三方にそばだつ義、鼎立に同じ、吳志に「成——之業」

【貞女】 「ミサヲ」正しき女、陸機の演連珠に「淫風大行、——蒙治容之誨、淳化一般流、盜跖放ム曾史之情」史記田單傳に「王蠋曰、忠臣不事二君、——不更二夫二云々」貞一に烈に作る、

【鄭重】 「ネンゴロ」の義、鄭も亦重なり、慇懃に同じ、漢書の王莽傳に「非メ皇天所以鄭重降符命之意」とあり、師古の註に「鄭重ハ、猶ホ頻煩ト言フガゴトシ」

【貞女峽】 十訓抄第六に「獨り——の月を詠めとあり、夫の死後貞操を守れる婦人のさびしき狀をいふなり、さて——は水經の注に「淮水出桂陽、南至四會、歷——」峽西岸高峻、有石如人形、高七尺、狀如女子、また三齊略記に「秦時有女子、化入石、在岩穴中」昌黎作「——詩」とあり、和漢朗詠集戀の部に「——空唯月色、窈窕堤荒獨波聲」とあり、併せ考ふべし、

【丁丁】 （——）を見よ、

【定鼎】 （鼎ヲ定ム）を見よ、

【亭亭】 高く聳え立つ貌、太公兵法に「高山磐石其——」また周敦頤の愛蓮說に「——淨植」

【涕洟】 涕は說文に「泣也」篇に玉「目汁出曰涕」と、洟は一音「イ」說文に「鼻液也」と、權德輿の詩に「羸車出門去、假望変——」

【丁寧】 丁當東丁・丁璫など皆同じ（——）を見よ、

【飣餖】 食を貯へ、設をつらぬる義、轉じて、徒に詞句をつらねて、意味なき文をいふ、玉海に「唐ノ少府監ノ御饌ニ、九飣・十二案ヲ用フ、九飣食ト名ヅク、今ノ俗、燕會ニ、黏果、席前ニ列スルヲ、看席飣坐トイフ、古ニ飣坐ト稱ス、飣シテ食ハザルモノヲイフ」と、また唐書李遠傳に「人目ツケテ飣坐黎トナス、今、文詞ノ因襲累積スルヲ以テ、餖飣トナス」韓愈南山の詩に「或如臨食案、肴核紛——」また宋濂の詩に「偶逢玳筵張、肴核列——」

【亭毒】 毒は育なり、——はその形質を品成する義「ソダッ」老子に「亭ハ之ヲ毒レ之」註に「亭ハ以テ其ノ形ヲ品シ、毒ハ以テ其ノ質ヲ成ス、毒ハ徒篤ノ反、今育ニ作ル」亭育に同じ、康熙字典に「唐代宗詔書中字及物鄭育爲ス心、張說撰姚崇碑育鄭之功成、皆以——爲鄭育、古毒育音義通」

【呢喃】 言多くして明かならざるなり、また小聲、また燕の語る聲、呢一に嘫に作る、撫言に「梁上雙燕——」

【撫乳セバ歸ルコトヲ得ン】 漢書蘇武傳に「匈奴徙武北海上無人處、使牧羝、羝乳乃得歸」羝は牡羊（ヲヒツジ）乳は子を生むなり、牡羊の乳するは決してあるまじきことなり、以て生涯歸さざる意を寓せり（蘇武）を參看せよ、

【丁寧】（テイネイ）俗に叮嚀に作る、再三告げ示すをいふ、詩經小雅采薇の鄭箋に「重言采薇者、一(ニスルハ)行期(ヲ)也」後漢書郎顗傳に「丁寧再三留神於此」とあり、また國語に「戰以(イマシムルヲ)錞于丁寧(ニ)、儆(シムルヘ)其民(ヲ)也」とある丁寧は鉦(ドラ)なり、鳴し之を鳴らして兵民をいましむるに由り、轉じて告示の意に用ふるに至りしならん、一說に、丁は口を添ふれども、寧は然らずと、

【泥濘】（テイネイ）「ドロヌカルミ」文選左思の吳都賦に「霧霧——、

【丁年】（テイネン）舊唐書の食貨志に「男女始メテ生ルルヲ黃トナシ、四歲ヲ小トナシ、十六ヲ中トナシ、二十一ヲ丁トナシ、六十ヲ老トナス」唐の制二十一歲にして兵となり、六十歲にして免せらる、李陵の蘇武に答ふる書に「丁年ニシテ使ヲ奉ジ、陛首ニシテ歸ル」

【鼎ノ輕重ヲ問フ】（テイノケイチョウヲトフ）（鼎ノ）を見よ、

【貧秕】（テイヒ）莠は穢に同じ「イヌビエ」秕は「ヒエ」草の穀に似て、其の實も食ふべき者、孟子の告子上に「五穀者種之美者也、苟爲(セバ)不(レ)熟(セ)、不(レ)如(カ)——、夫仁亦在(リ)乎熟(スルニ)之(ヲ)而已矣」

【邸報】（テイホウ）都に在る屋敷より國元への報知なり、宋史曹輔傳に「自是——即(チ)四方ニ唐詩話に「韓翃家居(ス)、一日有(リ)入叩(ク)門賀(シテ)曰、——制誥闕(ノ)人、中書進(ム)君名已除(ラル)翰部郎中知制誥(ニ)矣」

【綈袍戀戀】（テイハウレンレン）范雎は魏の人なり、須賈に從ひ齊に使す、賈、雎が魏國の私事を以て齊王に告げしならんと疑ひ、歸りて魏の相魏齊に告ぐ、魏齊怒りて雎を笞擊す、雎詐り死す、之を厠中に棄つ、雎姓名を變じて張祿といひ、走りて秦に至る、秦王雎を以て相となす、後、須賈が魏の使者となりて秦に來りしを聞き、微行して賈を見る、賈曰く范叔一寒此の如きかと、乃ち一綈袍を取りて與ふ、已にして雎が相たるを知り、賈乃ち膝行して內に入り罪を謝す、雎曰く、公の死なきことを得る所以は綈袍戀戀として故人の意あるを以てなりと、綈袍は「ツムギ」の綿入衣なり、詳しくは史記の范雎傳を見よ、この故事にて舊友の情厚きにいふ、

【程邈】（テイバク）秦の人、篆を改めて隸と爲す、今の楷書是れなり、

【滯泊】（テイハク）「フナドマリ」星槎勝覽に「至(リ)福建長樂(ノ)太平港(ニ)——」

【鄭白ノ衣食】（テイハクノイショク）太平記卷十二に見ゆ、班固の兩都賦に「下有(リ)鄭白之沃、衣食之源(ト)」注に「鄭國韓水工、爲(メニ)秦決(シ)涇水(ヲ)溉(ス)田、名曰(フ)鄭渠、趙大夫白公穿(ツ)渠、引(テ)涇水(ヲ)溉(ス)田、名曰(フ)白渠、人賴(テ)此以爲(ス)衣食(ト)」

【帝範】（テイハン）四卷、唐の太宗親ら撰して太子に賜ふところにして、帝王たる者の模範とすべきことを記す、凡て十二篇、

【鄭板橋】（テイバンキョウ）（鄭燮）を見よ、

【貞珉】（テイビン）珉は玉に次げる美石なり、——はかたくして美なる石、石碑などを稱していふ、汪道會の墨賦に「鐫鏤(シ)——、點畫(ヲ)斷楮(ニ)」

【貞婦】（テイフ）貞は正なり、固なり、節操の正しく堅固にして終始變らぬ「ヨメ」の意なり、貞松の貞も同じ、禮記に「孝子、弟弟(スルハ)——」

【娣婦】（テイフ）娣は妹なり、——は兄の妻より弟の妻を呼ぶ稱「オトトヨメ」(娣婦)を見よ、

【鼎沸】（テイフツ）鼎中の湯の沸騰するが如く、みだれ起るをいふ、漢書霍光傳に「群下——、社稷將傾(カントス)」

【程文】（テイブン）試驗場にて用ふる、一定の法式ある文をいふ、文章軌範將字集の小序に「場屋——論(ニ)當用(フ)此樣文法(ヲ)」

【帝謨】（テイボ）帝王の大いなる謀策なり、法言に「皋陶以(テ)其智(ル)——(ト)」

【提封】（テイホウ）知行の地をいふ、字彙に「提ハ擧ナリ、四封ノ內ヲ擧ゲテ之ヲ計ルヲ——トイフ」漢書刑法志に「——萬井皮日休の詩に「烟羅爲(ニ)印綬、雲壑是(レ)——」また庾

【程明道】（テイメイダウ）（程顥）を見よ、

【帝命溥將】（テイメイフショウ）溥は普なり、徧なり「アマネシ」將は助くるなり、諸侯が天子の命を受けて、あまねく祭祀を助くるをいふ、詩經の商頌烈祖篇に「我受(ケ)命溥將(シ)、自(リ)天降(シ)康(テ)、豐年穰穰」また宋史樂志に「隆化洋洋、——」一解に將は大なり、溥將は廣大の義なりと、亦通ず、

【程門雪ニ立ツ】（テイモンユキニタツ）（程門立雪）弟子の師を重んずるの篤きをいふ、宋史に「御史游酢字ハ定夫侍郎楊時字ハ中玄ト、初メテ程伊川先生ニ見ユ、伊川瞑目シテ坐ス、二子侍立シテ去ラズ、既ニ覺ム、二子ニ謂ヒテ曰ク、賢輩猶ホ此ニ在リシ乎、今既ニ晚レヌ、且ツ休セヨト、門ヲ出ルニ及ビテ門外雪深サ三尺」

【羝羊觸藩】（テイヤウマガキニフル）羝羊は、牡羊なり、剛壯にして物に觸るるを喜ぶ、故に藩籬に逢へば、之に觸れ

て其の角を觝らす、人剛壯を尚び、唯だ進んで事に當るときは、必ず挫折して困むに喩ふ、易經の大壯に「——羝羊觸其角」また「——不能退、不能遂」とあり、遂は進なり、この語によりて、人の進退の自由ならざるにも喩ふ、

【鵜、翼ヲ濡サズ】（鵜不濡翼）小人が力を用ひずして、厚祿を食むに喩ふ、詩の曹風に「維鵜在梁、不濡其翼」とあり、鵜は「ウ」水中に入りて魚を食ふものなるに、今や魚は人の施したる梁の上に在り、故に其の翼を濡さずして之を摑み食ふをいふ「維鵜在梁、不濡其味」とあるも同義、味は喙（クチバシ）なり、

【丁蘭至孝】 徐盛逸人傳に「丁蘭ハ河内ノ人ナリ、少クシテ考妣ヲ喪ヒ、供養ニ及バズ、乃チ木ヲ刻ミ人ヲ爲リ、親ノ形ニ髣髴ス、之ニ事フル生ケル若クシ、朝夕定省ス、其ノ後チ隣人張叔ガ妻、蘭ガ妻ニ從ヒ借ル所ロ有ラントス、蘭ガ妻睚ツキ木人ニ報ズ、木人悅ビズ、以テ之ヲ借サズ、叔辭疾アリ、來リテ木人ヲ罵リ杖ヲ以テ其ノ頭ヲ敲ク、蘭還リ木人ノ色悅バザルヲ見テ、其ノ妻ニ問フ、妻具サニ以テ之ヲ告グ、卽チ劒ヲ奮ヒ張叔ヲ殺ス、吏蘭ヲ捕フ、蘭木人ニ辭シ去ル、木人蘭ヲ見テ之ガ爲メニ淚ヲ垂ル、郡縣其ノ至孝ノ神明ニ通ズルヲ嘉シ、其ノ形ヲ圖シ雲臺ニ象ドル」

【亭林遺書】 六十五卷、清の顧炎武の遺書（單行本ハ除ク）を、朱記榮の輯めたる者にて九經誤字一卷・五經同異三卷・歷代帝王宅京記二十卷・金石文字記六卷・亭林文集六卷・詩集五卷等あり、なほ亭林先生年譜・同神道表をも附載せり、

【亭林詩集】 五卷、清の顧炎武撰す、炎武は力を學に專にし、詩はその緒餘なりと雖も、一たび發して韵語となれば、清新にして法度あり、遒勁樸茂專家の及ぶべからざるものあり、

【亭林文集】 六卷、清の顧炎武撰す、亭林はその號なり、この書辨論一卷、序一卷、書二卷、記、墓誌銘共一卷、補遺一卷より成る、亭林は經學に深くして考據に精し、文章亦淵博にして涯涘なし、清初の大家たるに恥づることなし、

【砥礪】 「トイシ」山海經に「崦嵫之山、其中多——二砥一音シ（——）」を見よ、

【丁令威】 搜神後記に「漢ノ遼東ノ人、道ヲ靈墟山ニ學ビ、後チ鶴ニ化シテ遼ニ歸リ、郡城門ノ華表ノ柱頭ニ集ル、少年アリ、弓ヲ擧ゲテ之ヲ射ラントス、鶴乃チ飛ビ、空中ヲ徘徊シテイフ、有鳥有鳥——、去家千年今始歸、城郭如故、人民非、何不學仙、冢纍纍ト遂ニ高ク上リテ天ニ冲ル」云云

【庭燎】 庭にもやすかがり火「ニハビ」古は以て來朝の臣の夜入る者を照す、天子は百燎、上公は五十燎、侯伯子男は三十燎、これ周代の禮なり、禮記に「——之百、由齊桓公始也」百とは炬火百個を點ずるなり、また詩の小雅に「夜如何其、夜未央——之光」周禮の司烜氏に「邦之大事、具墳燭——」鄭玄いふ「墳ハ大ナリ、門外ニ植ツルヲ大燭トイヒ、門内ニ於テスルヲ——トイフ、皆衆ヲ照シ門ヲ爲ス所以ナリ」

【定論】 確定したる議論をいふ（一定論）を見よ、

【閾域】 境域を開張する義、詩の商頌に「——彼四海」

【朝雲】 巫東坡の愛妾の名、朝雲死して、東坡爲めに六如亭を作りて之を祭る、朝雲人と爲り、楷書を善くす、公嘗て朝より退き、腹を捫して徐步す、顧みて侍婢に謂つて曰く、汝輩且つ道へ、是中何物かあると、一婢遽に曰く、都て是れ文章と、公以て然りと爲さず、また一婢曰く、都て是れ識見と、公亦未だ以て然りと爲さず、朝雲乃ち曰く、學士一肚皮（腹中トイフ如シ）時宜に合はずと（蓋シ公ノ苟モ時ニ合ハズシテ不遇ナルヲイフ）公腹を捧げて大に笑ふ、

【趙孟】 （趙元國）を見よ、

【調役】 布帛の調と、エダチ」即ち夫役と、晉書に「平均——一、百姓賴之」

【雕ヲ斲リテ朴ト爲ス】 （斲雕而爲朴）雕は「キザミエル」雕刻を削りて質朴に反らしむるをいふ、史記酷吏傳に「破觚而爲圜、——」

【朝歌】 縣の名、漢の河内郡、晉・北魏の司州汲郡に屬す、今の河南衛輝府淇縣の東北、南宋・南齊の——は徐州鍾離郡に屬す、今の安徽鳳陽府の東北、

【趙嬙】 晩唐の詩人、字は承祐、山陽の人、會昌二年の進士、大中閒、仕へて渭南の尉に至る、渭南集三卷、また編年集二卷あり、並に傳はる、

【趙璚】 宋史の——傳に「趙璚平日常ニ瓶ト豆トヲ几案ノ閒ニ置キ、一念起ルゴトニ、必ズ善惡ニ隨ヒテ之ヲ別ツ、善ナレバ則チ一ノ白豆ヲ白瓶ノ中ニ投ジ、惡ナレバ、即チ一ノ黑豆ヲ黑瓶ノ中ニ投ズ、初ハ則チ黑豆殊ニ多シ、既ニシテ漸ク少ク、久シクシテ則チ絕エテ無シ、瓶豆モ亦復用ヒザルニ至レリ」

【趙高咸陽ニ刑セラル】 趙高は秦の始皇帝の臣なり、權を專にしけるが、諸臣の心を試みんとて、鹿を指して馬といひて二世皇帝に獻ぜしに、帝は笑つて汝は

誤れるか、鹿を指して馬と爲すと、左右に問ふに、或は默して言なく、或は鹿なりといふ、高ひそかに鹿といひし者共に中つるに法を以てせしかば、その後群臣皆高を畏れて敢てその過をいふ者なきに至れり、かくて專横極りなく、遂に帝を望夷宮に弑し、公子嬰を秦王となす、嬰立ちて高を族誅す、咸陽は秦の都の名、詳しくは史記の秦始皇本紀を見よ、

【鳥革翬飛】 詩の小雅斯干に「如鳥斯革」とありて傳に「革ハ翼ナリ」とあり、家屋の鳥翼を張りし如きをいふ、又「如翬斯飛」とありて、箋に「翬ハ鳥ノ奇異ナルモノ」とあり、雉をいふ、雉の飛ぶが如く、立派なる屋をいふ、成語考に「——謂創造之雄善」

【趙簡子】 說苑に「——、弊車瘦馬ニ乘リ、羖羊ノ裘ヲ衣ル、其ノ宰諫メテ曰ク、車新ナレバ、則チ安ク、馬肥ユレバ、則チ往來疾ク、狐白ノ裘ハ、溫ニシテ且ツ輕シト、簡子曰ク、吾知ラザルニ非ザルナリ、吾之ヲ聞ケリ、君子ハ服善ナレバ、則チ益〻恭シク、細人ハ服善ナレバ、則益〻倨ルト、我レ以テ自ラ備ン、細人ノ心アランコトヲ恐ルルナリト」

【朝歌夜絃】 晝夜の別なく歌舞管絃にふける義、杜牧阿房宮の賦に「——爲秦宮人」

【釣磯】 釣をするによき場所をいふ、名勝志に「釣臺山ハ東阿縣ノ鎭城ノ東南ニ在リ、山ニ碎石多シ、魚蟹ノ狀ノ若シ、麓ニ——アリ、相傳フ嚴光ノ釣リシ處、孟浩然の詩に「——平可坐苔磴滑難歩」

【趙岐】 字は邠卿後漢の京兆長陵の人少くして經學に明かに、才藝あり、嘗て兄の襲と罪を中常侍唐衡〔衡一ニ衡ニ作ル〕に得、禍を北海に避く、唐死す、乃ち出で徵されて議郎に拜す、嘗て孟子章句及び三輔決錄を著す、後ち荊州に居る、建安辛巳卒す、卒するに先だち自ら壽藏を爲り、季札・子產・晏嬰・叔向を圖繪し、賓に居らしめ、自ら其の像を畫きて主位に居り、皆贊頌を爲る、

【調戲】 嘲り戲るる義、左傳襄六年に「宋華弱與樂轡、少相狎、長相優、又相謗也」の註に「狎ハ親習ナリ、優ハーナリ」また晉書熊遠傳に「羣臣會同、在——酒食」而已」

【朝菌晦朔ヲ知ラズ】 〔朝菌不知晦朔〕莊子逍遙游に出づ、菌は「クサビラ」「キノコ」朝菌は一日のうちに生死する「キノコ」この句の下に「蟪蛄不知春秋」とあり〔蟪蛄〕を參看せよ、

【弔屈】 楚の屈原を弔ひ祭ること〔屈原ヲ〕を見よ、

【條貫】 猶ほ條理の如し、史記屈原傳に「明道德之廣

崇、治亂之——ニ

【岩栖】 高き貌、何晏の景福殿賦に「——峯立、崔嵬嶱居」

【調絃】 琴の調子を合せてしらべる義、謝朓の詩に「清吹要碧玉、——命綠珠、顧況の李供奉彈箜篌歌に「大指一レ中指掇、腕頭花落舞衣裂」陸龜蒙の詩に「爲誰」書淩遲遺編、一レ夸新聲」

【超悟】 人なみすぐれてさとき、又とびぬけたる「サトリ」晉書に「大師聰明——、天下無二」

【調護】 助けまもること、猶ほ營護または保護の如し、史記留侯世家に「煩公幸卒——太子」宋史に「賴幸相韓琦、參政歐陽修等——」

【晁公武】 字は子止、冲の子、宋の鉅野の人、乾道の初、興元府に知たり、吏を束し民を愛し、百廢具に擧り、庭に滯訟なし、稱して良吏となす、世に昭德先生と號す、

【朝三暮四ノ術】 詐りて人を惑弄するをいふ、列子に「宋ニ狙公トイフ者アリ、狙ヲ愛シテ之ヲ養ヒ、群ヲ成ス、能ク狙ノ意ヲ解ル、狙亦公ノ心ヲ得タリ、其ノ家口ヲ損シテ、狙ノ欲ニ充ツ、俄ニシテ匱シ、將ニ其ノ食ヲ限ラントス、衆狙ノ己ニ馴レザルコヲ恐ル、先ヅ之ヲ詐キテ曰ク、若ニ芧ヲ與ヘン、朝三ニシテ暮四ニセバ足ラント、衆狙皆起チテ怒ル、俄ニシテ曰ク、若ニ芧ヲ與ヘン、朝四ニシテ暮三ニセバ足ランカト、衆狙皆伏シテ喜ブ、物ノ能鄙ヲ以テ相籠スルコト、皆猶ホ此ノ如キナリ、聖人ノ智ヲ以テ、群愚ヲ籠スルコト、亦狙公ノ智ヲ以テ、衆狙ヲ籠スルガ如キナリ、名實虧ケズシテ、其レヲシテ喜怒セシム」とあり、能鄙は、智愚なり、籠は籠絡なり、この事、莊子の齊物にも見ゆ、

【朝從】 朝見と從行となり、史記淮陰侯傳に「信漢王ノソノ能ヲ畏惡スルヲ知リ、常ニ病ト稱シテ——セズ」

【趙柔】 魏書の列傳に「——字ハ元順、金城ノ人、少クシテ德行才學ヲ以テ名ヲ河右ニ知ラル、高宗踐祚、河內太守トナリ、甚ダ仁惠ヲ著ス、柔嘗テ路ニ在リテ人ノ遺シシ所ロノ金珠一貫ヲ得タリ、值數百鎰ニ直ル、柔主ヲ呼ビテ之ヲ還ス、搢紳ノ聞、聞キテ敬服セリ」十訓抄第六にも引用せり、

【潮州】 廣東省に屬す、禹貢揚州の域〔潮陽〕を見よ、

【趙充國】 字は翁孫、漢の上邽の人、良家の子、騎射を善くす、沈勇にして方畧あり、武帝の朝、中郎將車騎將軍に拜す、霍光と定册して宣帝を立つ、また金城に屯して西羌を討ち、營平侯に封ぜらる、卒する年八十六、

識して壯侯といふ、成帝の時、形を麒麟閣に圖せらる、

【鳥獸ト群ヲ同クスル云云】　太平記卷五に見ゆ、論語微子篇に「鳥獸不可與同群」と、孔安國の曰く「山林ニ隱居スルハ、是レ鳥獸ト群ヲ同ジクスルナリ」

【釣詩鉤】　詩を釣る「ツリバリ」酒の異名、蘇軾の飲酒の詩に「應呼——亦號掃愁帚」酒興を借りて詩思を生ずるによりていふ、

【豬齕】　豬は說文に「小兒乖結也」とあり、齕は說文に「毀齒也、男八月生齒、八歲而齕、女七月生齒、七歲而齕」とあり、小兒の乖戾して齒のぬけ換る頃をいふ、

【朝秦暮楚】　住居のあちらこちらと轉じて定まらざる義、晁補之の北渚亭賦に「托生理于四方、固——而——」

【趙松雪】　（趙子昂）を見よ

【朝宿邑】　諸侯の大功ある者、京師に於て邑を賜ひ、朝する時、此に宿する義、公羊傳に「天子之邘、諸侯皆有——」また漢書郊祀志に「古者天子、五載一巡狩、用事泰山、諸侯有朝宿地」

【超乘】　車に飛び乘るをいふ、左傳僖三十三年に「秦師過周北門、左右免胄而下、——者三百乘」

【趙子昂】　名は孟頫、子昂は字、松雪道人と號す、歸安の人、宋の宗室なり、經史に博通し、詩文に工に、書畫を善くす、その畫は山水木石花竹人馬尤も精緻なり、國亡びて後家居して益〻學を力む、元の至元中薦を以て入朝す、世祖之を奇とし、兵部侍郎を授く、累遷して翰林學士承旨に至り、卒して文敏と謚し、魏國公に追封す、夫人管氏亦書畫を能くす、閒〻蘭竹を作るに、瀟灑の致を極む（王蒙）を參看せよ、

【朝隮】　隮は雲氣の升りあがるをいふ、詩の曹風に「朝隮于南山——」

【趙清獻公】　（趙抃）を見よ、

【朝生】　朝生は木槿をいふ、朝に榮え夕に死するによりて、人の短命に喩ふ、戰國策に「君危於累卵而不善於朝生」

【朝齊暮齧】　困窮して、朝飯には薺（ナヅナ）を食ひ、夕飯には鹽を嘗むるをいふ、生活の極めて貧しきをいふ、韓愈の送窮文に「大學四年、朝齊暮齧」

【調笑】　調も亦笑なり、世說に「王丞相、每調之」猶ほ嘲弄の如し「カラカヒワラフ」李白詩に「——二千石、日暮岸」幘蹄」

【鳥跡】　文字をいふ、事物原始に「蒼頡觀——、因而遂製、則謂之字」頡は黃帝の臣、

【朝、夕ヲ謀ラズ】　（朝不謀夕事の急迫して考慮の暇なきをいふ、左傳昭元年に「趙孟對曰、老夫罪戾是懼、焉能恤遑吾儕偷食朝不謀夕、何其長也」この語、僖七年、襄十六年、三十一年また戰國策にも出づ（朝夕ヲ）を參看せよ、

【晁說之】　字は以道、宋の鉅野の人、補之の弟、司馬光（晩ニ迂叟ト號ス）の人と爲りを慕ひ、之に從學し、因つて自ら景迂と號す、元豐五年の進士、蘇軾著述科を以て之を薦む、建炎の初、徽猷閣待制に擢でられ、同三年卒す、年七十一、山水寒林雪雁を善くし詩に工なり、著すところ儒言・景迂生集等あり、

【挑戰】　戰を挑むこと、我より敵に向ひて戰を求むる義、左傳宣十二年に「趙旃請挑戰、弗許」また國語の晉語に「公令韓簡挑戰」

【釣船】　魚をつる「フネ」釣舟に同じ、庾信の句に「高荷汲——」

【朝鮮】　縣の名、西漢の樂浪郡、東漢の幽州樂浪郡、晉の平州樂浪郡に屬す、今の朝鮮平安道平壤府治、また北魏の平州北平郡の縣、今の直隸永平府盧龍縣の東、

【晁錯】　漢の潁川の人、申韓の刑名を學び、文學を以て太常掌故と爲る、文帝遣して尙書を伏生に受けしめ、太子の家令に遷り、智囊と號せらる、數〻上書して邊事をいふ、皆嘉納せらる、景帝の時、御史大夫に遷る、晁一に鼂に作る（朝錯ヲ假リテ）を見よ、

【朝宗】　歸し趣くの義なり、書經の禹貢に「江漢朝宗于海」この註に「春見ユルヲ朝トイヒ、夏見ユルヲ宗トイフ、朝宗ハ、諸侯天子ニ見ユルノ名ナリ、江漢荊ニ合流シ、海ヲ去ルコト尙ホ遠シ、然モ水道已ニ安シ、而シテ壅塞橫決ノ患有ルコト無シ、未ダ海ニ至ラズト雖モ、而モ其ノ勢已ニ奔リテ海ニ趣ケルコト、猶ホ諸侯ノ王ニ朝宗スルガ如キナリ」又曰く「百川海ヲ以テ宗トナス」と、また詩經小雅沔水に「沔彼流水、——于海」沔は水の流るる貌、

【朝錯ヲ假リテ逆謀ヲ舉グ、劉濞ノ亡ブル所ロ】　太平記卷十七に見ゆ、朝は鼂に同じ、鼂錯は潁川の人なり、人と爲り峭直刻深なり、初め孝文帝の時、吳王濞の太子入見す、皇太子に侍し飮むを得て博して道を爭ふ、不恭なり、皇太子博局を引き之を提殺す、濞疾を稱し朝せず、錯しば〳〵吳の過、削るべきをいふ、文帝忍びず、景帝位に卽くに及び、錯曰く、吳王天下の亡人を誘ひ、亂を作さんと謀る、今之を削るも亦反し、削らざるも亦反す、削れば、反亟かに禍小なり、削らざ

れば、反遅く禍大なりと、上公卿列侯宗室をして雑議せしむ、敢て難んずるなし、罷錯又いふ、楚趙罪あり、一郡を削らん、膠西姦あり、六縣を削らんと、呉會稽豫章を削るの書至るに及び、呉王遂に反す、膠西膠東菑川濟南楚趙皆呉と同じく反し、錯を誅するを以て名とす、袁盎奏して曰く、錯を斬り、諸侯の故地を復せば、亂自ら平がんと、錯東市に腰斬せられ、父母妻子同産少長となく棄市せらる、ついて周亞夫兵に將として、呉楚を破り、諸反皆平ぎぬ、詳しくは史記を見よ、

【釣築】（盤子陵ガ）を見よ、

【條對】一一條錄して對ふる義、漢書梅福傳に「詣行在所、一一急政」

【雕題】題は額なり「ヒタヒ」に「ホリモノ」をする義、禮記王制に「南方曰蠻雕題」の註に「雕題ハ、其ノ肌ヲ刻シ、丹青ヲ以テ之ヲ涅ルヲイフ」左思の呉都賦に「雕題之士、鏤身之卒、比飾虬龍、蛟蝄與對」の註に「題ハ額ナリ、言フココロハ、夷人額ヲ雕リ、身ヲ鏤メ、文ヲ爲シテ、虬龍ノ色ト相似タリ、故ニ飾ヲ比ブトイフ又虬龍ト偶對スベキナリ」史記の趙世家にも「黒齒一一」とあり、

【雕題黒齒】前條並に（題ニ雕リ）を見よ、

【調度】猶は區畫といふが如し、離騷に「和一一」以自娛」三國志諸葛亮傳に「臣子孫衣食自足、臣身在外、別無一一」一說に度音ト（一一）を參看せよ、

【挑達】挑は輕儇跳躍の貌、達は放恣なり、詩の鄭風に「挑兮達兮、在城闕」城門繁華の地にて、放まゝに跳り戲むる義、

【條達】木の枝の分ち布くが如きをいふ、戰國策に「地四平、諸侯四通、一一輻湊」

【晁端友】字は君成、文元公（迥）の曾孫、補之の父、沉靜清介文詩に工に、尤も詩に長ず、常に自ら晦匿して、人の知るを求めず、早く進士に登り、仕に從ふと二十餘年、著作佐郎となる、詩文は淸厚靜深、每篇輒ち新意奇語を出す、蘇軾その文に序す、

【雕蟲】文を作るに、字句を鏤飾するをいふ、俗に「コガタナザイク」といふ義、揚子法言の吾子篇に「或問、吾子少而好賦、曰然、童子雕蟲篆刻、俄而曰、壯夫不爲也」成語考に「雕蟲ノ小技ハ、自ラ文學ノ卑キヲ謙スルナリ」

【兆朕】物の「キザシ」をいふ、淮南子俶眞訓に「欲與物接而未成一一」また佩觿集に「吉凶形兆謂之一一字从目」

【調停】兩箇の間に入りて和解せしむるなり、類書纂要に「和調兩全也」周禮調人に「掌司萬民之讐而調和之」とある調和と同義、宋史に「呂大防劉摯欲引用元豐舊人以平僊怨、謂之一一」

【ヲヲ】風止まんと欲して、樹葉微しく動く貌、莊子齊物に「而獨不見之調調之ヲヲ乎」の註に「調調一一ハ搖動ノ貌」

【調調】風吹きて微に樹葉の動く貌、前の（ヲヲ）を見よ、

【嫋嫋】嫋嫋に同じ「タヲヤカ」謝靈運詩に「白楊信一一」

【嫋嫋】風動く貌、楚辭九歌に「一一兮秋風、洞庭波兮木葉下」また聲などの長く弱くひきて絶ゆざる貌、前赤壁賦に「餘音一一不絶如縷」

【ヲ斗】銅を以て鑑器を作り、一斗を受く、軍中にて韲は飯食を炊き、夜は聲ちて警むる者「ドラ」漢書李廣傳に「不擊ヲ斗自衛」と、鑑は音セウ、銚子に似て物を溫むる器なり、

【釣徒】魚を釣る「トモガラ」なり、事類全書に「唐書隱逸傳を引きて「張志和、江湖ニ居リ、自ラ烟波釣徒ト稱シ、玄眞子ヲ著シテ、以テ自ラ號トス、釣ヲ垂レテ餌ヲ設ケズ、志、魚ニアラザレバナリ」また高啓の詩に「家世當年本一一」張志和」を見よ、

【調度】多く國文に用ふる語にて手廻りの道具をいふ、源氏物語に「うるはしき一一のかざりを」また武家にては專ら弓矢の稱とす（一一）を參看せよ、

【朝畝】「アサヒ」張九齡の句に「飛妍在一一」

【趙盾ソノ君ヲ弑ス】（趙盾弑其君）史記の趙世家に「靈公既ニ立ツ、趙盾益ス國政ヲ專ニス、靈公立ツテ十四年益ス驕ル、趙盾シバシバ諫ム、靈公聽カズ、熊蹯ヲ食フニ及ビ、膕シテ熟セズ、宰人ヲ殺シ、ソノ尸ヲ持チテ出ヅ、趙盾之ヲ見ル、靈公此ニ由リテ懼レテ、盾ヲ殺サント欲ス、盾ハ素仁ニシテ人ヲ愛ス、嘗テ食ハシムル所ロノ桑下ノ餓人、カヘッテ扞ギテ盾ヲ救フ、盾以テ亡ルヲ得、未ダ境ヲ出デズシテ、趙穿靈公ヲ弑シテ襄公ノ弟黒臀ヲ立ツ、是ヲ成公トナス、趙盾復タ反リテ國政ニ任ズ、君子盾ガ正卿トナリ亡ゲテ境ヲ出

デヌ、カヘツテ賊ヲ討ゼザルヲ譏ル、故ニ太史書シテ趙盾弑ス其君トイフ」

【朝ニ杖ク】（杖朝）を見よ、

【趙ノ武靈王】 史記の趙世家に「武靈王自號爲主父、主父欲令子主治國而身胡服、將士大夫西北略胡地云云、於是詐自爲使者入秦、秦昭王不知、已而怪其狀貌非人臣之度、使人逐之、而主父馳已脫關矣、審問之乃主父也、秦人大驚、主父所以入秦者、欲自略地形、因觀秦王之爲人也」

【趙伯駒】 字は千里、宋の宋室なり、太祖七世の孫、畫を善くし、山水花果翎毛に優なり、伯驌字は希遠、駒の弟、山水花木に長じ、著色尤も工なり、

【雍法師ガ刑戮】 太平記鈔に「雍法師ト云フ ニ二人アル歟、羅什三藏ノ上足、弟子四人アリ、生蜜融叡是レナリ、然ルニコノ中ノ僧肇ハ晉ノ義熙十年ニ長安城ニテ卒ス、亦秋三十有一ト、梁高僧傳六卷ニノセタリ、刑戮ノコト、カツテ諸傳ニナシ、然ルニ傳燈錄二十七卷ニ、遊秦王難臨就刑說偈曰、四大元無主、五陰本來空、將頭當白刃、猶似斬春風トアリ、又禪林類聚十三卷ニモ出デタリ、刑戮ノ事、疑フ所ロニ非ズ、サルホドニ二人アル歟ト覺エタリ」

【趙普】 字は則平、宋の幽州薊の人、父適洛陽に徙る、普沉厚寡言、太祖に仕へ、累遷して相に拜す、天下の事を以て己の任となす、又太宗に相とし太師に拜す、卒するに及び韓王に追封せられ忠獻と謚す、普初め學術寡し、太祖勸むるに讀書を以てす、是より手に卷を釋てず、私第に歸る毎に篋を啓き書を取りて之を讀む、乃ち論語二十篇なり、弟安易、官宗正卿に至り、子承宗數州に歷知たり、自警編に曰く「宋大宗欲相趙普、或譖之曰、普山東學窶、惟能讀論語耳、大宗疑之以告普、普曰、臣實不知書、但能讀論語、佐藝祖定天下、機用得半部、尙有一半、可以輔陛下、大宗釋然卒相之」

【條風】 八風の一、易通卦驗の「立春——至」の註に「——ハ萬物ニ條達スル風ナリ」又曰く「東北曰——」

【趙復】 元の德安の人、皇子闊出てて江南を征するとき、俘として之を得たり、會姚樞命を奉じて人才を搜訪す、復を見て與に語り大に悅び之と北上す、楊惟中請うて太極書院を建て、復を延きて師と爲す、復乃ちその記する所ろの程朱の書を錄し、以て學者に敎ふ、是に由りて河朔始めて道學を知る、後ち竟に官を受けず、學者稱して江漢先生といふ、

【弔文】 文選明辨に「按ズルニ弔文ハ、死ヲ弔スルノ辭ナリ、劉勰イフ、弔ハ至ナリ、詩ニイフ神之弔矣ト、神至ルヲイフナリ、賓ノ主ヲ慰スル至到ヲ以テ言ヲ爲ス、故ニ之ヲ弔トイフ、賈誼ノ屈原ヲ弔スルガ若キハ、則チ弔ノ祖ナリ」

【朝聞夕死】（朝ニ道ヲ）を見よ、

【趙抃】 字は閱道、宋の西安の人、景祐の初の進士、殿中侍御史に遷り、彈劾して權倖を避けず、京師號して鐵面御史と號す、蜀に帥とし、一琴一鶴を以て自ら隨ふ、後ち參知政事に拜し、王安石と合はず、求めて杭州に知たり、老を請ひ太子少保を加へらる、卒して淸獻と謚す、次條を參看せよ、

【趙抃私隙ヲ以テ公道ヲ廢セズ】 宋史に「趙抃御史タリシ時、范鎭ト事ヲ論ジテ隙アリ、王安石相トナルニ及ビ、鎭シバシバ其ノ短ヲ上ニ訐ク、安石之ヲ恨ム、一日上、鎭ノ人ト爲リヲ安石ニ問フ、安石對ヘテ曰ク、趙抃ニ問ヘ、便チ鎭ガ人ト爲リヲ知ラント、上抃ニ問フ、抃曰ク、忠臣ナリト、上曰ク、何ヲ以テ之ヲ知ルト、抃曰ク、昔仁宗遑豫ナリシ時、鎭首トシテ皇嗣ヲ建立シテ以テ社稷ヲ安ンゼンコトヲ請ヒ、疏十九タビ上リ、命ヲ俟ツ百日、鬚髮皆白シ、忠臣ニアラズシテ何ゾヤト、上之ヲ然リトス、既ニ退ク、安石曰ク、公ハ鎭ト隙アルニアラズヤト、抃曰ク、何ゾ敢テ私隙ヲ以テ公道ヲ廢センヤト、安石大ニ慚デヌ（鐵面御史）を參看せよ、

【晁補之】 字は无咎、宋の鉅野の人、宗懿の曾孫、才氣飄逸にして、學を嗜みて倦まず、文章溫潤奇卓、蘇軾その博辨偉觀必ず世に顯れんことを稱す、進士に擧げられ、禮部郎中に官し、出てて泗州に知たり、自ら歸來子と號し、情を仕進に忘る、陶潛の人と爲りを慕ふ、山水圖繪を善くし、書も亦凡ならず、大觀四年卒す、年五十八、著すところ雞肋集七十卷あり、

【趙孟頫】（趙子昂）を見よ、

【兆民】 萬民をいふ、十億を兆といふ、書經の呂刑に「一人有慶——賴之」一人は君をいふ、

【釣名】（名ヲ釣ル）を見よ、

【朝名市利】 名聞を爭ふものは、朝廷に於てし、利を爭ふものは、市上に於てする義、戰國策に「張儀曰、臣聞爭名者於朝、爭利者於市、今三川周室天下之市朝也」

【潮陽】 南宋南齊隋の縣名、今の廣東潮州府——縣の西北三十五淸里、また唐の嶺南道潮州——縣、以後歷代の——縣は今の——縣これなり、

【朝陽ノ鳳鳴】→駿斎雑話「楠正成」の條に見ゆ（鳳朝陽）を見よ、

【朝蠅暮蚊】　蠅は朝に群を成して騒ぎ、蚊は暮に隊を成してあつまる、韓愈の雑詩に「朝蠅不須驅、暮蚊不可拍」また坤雅廣要に「蠅成市于朝、蚊成市于暮」傳に「聚蚊雷ヲ成スト云ヘリ市ノ時ヲ謂フ」

【趙翼】　字は雲松、甌北と號す、清の江蘇陽湖の人、乾隆二十六年進士及第、第三人となる、三品衡を加へらる、詩を以て名あり、嘉慶十九年卒す、年八十八、廿二史劄記、皇朝武功紀盛、陔餘叢考、簷曝雑記、十家詩話、甌北集等の著あり、

【跳梁】　跳りて亂走する義、莊子逍遙游に「子獨不見狸狌乎、卑身而伏以候遊者、東西——不避高下」遊者とは、あそび翔る物をいふ、また宣和畫譜に「虎豹鹿豕、悉者取其——奔逸、不就羈靮之狀以寄筆閑豪邁之氣」

【雕龍】　龍をさざむ如く、文をはでに飾るをいふ、史記の孟荀列傳に「齊人頌曰、談天衍、雕龍奭、炙轂過髡、雕蟲と義略同じ、談天——の辯は、その辯の閎博靡麗にして實施し難きをいふ、

【條例】　一つ一つに、例を擧げて示す義、晉書劉實傳に「撰ス春秋——二十卷ヲ」の顔師古の註に「凡ソ條トイフハ、一一ニ之ヲ疏擧スルコト木條ノ如キヲイフ」

【朝令暮改】　政令を改むることの極めて急劇なるをいふ、龜鑑の論貴粟に「急政暴虐、賦斂不時、——而——」

【朝露】　朝の露は乾き易し、以て人生の「ハカナキ」に喩ふ（人生ハ——）を見よ、

【調和】　（調停）を見よ、

【手ヲ擧ゲテ星辰ヲ捫ス】　（擧手捫星辰）趙德麟の侯鯖錄に「黃梅縣峰頂寺、李白題詩云、夜宿峰頂寺、——不敢高聲語、恐驚天上人」

【手ヲ炙レバ熱スベシ】　（炙手可熱）權勢の甚ださかんなるをいふ、杜甫の詩に「——勢絶倫、慎莫近前丞相嗔」また唐の安樂公主、韋氏に附會す、熱手を炙るべく、人咸之を畏る云云とあり、

【手ヲ額ニス】　（額手）宋史司馬光傳に「以手加額」とあり（手額）を見よ、

【手ヲ反ス】　（反手）事の極めて易きをいふ、孟子公孫丑上に「以齊王由——也」由は猶に通ず、

【手ヲ拱ク】　（拱手）もろ手をこまぬくこと、人を敬ふ貌、禮記に「遵先生于道、趨而進、正立——」また、何事もせず、力を勞せざる義、後漢書に「天水隴西——自服」また書經の武成に「垂拱而天下治」の註に「衣裳ヲ垂レ手ヲ拱クナリト」

【手ヲ翻セバ雲トナリ手ヲ覆セバ雨】　人情の翻覆常なきに喩ふ（貧交行）を見よ、

【手ヲ分ツ】　（分手）離別なり、分袂に同じ、江淹の別賦に「——而銜涙」

【適意】　心にかなふ義、史記刺客傳に「悉荆軻所欲以順適其意」晉書文士傳に「張翰曰、人生貴——耳」

【糴價】　糴は買ひ入るる米なり「カヒヨネ」の價なり、顔師古の注に「——翔踊、則工商窘乏」

【敵愾】　敵は猶ほ當の如し、愾は恨怒なり、王の恨み怒らるる所ろに當るをいふ、左傳文四年に「諸侯敵王所愾而獸其功」とあるに本づく、

【摘髭】　挑發なり「カカゲアバク」漢書孫寶傳に「欲——以揚我惡」

【祖公門ニ書ス】　（一貴一賤）を見よ、

【嫡妻】　正妻をいふ、爾雅に「妾謂夫之——、曰女君」

旁妻は妾をいふ、

【嫡子】　本妻の生みたる子をいふ（二男三男以下皆含ム）經史摘語に「正室ノ生ム所ロハ叔季モ亦——ト曰ヒ、以テ嫉妾ノ生ム所ロニ別ツナリ、吾ガ國俗惟家子ノミ之ヲ——トイフ」とあり、左傳閔元年に「嬖子配レ嫡、亂之本也」康熙字典に「增韻ニ正室（ほんさい）ヲ嫡ト曰フ、正室ノ生ム所ロノ子ヲ——ト曰フ、一ニ曰ク嫡ハ敵ナリ、與ニ敵スルナキヲ言フナリ」

【適人】　（人ニ適ク）を見よ、

【狄仁傑】　字は懷英、唐の太原の人、明經に擧げらる、嘗て幷州の法曹に赴き、太行山に登り、白雲の孤飛するを見て曰く、吾が親の舍、その下に在りと、同府參軍鄭崇質、母老いて且つ病む、絶域に使するに當る、仁傑代り行かんと請ふ、長史薛仁基之を義として曰く、斗南の一人のみと、中宗の時、梁國公に封ぜらる、

【敵手】　敵は當なり、五分五分の相手をいふ、晉書謝安傳に「安棋劣于元、是日元懼兵至、遂爲——」また杜荀鶴の觀棋詩に「有時逢敵手、對局到深更」好——は、よき相手なり、

【適然】　適は偶なり、適爾に同じ、康熙字典に「正韻ニ、——ハ猶ホ偶然ノ如キナリ」また事の常に然る者も亦——といふ、賈誼の治安策に「以是爲——耳」

【倜然】　高く擧る貌、荀子に「天下——舉去槩紂而葬湯武ニ擧ハ皆なり、

【惕息】 惕は憂なり、懼なり、おそれて喘息する義、司馬遷曾に「視レ徒隷一則心ー一」

【俶儻】 次條の「倜儻」を見よ、

【倜儻】 才氣の卓異(スグルル)なるをいふ、晉書の郤詵傳に「瑰偉倜儻不レ拘二細行一」とあり、史記の魯仲連傳に、倜を俶に作る、音義共に同じ、司馬相如の子虛賦に「俶儻瑰琦」

【擲地金聲】 (地ニ擲テバ)を見よ、

【イ亍】 行く貌、左歩を彳とし、右歩を亍とす、二字合すれば、行字となる、說文に「彳ハ小歩ナリ、人ノ脛三屬和連ルニ象ル」行きて小しく留るなり、潘岳の射雉賦に「ー一中輟」また沈受行の詩に「我傍山根」ーー行

【蹢躅】 足を以て地を擊つなり、易の垢卦に「羸豕孚ニーー」と、豕は陰躁の物にして、羸弱なるも、地を擊つて跳る心あり、以て小人微弱の時と雖も、君子を害する意あるに喩ふ、禮記の三年問にも「ーー焉、蹢躅焉」とあり、蹢一に躅に作り、躅一に躅に作る、荀子禮論に「蹢躅焉」また行かざる貌、また足を住むる也とも解く、

【躑躅】 「ツツジ」韓愈詩の註に「ーー ハ、樹生ズルコト、高三四尺、一ニ岩榴ト名ヅク」西溪叢語に「ーーヲ山客ト爲ス」山石榴、映山紅、杜鵑花等の異名あり、白居易の題「元十八溪居」に「晩藥尚開紅躑躅、秋房始結白芙蓉」また前條を參看せよ、

【狄鞮】 西方の蠻國の通辯人、禮記王制に「西方曰ーー」ーーニ註に「鞮ノ言ダル知ナリ云云」

また地名、漢書司馬相如傳に「ーー之倡」の註に「ーーハ地名、河内ニ在リ、善倡者ヲ出ス」

【逖逖】 利を欲する貌、楚辭九章に「悼來者之ーーニ」

【篳篥】 竹の枝なくして長き貌にいふ、詩の衞風に「ーー竹竿、以釣二于淇一」

【適適然】 大に驚く貌、莊子秋水に「ーーー驚」

【謫發】 謫は、過を責むるなり、發は惡を訐くなり、列子に「窮年不レ相ーーニ

【敵侔ノ國】 力相匹敵して、ひとしき國なり、戰國策に「韓與レ魏、敵侔之國也」

【的歷】 鮮明なる貌、歐陽修の眞州東園記に「芙蕖芰荷之ーー」芰は菱の一種なり

【的皪】 白く光ある貌、史記司馬相如の上林賦に「明月珠子、ーー江靡ニ」江靡は江邊靡迤の處なり、また左思の魏都賦に「丹藕凌レ波而ーー」前の的歷に通用す、

【適往】 その德を慕ひ、ゆきて從ふをいふ、呂氏春秋に「帝也者、天下之適也、王也者天下之往也」

【徹】 周の代の井田の稅法、田九百畝を井字形に九等分し中央を公田とし、中二十畝を廬舍とし、殘る八十畝を周圍の田を受けたる八家にて十畝づつ分ちて耕作し、その收穫を租稅とす、されば私田の百畝に對して什分の一の賦課となるなり、孟子に「周人百畝而ーー」

【鐵衣】 甲冑なり、木蘭の歌に「朔氣傳レ金柝一寒光照ーーこまた鐵の鎧をいふ、本草に「鐵上ノ赤衣」とあり、

【鐵圍山】 「テッチセン」とも讀む、梵語、大海をめぐりて一小世界を區畫せる山の名、鐵より成立す、即ち內は須彌山を中心として、外はーーを限りとして一世界をなせるなり、

【鐵ヲ點シテ金ト成ス】 (點鐵成金)鐵を點(滅ナリ)化して黃金となす義、前人の語を活用して名句となすに喩ふ、聞見後錄に「黃魯直稱二杜老詩一如二靈丹一粒、點ニ鐵成一金一また傳習錄下に「人若知二這良知訣竅一隨他多少邪思枉念、這裏一覺、都自消融、眞箇是靈丹一粒、點ニ鐵成一金一」

【轍ヲ結バズ】 (不結轍)車轍の往返して、いり交るは、猶ほ糸を結ぶが如し、ーーとは、車を回らして舊處に返らざる義、管子に「車ーーー士不レ旋踵」

【轅耕錄】 三十卷、明の陶宗儀撰す、元代の法制、及び至正末の東南兵亂を記すること頗る詳なり、また書畫文藝に關する說、參考に資すべし、わが國にては承應年間の校刻あり、

【轍魚ノ泥ニ吻キ】 太平記卷十六に見ゆ(轍鮒)を見よ、

【鐵硯未ダ穿タズ】 (鐵硯未穿)書言故事に「業ヲ改メザルヲ、鐵硯未ダ穿タズ」(鐵硯未穿トイフ、宋ノ桑維翰進士ニ擧ゲラレテ第セズ、或ヒト其ヲシテ改メシム、維翰鐵硯ヲ鑄テ以テ人ニ示シテ曰ク、硯穿ダバ、則チ他ノ業ニ易ヘント、卒ニ進士ヲ以テ及第セリ」詳しくは五代史桑維翰傳を見よ、

【徹侯】 徹は通なり、その功德王室に通ずるをいふ、揚子方言に「徹ハ列ナリ」秦邕獨斷に「羣臣異姓ニシテ功封アル者、稱シテーートイフ、武帝ノ諱ヲ避ケ、改メテ通侯或ハ列侯トイフ」漢書百官表に「爵級二十、徹侯金印紫綬」

【鐵鎖江ニ橫フ】 (鐵鎖橫江)鐵の「クサリ」を水中に張りて防禦する義、晉書に「晉大擧伐二吳一、杜預出二江陵一、王濬下二巴蜀一、吳人於二江磧要害處一竝以二鐵鎖一橫二江截一之、又作二鐵錐長丈餘一暗置二江中一、逆拒二舟艦一」

【鐵蒺藜】（テツレイ）「テツノヒシ」六韜に「狹路微徑張ル——」蒺藜は和名「ハマビシ」海濱の沙地に生じ、地に布きて蔓生す、葉は互生し、細くして「サイカチ」の初生の葉の如し、夏、葉の閒に五瓣の小黃花を開く、子の大さ三分許、三角或は四角、角に刺ありて狀、菱の如し、これに象りて防禦の具とせしなり、渠答に同じ、木にてつくりたるを、木蒺藜といふ、

【鐵心石腸】（テツシンセキチヤウ）性を乘ることの堅剛なるなり、志操固くして外物に動かされざるをいふ、皮日休云ふ「宋廣平、剛態毅狀、疑其鐵心石腸、及觀「梅花賦」清新富麗」と、五車韻瑞に見えたり、また蘇軾の與李公擇書にも「僕本以——待公」

【鐵鞭】（テツベン）「オハグロ」本草に「——ハコレ生鐵ヲ以テホニ濟シ服餌スルモノ」

【徹宵】（テツセウ）徹は通なり、宵は夜なり、——は徹夜また通宵また終宵に同じ「ヨドホシ」

【轍跡天下ニ徧シ】（テツセキテンカニヘンシ）（轍跡徧天下ニ天下を徧歷し、其の車轍馬跡の至らざる隈なきをいふ、左傳昭十二年に「昔穆王欲肆其心周行天下將皆必有車轍馬跡焉」

【鐵石ノ心腸】（テツセキノシンチヤウ）性を乘ること堅剛なるをいふ、排韻に「宋璟耿介ニシテ大節アリ、初メ小官ニ居ル、作ル所ロノ梅花ノ賦ヲ以テ、蘇味道ニ投ズ、蘇之ヲ稱ス、是ヨリ名ヲ知ラル、皮日休ガ云フ、璟貞姿勁質、剛態毅狀、疑フラクハ鐵石ノ心腸、婉媚ノ辭ヲ吐クコトヲ解セズト」また三國志魏志武帝紀の註に「心如鐵石」（鐵心石腸）を見よ、

【姪孫】（テツソン）「マタオヒ」明律に「——ハ兄弟ノ孫ヲイフ」

【佚蕩】（テツダウ）放逸にして物に無頓著なるなり「シマリナシ」漢書揚雄傳に「雄爲人簡易——」跌宕と同じ、

【跌宕】（テツダウ）放逸なり、文選の江淹の賦に「脫略公卿——」文史にまた宕は蕩に同じ、後漢書孔融傳の「跌蕩放言」の註に「跌蕩ハ儀撿ナキナリ」

【鐵搭】（テツタフ）「クマデ」三才圖會に「——或ハ四齒或ハ六齒、ソノ齒銳クシテ微ニ鉤ル、土ヲ劃ルコト搭ツガ如クス、故ニ鐵搭ト名ヅク」鐵把に同じ、

【鐵中錚錚】（テツチウサウサウ）（鐵中錚錚）後漢書劉盆子傳に「光武帝、謂徐宣曰、卿所謂——高中佼佼者也」錚は金聲なり、鐵の微く剛利なる者をいふ、庸は僧等なり、凡庸の中にて勝れたるに喩ふ、佼は好なり、

【跌踶】（テツテイ）疾く走るをいふ、淮南子修務訓に「墨子——而趍千里以存楚宋」

【徹底澄清】（テツテイチヨウセイ）水が底までよく澄める義、轉じて心の、極めて清廉なるにもいふ、北史宋世良傳に「爲清河大守、有老人前謝曰、府君非唯善政、清亦徹底」

【輟朝】（テツテウ）廢朝に同じ、綱目宋紀に見ゆ、輟は「トドムル」「ヤム」

【惙惙】（テツテツ）憂ふる貌、詩經の草蟲に「未見君子憂心——」仲仲と同義、

【轍環天下ヲ環ル】（轍環天下ニ天下をあまねく巡歷する義、韓愈の進學解に「昔者孟軻好辯、孔道以明、——一卒老于行」

【徹頭徹尾】（テツトウテツビ）徹は通の義、始より終まで通じてなり、朱子語類に「敬ノ字ハ是レ徹頭徹尾ノ工夫」程子中庸解に「誠者物之終始、猶俗言——」

【鐵如意】（テツニヨイ）釋氏要覽に「石季倫王敦皆執——云云」（如意）を見よ、

【鐵幕】（テツマク）鐵製の楯なり、楯を列することの幕の如くするをいふ、史記蘇秦傳に「當敵則斬堅甲——」

【哲婦】（テツフ）哲は知なり「サトキヲンナ」詩經の大雅瞻卬に「哲夫成城、——傾城」婦人は從順にして非行なきを善とす、哲を非とするところなし、哲なればかへりて禍亂の階をなす、蓋しここの——は褒姒を斥す、

に「倒逆涸轍ニ困ミテ、西江ノ水ヲ待チ難キハ、人ノ甚ダ窘メルニ比ス」

【掫蛸】（誰カ知ラン、偽言）を見よ、

【鐵網珊瑚】 鐵の網にて海中の珊瑚樹を取ること、轉じて詩文等の傑作を網羅するに喩ふ、唐書拂林國傳に「海中有珊瑚洲、海人乘大船、墮鐵網水底、珊瑚初生石上、白如圏、一歲而黄、三歲而赤、枝格交錯、鐵發其根、繫網船上、絞而出之、失時即腐」

また書名、十八卷、舊本明の朱存理撰と題すれども、その實は趙琦美、秦氏焦氏の兩家、無名の書畫題跋を得て、併せて一本と爲し、又見るところの眞蹟を以て補綴して成すなり、然れども載するところの題跋印記は實鑒家多く之を引據す、亦必ずしも定めて誰氏に出づるかを問ふを要せざるなり、

【鐵面御史】 趙公神道碑に「趙抃殿中侍御史ト爲リ、彈劾シテ權倖ヲ避ケズ、京師鐵面御史ト號ス、其ノ言、當ニ朝廷ノ君子小人ヲ別白センコトヲ欲ス、謂ヘラク、小人ハ小過ト雖モ、當ニ力メ排シテ之ヲ絶ツベシ、後チ乃チ患ナカラン、君子ハ不幸ニシテ誣誤アラバ、當ニ保持愛惜シテ、以テ其ノ德ヲ成スベシト、故ニ事ヲ言フコト切ナリト雖モ厭ハレズ」

【鐵面皮】 厚顔にして慙づること無きをいふ、北夢瑣言に「進士王光遠、權豪ヲ干シ索メテ厭フコトナシ、或ハ撻辱ニ遭フトモ、略ヽ改メ悔ユルナシ、時人イフ、光遠顏厚キコト、十重ノ鐵甲ノ如シ」虛堂錄に「劫火食烹鐵面皮」

【徹夜】 通夜に同じ、夕より曉に達するをいふ、朱子の詩に「乞得山田三百畝、青燈徹夜課農書」乾淳歲時記に「除夜中略燃竹鼓吹之聲喧闐」

【鐵驄】 驄は說文に「馬深黑色也」「クロウマ」の義、禮記に「仲冬之月、天子駕鐵驪」

【手ニ隨ヒテ亡ブ】（隨手亡）即時に亡ぶる義、史記淮陰侯傳に「吾今日死、公亦隨手亡」

【手ニ萬鈞ヲ提ゲテ多力見ハル】 劉勰新論に「手提萬鈞而後多力見焉、處難踐患而後貞勇出焉」人は患難に處してその忠勇もあらはるるに喩ふ、

【手ノ之ヲ舞ヒ、足ノ之ヲ蹈ムヲ知ラズ】（不知手之舞之足之蹈之）喜の極まりて覺えず自ら舞踏するに至るなり、禮記の樂記の末章に見ゆ、孟子にも「不知足之蹈之、手之舞之」

【蝶】 蜱雅に「蛺蝶ハ粉翅ニシテ鬚アリ、一名ハ蝴蝶」天實遺事に「明皇、春時妃嬪ヲシテ花ヲ挿マシメ、親ラ蝶ヲ放チ、ソノ止マルニ隨ヒテ之ニ幸ス」と、花鏡に「蛺蝶出沒於園林、翩躚於庭畔、暖烟則沉、煙徑、微雨則宿、花房、兩兩三三、不招而自至、遶遶栩栩不撲而自親、誠微物之得趣者也」（蝴蝶ノ夢）を參看せよ、

【蝶山集】 五卷、宋の謝枋得撰す、枋得生を捐て節を全うす、文天祥と塗を異にし跡を同うす、その卻聘の一書は鄉塾の童子も皆能く記誦す、その他の文亦光明磊落卓爾として不羣なり、

【蝶血】（血ヲ喋ム）を見よ、

【蝶幞】 幞は高くしてけはしき山、ーーは、かさなりて聳ゆる山をいふ、地理通釋に「重巖ーー」

【帖囁】 耳に附きて、小語（ササヤキ）する聲をいふ、漢書の滿夫傳に「今日長者爲ス壻ヲ、廼效女曹兒帖囁耳語」女曹兒とは、猶ほ兒女の輩と言ふがごとし、

【帖帖】 垂れさがる貌、釋名に「脈前帷曰帖、言ーー垂也、また「ユッタリ」として定まれる貌、杜牧の句に「堰字寬ーー」

【帖帖】 小さき貌、唐書王叔文傳に「ーー小人」

【喋喋】 諜諜に同じ、多言の貌、漢書張釋之傳に「豈效此賈夫ーー利口捷給ナルニ哉」

【沾沾自喜ブ】 沾沾は自ら躯ふる貌、一に輕薄なりとも解く、史記の魏其傳に見ゆ、

【蝶粉蜂黄】 鶴林玉露に「楊東山ガ言フ、道藏經ニ云フ蝶交メバ即チ粉退キ、蜂交メバ則チ黄退クト、周美成ガ詞ニ云フ、ーーーー渾退了ト、正ニ此ヲ用フルナリ、而シテ說ク者以テ宮粧ト爲シ、且ツ退ヲ以テ褪ト爲ス、誤レリ矣ト、余因ツテ敷ジテ曰ク、區區タル小詞モ書ヲ讀ムコト博カラザル者ハ尙ホ其ノ旨ヲ得ズ、況ヤ古人ノ文章ニシテ、臆見ヲ以テ妄解スベケンヤ」

【天】 河圖括地象に「易ニ太極アリ、是レ兩儀ヲ生ズ、兩儀未ダ分レズ、ソノ氣混沌タリ、清濁既ニ分レテ覆フ者ハ天トナリ、偃ス者ハ地トナル」釋名に「天ハ坦ナリ、坦然トシテ高クシテ遠キナリ」說文に「天ハ顚ナリ、至高ニシテ上ナシ、一大ニ從フナリ」爾雅に「春ヲ蒼天トナシ、夏ヲ昊天トナシ、秋ヲ昊天トナシ、冬ヲ上天トナス、春ニ色ヲ言ヒ、夏ニ氣ヲイヒ、秋ニ情ヲイヒ、冬ニ位ヲイフ、相備ハレリ」と、纂要に「東西南北ヲ四方トイヒ、四方ノ隅ヲ四維トイヒ、天地四方ヲ六合トイフ」と、荀子に「天不言而人推高焉、地不言而人推厚焉」愼子に「天有明不憂人之暗、地有財不憂人之貧」國語に「天之所支不可壞也、其所壞亦不可支也」禮記に「天則不言而信、神則不怒而威」淮南子に「天之且

雨也、陰曀未ㇾ集、魚已喰ㇾ鈎程子遺書に「天ノ蒼蒼タル豈是レ天ノ形ナランヤ、下ヲ視ルモ亦復是ノ如シ」井ニ坐シテ」を見よ、

【傳】 文の一體なり、文體明辨に「按ズルニ字書ニイフ、傳ハ「ツタフル」ナリ、事迹ヲ紀載シテ、以テ後世ニ傳フルナリ漢ノ司馬遷史記ヲ作リ、列傳ヲ創爲シテ、以テ一人ノ始終ヲ紀セシヨリシテ、後世ノ史家、卒ニ能ク易フルナシ、是ニツイデ、山林里巷、或ハ隱德アリテ彰ハレズ、或ハ細人アリテ法ルベキハ、則チ皆之ガ爲メニ傳ヲ作リテ、以テ其ノ事ヲ傳ヘ、其ノ意ヲ寓ス、而シテ文墨ニ馳騁スル者、閒、滑稽ノ術ヲ以テ雜ユ、皆傳ノ體ナリ、其ノ品ニ四アリ、一ニ曰ク史傳、二ニ曰ク家傳、三ニ曰ク托傳、四ニ曰ク假傳」

また傳車の義、史記孝文紀に「乘傳詣長安」

また關所を過ぐるに用ふる切符、後漢書陳蕃傳に「投傳而去注に「傳ハ符ナリ」

【墊隘】 窮れ困むをいふ、左傳に「民愁則ㇾ墊」墊は溺なり、下なり、

【天殃】 上帝よりくださるる「トガメ」孟子に「不ㇾ取必有ㇾ之殃は咎なり、禍なり、

【典衣】 「キモノヲシチニオク」杜市の詩に「朝回日日典ㇾ春衣ニ

【天佑】 佑は祐に同じ「タスクル」ㇾは天の助けなり、書經湯誥に「上天孚ㇾ佑下民」また同書太甲に「皇天眷ㇾ佑有商」易の大有に「自ㇾ天祐ㇾ之、吉无ㇾ不ㇾ利」また繫辭上傳に「易曰、自ㇾ天祐ㇾ之、吉无ㇾ不ㇾ利子曰、祐助也、天之所ㇾ助者順也、人之所ㇾ助者信也」云云」

【天威咫尺】 上天の威は、常に咫尺の閒に在るが如し、故によろしく自からつつしみおそるべしとの意、管子に「天威不ㇾ違ㇾ顏咫尺、小白承ㇾ天子之命、而毋ㇾ下ㇾ拜、ㇾ恐顚蹶於下ㇾ以爲ㇾ天子羞ㇾ」違は去なり、咫は八寸、小白は、齊の桓公の名、この事左傳僖九年にも出づ、漢書師丹傳に「臣聞天威不ㇾ違ㇾ顏咫尺、願陛下深思ㇾ先帝所ㇾ以建ㇾ立陛下ㇾ之意ㇾ」また轉じて臣が天子に謁することにも用ふ、天子の「ゴキゲンウカウ」

【天胤】 胤は子孫相承續するなり、ㇾは、天の繼嗣なり、書經高宗肜日に「罔ㇾ非ㇾ天胤ㇾ」ㇾこまた荀子に「若ㇾ天之嗣ㇾ其事不ㇾ可ㇾ識ㇾ」とあるは、聖人は、天の繼嗣の如く、衆人其の意を識ること能はずとなり、

【天衣無縫】 天上の織女の著けたる衣には縫目なし、以て詩文などの圓熟して斧鑿の痕なきを評するに用ふ、靈怪錄に「郭翰暑月臥ㇾ庭中ㇾ有ㇾ人冉冉自ㇾ空而下ㇾ曰、吾織女也、徐視ㇾ其衣、並無ㇾ縫、翰問ㇾ之、謂曰、天衣本非ㇾ針線爲ㇾ也」

【典要】 定法なり、易經繫辭に「不ㇾ可ㇾ爲ㇾ典ㇾ要ㇾ」

【頓挫】 阻塞なり、楚辭に「行不ㇾ群ㇾ以ㇾ頓挫ㇾ兮」

【囤噎】 噎一に囷に作る、充ちむせぶをいふ、吳都賦に「冠蓋雲蔭ㇾ闉闍ㇾ」

【頓越不悉】 頓隕踰越し上の命を恭み用ひざる義、書經盤庚中に「乃有ㇾ不ㇾ吉不ㇾ迪ㇾ」ㇾ曁過姦宄、我乃劓ㇾ殄滅之、無ㇾ遺育ㇾ」

【田園】 田畑をいふ、陶潛の歸去來辭に「ㇾ將ㇾ蕪ㇾ胡不ㇾ歸ㇾ」陶淵明を參看せよ、

【天地】 天は圓く、地は方なるをいふ、呂氏春秋に「天道圓、地道方、精氣一上一下、圓周複雜、無ㇾ所ㇾ稽留、故曰天道圓、萬物殊類殊形、皆有ㇾ分職、不ㇾ能ㇾ相爲、故曰地道方ニ

【天淵ノ差】 甚しく懸隔せること、天と淵との如きをいふ、詩經の大雅旱麓に「鳶飛戾ㇾ天、魚躍ㇾ于ㇾ淵ㇾ」雲泥、霄壤皆同じ、

【天ヲ仰ギテ而シテ唾ハク】 (仰ㇾ天而唾)人を害せんとして、かへつて己が身を傷ふに喩ふ、四十二章經に「惡人賢者ヲ害セント欲スルハ、天ヲ仰ギテ唾ハクナリ、唾、天ヲ汚サズ、還テ己ガ面ヲ汚ス」

【天ヲ怨ミズ、人ヲ尤メズ】 (不ㇾ怨ㇾ天不ㇾ尤ㇾ人)己れ世に合はざるも天道を怨みず、また他人を咎めず、自ら反省して、序を逐ひて進まんことをはかるべしとの義、論語憲問に「子曰、ㇾ莫ㇾ我ㇾ知ㇾ也夫ㇾ、子貢曰、何爲其莫ㇾ知ㇾ子也ㇾ、子曰、不ㇾ怨ㇾ天、不ㇾ尤ㇾ人、下學而上達、知ㇾ我者其天乎」

【天ヲ補フ】 (補ㇾ天)淮南子に「昔、女媧氏、五色ノ石ヲ煉リ、以テ蒼天ヲ補ヒ、鰲ノ足ヲ斷チ、以テ四極ヲ立ツ」

【天ヲ捩フノ才】 (捩天才)捩は蓋なり、左思の蜀都賦に「摎ㇾ藻捩ㇾ天庭ㇾ」唐詩に「愧乏ㇾ捩ㇾ天才ㇾ」

【天ヲ指シテ魚ヲ射ル】 (指天射魚)求むるに其の道を以てせざるときは、益なきに喩ふ、說苑の尊賢篇に「秦、趙高ヲ用ヒ、而シテ天下其ノ亡ビンコトヲ知ルナリ、其ノ人ニアラズシテ功アランコトヲ欲スルハ、譬ヘバ其レ夏至ノ日ニシテ、夜ノ長キヲ欲シ、魚ヲ射ルニ天ヲ指シテ、而シテ之ヲ發シテ當テント欲スルガ若シ、舜禹ト雖モ猶ホ亦困ム、而ルヲ又況ンヤ俗主ヲヤ」

【天ヲ幕トシ地ヲ席トス】 (幕天席地)志氣豪放にして、跼蹐せざる義、劉伯倫の酒德頌に「有ㇾ大人先生ㇾ以ㇾ天地ㇾ爲ㇾ一朝ㇾ萬期爲ㇾ須臾ㇾ、日月爲ㇾ扃牖ㇾ、八荒爲ㇾ庭衢ㇾ、行無ㇾ轍跡ㇾ、居無ㇾ室廬ㇾ、幕ㇾ天席ㇾ地、縱ㇾ意所ㇾ如ㇾ」とあり、註に

「志ノ廣大ナルヲイフ」天地開闢已來を以て一日と爲すなり、萬歳の期を少時と爲すなり、局牖は「マド」なり、八荒は八方なり、

【田ヲ求メ舍ヲ問フ】（求田問舍）(貿田問舍)を見よ、

【天下】「アメガシタ」世界をいふ、また一國内をいふ、書經に「奄有四海爲君」——「君」孟子に「以一人易天下」——「得人難」堯の舜を得、舜の禹皐陶を得たる如きは、よく天下の爲めに人を得たるなり、史記鄭生陸賈列傳に「——安注意相」——「危注意將」これは陸賈が陳平と語る時の言なり、管子に「——不忠無臣、忠無君以使之、——不忠無財、忠無人以分之」

【天家】天子の稱、禁忌の獨斷に「天子無外以天下爲家故稱之——」

【田何】漢の淄川の人、杜陵に徙り、杜田生と號す、易學に明かに、易傳數篇を著す「同郡の楊何、易を何に受く、

【田歌】田を耕す歌、藏島の四月卽哉詩に「茶歌幾了又一一」

【殿下】酉陽雜俎に「秦漢ヨリ以來、天子ニ於テハ陛下トイヒ、皇太子ニハ、殿下トイヒ、將ニハ麾下トイヒ、使者ニハ節下、殿下トイヒ、二千石ノ長吏ニハ、閣下トイヒ、父母ニハ膝下トイヒ、通稱相呼ビテハ足下トイフ」とあり、事物紀元に「漢ヨリ以來皇太子諸王ニ——トイフ稱ス」

【天涯】極めて遠き地をいふ、古詩に「相去萬餘里、各在天一涯」

【天涯地角】天の限り、地の「ハテ」をいふ、角は隅なり、——は、絶遠の處をいふ、徐陵爲陳武帝與嶺南酋豪書に「天涯藐藐、地角悠悠」また韓愈の祭十二郎文に「一在天之涯、一在地之角」

【天下意ノ如クナラザルモノ恒ニ十ニ七八ニ居ル】（天下不如意恒十居七八）晉書羊祜傳の語、

【天涯比隣ノ如シ】遠隔の地も、比屋の近隣に居るが如き思を爲すをいふ、王勃の杜少府之任蜀州の詩に「海内存知己天涯如比隣」唐詩別裁集卷の九に出づ、就きて見よ、

【天香國色】牡丹を形容していふ、書言故事に「牡丹ヲ天香國色トイフ、王建ノ詩ニ、國色朝酣酒、天香夜染衣」と、酣酒とは人の醉ひたる面の如きをいふ、錦字箋には、國色天香の句を倒置し、且つ李正封の詩とせり、

【天下熙熙皆利ノ爲メニ來ル】史記貨殖傳に「天下熙熙皆爲利來、天下攘攘皆爲利往」熙は和なり、廣なり、

攘攘は紛錯の貌、

【點額】落第をいふ、三秦記に「河津一名ハ龍門、龜魚ノ屬、能ク上ルナシ、江海ノ大魚、門下ニ集ルモノ數十、上ルヲ得ズ、上レバ卽チ龍トナル、故ニ云フ、噪額龍門」また書言故事に「唐人進士ノ登科ヲ比シテ、登龍門トナス」また水經に「鯉魚聚穴ヲ出デテ三月、上リテ龍門ヲ渡ル、渡ルヲ得バ龍トナル、否レバ則チ額ヲ點シテ還ル（魚渡るを得ず、跳躍の功、其の額を點傷す、士人衆に中らずして還るが如し）」登龍門」を參看せよ、

【殿閣微涼ヲ生ズ】「タカドノ」にすこしの涼氣の生ずるをいふ、人皆」を見よ、

【天下郡國利病書】百二十卷、清の顧炎武撰す、この書、首に輿地山川總論あり次に各省に及び、次に、邊備、河套、西域、交趾、海外諸蕃、海外諸蕃入貢互市の七目あり、四庫提要に「其ノ中舊文ヲ採掇シ、同異兼ネ收メ明ノ矛盾ノ處アリ編次亦絕エテ體例ナシ、蓋シ未成ノ稿本ナリ」といへり、

【天下太平】天下が太平に治るをいふ、禮記の仲尼燕居篇に「言而履之禮也、行而樂之樂也、君子力此二者、夫是以——也」また路溫舒の上尚德緩刑書に「是以囹圄空虛、——」

【天下ニ無シ】（天下無天下に比なきをいふ、杜甫の詩に「閣風玄圃與蓬萊、中有高堂——」蘇軾の詩に「八月十八潮、壯觀——」と、賴山陽の詩に「耶馬溪山——」は、蓋しこれ等に本づく、

【天下ニ不是底ノ父母ナシ】（天下無不是底父母）世の中に惡しき親は無きをいふ、底は俗語、的に同じ、小學外篇に、羅豫章孟子說を引きていふ「羅仲素論瞽瞍底豫而天下之爲父母者定云、只爲天下無不是底父母云云瞽瞍底豫云云の語は、孟子離婁上に出づ、

【天下ノ憂ニ先チテ憂ヒ天下ノ樂ニ後レテ樂ム】（先天下之憂而憂、後天下之樂而樂）宋の范仲淹の語、その作るところの岳陽樓記に見ゆ、蓬窓日錄に「先憂事者後樂事、先樂事者後憂事、此曾子立事篇語、大戴禮所載范文正公語本此」

【天下ノ英雄ワガ轂中ニ入ル】（英雄吾轂中ニ入ル）を見よ、

【天下ノ才】天下にまれなる才をいふ、蜀志諸葛亮傳に「司馬宣王按行其營壘處所、曰天下奇才也」また天下を治むる才をいふ、國語に「夫管子天下之才也」

【天下ノ士】猶ほ國士といふが如く、其の名天下を蓋

ふ者、史記魯仲連傳に「吾乃今日知先生爲天下之士也」孟子に「天下之善士斯友天下之善士」

【天下ノ眞花】　歐陽修牡丹記の序に曰く「花至牡丹則不名直曰花、謂天下眞花獨牡丹耳」

【天下ノ大事ハ必ズ細ニ作ル】　（天下之大事、必作于細）天下の大事件は、その本は微細のことをゆるかせにするより作るをいふ、老子の語、上に「天下難事必作於易」とあり、

【天下ノ名山僧占多】　天下の名山は多くは僧徒が占有して寺院を建立せるをいふ、唐人の句、韶府摹玉の占字の下に見ゆ、

【天下ノ戮トナル】　（爲天下戮）天下の人、擧りて共に之を戮する義、戰國策に「身死國亡、爲天下戮」一解に、戮は僇に通ず、大辱なりと、

【天下ハ祖宗ノ天下ナリ】　天下は皇祖皇宗の天下にして今上の天下に非ずとの義、宋の胡詮の上高宗封事に「夫天下者、祖宗之天下也、陛下所居之位、祖宗之位也」

【天下ハ天下ノ天下ナリ】　天下は固より天下の人の共同の天下にして、君主一人の私有物に非ざるなり、六韜の文韜、文師篇に「太公曰、天下非一人之天下、乃天下之天下也、同天下之利者則得天下、擅天下之利者則失天下」また呂氏春秋貴公篇にも類語あり、

【鈿合】　「アヲガヒザイク」の香箱、陳鴻の長恨歌傳に「定情之夕、授金釵一以固之」

【天下道アレバ走馬ヲ却ケテ糞車ニ以フ】　（天下有道、却走馬以糞車）天下に無爲の大道行はれて靜謐なる時は、一日に千里を走る駿馬も無用なる故、却りて農事に用ひて糞車を引かしむるをいふ、老子の語、下に「天下無道戎馬生於郊」とあり、

【天漢】　天の河なり、詩經に「維天有漢」

【皴顏】　惣ぢたる「カホツキ」厚顏に同じ、丘遲の與陳伯之の書に「將軍猥一借命、驅馳氐羌之長」杜甫の詩に「野人嗔蕩無一豈可久在王侯閉」

【點撥】　「シルシ」をつけてしらべる、韓愈の句に「丹鉛事一一」

【天眼通】　能く六道の衆生の生死苦樂の相を見、及び一切世間種種の形色を見て障礙あることなきを一一と名づく六神通の一なり、

【天下モト無事、庸人自ラ之ヲ擾ス】　唐書に「陸象先政寬簡ヲ尙ブ、吏民罪アレバ、多ク曉諭シテ之ヲ遣ル、州ノ錄事、象先ニ言ヒテ曰ク、明公籌擢ヲ施サザレバ、何ヲ以テ威ヲ示サン、象先曰ク、人情遠カラズ、州ノ屬豈吾ガ言ヲ解セザランヤ、必ズ籌擢以テ威ヲ示サント欲セバ、當ニ汝ヨリ始メント、錄事慙デ退ク、象先嘗テ人ニ謂ヒテ曰ク、天下本無事、但庸人擾之ノミ、苟モ其ノ源ヲ淸クセバ、何ゾ治マラザルヲ憂ヘンヤト」

【天紀】　歲月日星辰曆數をいふ、書經に「畔官離次、俶擾天紀」

【天機】　獨ほ天意の如し、淮南子に「內有以通于天」また莊子の大宗師に「其嗜欲深者、其天機淺」とあるは、天賦の機智なり、また廟算の義、三國志の吳主孫權傳に「君臨萬國、承統天業」

【恬熙】　世の太平無事なる義、王逢の詩に「一一屬累朝」

【傳奇】　小說をいふ、后山詩話に「范文正岳陽樓記、對語ヲ用ヒテ時景ヲ說ク、世以テ奇ト爲ス、尹師魯之ヲ讀ミテ曰ク、此レ傳奇體ノミト、一一トハ唐裴鉶著ストコロノ小說ナリ」莊岳委談に「陶宗儀謂、唐爲一一、宋爲戲評、元爲雜劇、非也、唐所謂一一自是書名、雖事涉緣綴、而氣體俳弱、然其中絕無歌曲云云」

【天弓】　侯鯖錄に「一一ハ卽チ虹ナリ、マタ之ヲ帝弓トイフ」

【典廐】　王のうまやを掌る官の名、隋書に「改龍廐曰一一」

【點鬼簿】　過去帳なり、詩文中に、多く古人の名を入るる病をいふ、朝野僉載に「楊炯爲文、好以古人姓名連開、如張平子之談略、陸士衡之所記、潘安仁之所賦、宜其陋矣、仲長統何足以知之、號點鬼簿」

【典據】　正しさよりどころ、大唐新語に「咸有一一」

【天狗】　深山にすむ怪物、鼻高く羽翮を有すといふ、物徂徠に一一說あり、山海經、杜甫の一一賦等によれば猿又は狸に類する奇獸なるが如し、山海經に「陰山有獸焉、其狀如狸而白首名曰一一、其音如榴榴可以禦凶」また星の名、史記天官書に「一一、狀如大奔星、有聲、其下止地類狗所墮及望之如火光炎炎衝天」の注に「星、尾アリ、旁短彗アリ、下ニ狗ノ形ノ如キ者アリ、亦太白ノ精」

【天火】　自然に起りし火災なり、左傳宣十六年に「凡火、人火曰火、一一曰災」

【點化】　爾雅に「點ハ滅ナリ」注に「筆ヲ以テ字ヲ滅スルヲ點トナス」とあり、古人の句を、或は二三字、或は四五字、改めて吾が句となし、或は其の格を取り、或はその句法を取りて、かへりて古人よりまさりたるものと

するをいふ、李嘉祐の詩に「水田飛白鷺、夏木囀黃鸝」とあるを、王維が漠漠と陰陰との二字を上に添へて、七言の佳句としたるが如き、其の一例なり、周必大の詩に「紅紫丁寧容老圃、丹青一一屬詩仙」

【田光】 燕の人、仕進を慕はず、人と爲り智深くして勇沈なり、太子丹その賢を聞き、之と交り以て國事を圖らんことを願ふ、光曰く、臣聞く、騏驥の盛壯の時は一日にして千里を馳するも、その衰老に至りては駑馬も之に先んずと、今は太子光の盛壯の時を聞きて臣の精已に消亡せしを知らざるなりと、因りて荊軻を薦む、太子曰く、願くは先生泄す勿れと、光曰く諾と、出でて嘆じて曰く、夫れ行を爲して人をして之を疑はしむるは節俠にあらざるなりと、遂に自ら刎ねて以て言はざるを明かす、

【田廣先生ハ燕丹ニ語ラレ云云】 太平記卷十に見ゆ、史記刺客傳に見ゆ、廣は光に作るを可とす、太子曰、願因先生結交於荊卿、可乎、田光曰、敬諾、即起趨出、太子送至門戒曰、丹所報、先生所言者、國之大事也、願先生勿泄也（中略）田光曰、吾聞之、長者爲行、不使人疑之、今太子告光曰、所言者、國之大事也、願先生勿泄、是太子疑光也、夫爲行而使人疑之、非節俠也、欲自殺以激荊卿曰、願足下過太子、言光已死、明不言也、因遂自刎而死、丹は太子の名、

【天渙ノ派】 皇族をいふ、書言故事に「宗室曰一一之派、こと、魏の曹固の表に「王孫公子、疏派天渙、宜親宗室、強幹弱枝」と、疏は分なり、派は水分流するなり、天渙は星の名、言ふ心は王孫公子は天渙の分別せる若しと、その尊貴なるに喩ふ、史記天官書に「旁有八星絕漢、曰天渙」渙は星の名なり、

【典刑】 常刑なり、書經舜典に「象以一一、流宥五刑」また舊法なり、詩の大雅蕩篇に「雖無老成人、尚有一一」箋に老成人とは、伊尹・伊陟・臣扈の屬の如きをいふ、これ等の臣なきも、なほ常事故法の案用すべきありと、また常法をいふ、國語の鄭語に「修一一以守之」

【天經】 孝道をいふ、孝經に「孝天之經也、地之義也、人之行也」また柳宗元の文に「稟承粹和、篤守一一」またひろく禮をいふ、左傳昭二十五年に「夫禮天之經也」註に經とは道の常なり、

【典故】 典例故實をいふ「フルゴト」後漢書東平王蒼の傳に「陛下至德廣施、慈愛骨肉、事過一一、臣惶怖戰慄、誠不自安」また宋史の宋敏求傳に「敏求藏書三萬卷、皆略誦習、熟于朝廷一一士大夫疑必就正焉」陸倕の石闕銘に「歷代規謨、前王一一、莫不法夷剪滅允執其中」

【天鼓】 雷をいふ、事物異名錄に「抱朴子ニ、雷ハ天ノ鼓ナリ、雲仙雜記に「雷ヲ一一トイフ」

【天吳】 山海經に「朝陽ノ谷、神アリ一一トイフ、是ヲ水伯トナス、其ノ獸タルヤ、人面八首八足八尾皆青黃ナリ」

【天工】 猶ほ神造といふが如し、書經皐陶謨に「無曠庶官一一人其代之」傳に「庶官治ムル所ロ天事ニ非ルナシ」趙孟頫の放煙火詩に「人閒巧奪一一ニ

【天功ヲ亮ク】 （亮天功）天の事を相け成すをいふ、能く民を治めて其の所を得しむるの意、書經舜典に「咨汝二十有二人、欽哉、惟時一一ニ二十二人は、四岳九官十二牧をいふ、また漢書五行志に「聖王在上總命群賢、以一一一ニ

【天功ヲ貪リテ己ノ力トナスハ咎犯ノ恥ヅル所ロ】 太平記卷十七に見ゆ、咎犯は重耳の臣、狐偃字は子犯なり、ここは介之推に改むべし、左傳僖廿四年に「晉侯賞從亡者、介之推不言祿、祿亦弗及、推曰、獻公之子九人唯君在矣、惠懷無親、外内棄之、天未絕晉、必將有主、主晉祀者、非君而誰、天實置之、而二三子以爲己力、不亦誣乎、竊人之財、猶謂之盜、況貪天之功以爲己力乎、云云」史記の世家にも見ゆ、

【篆刻】 篆字を印に刻むをいふ、轉じし形容のみ多く實益なき文を輕んじていふ（雕蟲）を見よ、また任昉の讓表に「一一爲文而三冬靡就」

【傳國璽】 太平御覽に「一一一ハ是レ秦始皇ノ刻スル所ロ、其ノ玉藍田山ヨリ出ヅ、是レ丞相李斯ノ書スル所ロ、ソノ文ニ受命于天、既壽永昌トイフ、漢ノ高祖三秦ヲ定ムル、秦王子嬰、コノ璽ヲ獻ズ、漢高位ニ即クニ及ビテ仍ホ之ヲ佩ブ、因リテ以テ相傳フ、故ニ號シテ一一一トイフ」また事類全書に「舊制乘輿六璽、唐改メテ寶ト爲ス、唐末ノ喪亂或ハ多ク亡失ス、周廣順中詔シテ二寶ヲ造ル、曰ク、皇帝承天受命之寶、皇帝神寶、宋祖命ヲ受ケ、其ノ二寶ヲ傳フ、太宗ニ至リ、又別ニ承天受命之寶ヲ制ス、嘉祐八年英宗即位シ、受命寶ヲ作ル、歐陽修ニ命ジテ、其ノ文ヲ篆シテ、皇帝恭膺天命之寶トイフ」

【天之ニ年ヲ假ス】 （天假之年）壽命を延すをいふ、左傳の僖二十八年に「晉侯在外十九年矣、而果得晉國、險阻艱難備嘗之矣、民之情僞、盡知之矣、天假之年、而除其害、天之所置、其可廢乎」の註に「獻公ノ子九

人、唯ダ文公ノミ在リ、故ニ天之ニ年ヲ假ストイフ」

【天才】（テンサイ）生れつきの才なり、北史李德林傳に「少クシテ孤求ダ字アラズ、魏收之ニ謂ヒテ曰ク——必ズ公輔ニ至ラン、吾輩チ天才ヲ以テ卿ニ字セント」唐書王勃傳に「川語益ゝ奇ナリ、乃チ曰ク——ナリト」稽康の絶交書に「不欲以枉其天才」

【殿最】（デンサイ）功勞を考察するに、上功を最といひ、下功を殿といふ、漢書宣帝紀に「歲竟丞相御史課其——」

【天造草昧】（テンゾウサウマイ）天造とは天の始めて物を造る義、一解に猶ほ天運といふが如しと、草は雜亂、昧は晦冥なり、天下未だ定まらず、名分未だ明らかならざる時をいふ、易の屯卦に「——、宜建侯而不寧」疏に「天ノ萬物ヲ草創ノ始ニ造ルヲイフ」と、晦亂の世は、宜しく君を立て統治せしむべし、然れども未だ遽かに安寧を望むべからずとの義なり、

【佃作】（デンサク）佃は「タックル」耕作なり、史記に「民雖不——而足於粢粟矣」

【添削】（テンサク）文字を添へたり、削りたりして改むるをいふ、法華文句に「余二十七於金陵聽受、六十九於丹丘——添刪と同義、刪音サン

【點竄】（テンザン）詩文の字句を改め易ふること、三國志魏武帝紀に「多所——」また册府元龜に「梁任昉善爲文、起草即成、不加——」點は滅なり、竄は改なり、易なり、

【點竄堯典舜典字】（テンザンゼウテンシュンテンノジ）堯典舜典は書經の篇名、古の典雅なる經文を削改して別に一篇の好文章を作る義、李商隱の讀韓碑詩に見ゆ、下に「塗改清廟生民詩」とあり、清廟は詩經周頌の篇名、生民は詩經大雅の篇名、塗改は文字を塗抹して書き改むる義、韓碑は韓愈の平淮西碑を斥す、

【天子】（テンシ）王者の稱、詩經の時邁に「時邁其邦、昊天其子之」邁は行なり、邦は諸侯の國なり、また禮記の曲禮に「君天下曰——」註に「鄭玄イフ、今漢ニテハ、蠻夷ニ於テ天子ト稱シ王侯ニ於テ皇帝ト稱ス」また公羊傳の成八年の注に「聖人命ヲ受ク、皆天ノ生ズル所ロ、故ニ——トイフ」と、命とは天命なり、書經に「——作民父母、以爲天下主」說文に「古之神聖人、母感天而生子、故曰——」

【天使】（テンシ）日月をいふ、淮南子に「日月者天之使也」また勅使をいふ、通鑑の唐紀に「大尉待——不敬」の註に「朝廷遣ストコロ、之ヲ——トイフ、蓋シ君ハ天ナリ、君ノ遣ストコロ、猶ホ天ノ遣ストコロノ如シ」

【天資】（テンシ）資は材質なり、天性に同じ、史記商君傳に「商君者其——刻薄人也」

【天時】（テンジ）時日支干孤虛旺相の屬をいふ、孟子公孫丑下に「——不如地利、地利不如人和」また荀子に「上得——下得地利」

【廛肆】（テンシ）禮記王制の注に「廛市物邸舍」また周禮天官司市の注に「肆謂陳物處」

【殿試】（デンシ）天子親ら進士等の試驗を爲すをいふ、通俗編に「漢書儒林傳有司舉賢良文學士、錯在選中、上親策詔之、後世——之制蓋昉于此」矣、晉書阮种傳、或言對策者因緣假託、乃更延舉士廷、以問之、郤詵傳載其對策有爰進之於廷之語、或謂——始唐武后非也」唐武后の世に始るとの說は杜佑の通典に見ゆ、

【殿屎】（デンシ）呻吟の聲なり、詩の小雅に「民之方——則莫我敢葵」葵は揆に通ず、

【天子ニ戲言ナシ】（テンシニゲゝンナシ）史記の晉世家に「成王與叔虞戲、削桐葉爲珪、以與叔虞曰、以此封若、史佚因請擇日立叔虞、成王曰、吾與之戲耳、史佚曰、天子無戲言、於是遂封叔虞於唐」とあり、成王は周の武王の子、叔虞は成王の弟なり、史佚は、太史、佚はその名、柳宗元に、桐葉封弟辨あり、參看せよ、

【田子方】（デンシ）公季成、魏の文侯に謂つて曰く、田子方は賢人なりと雖も有士の君にあらざるなり、君之と禮を齊しくす、もし子方より賢なる者あらば、何を以て之に加へんとするぞと、文侯曰く、子方は仁人なり、仁人は國の寶なりと、

【天子ハ四海ヲ以テ家トナス】（テンシハシカイヲモツテカトナス）（天子以四海爲家）史記高祖本紀に「蕭何曰、天下方未定故可因遂就宮室、且夫——非壯麗無以重威云云」

【天心】（テンシン）天の中央なり、宋の邵雍の清夜吟に「月到天心處、風來水面時」また天帝の心をいふ、書經に「克享——受天明命」

【天津】（テンシン）直隸省天津府天津縣に屬し、咸豐十年の條約によりて開ける港なり、東經百十七度十三分五十五秒、北緯三十九度三分五十五秒にして、大運河と白河と會する處の南岸に位し、白河口を汚ること十三里餘にして本港に達す、地勢平坦にして卑濕、四方山なく諸水縈回、白河南に流れ、運河東より注ぎ、城の東南に來りて相合し、最も船舶の往來に便なり、北清に於てはその繁華北京に亞ぐ、人口凡そ百萬あり、光緒元年(明治八年八月)わが國にても領事館を——縣城の紫竹林に置く、

【天眞】（テンシン）生れままなる純粹の性をいふ、晉書阮籍傳に

「粲和服」純以保——こまた淮南子に「所謂天者純粹樸素質直皓白、未始有與雜糅者、斯其眞也歟」杜市の寄二李白一詩に「劇談憐二野逸一嗜酒見二——一」

【點心】 少しの食を、心胸の間に點すといふ義にて、氣の倦みたる時、菓子など食するをいふ、能改齋漫錄に「世俗例ニ、早晨ノ小食ヲ以テ——ト爲ス、唐時ヨリスデニ此ノ語アリ」唐書に「鄭餘江淮ノ留後トナル、夫人ソノ弟ヲ顧ミテ曰ク、吾レ未ダ餐ニ及バズ爾且ツ點心スベシト」また類聚錄に「今、早飯前、及ビ午前午後晡前ニ小食スルヲ以テ、點心トナス」河東記に「板橋三娘子置二新作燒餅一于食床上一、與レ客——」轉じて菓子の義にも用ふ、

【傳神】 人の像を寫してその精神を傳ふる義、晉書顧愷之傳に「愷之每レ畫二人數年不レ點レ眼、答曰、——寫照正在二阿堵中一」

【天津橋上杜鵑ノ聲ヲ聞ク】 淵鑑類函卷の六十四に「宋治平時、鄧雍與二客散一步天津橋上一、聞二杜鵑聲一不レ樂、曰洛陽荒無二杜鵑一、今始至、天下將レ治、則地氣自レ北而南、將レ亂地氣自レ南而北、今南方地氣至矣、禽鳥得二氣之先一、不二十年一、上用二南人一作レ相、專務二變更一、天下自レ此多事矣、至二是上用一王安石一、雍言果驗」

【傳習錄】 三卷、明の王陽明の語錄にして門人徐愛等編す、論語學而篇、曾子の言に「傳不レ習乎」とあるに取りて名づく、上卷には徐愛が錄するところ、十四條、陸澄が錄するところ八十條、薛侃が錄するところ三十五條あり、中卷には答二人論一學書一・答二周道通一書・答二陸原靜一書(二篇)答二歐陽崇一書・答二羅整庵一小宰二書・答二聶文蔚一書(二篇)の八篇に、示二弟立志說一・訓蒙大意・教約の三篇あり、下卷には、陳九川が錄するところ十五條、黃以芳が錄するところ十一條、黃修易が錄するところ十一條、黃省曾が錄するところ十七條、錢德洪が錄するところ五十一條あり、之を續錄とす、補遺は凡て二十八條、此の外晩年定論を添ふ、また大學問・示二徐曰仁一應試・論俗四條・客坐私祝・略年譜を附錄とす、正德二年九月三輪執齋諸本を參考して標註傳習錄三卷を刊行し、大に世に行はる、佐藤一齋の——欄外書三卷參考の資とすべし、

【傳事】 驛傳の車なり、康熙字典に「古者、車駕馬乘ヲ以テ京師ニ詣ル、之ヲ——トイフ」史記游俠傳に「條侯乘二——一將至二河南一」

【傳舍】 宿驛に設けたる旅舍をいふ、去る者、來る者轉轉相傳へて常主なきの義、史記酈食其傳に「沛公至二高陽一——一」

【天常】 五常の道なり、揚子法言に「吾見二——一」

【天壤】 天地に同じ、史記魯仲連傳に見ゆ、張協の詩に「清風激二萬代一、名與二——一俱」

【田穰苴】 田完の苗裔、景公與に兵事を語りて之を說び、以て將軍となし、燕晉の師を扞がしむ、尊びて大司馬となす、齊の威王、古者司馬穰苴の兵法を論じ、穰苴をその中に附す、因つて號して司馬穰苴の兵法といふ、

【天上天下唯我獨尊】 傳燈錄に「釋迦牟尼佛初生、一手指レ天、一手指レ地、周行二七步一、目顧二四方一曰、天上天下唯我獨尊」この語もと瑞應經に出づ、また大莊嚴經の轉法輪品に「天上天下唯我最勝」

【天上ノ五衰】 太平記卷三に見ゆ、大論に曰く「諸天命欲レ終時、五死相現、一華冠萎、二腋下汗出、三蠅來著レ身、四見二更有一天坐一己坐處、五自不レ樂二本座一」と、また俱舍論に「復有二五種大衰相一現、一衣染二塵埃一、二華冠萎悴、三兩腋汗出、四臭氣入レ身、五不レ樂二本座一、此五相現、必定當二——一」

【天上ノ石麒麟】 小兒のすぐれたるを稱する語、南史に「陳徐陵字孝穆、年數歲沙門寶誌、摩二其頂一曰、天上石麒麟也」金璧故事にも引けり、また杜甫の見二徐卿二子一歌に「徐卿二子生絕奇、感應吉夢相追隨、孔子釋氏親抱送、竝是——一」

【殿上ノ虎】 殿上にて天子を直諫することの甚しきものを稱していふ、宋書に「劉安世字ハ器之、言政ヲ遍歷シ、色ヲ正シテ朝ニ立チ、君子ヲ進メ、小人ヲ退クルヲ以テ急トナセリ、其ノ面折廷諍シテ、雷霆ノ怒、赫然タルニ至レバ、簡ヲ執リテ却立シ、天威ノ少シク霽ルヲ伺ヒ、復タ前ンデ極論シ、且ツ前ミ且ツ却ゾキ、或ハ四五スルニ至ル、觀ル者ミナ竦立セリ、故ニ時人、安世ヲ稱シテ、殿上ノ虎ト云ヘリ」

【天上ノ白玉京】 李白の詩に「天上白玉京、十二樓五城」とあり、全集の註に「五星經、天上白玉京黃金闕」とあり、神仙家にいふ所ろの天宮の稱なり、

【田舍翁】 「キナカ」に生長せる老人の義にて人を嘲るにいふ、宋書に「武帝大修二宮室一、裝顯盛稱二高祖儉素一、帝曰、——得レ此、已過矣」また自ら謙する辭、柳宗元の詩に「皇恩若許レ歸二田土一、晩歲當レ爲二——一」

【天錫】 錫は賜なり、猶ほ天授といふが如し、書經の仲虺之誥に「天乃錫二王勇智一、表二正萬邦一」高適の詩に「李侯懷二英雄一抗髒乃——」

【天爵】 自然に貴き所ろの者、即ち德をいふ、孟子告子

上篇に「天爵トイフ者アリ、人爵トイフ者アリ、仁義忠信、善ヲ樂ンデ倦マザルハ、此レ天爵ナリ、公卿大夫ハ、此レ人爵ナリ、古ノ人ソノ天爵ヲ修メテ而シテ人爵之ニ從ノ云云」人爵は人の與ふる所ろなれば、必ずしも公平なるものにあらず、

【天酒】（甘露）を見よ、

【天授】天の助けて與ふるをいふ、史記淮陰侯傳に「陛下所謂ー一、非人力也」また留侯世家にも「沛公殆ー

【田畯】田の大夫、勸農の官なり、詩の豳風七月に「彼南畝」ーー至喜」

【篆書】書の一體にして、大小の二あり、事類全書に「大篆ハ周ノ宣王ノ太史、史籀ノ作ル所ロナリ、小篆ハ、秦ノ丞相李斯ノ作ル所ロナリ、大篆ヲ增損シテ、之ヲ小篆トイフ、亦秦篆トモイフ」法書攷にも大篆は史籀の作として且つ曰く「或人曰ク、杜下史、始メテ古文ヲ變ジテ、或ハ同ジク、或ハ異ニシ之ヲ篆トイフ、篆ハ傳ナリ、ソノ物理ヲ傳ヘテ之ヲ無窮ニ施ス、漢書藝文志ニ、史籀十五篇トアル、是レナリ、史官之ヲ製シ、之ヲ用ヒテ教授セシヲ以テ之ヲ史書トイフ、凡ソ九千字アリ、小篆ハ秦ノ相李斯ノ作ル所ロ、大篆籀文ヲ增損シテ之ヲ小篆トイヒ、亦秦篆トイフ、天下之ヲ行フ、盡ハ鐵石ノ如ク、字ハ飛動スルガ如シ、楷隸ノ祖タリ、不易ノ法トナル、其ノ鐘鼎ニ銘題シ、及ビ符節ヲ作ルニハ今ニ至ルマデ之ヲ用フ」

【天縱】縱は猶ほ肆の如し、天よりゆるされて德を有つの意、論語子罕に「固ーーレ之將聖、又多能也」

【天職】天の賢人を待つて、天民を治めしむる所以のもの、君主の得て專らにする所ろに非ず、故にーーといふ、孟子萬章下に「弗與治ーー也」荀子に「ーー既立、天功既成」また天帝の職をいふ、列子に「ーー生覆、地職形載」

【傳食】諸方に轉寫して、口を餬するをいふ、孟子滕文公下に「後車數十乘、從者數百人、以ーー諸侯」

【天子】ヨリ庶人ニ至ルマデ皆身ヲ修ムルヲ以テ本トス】大學に「自天子以至於庶人、壹是皆以修身爲本」

【天水】西漢の郡名、今の甘肅鞏昌府通渭縣の西南に當る、また晉北魏隋の郡名、今の甘肅秦州の西南、また南宋南齊の郡名、今の陝西漢中府南鄭縣の地、宋の利州路ーー軍ーー縣は今の甘肅秦州の西南七十淸里に在り、その他歷朝同名異地あり、地理志韻編卷十二を見よ、

【殄瘁】殄は病なり、絕なり、瘁は病なり、勞なり、病み疲れて絕え亡ぶるをいふ、詩經に「人之云亡、邦國ーー」

【酣酔】酣は濕なり、ーーは大醉をいふ、漢書游俠傳に「候遊ーー時」遊は陳遊、

【天井】上棟の中に當り、木を交へて方形に爲くること、井幹の如き者をいふ、陸機の挽歌詩に「側聞陰溝涌、臥觀ーー壓」また西京賦に「蔕倒茄於藻井」とあり藻井とは、水草を畫きたる天井をいふ、書言字考に「堂殿ノ上、藻井ヲナス、藻ハ水草ナリ、井ハ星宿ナリ、皆是レ火災ヲ厭スル所以ナリ」

【天性】天然の性質をいふ、禮記樂記に「人生而靜、天之性也、感於物而動、性之欲也」また史記李廣傳に「廣爲人長猿臂、善射、亦ーー也」

【天斬】斬は城をめぐれる「ホリ」ーーは天然の「ホリ」なり、陳孔範曰く「長江ハーーナリ古ヨリ以テ限ト爲ス」南史に「長江ーー、古來限隔南北」

【恬然】安靜の貌、荀子に「ーー如無治者」また南史羊欣傳に「欣長隸書、會稽王世子元顯、使書扇、不奉命、元顯怒、使爲後軍府舍人、此職本用寒人、欣意貌ーー不以高卑見色」また溫庭筠の詩に「曾讀逍遙第一篇、爾來無處不ーーまた驚き動かざる貌とも解す、

【殄殲】絕ち滅す義、「ミナゴロシ」書經に「誕以爾衆士ーー乃讐」

【塡然】塡は塞なり、滿なり、盛んに鼓をうつ聲、孟子梁惠王上に「ーー鼓之、兵刃既接」

【靦然】面目ありて人を視る貌、詩の小雅に「有靦面目」また國語の越語に「余雖ーー而人面」哉、吾猶禽獸ニ

【靦然】笑ふ貌、莊子に「ーー而笑」また左思吳都賦に「東吳王孫ーー而哈」

【天則】自然に、しかあるべき法則、易の乾卦に「乃見ーー」

【天粟】雨ラシ鬼夜哭ス】淮南子本經訓に「蒼頡書ヲ作リテ天雨粟鬼夜哭」注に「書契作ラレテ詐譌生ジ、本ヲ去リ末ニ就ク、天、人ノ將ニ餓エントスルヲ知ル、故ニ粟ヲ雨ラス、鬼、文ノ劾スル所ロタルヲ知ル故ニ哭

【傳飧】（飧ヲ傳フ）を見よ、

【天台山】一に桐柏山といふ、浙江省台州天台縣の西に在り、高一萬八千丈、周回八百里と稱す、台敎の根地にして我が傳敎智證兩大師等受法の處なり、

【天台大師】天台宗の開祖なり、姓は陳氏名は智顗、潁

川の人、陳隋の兩朝に在りて道を弘む、隋の煬帝の未だ晉王たりし時 智者の號を賜ふ、よつて智者大師といふ、揚州の天台山にて一宗を開きしにより、天台宗と名づく、開皇十七年寂す、淨名義疏・小止觀・法界次第等の著あり、詳しくは佛祖統紀卷六を見よ、わが邦にては桓武帝の延曆二十三年七月 比叡山寺の最澄和尙(傳敎大師ト諡セラル)入唐し、天台の道邃和尙に就きて一心三觀の圓宗を相承し、且つ密敎を越州の順曉阿闍梨に受け、禪旨を唐興寺の翛然禪師に得て、同二十四年五月歸朝し、延曆寺に住して盛に之を弘通す、之を單に天台宗と稱し、又山門・山家等の稱あり、

【椽大ノ筆】 文章の「リッパ」なるをいふ、大手筆といふが如し、晉書王詢傳に「王詢孝武ノ時、左僕射トナル、夢ニ人大筆、椽ノ如キヲ以テ、之ニ與フ、既ニ覺メテ人ニ語リテ曰ク、此レ當ニ大手筆ノ事アルベシト、俄ニシテ帝崩ズ、哀冊諡議、皆詢ガ草スル所ロナリ」とあり、椽はまるき、タルキ」

【典當】 品物を抵當にして金を借ること、後漢書劉虞傳に「——胡夷ニ

【天道容レズ】 (天道不ˋ容)天の道は公正にして惡人を容れざる義、南史謝超宗傳に「閑道塭、緒淵墜、水、霑濕狠藉而出、超宗曰、有ˋ天道ˊ焉、天所ˋ不ˊ容、地所ˋ不ˊ載、投ˋ畀河伯ˊ、河伯不ˋ受ˊ」

【天道「諂ハズ」】 (天道不ˋ諂)諂、一に慆に作る、疑なり、天の人に禍福するは、其の意明白にして、疑ふべきものなきをいふ、一解に、不諂は不濫の義とす、また通ず、左傳昭二十六年に「——ˋ不ˊ貳ˋ其命ˊ」まだ同哀十七年には「天命不ˋ諂久矣ˊ」とあり、慆は音タウ諂と異り、

【天道親ナシ常ニ善人ニ與ス】 (天道無ˋ親常與ˋ善人ˊ) 老子の語、天道は私なきものにて、誰を取り分けて親しむといふことはなく、ただ常に善人に與してそれを助くとなり、

【天道ハ是カ非カ】 (天道是耶非耶)天道の是非に惑ひて、決し難き意にて、怨恨の辭なり、史記の伯夷傳に「太史公曰ク、公正ニアラザレバ、憤ヲ發セズ、而モ禍災ニ遇ヘル者勝ゲテ數フベカラザルナリ、余甚ダ惑ヒヌ、儻クハ所謂天道ハ是カ非カ」

【天道ハ盈ヲ虧キテ謙ニ益ス】 (天道虧ˋ盈而益ˋ謙)易の謙の卦の彖傳に「天道虧ˋ盈而益ˋ謙ˊ」とあり、これ天の行を以て言ふ、盈てる者は則ち虧く、謙する者は則ち益す、日月陰陽是れなり、例へば日中すれば則ち昃き、月盈つれば則ち食するが如し、また下に「人道惡ˋ盈而好ˋ謙ˊ」とあり、人情盈滿を疾み惡んで、好んで謙巽に與するをいふ

【恬澹】 恬は安靜なり 澹は淡に同じ、淡泊なり、心のしづかに安らかなる義、澹泊無爲なり、唐書韓思復傳に「遷ˋ御史大夫、性——不ˋ喜ˋ爲ˋ繩察ˊ」また淮南子に「恬然無思、澹然無慮」また阮籍の詩「猗歟上世士、——志安貧」

【田單ノ火牛ノ計】 支那春秋戰國の代、燕の昭王大軍を以て、齊に攻め入りし時、齊の諸城多く陷り、齊の湣王も、又此の亂に殺されたり、此の時齊の諸城の中にて未だ陷らざるものは、ただ莒と即墨とのみなりき、時に田單は齊の臨淄の市掾たりしが、即墨の人の爲めに推されて將軍となり、殘餘の兵を集めて、燕軍と最後の決戰を試むる事となりしが、衆寡もとより敵すべきにあらず、奇計を以て破るに如かずとなし、終に一計を案じ、各所より牛千餘頭を集め 皆赤色の衣を被らしめ、五彩の龍文を畫きて、兵刃を其の角に束ね、脂を灌ぎて葦を尾に束ね、其の端に火し、夜に乘じ燕軍に向つて放ちたり、かくて城中よりは決死の勇士數隊突出したりしかば燕軍敵する能はずして大に敗れ、爲に前に陷りたる齊の七十餘城も又復するを得たり、かくて襄王を莒に迎立す、王單を封じて安平君と爲す、

【天池】 海をいふ、莊子の逍遙遊篇に「南冥者天池也」藝林伐山に「海ヲ天池トイヒ、江ヲ天塹トイヒ、鹽ヲ天藏トイフ」註に「天トイフハ、是レ天造ノ義ナリ」說文に「海ハ——ナリ、以テ百川ヲ納ル」

【天地】 「アメツチ」易の繫辭に「——之大德曰レ生、聖人之大寶曰レ位」莊子に「天地雖レ大其化均、萬物雖レ多、其治一也」

【田地】 場所といふ義に用ふる俗語、朱子文集に「爲レ學須以ˋ主敬立志ˊ爲ˋ先、方可ˋ就ˊ此——上推尋義理ˊ見ˋ諸行事ˊ、また耕すべき土地をいふ、史記に「君胡不ˋ多買——ˊ」

【天地絪縕】 絪縕は、元氣なり、天地の元氣こまやかに交るをいふ、一に氤氳に作る、易の繫辭に「——、萬物化醇、男女構精萬生化生」構は合なり、

【天中節】 提要錄に「五月五日ノ午時ヲ——ト爲ス」

【天地ヲ動シ、目ニ見エヌ鬼神ヲモ哀ト云云】 太平記卷二に見ゆ、毛詩序に「動ˋ天地ˊ感ˋ鬼神ˊ莫ˋ近ˊ於詩ˊ」とあるに本づく、古今集の假名序は此の意にて書きたるなり、

【天地ヲ刮ル】（刮ハ天地ニ）風の強く吹くにいふ、岑參の句に「浩灝霜風刮天地」

【天地ヲ鑪トナシ、造化ヲ工トナス】（天地爲鑪、造化爲工）天地造化の萬物を育成するは、猶ほ冶工が、鑪を以て、金を鎔かし、工を加へて器と爲すが如きに喩ふ、賈誼の鵩鳥賦に「――陰陽爲炭、萬物爲銅」

【天地玄黄】天地の色をいふ、易經に「夫玄黄者、天地之色也、天玄而地黄」千字文に「――宇宙洪荒」

【天地全功ナシ】（天地無全功）荀子の語、天は覆へども載する能はず、地は載すれども覆ふこと能はざるをいふ、

【天竺】玄奘の西域記に「――之稱、異議糾紛、舊云身毒、或云賢豆、今從正音宜云印度、印度者唐云月、云云舊とは舊譯なり、佛典に舊譯新譯の別あり、即ち唐の玄奘以前の者を舊譯とし、玄奘以後の者を新譯と稱す、玄奘は新譯の翹楚なり、天竺の唐音は「チエンド」にて身毒、賢豆は皆「エンド」にて「インド」と音近し、また同書に「其土聖賢、繼軌導、凡御物如月照臨、由是幾故、謂之印度」

【天竺花】わが國の萩（ハギ）の異名、西湖志に「百菊集譜云、觀音菊、――是也、自五月開至九月、花頭細小、其花純紫、枝葉如嫩柳、其幹之長、與人等」

【天竺三五山】祇園精舍・竹林精舍・大林精舍・精多林精舍那蘭陀寺をいふ、

【天竺四姓】刹利（王種）婆羅門（淨行）毘舍（商賈）首陀（農人）をいふ、また婆維門・刹帝利・吠奢・戍陀羅ともいふ、

【天竺ノ石橋】太平記卷十四に見ゆ、竺は台の誤り、方輿勝覽八に「石橋ハ天台縣ノ北五十里ニ在リ、即チ五百應眞ノ境、相傳フ、方廣寺ニ在リ、石梁アリ、兩崖ノ閒ニ架ス、龍形龜背廣サ尺ニ盈タズ、ソノ上、雙澗合流、洩レテ瀑布ヲナス、梁スデニ峭危、且蘚苔多ク甚ダ滑カナリ、下絕澗ニ臨ム者、心怦ス、石罅ニ木瓜アリ、華時蛇アリ盤糾ス、實落ツルニ至リ大士ニ供スレバ乃チ去ル、號シテ護聖瓜トナス」

【天地ノ長子】雷をいふ、易の繫辭に「震ヲ雷トナシ、長子トナス」四機活法に「雷ハ天地ニ於テ長子トナス、其ノ萬物ヲ以テ出入ヲ爲スナリ、雷二月地ヲ出ヅル百八十日、雷出ヅルトキハ則チ萬物出ヅ、八月地ニ入ル、百八十日、雷入ルトキハ則チ萬物入ル、入ルトキハ則チ害ヲ除キ、出ルトキハ則チ利ヲ興ス、人君ノ象ナリ」

【天地ハ一大戲場】天地の間、善者あり、惡者あり、紛紛然として生ずれども終に消滅に歸せざるなく畢竟一の大なる戲場のみ、侗庵筆記に「日月燈、江海油、雷霆鼓板、天地一大戲場、堯舜旦、文武末、莽操丑淨、古今來許多脚色、此清康熙帝語、嘗以揭于坐側也、聞者莫不想慕其英風、然、楊用修已云、――乃一大戲場、堯舜爲古今大淨、千載而下不得其解、皆矮人觀場也、語氣極相類、坤齋日抄朱毛翔詩、閱世今知百戲場、錢宗伯又云、乾坤百戲場、康熙御製語本于此」

【天長地久】老子に「――天地所以能長且久者、以其不自生、故能長生」天地の萬物を生ずるは、自然に由りて私心を容るる所ろなし、故に千萬歲の久しきも、猶ほ一日の如しとの意、また白居易の長恨歌に「天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期」

【顚墜】ころげおつる、孔子家語に「不觀高崖、何以知――之患」

【天誅】公道至正の征伐、天命にしたがひ誅責する義、誅は討なり、責なり、殺なり、漢書陳湯傳に「將義兵、行――」

【天柱】折ケ地維缺ク】天綱をやぶり、地維を絕つの義にて、紛亂の甚しきをいふ、史記三皇紀に「――女媧乃鍊五色石以補天」とあり、五色は五倫に喩ふ、石は堅くして易ふべからざるの義に取り、天下の綱紀紛亂せし時、女媧氏が、五倫の道を修め、以て天の化育の及ばざる所ろを補ひ助けたりとの意ならん、

【添丁】男子を生むをいふ、唐書盧仝傳に「盧仝生子、名――、欲爲國持一役也」と、唐の制、男子二十一歲、丁役に服す、故に國の爲めに一丁を添ふるの意、

【傳遞】驛傳にて送るをいふ、遞は代なり、更迭なり、增韻に「――ハ驛遞ナリ」禮記玉藻に「――之臣」

【天手ヲ假ル】（天假手）天は自ら爲さず、人力を假りて行ふ義、書經伊訓に「皇天降災、假手于我有命」造攻自鳴條」また左傳に「天將假手於楚以斃之」

【點滴】雨だれなり、唐の杜牧の詩に「――侵寒夢」宋の陸游の詩に「遶簷――如琴筑」

【點鐵成金】（鐵ヲ點シ）鐵を點じて金と爲すなり、詩の小雅に「振旅――」また楚辭に「屬雷師之――兮」また車馬の聲にもいふ、文選左思の蜀都賦に「車馬雷駭轟轟――」また群り行く貌、爾雅釋天に「振旅――」注に「群行ナリ」また雲雨の盛んに起る貌、薛逢の上白相公啓に「飛龍在天、雲雨――」闐は滿なり、塞なり、すべて盛んなる形容に用ふ、

【顛蹶】（テンケツ）　衰ひ思ひて、心の舒びざる貌、禮記に「色容——」

【輾轉】（テンテン）　輾は半轉、轉は周轉の義、臥して席に安んぜざるなり、詩經周南關雎に「悠哉悠哉、——反側」反は輾の過ぐるをいひ、側は轉の留まるをいふ、

【渕涊】（テンアン）　垢濁なり、楚辭に「切——之流俗」また陸機の文賦に「謬玄黃之秩序、故——而不鮮」また玉篇には「——ハ惡醉ノ貌」

【田田】（デンデン）　胸などを擊つ聲、禮記問喪に「殷殷——、如、塊踊然」また蓮葉の水に浮べる貌、江南曲に「江南可採蓮、荷葉何——」

【輾轉反側】（テンテンハンソク）　四字皆臥して席に安んぜざるの意、前の（輾轉）を見よ、また陳風澤陂に「輾轉伏枕」

【點頭】（テントウ）　「ウナヅク」頷するなり、首肯に同じ、侯鯖錄に「一朱衣人——」

【顚頭】（テントウ）　歌舞する者に、錢貨を與ふるをいふ、通鑑の後梁紀に「郎君ノ顚頭、皆承業ノ俸祿ヨリ出ヅ」とあり、成語考に「——錦ヲ用フル ハ舞ヲ助ケテ更ニ嬌ヲ添フルナリ」と、杜甫の贈美人詩に「笑時花滿眼、舞罷錦——」

【傳燈】（デンレン）　祖師の法を傳ふるをいふ、燈の能く暗を破るに喩ふ、釋氏要覽に「自ラ行ジテ彼ヲ化スレバ、則チ功德ヲ以テ子ニ生ズ」（天生德於予）天我に授くるに聖德を以てするをいふ、論語述而に「——、——、桓魋其如予何」

【恬トシテ怪マズ】（テンカイ）　（恬不怪）恬は安なり、ただ安閑と、おちつき居りて、少しも訝り怪まざる義、漢書賈誼傳に「至於俗流失、世壞敗、因恬而不知怪」

【天ニ眼アリ】（テンガン）　（天有眼）天には眼ありて人の善惡を監視するを云ふ、蔡琰の胡笳十八拍に「爲天有眼兮、何不見我獨漂流」

【天ニ跼シ地ニ蹐ス】（テンキョクチセキ）　（跼天蹐地）類書纂要に「跼ハ、身ヲ曲メ、蹐ハ足ヲ累スルヲイフ、畏怖スルナリ」卓氏藻林に「跼天蹐地トハ、恐懼ノ甚シキヲ言フ、天高ク地厚シト雖モ、狹載スルコト能ハザルガ如シ」と、詩の小雅正月篇に「謂天蓋高、不敢不局、謂地蓋厚、不敢不蹐」

【天ニ三日ノ晴ナシ】（テンシンジツ）　（天無三日晴）天には三日間極めて善き晴天のつづくことなし、以て人世は無事なることのみ續くものにあらざるに喩ふ、明詩綜に「——、地無三尺平」

【天ニ私覆ナシ】（テンシフ）　（天無私覆）天道は公平にして私なきをいふ、禮記に「天無私載、地無私載、日月無私照」

【天ニ違フ所ロハ、成ルト雖モ必ズ敗ル】　（天之所違、雖成必敗）管子の語、

【天ノ時ハ地ノ利ニ如カズ】　孟子公孫丑下に「天時不如地利、地利不如人和」時日干支その他天候の宜しきを得たりとも城池の要害よきには如かずとの意、

【天ノナセル孽ハ猶ホ違クベシ、自ラナセル孽ハ逭ガルベカラズ】　（天作孽猶可違、自作孽不可逭）書經の太甲篇の語、孽は音「ゲッ」災なり、違は逃なり、逭は避なり、上に「欲敗度、縱敗禮、以速戾于厥躬」この句あり、戾は罪なり、天災は避くべきも自ら招きたる禍は逃るべからざるをいふ、

【天之美祿】（テンビロク）　酒を稱す、漢書食貨志に「酒天美祿、頤養天年」

【天然】（テンネン）　自然に同じ、後漢書賈逵傳に「通——之明、建大聖之本」

【天ノ未ダ陰雨セザルニ迨ビ牖戸ヲ綢繆ス】（テンイマ——イウコ）　（天之未陰雨、徹彼桑土綢繆牖戸）を見よ、

【天ノ君ヲ立ツルハ民ノ爲メナリ】　わが仁德天皇の語、左傳に「天生民而樹之君、以利之也」また荀子に「天之生民非爲君也、天之立君以爲民也」と同意、

【天ノ違フ所ロハ、成ルト雖モ必ズ敗ル】　（天之所違、雖成必敗）管子の語、

【天ノ時ハ地ノ利ニ如カズ】　孟子公孫丑下に「天時不如地利、地利不如人和」時日干支その他天候の宜しきを得たりとも城池の要害よきには如かずとの意、金城湯池の固も、民心の一致和合せるには如かずとの意、

【天ノナセル孽ハ猶ホ違クベシ、自ラナセル孽ハ逭ガルベカラズ】　（天作孽猶可違、自作孽不可逭）書經の太甲篇の語、孽は音「ゲッ」災なり、違は逃なり、逭は避なり、上に「欲敗度、縱敗禮、以速戾于厥躬」この句あり、戾は罪なり、天災は避くべきも自ら招きたる禍は逃るべからざるをいふ、

【天之美祿】（テンビロク）　酒を稱す、漢書食貨志に「酒天美祿、頤養天年」

【天ノ視ルハ我ガ民ノ視ルニシタガフ】　（天視自我民視）天は無形にして耳目なし、故に其の視聽は、則ちすべて皆衆庶の視聽に從ふとの義、書經に「——、天聽自我民聽」自は從なり、

【天之曆數】（テンレキスウ）　帝王相繼ぐの次第をいふ、猶ほ歲時氣節の順序の如し、書經大禹謨に「——、在汝躬」論語

堯曰に「堯曰、咨爾舜、――――在"璇璣"」

【天馬】 大宛國より出づる駿馬なり、大宛は今の露領「フエルガナ」州なり、史記大宛傳に「大宛多"善馬"、馬汗"血"、其先――子也」注に「大宛國ニ高山アリ、其ノ上ニ馬アリ、得ベカラズ、因リテ五色ノ母馬ヲ取リテ其ノ下ニ置ク、與ニ交リテ駒ヲ生ズ、血ヲ汗ス、因リテ號シテ――ノ子トイフ」(汗血ノ)を參看せよ、

【傳播】 だんだんにひろくつたへしく義、宋史に「所"爲"詞草、往往――在"人口"」

【顚沛】 (造次――)を見よ、

【天ハ高ニ居テ卑キニ聞ク】 久米幹文の水屋集孝子勘七の條に見ゆ、こは三國志の蜀志に「張溫問曰、君學乎、蔡密曰、五尺童子皆學、何必小人、溫復問曰、天有頭乎、密曰、有、在"西方"、詩曰乃眷西顧、以"此推"之、溫曰、天有"耳乎、密曰、天處"高聽"卑、詩云、鶴鳴"九皐"、聲聞"于天"、無"耳何以聽"之」と、ここにては、天は冥冥の裡に照鑑ましますといふ義、

【傳發】 令を傳へて發程せしむるをいふ、史記淮陰侯傳に「夜半――」

【天花ヲ雨ラス】 (天雨"花")因機活法に「梁ノ高僧經ヲ講ズルニ、天、寶花ヲ雨ラシ繽紛トシテ下ル」

【轉法輪ノ相】 佛の出世には必ず八相といふことあり、その中の第七相にて佛の說法をいふ、法輪とは佛の敎法をいふ、惠遠の維摩經疏に「法輪者、從"喩名"之、如"轉輪聖王輪寶能摧"剛强"」とあり、

【天翻地覆】 天のひるがへり、地のくつがへる義、天地に大變動を生ずるをいふ、中庸或問に「三辰失"行"、則必――――」

【佔畢】 佔は視、畢は簡なり、簡を視るは即ち書を讀む義なり、禮記の學記に「今之敎者呻"其――"、多"其訊"、言及"于數"」とあり、呻は吟諷の聲なり、但其の佔ひ視る所ろの簡牘を吟諷して、其の蘊奥に通ずること能はず、徒に多く問を發し、言ふ所ろ又一端に止まらざるをそしる、

【天府】 天然に財物の多く產する沃土をいふ、戰國策に「沃野千里、蓄積饒多、地勢形便、此所"謂――也"」轉じて學問の深きをもいふ、荀子に「學問不"厭好"、士不"倦"、是――也」

【田夫】 農夫なり、禮記に「黃衣黃冠而祭、息"――"也」唐書の倪若水傳に「九夏時忙、三農作苦、――擁"未"盪"婦"持"桑"」

【電赴】 疾行の義、晉書阮王承傳に「卷"甲"――"猶或"有

【句服】 書經禹貢に「五百里"甸服"」の註に「甸服ハ畿內ノ地ナリ、甸ハ田、服ハ事ナリ、皆田賦ノ事ヲ以テス、故ニ之ヲ甸服トイフ、五百里トハ、王城ノ外、四面皆五百里ナリ」

【田文】 戰國の時、齊の人、父嬰、靖郭君と號す、齊の威王の公子なり、齊に相たること二十餘年、文も亦齊に相とし、萬戶に薛に封ぜらる、天下の賢士を招致し、食客常に數千人あり、聲名諸侯に聞え、孟嘗君と號す、

【天兵】 官軍をいふ、明史に「――下"紫荊關"」天軍といひ、王師といふ、皆同じ、

【田雯】 字は綸霞(一ニ子綸トモイフ)山曉子と號し、晚に蒙齋と改む、山東德州の人、康熙三年の進士、戶部侍郎に至る、康熙四十三年卒す、年七十、著すところ古懽堂集三十六卷あり、その詩雄偉奇麗を以て稱せらる、その名は王士禎に及ばずと雖も、亦士禎の勁敵たるを失はず、

【傳聞何ゾ盡ク信ズベケンヤ】 (傳聞何可"盡信")歐陽修の春秋論下に「然則所"傳者"、皆不"可"信乎、曰、――――」

【傳聞ハ親見ニ如カズ】 聞き傳への事は、實見せし如く正確ならざるものなればなり、後漢書馬援傳に「傳聞、不"如"親見"、視"影不"如"察"形"」荀子儒效篇に「聞"之不"若"見"之"」とあるも同じ、

【展墓】 墓に詣づるなり、禮記に「――"而入"」

【電母】 「イナビカリ」三餘贅筆に「俗ニ雷電ヲ呼ビテ雷公電母ト爲ス、亦本ヅク所ロアリ、易ニ震ヲ雷トナシ、離ヲ電トナス、震ハ長男、陽ナリ、而シテ雷ハ天ノ陽氣ニ出ヅ、故ニ俗ニ雷公トイフ、離ヲ中女トナス、陰ナリ、而シテ電ハ地ノ陰氣ニ出ヅ、故ニ――トイフ」

【天保九如】 人の壽を祝するに用ふ、詩經の小雅天保篇に「天保"定爾"、以莫"不"興、如"山如"阜、如"岡如"陵、如"川之方"至、以莫"不"增(中略)如"月之"恒、如"日之"升、如"南山之壽"、不"騫不"崩、如"松柏之茂"、無"不"爾或承"」註に「爾ハ君ヲ指ス、高平ヲ陸トイヒ、大陸ヲ阜トイヒ、大阜ヲ陵トイヒ、山脊ヲ岡トイフ、恒ハ弦ナリ、弦ハ厜ナリ、承ハ繼ナリ」如の字、九ある故に九如といふ、

【天步艱難】 步は運なり、天步は、猶ほ天の時運といふが如し、時運の日日に非なるをいふ、詩の小雅白華に「――――、之子不"猶"」

【典謨訓誥】 古聖賢の定められたる法度訓誨の辭をいふ、書經の堯典・舜典・大禹謨・皐陶謨・伊訓・仲虺之誥・湯

誥・大誥・酒誥・洛誥・康王之誥などを斥していふ、

【田父ノ功】 鷸蚌の爭は、漁父の利といふに同じく、勞せずして功を收むるに喩ふ、戰國策に「韓子盧者天下之疾犬也、東郭逡者海内之狡兎也、韓子盧逐二東郭逡一、環二山者三、騰二山者五、兎極二於前一、犬廢二於後一、犬兎俱罷、各死二其處一、田父見レ之無二勞倦之苦一而擅二其功一」

【天魔】 一切經音義六卷に「梵言魔羅、此云二殺者一、斷二慧命一、故名爲レ魔也」また一解に障能と翻す、修道の爲めに障礙を作すの義、大藏法數に「此魔ハ即チ欲界ノ第六天ナリ、若シ人勝善ヲ勤修シ、三界ノ生死ヲ超越セントスルニ、——爲メニ障碍ヲナス云云」

【頭毛】 頭は「イタダキ」——は、頂髪なり、國語に「班序——二頂髪の黑白をついでて、長幼の等級を定むるなり、」

【天網恢恢疎ニシテ漏サズ】 (天網恢恢疎而不レ漏)天の網は、廣大にして、その目疎く、善惡の報漏るる者ある如くなれどもつひに一人の漏るる者無く、善には必ず善報あり、惡には必ず惡報ありて、一も失ざるをいふ、老子に「天網恢恢疎而不レ失」とあり、唐の朱泚位を簒ひて敗走せし時、野人この語を用ひてそしれり、

【頭末】 事の始より終まで、「イチブシジフ」載復古の句に「題二詩記一——一」

【天空クシテ鳥ノ飛ブニ任ス】 (海闊ク)を見よ、

【纏綿】 まつはり附きて離れざる意、文選の潘岳賦に「思——於墳塋一」

【天文】 日月星辰の錯列し、寒暑陰陽の代變するをいふ、易經繫辭に「觀レ乎——以察二時變一、觀二乎人文一、以化二成天下一」また閒居賦に「窺——之祕奥一、究二人事之終始一」

【天門】 心をいふ、一說に大道なりと、莊子に「——弗レ開矣」老子に「——開闔能爲二雌乎一」開闔は、心の變化運動するをいふ、また天上の門戸なり、晉書陶侃傳に「夢生二八翼一、飛而上レ天、見二——九重一、已登二其八一、唯一門不レ得レ入」

【天與取ラザレバ反リテ其ノ咎ヲ受ク】 天の與ふるところを取らざれば反りて、咎を受くる義、史記の越世家に「范蠡曰ク、會稽ノ事、天、越ヲ以テ吳ニ賜フ、吳取ラズ、今天吳ヲ以テ越ニ賜フ、越其レ天ニ逆フベケンヤ(中略)且ツ夫レ、天與ヲ取ラザレバ、反リテ其ノ咎ヲ受ク」とあり、この語、逸周書にも「天與弗レ取反受二其咎一、當レ斷弗レ斷反招二其亂一」

また史記の淮陰侯列傳にも「天與弗レ取、反受二其咎一、時至不レ行、反受二其殃一」とあり、蒯通が韓信にすすめて

漢に叛きて獨立せしめんとせし時の語なり、

【天籟】 自然に鳴る音響なり、風の樹に觸れて聲をなす類なり、莊子齊物に「女聞二人籟一而未レ聞二地籟一、女聞二地籟一而未レ聞二天籟一夫」の註に「籟ハ簫ナリ」とまた「子游曰ク地籟則衆竅是已、人籟則比竹是已、敢問二天籟一、子綦曰ク、夫吹萬不レ同、而使二其自一已也」

【天吏】 天命を奉行する者をいふ、孟子に「無レ敵二於天下一者——也」とあり、また淮南子に「四時者天之吏也」とあるは、孟子の天吏とは意やや異り、

【天理】 理は條理なり、萬物皆自然の條理あるをいふ、天道に同じ、禮記の樂記に「滅二——而窮二人欲一者也」韓詩外傳に「倚二——一觀二人情一」漢書衛青傳に「逆二——一亂二人倫一」

【天倫】 兄弟をいふ、兄は先、弟は後なると、天の倫次なり、故にいふ、殺梁傳隱元年に「兄弟——也」また劉峻の書に「值二余有一——之感一」李白の春夜宴桃李園序に「會二桃李之芳園一、敍二——之樂事一」

【轉輪王】 輪寶を轉じて四方を平伏するによりて、轉輪聖王とも、——とも、畧して輪王ともいふ、輪寶に金銀銅鐵の四種ありて四王の優劣わかる、俱舍論十二に「此王由二輪旋轉一、應二導威伏一切名一——」

【天祿】 天より賜はる福なり、天祐に同じ、書經大禹謨に「四海困窮——永終」論語堯曰にも出づ、また漢書刑法志に「功成事立則受二——一而永レ年」

また漢の殿閣の名、劉向別傳に「向校二書一——閣、夜暗猶坐誦レ書有二老人一、黃衣杖二青藜杖一、叩レ閣而進」また水經の注に「未央殿東有二——石渠麒麟三閣一」また駱賓王の詩に「校レ文——閣、習レ戰昆明池」

【天王】 天子なり、蔡邕の獨斷に「——諸夏之所レ宗、天下之所二歸往一、故稱二——一」また日知錄に「尚書ニハ但王ト稱ス、春秋ハ則チ——トイヒ、以テ當時ノ楚吳徐越ノ僭王ニ別ツ」春秋隱元年に「秋七月——使二宰咺一來、歸二惠公仲子之賵一」賵は喪を助くる物なり、

【天皇】 天子の稱、項峻の始學篇に「天地立有二——一」舊唐書高宗紀に「改二皇帝一稱二——一」支那にては唐の高宗のみ——と稱せり、その他は皆皇帝と稱せり、

【田橫、義漢ニ臣タラズ】 (田橫義不レ臣レ漢)田橫は齊王田榮の弟なり、通鑑輯覽に「彭越既受二漢封一、田橫與二其屬徒五百餘人一入レ海、居二島中一、帝(漢の高祖)恐二其爲一レ亂、赦二橫罪一召レ之、橫謝曰、臣烹二陛下之使酈生一、今聞二其弟商爲一漢將一、臣恐懼不レ敢奉二詔一、使還報、帝乃詔二衛尉酈商一曰、齊王田橫即至、敢動搖者族二夷其一、乃復使二使具一告レ以

詔商狀曰、田橫來、大者王、小者乃侯、耳、不來、且發兵加誅、橫乃與其客二人、乘傳詣洛陽、至尸鄕廐置、謂其客曰、橫始與漢王俱南面稱孤、今漢王爲天子、而橫乃爲亡虜、北面事之、其恥固已甚矣、且吾烹人之兄、與其弟幷肩而事主、縱彼畏天子之詔、不敢動、我獨不愧于心乎、遂自剄、令客奉其頭、從使者馳奏之、帝爲流涕、以王禮葬之、拜其二客爲都尉、橫既葬、二客穿其冢傍孔、皆自剄下從之、帝聞之大驚、以橫客皆賢、餘五百人尙在海中、使使召之、至則聞橫死、亦皆自殺」

【寺】 釋名に「寺ハ嗣ナリ、事ヲ治ムル者ソノ內ニ、相嗣續スルヲ謂フ」故に天子に九寺あり「ヤクショ」後漢明帝永平十年、佛法初て至る、印度の僧摩騰竺法蘭、白馬を以て經像を馱して洛陽に屆る、勅して鴻臚寺に於て安置せしめ、十一年戊辰に至り勅して雍門の外に於て別に寺を建て、白馬を以て名となす、即ち漢土佛寺の始なり、六帖に「精舍・梵宮・寶地・紺園・化城・淨土・鷲峯・布金地・招提・道場ハ皆佛寺ナリ」

題精舍寺　　錢　起

勝景不易過、入門神頓清、房房占山色、處處分泉聲、詩思竹邊得、道心松下生、何時來此地、擺落世閒情、

格言七則

天地鬼神之道、皆惡滿盈、謙虛冲損可以免」（顏氏家訓）

天道先者後之、秋、以成歲、爲政先令後誅、以爲治（揚子）

天下之務、當下與天下共之、豈一人之智、所能獨了（宋書顏延之傳）

天下之禍、莫甚於殺已人、爲陰德者、亦莫大於活已人（藥夢得避暑錄）

天下之理、愚或化譬、譬或化愚、是以聖人、居常慮變（關尹子）

天下之所以平者、政平也、政之所以平者、人平也、人之所以平者、心平也、夫平猶權衡然、加銖兩則移矣（子華子）

天下之勢、猶持衡然、此首重則彼尾輕（唐書李石傳）

【斁】 蠹に同じ、說文に「木中蟲也」莊子人閒世に「以爲柱則蠹是不材之木也」續博物志に「積穀則生蠹」又一魚は紙を食ふ「シミ」說苑の說叢に「一喙作柱梁、蚊痴走牛羊」商子に諺を引きて「一衆則木折、隙大則牆壞」

【塗鴉】 紙上に墨を塗りて鴉の如くなるをいふ、書言故事に「人ノ見ノ幼ナルヲ言ヒテ塗抹詩書ト曰フ、盧仝ノ示添丁（添丁は盧仝の子の名）詩忽來案上飜墨汁、塗抹詩書如老鴉、父憐母惜摑不得、却生癡笑今人嗟」また文字の拙きをいふ、劉炳の詩に「病目——不作字、紛牋香墨惜烏絲」烏絲は界紙なり、

【吐握】 賢者を求むる心の切なる義、吐哺握髮の約語、李白の與韓荊州書に「豈不以周公之風、躬——之事（吐哺）を見よ、

【怒蛙ニ式ス】 （式怒蛙ニ式は車前の橫木なり、立乘する者、身を俛し、式を撫てて以て人を禮敬するなり、轼に作る同じ、韓非子內儲說上に「越王吳ヲ伐ツヲ慮ル、人ノ死ヲ輕ズルヲ欲スルヤ、出デテ怒蛙ヲ見ル、乃チ之ガ爲メニ式ス、從者曰ハク、奚ゾ此ヲ敬スルト、王曰ク、其ノ氣アルガ爲メノ故ナリト、明年頭ヲ以テ王ニ獻ゼント請フ者、歲ニ十餘人、此ニ由リテ之ヲ觀レバ、之ヲ礼ムルハ以テ人ヲ勸ムルニ足レリ」越絕書にも「句踐既ニ吳ニ辱メラル、常ニ禮ヲ盡シテ士ニ接シ、以テ吳ヲ平ゲント思フ、一日出遊シ、怒蛙ヲ見テ句踐之ニ式ス、左右曰ク、王怒蛙ニ式スルハ何ゾヤト、答ヘテ曰ク、蛙是ノ如ク怒ル、何ゾ敢テ揖セザランヤト、是ニ於テ勇士之ヲ聞キ、越ニ歸シテ吳ヲ平グ」

【屠維】 己なり（十干）を見よ、

【杜佑】 字は君卿、唐の京兆萬年の人、官檢校司徒中書門下平章事に至り太保を加へらる、學を好み、貴しと雖も、夜分なほ讀書す、元和七年卒す、年七十八、安簡と謚す、著すところ通典二百卷あり、

【杜宇】 「ホトトギス」の異名、禽經に「江左曰子規、蜀右曰——」杜鵑ともいふ、蜀王本紀に「鼈靈死、其屍逆江而流至蜀、王杜宇以爲相、宇自以德不及靈、傳位而去、其魄化爲鳥、因名此亦曰杜鵑」即望帝也」華陽志には「望帝禪位於開明、升西山隱焉、時適二月、子規鳥鳴、故蜀人悲鳥鳴也」とあり、何れにしても妄誕なるべし（杜鵑）を參看せよ、

【同惡相助ク】 惡人も、其の希望を達せんが爲めには、互に助け合ひて力を盡すをいふ、史記吳王濞傳に「——同好相留、同情相成、同欲相趨、同利相死」

【偸安】 一寸のがれに、安をむさぼるをいふ、賈誼新書に「夫レ火ヲ抱キテ、之ヲ積薪ノ下ニ措キテ、而シテ其ノ上ニ寢ス、火未ダ燃ユルニ及バズ、因リテ之ヲ安シト云フハ、偸安スル者ナリ」とあり、又史記の二世本紀に「偸安日ニことあり、偸は苟且なり、一日一日と安んじ、後日を慮らざるをいふ、朱熹の詩に「年豐何意且偸安」

【同安】 福建泉州府に屬する縣名、

【蓋安于】 周の人、趙簡子晉陽を治めしむ、民その政を樂む、

【等夷】 夷は猶ほ儕の如し、同じ儕輩をいふ、史記留侯世家に「諸將皆陛下故——」

【同寅】 同僚の義、但し大臣などの身分に用ふるを妥當とす、書經皐陶謨に「——協恭、和衷哉」とあるに本づく、寅は畏れつつしむ義、その寅畏を同じくしその恭敬を協はして官職に從ふ義、疏に「——ハ今借リテ同僚トナス」

【同雲】 詩經に「上天——、雨雪雰雰」草氏藻林に「雲一色

也、上天同雲、將雪之候」

【董永ガ身ヲ賣リシ志】 十訓抄第六に見ゆ、搜神記に「後漢董永、家貧傭作、以養其父、父歿、貸錢於里之富人裴氏、許身爲奴、以償所貸、得錢五千、營葬、葬畢、忽道遇一婦人、求爲永妻、永與俱詣錢主、遂織絹於裴氏、織三百綵、以償、一月而畢、辭永去、乃曰、我天之織女也、緣君至孝、天帝令我助君償、言訖、凌空而去」

【童謠】 はやり歌をいふ、諸は樂器を用ひずして歌ふをいふ、列子仲尼篇に「堯天下ヲ治ムル五十年、天下治マルカ、治マラザルカ、億兆己ヲ戴クヲ願フカ、己ヲ戴クヲ願ハザルカヲ知ラズ、顧ミテ左右ニ問フ、左右知ラズ、外朝ニ問フ、外朝知ラズ、在野ニ問フ、在野知ラズ、堯乃チ微服シテ康衢ニ游ブ、兒童謠ヒテ曰ク、立我烝民、莫匪爾極、不識不知、順帝之則ト、堯喜ビ、宮ニ還リテ、舜ヲ召シテ禪ルニ天下ヲ以テス」

【桐葉弟ヲ封ズ】 (天子ニ戲言ナシ)を見よ、

【凍ヲ呵ス】 (呵凍)寒さきびしく筆硯こほりたるに息を吹きかけて文を草し字を書くをいふ、天寶遺事に「李白撰詔誥時、大寒硯凍、帝勅宮嬪執牙筆呵之」

【等ヲ躡ユ】 (躡レ等)禮記の學記に「學不レ躐レ等也」の正義に「躐、踰越也」とあり、次第順序によらず、一足飛びに

等級を踰ゆる義、

【銅ヲ以テ鑑ト爲セバ衣冠ヲ正スベシ】 通鑑に「唐太宗曰、以レ銅爲レ鑑、可レ正レ衣冠、以レ古爲レ鑑、可レ知レ興廢、以レ人爲レ鑑、可レ知レ得レ失、今魏徵死、一鑑亡矣」

【頭ヲ以テ地ヲ拾ク】 (以頭拾レ地)俯伏して哀を乞ふをいふ、戰國策に「布衣之怒、亦免レ冠徒跣、以頭抢レ地耳」司馬遷の書に「見レ獄吏則頭抢レ地」

【棟折レ榱崩ル】 棟は桷なり「タルキ」棟上に相交りて直ちに榱に達す、故に棟折るるときは、榱隨ひて崩る、上官つまづけば、下僚隨ひてたふるるに喩ふ、左傳に「——僑將壓」僑は公孫僑、

【登遐】 遐は遠なり、遠きに升る義にて、帝王の崩ずるをいふ遐一に假に作る、列子に「帝登假、百姓號之二百餘年不レ輟」帝は黃帝、楚辭には登霞に作る借字なり、禮記の曲禮に「天子——」陳澔曰く「遐ハ乃チ遠邈ノ義、——ハソノ升ルトコロ高遠ヲイフ、猶ホ漢書ニ、大行ト稱スルガ如シ」升遐また陟方に同じ、

【東海塵ヲ揚グ】 海の變して陸となるをいふ(滄海變ジテ)を見よ、

【東海ノ波ヲ蹈ミテ仲連ガ跡ヲ尋ネ】 太平記卷二十一に見ゆ、齊の人魯仲連趙に遊ぶ、時に秦趙を圍むこと

急なり、魏の使者新垣衍が趙に勸め秦を尊びて帝となさんとするを聞く、是に於て連衍を見て曰く、彼の秦は禮義を棄てて首功を上ぶの國なり、彼れ即卑然として帝となり、政を天下に爲さば、則ち連東海を蹈んで死するあらんのみと、秦の軍之を聞きて却くこと五十里、衍曰く吾乃ち今にして仲連の天下の士たるを知るのみと、詳しくは戰國策、史記列傳等を見よ、

【鄧艾ノ口】 口の吃するをいふ「ドモリ」魏將鄧艾、吃を患ふ晉の文帝艾に戲れて曰く、稱する毎に艾艾といふ、幾艾あるを知らずと、艾答へて曰く、假へば孔子の鳳や鳳やと云へるが如し、亦只一鳳あるのみと、

【登高】 續齊諧記に「汝南ノ桓景、費長房ニ隨ヒ、游學スル累年、長房景ニ謂ヒテ曰ク、九月九日、汝ガ家當ニ災厄アルベシ、宜シク急ニ去ルベシ、家人ヲシテ各絳嚢ヲ作リ、茱萸ヲ盛リ、以テ臂ニ繫ケ、高キニ登リ、菊花酒ヲ飲マバ、此ノ禍ヲ除クベシト、景ソノ言ノ如クシ、家ヲ擧ゲテ山ニ登リ、夕ニ還レバ、雞犬牛羊一時ニ暴死スルヲ見ル、長房之ヲ聞キテ曰ク、此レ汝等ガ命ニ代ルナリト、今、世人九日高キニ登リ、酒ヲ飲ミ、婦人ハ茱萸嚢ヲ帶ブル、蓋シ此ニ始マル」されども此の說虛妄信ずべからず、西京雜記に「戚夫人ガ侍兒賈佩蘭宮中

ニ在リテ九月九日蓬餌ヲ食ヒ、菊花酒ヲノム、此ノ如クスレバ人ヲシテ長壽ナラシム」とあれば、漢初すでにこの事あるを知るべし（遙ニ知ル）を見よ、

【同庚】 年齒を庚といふ、同年齡の義、墨客揮犀に「文彥博、居洛日、年七十八、與和眴司馬旦、席汝言爲同庚會各賦詩一首」とあり、齊年・同甲・同齒・同甲子など、皆同じ、

【東行西走】 齷齪として東西に奔走する義、易林に「——、喪其犬馬（また南行北走、延頸望食）」

【登高自卑】（高ニ登ル）を見よ、

【冬學】 宋の陸游の詩の注に「農家十月ニ、子ヲ遣ハシ入學セシム、之ヲ——トイフ、讀ム所ロノ書ハ、雜字百家姓ノ類ナリ、之ヲ村書トイフ」

【同學】 同門に同じ、漢書蕭望之傳に見ゆ、また後漢書張酺傳の注に「酺祖充與光武同レ門學」

【頭角ヲ見ハス】（見頭角）衆中に傑出するをいふ（嶄然トシテ）を見よ、

【投轄】 人を款留するをいふ、漢書陳遵傳の字面（轄ヲ投ズ）を見よ

【東家ノ丘】 孔子の隣家の恐人が孔子の聖人なることを知らざりし故事に本づきて、己が鄉里に賢人のあることを知らざるに喩ふ、孔子家語に「孔子西家有レ愚夫一、不レ能レ識二孔子是聖人一、乃曰、彼東家丘」邴原遠く游學せんと欲し、安丘の孫崧に詣る、崧辭して曰く、君が鄉里の鄉君（名ハ玄、字ハ康成）は學古今を覽、博聞强識、深を鉤し遠を致す、誠に學者の師模なり、君乃ち之を捨てて屣を千里に蹈むは、所謂鄭を以て東家の丘となすなりと、原曰く人各〻志あり、向ふ所ろ同じからず（中略）君は謂ふ、僕が鄭を以て東家の丘と爲すと、即ち君は僕を以て西家の愚夫とするかと、

【同甲】 「オナイドシ」筆談に「文潞公（節）洛日、年七十八、嘗爲——會各賦詩一首」

【等閑】 「ナホザリ」の義、意を留めざるなり、張謂の詩に「眼前一榜又長滿、心中萬事如等閑」錢起の蹄雁の詩に「瀟湘何事——回、水碧沙明兩岸苔」

【東岸西岸ノ柳、遲速同ジカラズ】（南枝北枝ノ）を見よ、

【恫疑】 虛辭を以て人をそそかす義、史記、蘇秦傳に「——虛喝」一解に恐れ疑ふなり、

【同軌】 車の轍の度を同じくする義（同文）を見よ、また中國の諸侯の義、左傳隱元年に「天子七月而葬、——畢至、諸侯五月同盟至、大夫三月同位至、士踰月外姻至」注に「——トイフハ以テ四夷ノ國ニ分ツ」

【動悸】 悸は「ムネサワグ」——は心おそれてむねのさわぐをいふ、後漢書に「心中——」悸に同じ、

【同氣相求ム】 類を以てあつまる義にて、易の乾の卦の文言の字面、吳越春秋に「同病相憐、同氣相收」とあるも同義、

【彤弓】 「アカクヌリタル」弓、書經に「——一、彤矢百」

【崇其昌】 字は玄宰、明の華亭の人、萬歷十七年の進士、官禮部尚書に至る、書畫に精し、崇禎九年卒す、年八十三、畫史會要に「其昌ノ山水樹石烟雲流潤、神氣具足シ、而シテ出スニ倫雅ノ筆ヲ以テス、風流蘊藉、本朝第一トナス」畫禪隨筆に「其昌イフ、余ノ畫少クシテ黃子久ノ山水ヲ學ビ、中ゴロ復タ去リテ宋人ノ畫ヲ爲ル、又云フ、余ノ畫、文太史ト較スルニ、各〻短長アリ、文ノ精工具體ハ吾ノ及バザルトコロ、古雅秀潤ニ至リテハ更ニ一籌ヲ進ムト」

【同歸ニシテ殊塗】（同歸而殊塗）天下の理は、本一にして、之に趨くの路を異にする義、易經繫辭に「天下——一致而百慮」魏志に「文武殊途、勳烈同歸」

【同氣ノ親】 兄弟の親みをいふ、後漢書東平王蒼傳に「蒼上疏歸職曰、凡匹夫一介、尙不忘簞食之惠、況臣居宰相之位同氣之親哉」

【踰居】 安を踰みて位に居るをいふ、國語に「國斯無刑——幸生」

【毀瘠】 字は友封、唐の元和二年の進士、元稹の浙東を觀察するや、奏して副使と爲す、性溫雅にして論を持する能はず、士友言議の際、吻動いて發する能はず、白居易等目して囁嚅翁と爲す、五言の詩に長ず、年六十にして歿す、

【登極】 天子の御即位をいふ、貞觀政要に「自——以來、大事三數件」註に「北極ハ天極ト爲ス、ソノ位ニ居テ衆星之ニ拱ス、人君ノ象アリ、故ニ人君ノ即位ヲ——ト爲ス」踐祚・踐極に同じ、

【東宮】 太子をいふ、左傳の隱三年の——の註に「太子敢テ上位ニ居ラズ、故ニ常ニ東宮ニ居ル」疏に「四時ハ東ヲ春トナス、萬物生長スルハ東ニ在リ、西ヲ秋トナス、萬物成就スルハ西ニアリ、此ヲ以テ、君西宮ニ在リ、太子常ニ東宮ニ居ルナリ、或ハ易象ニ據リ、西北ヲ乾ト爲シ、乾ヲ父君トナス、故ニ君西ニ在リ、東方ハ震、震ヲ長男トナス、故ニ太子東宮ニ在ルナリ」また按ずるに東宮の稱、詩經及び左傳より出づ、もとは以て諸侯の世子を稱す、後世專ら皇太子の稱とす、其の春宮と

いひ、青宮といふは、皆此より轉用すと、名物六帖に見ゆ、詩經衞風碩人の「——之妹」の傳に「——ハ齊ノ太子ナリ」疏に「太子——ニ居ル」なほ易の震卦を參看せよ、

【東君】　太陽をいふ、史記封禪書に「五帝——雲中司命之屬」の註に「——日也」と、されど後世多くは、春の神の稱とす、

【頭會箕歛】　頭會は、民の頭數に隨ひて其の稅を取り、箕歛は箕を以ておさめ取る如く多く稅をおさむるをいふ、史記張耳陳餘傳に「——、以供軍費」また淮南子に「頭會箕賦輸於少府」とあるも同じ、

【東皇】　春の神なり　尙書緯に「春爲——又爲青帝」

【東郭貌】　戰國策の齊策に「——者天下之狡兎也」韓愈の毛穎傳に「居東郭者曰貌」

【東郭ノ履】　史記滑稽傳に「東方朔、東郭先生ト號ス、久シク詔ヲ公車ニ待ツ、貧寒ニシテ衣履完タカラズ、雪中ニ行クニ、履上アリ下無シ、足盡ク地ヲ踐ム、道中ノ人之ヲ笑フ」

【豆花水】　宋史河渠志に「七月菽豆方ニ秀ヅ、之ヲ——ト謂フ」

【投瓜得瓊】　微物を贈りて厚き返禮を得たる義（報瓊）を見よ

【豆花ノ雨】　秋日豆花の開く頃の雨をいふ、古詩に「秋景不肯退、那堪官路長、絲絲——、便作十分涼」荊楚歲時記に「里俗以八月雨爲——」

【燈火將ニ滅セントシテ光ヲ增ス】　事の將に亡びんとする際一時盛んなるが如き觀あるに喩ふ、法滅盡經に「聖王去後吾法滅盡、譬如油燈臨欲滅時光更猛盛便滅」

【投繯】　「クビククル」品字箋に「繯ハ環ナリ、索ヲ以テ繯トナシテ自ラ縊ル、之ヲ——トイフ、罪人常ニ決スベクシテ絞ヲ受クル、之ヲ繯頭トイフ」

【恫瘝】　恫は痛なり、瘝は病なり、疾痛といふが如し、書經康誥に「嗚呼小子封、——乃身敬哉」

【鬪很】　鬪は爭ふ義、很は一音コン忿り戻る義「イサカヒ」孟子に「好勇——、以危父母」很は很の俗字なり、

【童丱】　丱は總角（アゲマキ）なり、小兒の髮の形、詩經に「總角丱兮」とあり、——は幼童をいふ、晉書嘉容庾蔵記に「安北將軍張華、雅有知人之鑒、庾——時往謁之、華甚歎異」

【彤管ノ貽】　彤は赤色なり、赤管の筆をいふ、女子の用ふるもの、よりて女の文章を贈りて慇懃の情を通ずるをいふ、詩經邶風靜女篇に「靜女其孌、貽我彤管」を見よ

【潼關ノ戰】　太平記卷九に見ゆ「潼關ハ華州華陰縣ニ在リ」杜佑の通典に「潼關ハモト衝關ト名ヅク、ソハ河水龍門ヨリ南流シ華山ニ衝激シテ東スルニヨリテナリ」と、此地にて古より大戰數度あり、ここなるは玄宗皇帝の時、高仙芝祿山と戰ひ、兵互に多く死せしを斥すか、

【燈火稍親ムベシ】　秋になれば心爽かにして、燈火に親み書を讀むに適するをいふ、韓愈の符讀書城南と題する詩中の句、

木之就規矩、在梓匠輪輿、人之能爲人、由腹有詩書、詩書勤乃有、不勤腹空虛、欲知學之力、貧愚同一初、由其不能學、所入遂異閭、兩家各生子、提孩巧相如、少長聚嬉戲、不殊同隊魚、年至十二三、頭角稍相疎、二十漸乖張、清溝映汗渠、三十骨骼成、乃一龍一豬、飛黃騰踏去、不能顧蟾蜍、一爲馬前卒、鞭背生蟲蛆、一爲公與相、潭潭府中居、問之何因爾、學與不學歟、金壁雖重寶、費用難貯儲、學問淺之乎、身在則有餘、君子與小人、不繫父母且、不見公與相、起身自犂鋤、不見三公後、寒饑出無廬、文章豈不貴、經訓乃當途、潢潦無根源、朝滿夕已除、

【燈花喜ヲ報ズ】　燈火に花を生ずれば吉事のある前兆の「シラセ」なりといふ、談書に「樊噲問陸賈曰自古人君受命於天、有瑞應乎、賈曰目瞤得酒食、燈花得錢財、乾鵲噪而行人至、蜘蛛集而百事喜、小既有徵、大亦宜然」

【鬪雞】　錦字箋に「秦漢時記ニ、寒食ノ節、城市各〻雞ヲ鬪ハシ、狗ヲ走ラシ戲ヲ爲ス、資典ニイフ、——走狗清明前夜」荊楚歲時記に「寒食——」

【冬月被ナシ】　（孫晨）を見よ、

【同業相仇ス】　俗にいふ商賣「ガタキ」なり、素書に「同美相妬——」

【董源】　宋の畫人、圖畫見聞志に「——字ハ北苑、南唐ニ事ヘ、後苑副使トナル、畫山水ヲ善クス、水墨ハ王維ニ類シ、著色ハ李思訓ノ如シ」夢溪筆談に「——秋嵐遠景ニ工ナリ、多ク江南ノ眞山ヲ寫ス、奇峭ノ筆ヲ爲サズ」畫史寶傳に「寫ストコロノ風雨溪谷煙雲晦明ト夫ノ千態萬狀重汀絕岸トハ、荊關ノ後、殆ドソノ人歟」

【投壺】 古昔宴飲の時、才藝を講論するの禮、矢を執りて壺中に投ずるなり、禮記の投壺篇ニ「——之禮、主人奉レ矢、司射奉レ中、使二人執レ壺、主人請曰、某有二枉矢哨壺一、請以二樂賓一」註に「枉ハ不直、哨ハ不正ナリ」と壺の中に矢を投げ入るる一種の遊戲なり、詳しくは右の投壺篇を見よ、左傳に「晉侯與二齊侯一無レ設二——一」王禹偁の黃岡竹樓記に「宜——矢聲錚錚然」

【銅鼓】 「ドラ」三才圖會に「——ハ銅ヲ鑄テ之ヲ爲ル、ソノ一面ヲ虛シクシ懸ケテ之ヲ擊ツ、南蠻多ク此ノ器ヲ精シクス、ソノ聲數里ニ聞ユルモノハ蠻人モ亦以テ珍ト爲ス」

【同工異曲】 音樂のたくみなる點は同じくして、その演ずるところの曲調は異なるをいふ、轉じて詩文などにもいふ、韓愈の進學解に「子雲相如——」

【同功一體】 功績と體度とを同一にする義、漢書に「淮南王黥布、帝ノ韓信ヲ殺シ、彭越ヲ醢ニセシヲ見テ、——ノ人タルヲ以テ自ラ禍ノ及バンコトヲ疑ヒ、遂ニ反ス、高帝自ラ將トシテ之ヲ擊ツ」

【董狐ノ筆】 直筆して憚る所ろなきをいふ、左傳の宣二年に「趙穿靈公ヲ桃園ニ攻ム、宣子未ダ山(晉の境の山なり)ヲ出デズシテ復ヘル、太史書シテ曰ク、趙盾其ノ君ヲ弑スト、以テ朝ニ示ス、宣子曰ク、然ラズト、對ヘテ曰ク、子ハ正卿トナリテ、亡ゲテ竟(さかひ)ヲ越エズ、反リテ賊ヲ討タズ、子ニアラズシテ誰ゾト、孔子曰ク、董狐ハ古ノ良史ナリ、法ヲ書シテ隱サズト」穿は趙盾の從父昆弟の子なり、靈公趙盾を殺さんとす、故に出奔せしなり、文天祥正氣歌に「在晉——」

【僮昏】 僮は無知、昏は闇愚の者なり、國語に「——不可使レ謀」

【東西】 俗に物といふ義、今の支那官話にも用ふ「トンシイ」と發音す、通雅諺原門に「齊豫章王嶷傳、嶷謂上曰、南山萬歲、殆似二貌言一、以二臣所一レ懷、願陛下極二壽百歲一、上曰、百年亦何可レ得、止得——一百、於レ事亦濟、則謂レ物曰——」

【東西南北ノ人】 住所を一定せず、さまよふ者、禮記に「今丘也東西南北之人也」杜甫の詩に「甫也——人」また各所より、集り來れる人をもいふ、

【鬪草】 「ハナクラベ」荊楚歲時記に「競採二百藥一、謂ヘラク百草ハ以テ毒氣ヲ蠲除スト、故ニ世ニ——戲アリ」(百草を見よ)

【東作】 春月歲功方に興りて、當に作起すべき所ろの事なり、書經堯典に「寅賓二出日一、平二秋——一」寅は敬なり、賓は禮接すること、賓客の如きなり、出日は、方に出るの日なり、

【同産】 兄弟をいふ、史記孝文紀に「使二毋一レ罪之父母妻子——一坐之、及爲二收孥一戮其不取」また漢書にも「——子一人」註に「——ハ兄弟ナリ、——ノ子ハ、即チ兄弟ノ子ナリ」

【冬至】 二十四氣の一、太陽の黃道に於て赤道より南最も遠き處に至れる時、此時晝最も短くして夜最も長し、今大抵十二月二十二日なり、陰曆にては十一月中にあり、これを節日として賀す、殊に其の朔日に當れるは朔旦冬至といひて、二十年に一度ありて、瑞祥として禁中に公事あり、冬至に反して太陽の最も北に達し、晝最も長く夜最も短き時を夏至とす、大抵六月二十二日なり、通曆に云ふ「地皇氏十一月ヲ以テ冬至トス」玉燭寶典にいふ「冬至ハ陰陽萬物ノ始メ、日南ニ極リ影極メテ長シ、故ニ履長ノ賀アリ」淡雜事に云ふ「冬至ハ陽生ジ、君子ノ道長ズ、故ニ賀ス」これを以て見れば、冬至の賀は漢より起るならん、歲時記に「晉魏ノ閒、宮中、紅線ヲ以テ日影ヲ量ル、冬至ノ後、日ニ長サ一線ヲ添フ」

【登時】 即時の義、秉燭譚に「律ニ——ト云フコトアリ、即時トイフコトニテ「ソノママ」ト訓スベシ、然レドモ字書ニコノ解ナシ、固ニ欠事ナラズヤ、艾隱筆記ニ、房杜傳登殺用二唐律即時爲一レ登、即時殺之也、律ニ——殺傷者勿レ論ト、近比諸子ト讀史ノ次ニミレバ晉書載記百九卷ニ、登加二罪戮一、又集異記ニ急命二紙筆一登卽紀錄又云諸女慟哭登藥於路又云及レ瘥登言於醫工ト、コノ登ノ字イヅレモ即時ノ義ナリ、シカレバ登トイヒテモ、當時トイヒテモ即時ノ義ニ通用ス、唐以前ヨリノ俗語ト見エタリ、後世ハ多クハ見アタラズ」

【般子】 「スゴロク」の「サイ」五代史に「以——擲レ之、而勝者爲レ直」

【瞳子】 眼中の「ヒトミ」唐書に「——黑白明徹」

【銅臭】 後漢書の崔烈傳に「靈帝ノ時、鴻都門ヲ開キ、榜シテ官爵ヲ賣ル、公卿以下皆差アリ、烈、錢五百萬ヲ入レテ司徒トナル、嘗テ其ノ子鈞ニ問ヒテ曰ク、吾レ三公ニ居ル、議者ニ於テ如何ト、鈞曰ク、大人少クシテ英稱アリ、位卿守ヲ歷タリ、人イフ當ニ三公タルベシト、今、其ノ位ニ登リテ天下望ヲ失フト、烈曰ク、何爲ゾ然ルヤト、鈞曰ク、論者其ノ銅臭ヲ嫌フト」

【同舟相救フ】 利害を同じくする者は、危急の場合に臨みては、知ると知らざるとの別なく、期せずして相

救ふに喩ふ、孫子九地篇に「吳人與越人相惡也、當其同」舟濟而遇」風、其相救也、如左右手」戰國策にも類語あり、

【同臭味】 同類の義、黃庭堅の詩に「與」君草木臭味同」「臭味」を見よ、

【冬日可愛】【等身書】 「セイダケノシヨモツ」楊升菴集に「宋ノ賈黃中、幼キ日、聰悟人ニ過グ、父師書ヲ取リテソノ身ト相等シクシテ之ヲ讀マシム、之ヲ——ト謂フ」

【同而不和】 (同而不和)同は阿比するなり、和は心のうち和らぎて戻ることなきなり、小人の人と相與みするは、何事も彼に同じて、彼、是なりといへば、我も是なりといひ彼、非なりといへば、我も亦非なりといひ、すべて阿り比黨するものなれども、固より義理に本づきて然るにあらざれば忽ち事に臨みて乖き戻れる心生じて心底より打ち和くことなきをいふ、君子は之に反せり、論語子路篇に「子曰、君子和而不同、小人同而不和」

【東昌】 西漢の侯國、今の直隸冀州武邑縣の東北、また晉南宋南齊の廣陵郡——縣は、當に江西の境に在りたるなるべし 元の中書省——路、明の山東省——府は、今の山東——府聊城縣治これなり、

【東牀】 「ムスメ」の壻をいふ、釋常談に「女壻之ヲ——ト謂フ、太尉郗鑒、門生ヲシテ女壻ヲ王導ノ家ニ求メシム、王氏ノ子弟咸自ラ矜持ス、唯一人坦腹シテ臥シ、旁ニ人無キガ若シ、郗大尉ノ曰ク、——坦腹ノ者佳壻ナリト、訪問スレバ乃チ羲之ナリ、遂ニ女ヲ以テコレニ妻ス」羲之字は逸少、司徒導の從子、詳しくは晉書王羲之傳を見よ、

【桐城】 安徽省安慶府に屬する縣の名、漢の樅陽、晉の龍舒の地、唐以後桐城と改む、一に皖江ともいふ、

【同情】 二人心情を同じくする義(同惡)を見よ、

【銅爵臺】 魏の曹操の築きし臺の名、爵は雀なり、屋上に銅製の鳳凰を棲ましむ、故に名づく、魏志に「建安十五年冬、太祖乃于鄴作——ここまた鄴中記に「鄴城西、立臺、皆因城爲基趾、中央名——北則冰井臺、西臺高六十七丈、上作銅鳳二云云」

【冬青】 和名「モチノキ」群芳譜に「——一名凍青、一名萬年枝、女貞別種也」棄苑詳註に「——一名萬年、一名長生皆別名也、漢晉殿前多植之」盧多遜の詩に「太液池邊看月時、好風吹動萬年枝(——樹)」を見よ、

【同儕】 儕は等輩なり、同じ「ナカマ」をいふ、左傳僖二十三年に「晉鄭——」

【同聲相應】 同じ聲は互に相應ずる義、易經乾卦の文言に「子曰、——同氣相求、水流濕、雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩、本乎天者親上、本乎地者親下、則各從其類也」

【同聲異俗】 人性は本同じきも、習慣の爲めに變ずる義、荀子勸學篇に「于越夷貊之子、生而同聲、長而異俗、敎使之然也」于越は猶ほ吳越といふが如し、

【動靜物】 動は禽獸蟲魚の類、靜は草木の類、史記五帝紀に「動靜之物、小大之神」

【洞簫】 漢晉元帝紀贊に「鼓琴悲吹——注に「洞ハ通ナリ、簫ノ底ナキ者」蘇軾の前赤壁賦に「客有吹——者」

【邵析子】 一卷、周の邵析撰す、邵析は鄭人、子產より少しく後に出でたる人なるべし、この書無厚轉詞の二篇に分つ、篇數漢書藝文志と合す、されどもその文節次相屬せず、疑ふらくは後人の掇拾に係るなるべし、その說中韓黃老の閒に在り、簡明目錄これを法家類に入れたるは當れり、

【東漸】 東の方へ「ダンダン」に進む義、書經の禹貢に「東漸于海、西被于流沙」とあるに本づく、韻會に「漸ハ、進ムナリ」、轉じて佛法の東方諸國に弘まりしにも用ふ、翻譯名義集に「敎法——」

【登仙】 天に上りて仙人となる義、蘇軾の前赤壁賦に「飄飄乎如遺世獨立羽化而——ここの語莊子天地篇に「千歲厭世去而上仙」とあるに本づくか、

【冬扇夏爐】 時務に適せざる無益の說に喩ふ、王充論衡に「益ナキノ能ヲ作シ補ナキノ說ヲ納ル、猶夏ヲ以テ爐ヲ進メ、冬ヲ以テ扇ヲ奏ムルガ如シ、亦徒ノミ」

【董仙ノ杏林】 圓機活法に「董奉廬山ニ居ル、病ヲ治シ、重キ者ハ杏五株ヲ種エシメ、輕キ者ハ一株、董仙ガ杏林ト號ス」

【抖擻】 舉る貌「サッパリ」と拂ひ去る意あり、一に斗藪また抖擻に作る、揚子方言に「東齊曰鋪頒、猶秦晉言——也」王炎の夜半聞雨詩に「抖擻胸中三斗塵」また梵語に、抖擻といふは行脚して物を乞ふ意、また「ヨステピト」をいふ、釋氏要覽に「梵語杜多、華言——」——また王維詩に「——餬貧里」

【同窓】 同寮に同じ、また同學の義にも用ふ、丹鉛錄に「文選注寮小窓ナリ、同官ヲ寮ト爲ス、ソノ齋署同窓ヲ義トナス、今士子、業ヲ同ジクスルヲ同窓ト曰フ、官ハ事ヲ先ニシ、士ハ志ヲ先ニス、官ノ同寮モ亦士ノ同窓

ナリ」

【螣蛇足ナクシテ飛ブ】 螣蛇は龍に似たる蛇、雲霧を興してその中に游ぶといふ、以て心を用ふること專一なれば必ず成功するに喩ふ、荀子勸學篇に「螣蛇無足而飛、梧鼠五技而窮」(螣鼠ノ)を參看せよ、

【凍餒】 饑寒に同じ、孟子梁惠王下に「——其妻子ニ

【逗撓】 逗は留まるなり、撓は屈弱なり、敵を見て留り撓みて畏るるをいふ、漢書韓安國傳に「廷尉當恢——」當斬」恢は王恢、

【同堂兄弟】 父方の「イトコ」略して堂兄弟ともいふ、北史公孫表傳に「祖季眞云、二公孫——耳、吉凶會集、便有士庶之異ニ恒言錄に「舊唐書中宗紀ニ、堂兄左金吾將軍鬱林郡公千里ヲ封ジテ、成紀郡王ト爲ス、通典ニ宋庾蔚ノ說ヲ載ス、今人從父昆弟ヲ謂ヒテ同堂ト爲スト、又通典ヲ按ズルニ同堂姊・堂姑・堂外甥・堂姨舅ノ稱アリ、蓋シ六朝ノ人猶ホ同堂ト稱ス、唐ノ時同字ヲ省去ス」

【東道ノ主人】 主人となりて來客の用を辦ずるをいふ、左傳の僖三十年に「若舍鄭以爲東道ノ主行李之往來ニ共其乏困ニ君亦無所害」とあるに本づく、行李は使人なり、共は供なり、野客叢書にいふ「左傳有倚鄭爲東道主之言、後漢光武謂耿弇、鄧晨等皆曰、北道主人、北史魏孝武謂成陽王曰、昨得汝主簿爲南道主人、於是又有南道主人之說、史傳之閒獨未聞西道主之說」耳云云」

【銅駝街】 洛陽記に「洛陽有——、漢鑄銅駝三枚在宮西四會道相對、俗語曰、金馬門外集衆賢、銅駝陌上集少年、わが西京二條通の異名を銅駝坊といふは此に本づく、

【銅駝ノ荊棘ニ在ルヲ嘆ズ】 國亡びて都も荒れはて野原となるを嘆ずる義、成語考に「索靖知亡嘆銅駝會在荊棘ニと、註に「駝ハ獸ノ名(らくだ)銅駝ハ、宮門外銅鑄ノ駝ナリ、荊棘ハ刺アル木ナリ、宮門以外ノ地、將ニ荊棘ヲ生ゼントス、故ニ索靖晉國ノ將ニ亡ビントヲ知リテ、乃チ宮門外ノ銅駝ヲ指シテ嘆ジテ曰ク、會ズ汝ノ荊棘中ニ在ルヲ見ン耳」とあり、

【登壇】 大將を拜命する式、場に登る義、史記淮陰侯傳に「蕭何言、王欲拜信爲大將、必擇良日齋戒設壇場具禮乃可、王許之」轉じて大將となりし人をもいふ、

【董仲舒】 (昔ノ董生)を見よ、

【撞著】 撞は突なり、著は助辭なり、前後突き合ひて矛盾する義(自家——)を見よ、

【銅柱界ヲ爲ス】 後漢書馬援傳の注に「廣州記ニ曰ク、援交阯ニ到リ銅柱ヲ立テ漢ノ極界ト爲ス」

【東儲】 太子なり、南齊書に「太子曰——」

【投杼ノ疑】 謹愼の人も、讒にあふこと、たびかさなれば、他の疑をまねくに喩ふ、魯人曾參と姓を同くするものあり、人を殺せり、而して參の母方に機を織れり、人あり來りて其の母に告げて曰く、曾參人を殺せりと、母曰く、參は必らず人を殺さずと、俄頃にして又人あり、來りて其の母に告げて曰く、曾參人を殺せりと、母亦信ぜず、此の如きこと三度、其の母乃ち懼き疑ひ、杼を投じ門を出でて望めり、復た人の來るあり、其の母之れに問へば、答へて曰く、人を殺せるものは、母の子にあらずと、杼とは「ハタ」の「ヒ」なり、詳しくは史記の甘茂の傳を見よ、

【洞庭湖】 湖南省に在り、禹貢の九江なり、岳陽風土記に「水經ニイフ湖水廣五百里、日月ソノ中ニ出沒ス、大抵湖上舟行、流ニ泝リテ順風ニ遇ヒ、之ニ人力ヲ加フルトキハ、旦ヨリ暮ニ及ブマデ、二百里ヲ行クベシ、君山ハ——中ニ在リ杜甫の詩に「昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南坼、乾坤日夜浮云云」孟浩然ノ詩ニ「八月湖水平、涵空混太清、氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城云云」(彭蠡湖)を參看せよ、

【洞庭浚シト雖モ之ヲ負ム者ハ北グ云云】 太平記卷九に見ゆ、文選の左太冲魏都賦の句なり、注に「浚ハ深ナリ、負ハ恃ナリ、深阻タリト雖モ、德ナクシテ之ヲ恃ム者ハ必ズ、奔北ヲ見ル、軍敗ルルヲ北トイフ」と、洞庭は呉の境にあり、

【東都】 唐書に「寶應元年以京兆府爲上都、河南府爲東都、鳳翔府爲西都、江陵府爲南都、太原府爲北都」

【鼕鼕】 太鼓の聲、唐書馬周傳に「請置六街鼓、號爲一鼓」劉永之の詩に「候雞晨喔喔、警鼓夜——」

【鬆鬆】 前の鼕鼕に同じ、

【頭童齒豁】 山に草木なきを童といふ、因りて人の頭の禿げたるをいふ、齒豁は齒の墜ちて隙あるをいふ、四字老人を形容す、韓愈の進學解に「——、竟死何神」

【洞洞屬屬】 洞洞は敬の表裏「ヘダテ」なきをいひ、屬屬は誠實にして僞なきをいふ、また恭しき貌とも註す、禮記の禮器に「洞洞乎其敬也、屬屬乎其忠也」一解に、洞洞は質愨の貌、屬屬は專一の貌、また同書に「孝子如執玉、如奉盈——然如不勝、如將失之」

【登頓】 高きところにのぼりてやすむ、杜詩の「——生

厨陰」の註に「——ハ登臨シテ少シク頓息スルナリ」

【登年】 年を歴ること多きなり、國語周語に「若——以戒其毒、必亡」戒は行ふなり、

【同年生】 同じ年の進士及第者、事文類聚に「詢其履歴、乃——」とあり、國史補に「得第謂之進士、互相推敬謂之先登、俱捷謂之同年」と、捷とは及第せしなり、

【同胞】 兄弟をいふ、淡書の東方朔傳に「同胞ノ徒、容居スル所ナシ」の註に「胞ハ胞胎ナリ」

【同袍】 朋友をいふ、袍は長襦なり、朋友は互に困窮を救ふの義あり、故にその著るところの袍を貸して之れを共にする義、詩經の秦風無衣に「豈曰無衣、與子同——」

【洞房】 閨中なり、楚辭招魂に「姱容修態絙——」

【洞房花燭】 閨中の美くしき燭光なり、庾信の詠舞詩に「——明、燕餘雙舞輕」後世は專ら婚姻の宴に用ふ、花一に華に作る、

【東方朔肉ヲ劃ク】 事文類聚前集十卷に、東方朔の本傳を引きて「伏日ニ、詔シテ從官ニ肉ヲ賜フ、太官日晏クシテ來ラズ、東方朔獨リ劒ヲ拔キテ肉ヲ劃ク、同官ニ謂ヒテ曰ク、伏日ハ當ニ蚤ク歸ルベシ、請フ賜ヲ受ケント、即チ肉ヲ懷ニシテ去ル、太官之ヲ奏ス、朔入ル、上之ヲ問フ、朔冠ヲ免シ謝シテ曰ク、朔來リテ賜ヲ受クルニ、詔ヲ待タザルハ、何ゾ無禮ナルヤ、劒ヲ拔キ肉ヲ劃クハ、一ニ何ゾ壯ナルヤ、之ヲ劃クコト多カラザルハ、又何ゾ廉ナルヤ、歸リテ細君ニ遺ル、又何ゾ仁ナルヤト、上笑ヒテ曰ク、先生ヲシテ自ラ責メシメ、乃チ反リテ自ラ譽メシムト、復酒一石肉百斤ヲ賜フ」

【東方朔ノ流亞】 東方朔、字は曼倩、漢の武帝に事へ、滑稽諧謔に長じ、談笑の間に諷刺の意を寓せり、故に滑稽の者を稱してその流亞(ツギ)といふ、前條を參看せよ、

【東坡巾】 蘇東坡の自ら爲りて冠したる頭巾の名、通俗編に「東坡居士集、父老爭看烏角巾、應緣曾見宰官身、溪邊古路三叉口、獨立斜陽數過人、按後人取此詩意、寫東坡像、因有——之稱」

【銅鈸】 銅盤また鐃鈸ともいふ、法華經に「琶琵鐃——」

【頭髮種種】 老いて髮の短きをいふ、左傳昭三年に「余髮如此種種」

【東坂ノ三養】 (三養)を見よ、

【幢幡】 幢は梵語に脫閣といひ、幡は波多迦といふ、今は——にて單に「ハタ」の義に用ふ、法華經に「一一塔廟ニ各千——」

【投筆】 (筆ヲ投ズ)を見よ、

【冬冰折ル可シ】 文子に「冬冰可折、夏木可結」とあり、水も冰となれば折るべく、木も柔條は結ぶべし、剛柔の本性も時によりて異るを致すに喩ふ、

【豆腐】 即ち豆腐なり、淮南等の異名あり、

【東風】 「ヒガシカゼ」春多く吹くによりて春風の義とす、禮記の月令に「——解凍」

【動物】 人畜の類をいふ、文選張衡の西京賦に「植物斯生、——斯止」

【同文】 中庸二十八章に「今天下車同軌、書同文、行同倫」の註に「軌ハ轍迹ノ度、倫ハ次序ノ體、三ツノ者皆同ジ、言フココロハ、天下一統セルナリ」

【登聞鼓】 朝廷に鼓を懸け設き臣民の諫を進め、又は情を述べんと欲する者あれば之を擊ちて通ぜしむるをいふ、文獻通考に「古者誹謗ノ木、敢諫ノ鼓アリ、治道ヲ通ジテ諫者ヲ來ス所以ナリ、宋朝ハ鼓司ト爲ス、景德四年、詔シテ改メテ——院ト爲ス、諸ノ上封ヲ掌リテ之ヲ進メ、以テ萬人ノ情ヲ達セシム」(誹謗ノ木)を參看せよ、

【投杼】 (杼ヲ投ズ)を見よ、

【東平】 漢の國名、兗州に屬す、南宋北魏は郡名、今の山東泰安府東平州の東二十清里に在り、また明の山東省兗州府——州は即ち今の東平州治なり、

【東平王蒼】 東平は漢の國の名(善ヲ爲ス最モ)を見よ、

【同病相憐】 難苦を同じくする者は、互におもひやりありて、憐み助くる義、吳越春秋に「——、同憂相收」

【東壁】 文章をつかさどる星の名なり、二十八宿の一、晉書の天文志に「東壁二星、主文章、天下圖書之祕府也」

【菫北苑】 (菫源)を見よ、

【僮僕其ノ恩ヲ稱ス、以テ政ニ從フ可シ】 (僮僕稱其恩、可以從政矣)文中子の語、己が召しつかふ僮僕が恩に感ずる程の人、必ず政務に與るの才能ありとの義、

【同盟】 諸侯相共に盟約を結ぶをいふ(同軌)を見よ、

【同明相照シ同類相求ム】 明は光明なり、物皆類を以て相從ふをいふ、史記伯夷傳に「——、——雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩」(同聲相應ズ)を參看せよ、

【童蒙】 蒙は味なり稚なり、童稚にして蒙昧なる義、易に「匪我求——、——求我」

【投杼】 (杼ヲ)を見よ、

【童蒙訓】 三卷、宋の呂本中撰す、この書家塾訓課の本にて、正論格言多く、務めて實用に切、身を立て政に從ふの道に於て裨益するところ多し、

【童蒙須知】 (朱熹ノ)を見よ、

【童蒙我ニ求ム】 (童蒙求我)幼稚蒙昧の者、敎を我に求むる義、易經蒙卦に「匪我求童蒙、——」蒙求といふ書名は、この語に本づく、

【同門】 「アヒデシ」漢書儒林傳に見ゆ、註に「——ハ師ヲ同クシテ學ブ者ナリ」後漢書王丹傳には同門生とあり、

【登庸】 庸は用なり人才を擢用するなり書經の堯典に「時(是)者(ノ)時——」時は誰なり、

【騰踊】 物價の「アガル」をいふ、類書纂要に「物價騰踊」の註に「物大ニ貴キナリ」とあり、漢書魏相傳に「今歲不登穀糓騰踊」

【動容周旋禮ニ中ル】 「タチヰフルマヒ」の禮法にかなふをいふ、孟子の盡心篇に「動容周旋中レ禮者、盛德之至也」

【登來】 求め得たるなり、公羊傳隱五年に「——之也」の註に「——ハ讀ンデ得來トナス、齊人求メ得タルヲ——トナス」

【東流】 川をいふ、莊子に「海不レ辭レ東流一大之至也」とあり、支那の地勢は東に低下せり、川皆東流す、故に川を東流といふ(南方沿海ノ地ハ、莊子ノ時ニハ未ダ支那ノ版圖ニ屬セズ)

【逗留】 留まりて進まざるなり、漢書匈奴傳に「祁連知レ虜在レ前、——不レ進」

【東籬ノ菊】 陶淵明の飲酒の詩に「采レ菊東籬ノ下、悠然見レ南山」

【東林黨】 明は神宗の頃より、國勢漸く衰へ、尋て東林の黨起りて、朝政愈〻亂れたり、初め顧憲成といふ者、事を以て神宗に黜けられ、鄕に歸り學を東林書院に講じ、同志を集めて時世を諷議す、天下の學者これに附く者多く、自ら一大民黨となれり、是に於て廷臣はその徒を目して東林黨と稱し、軋轢益〻甚し、時に東林黨の葉向高相となり、その黨を任用し、黨勢漸く盛なりしが、宦者魏忠賢熹宗に寵用せらるるに至り、力めて東林黨を抑壓し、清流の徒を排斥せんとし、天啓二年六月、前副都御史楊漣・僉都御史左光斗・給事中魏大中・御史袁化中・太僕少卿周朝瑞・陝西副使顧大章を獄に下し、拷掠慘酷、禮完膚無し、秋に至り俱に獄卒の斃す所ろと爲る、獨り大章未だ死せず、群小いふ、諸人潛に竊る、以て人心を脈かす無しと、乃ち罪を定めて天下に布告し、大章を鎭撫司に移す、大章曰く、吾安んぞ再び此の獄に入るべけんやと、繯に投じて卒す、前吏部尚書趙南星等の籍を削る、是に於て朝政甚だ紊れ、熹宗崩じ、思宗立つに及び、李自成・張獻忠の徒、尋て亂を起し、明遂に亡ぶ、

【棟梁之器】 屋の脊柱を棟といひ、棟を負ふを梁といふ、重任に耐ふる材器を稱す、南史の陸凱傳に「宰相之門、豫章梧柏、雖レ小已有二棟梁之器一」

【登龍門】 龍門は、黃河の上流に在り、鯉魚之に登ることを得れば、化して龍と爲るといふ、由りて人の榮達するに比す、後漢書李膺傳に「膺以二聲名一自高、士有レ被レ其容接一者、名爲二——一」李白の與韓荊州書に「一登二龍門一則聲價十倍」(點額)を參看せよ、

【東流】 東漸に同じ、佛法を水源の竭さざるに喩へていふ、翻譯名義集に「大法——爲二日諒久一雖二風移政變一而弘之不レ易」——」を參看せよ、

【同僚】 同官を僚と爲す、寮に同じ、詩經大雅板に「我雖レ異レ事、及爾同僚」左傳文七年に「同官爲レ寮、吾嘗同寮、敢不レ盡レ心乎云云」

【同輩ヲ辭ス】 (辭同輩)漢書に「班婕妤、成帝初メテ位ニ即クニ當リ、選マレテ後宮ニ入ル、成帝後庭ニ遊ビ、嘗テ婕妤ト輦ヲ同ジクシ載ラント欲ス、婕妤辭シテ曰ク、古圖畫ヲ觀ルニ、聖賢ノ君ハ皆名臣側ニ在ルアリ、三代ノ末、乃チ嬖妾有リ、今輦ヲ同ジクセント欲ス、近似セル無キヲ得ン乎ト、上其ノ言ヲ善シトシ、而シテ止ム」

【燈籠錦】 燈籠の形を織り成せる錦をいふ、十八史略に「文彥博向守蜀、以二——一獻二貴妃一、得二執政一、又吹劍錄に「仁宗上元宴、張貴妃服二——一、曰文彥博所レ獻、蓋錦上織二成燈籠一也」宋史には奇錦に作れり、張貴妃は仁宗の妃張氏、

【燈籠草】 「ホホヅキグサ」實の燈籠に似たるによりて名づく、祕傳花鏡に「王母珠一名酸漿俗名——」

【滕六巽二】 滕六は、雪の神、巽二は、風の神なり、幽怪錄に「令滕六降二雪巽二起一風」

【滕王閣】 大明一統志に「南昌府——ハ府城ノ西章江門外城上ニ在リ、西、大江ニ臨ム、唐ノ高祖ノ子、元嬰、洪州ヲ都督スル時建ツ、閣成リテ命至リ封ジテ滕王ト爲ス故ニ其ノ閣ニ名ヅク、夾ムニ二亭ヲ以テス、南ヲ壓江トイヒ、北ヲ挹秀トイフ」咸亨二年閻伯嶼洪州の牧となり、大に此に宴す、其の壻に宿命して序を

爲らしめ以て客に誇らんとし、因りて紙筆を出して徧く客に請ふ、敢て當る者なし、王勃席に在りて最も少し、之を受けて辭せず、都督怒りて吏をしてその文を伺はしむ、輒ち報ずること一再す、報語益奇なり、乃ち瞿然として曰く天才なりと、王勃の序竝に詩は古文眞寶後集に收む、

【杜衍】 字は世昌、山陰の人、少より操を勵まし篤學す、宋の大中祥符中進士甲科に擢てられ、州縣を歷て皆政績あり、慶曆中相となり、富弼・韓琦・范中淹と同じく弊事を革め以て紀綱を修む、而して衍尤も僥倖を抑絕す、是に由りて僥倖する者、やうやく悅ばず、相たること百日にして罷む、太子少師を以て致仕し、後ち太子大傅に進み、祁國公に封ぜらる、太平興國戊寅に生れ、嘉祐丁酉卒す、年八十、正獻と謚す、衍性淸介にして私產を殖せず、年七十致仕を請ふ、第宅皐陌之に居て裕如たり、時に淸白宰相と號す（——ノ）を參看せよ、

【兎園冊】 五代史の劉岳傳に「宰相馮道、世ゝ本ト田家、狀貌質野、朝士多ク其ノ陋ヲ笑フ、且ニ朝ニ入ラントス任贊劉岳其ノ後ヘニ在リ、道行キテ數反顧ス、贊、岳ニ問フ、道ノ反顧スルハ何ノ爲メゾヤト、岳曰ク兎園冊ヲ遺却スルノミ、兎園冊トハ、鄕校ノ俚儒ノ田夫牧子ヲ敎フルノ誦スル所ロナリ、故ニ岳擧ゲテ以テ道ヲ誚ル、道之ヲ聞キテ大ニ怒リ、岳ヲ祕書監ニ徙ス」通俗編に「郡齋讀書志云、兎園冊十卷、唐虞世南撰、纂古今事ヲ爲四十八門、皆偶儷之語、至五代時行於民閒村塾以授學童、故有遺下——之誚」書言故事に「漢ノ梁ノ孝王ハ竇太后ノ愛子、景帝ノ母弟、孝王園アリ、名ヲ兎苑トイフ、孝王卒ス、太后之ヲ哀愛ス、景帝其ノ苑ヲ以テ民ヲシテ耕種スルヲ得シメ、乃チ官守ヲ置キ、其ノ租稅ヲ藉リテ、以テ祭祀ニ供ス、其ノ簿籍皆俚語ノ字故ニ鄕俗ノ誦スル所ロヲ兎園冊トイフ」とあり、

【杜衍ノ節儉】 宋元通鑑に「宋ノ杜衍、布衣ヨリ相タルニ至ルマデ、衣服飮食加フル所ロナシ、妻子ト雖モ、亦品節アリ、家故ヨリ饒富ナリ、俸祿ノ入ル所ロハ、以テ昆弟ノ貧者及ビ姻族ニ給シ、亦人ノ急難ヲ賑ス、其ノ歸老スルニ至リテ、宅ノ以テ居ルベキナクシテ、南京ノ驛舍ニ寓スルコト久シ」

【戶ヲ出デズシテ天下ヲ知ル】 （不出戶、知天下）居ながら天下の事を知るをいふ老子に「不出戶知天下、不窺牖見天道」とあり、聖人は、その身戶を出でずして、居ながら天下の事を知り、牖を窺はずして坐ながら天道の運を知るをいふ、

【戶ヲ閉デ書ヲ讀ム】 （閉戶讀書）晉の張方賢の楚國先賢傳に「孫敬字ハ文寶、常ニ戶ヲ閉デ書ヲ讀ム、睡ラントスレバ卽チ繩ヲ以テ頭ニ繫ケ、之ヲ梁上ニ懸ク、嘗テ市ニ入ル、市人之ヲ見テ皆曰ク、閉戶先生來ルト」敬は三國の時の人なり、

【蹔下】 賤劣の義、史記刺客傳に「臣——恐不足任使」

【塗改淸廟生民ノ詩】 典雅なる經書の文字を滅し改めて、別に一の好文章を作爲する義（點竄）を見よ、

【杜康】 古の酒を作りし人なり、博物志に「——造酒」とあり、よりて酒の異名とす、魏武帝樂府短歌行に「對酒當歌、人生幾何、譬如朝露、去日苦多、慨當以慷、憂思難忘、何以解憂、唯有——」

【登高】 九月九日の節句に高きところに登る故事なり（——）を見よ、

【都講】 學舍の長なり、後漢書楊震傳に「——取魚而進」

【土梗】 其の粗を得て其の精を得ざる義、莊子田子方篇に「吾所學者在——耳」一解に——は土偶なり、因りて眞物に非る者をいふと、

【妬悍】 「ネタム」心ありて「キバヤシ」南唐近事に「其妻張氏、——十急」

【奴顏婢膝】 人に對して卑屈なる「ミニクキ」態度をいふ、抱朴子に「交際以——爲曉解」陸龜蒙の詩に「——眞乞丐、反以正直爲狂癡」

【谷ヲ引ク】 （引谷）を見よ、

【尤メテ之ニ效フ】 （尤而效之）人の過失を咎めながら己亦之を爲すをいふ、左傳に「——、罪又甚焉」

【土宜】 風土に適する產物をいふ、左傳成二年に「先王疆理天下、物土之宜而布其利」と、疆は界なり、理は正すなり、物土之宜とは、播殖の物、各〻土の宜しきに從ふなり、周禮土方氏に「辨——之法」

【土儀】 「ミヤゲ」東京夢華錄に「謂之門外——」土遺・土產皆同じ、

【土簞】 韓非子に「昔者堯有天下、飯於土簞、飮於土鉶」簞は黍稷を盛る器、丙圖く外方、一斗二升を容る、

【菟裘】 魯の邑、泰山梁父縣の南に在り、左傳隱十一年に「隱公曰、使營——、吾將老焉」と、後人よりて、致仕して隱居する所の稱とす、蘇軾の詩に「一林叢竹吾——」本朝文粹一に、前中書王の、——賦並序あり、參看せよ、

【土牛木馬】 周書に「蘇綽、門資アリテ才具ナキ人ヲ嘲リテイフ、猶ホ土木ニテ造リタル牛馬ノ、形ノミハ似テ用ヲナサザルガ如シ」

【時ト俯仰セズ】（不與時俯仰）時俗と苟も合はざるをいふ、宋紀に「許景衡、程頤ノ學ヲ得、志慮忠純不與時俯仰、帝之ヲ思ヒテ曰ク、朕即位ヨリ以來、政ヲ執ル忠直、事ニ遇ヒ敢言スルハ惟景衡耳ト」

【時ニ遇ハズ】（不遇時）不仕合の義、時勢に合はざるをいふ、史記李廣傳に「文帝曰、惜乎、子ノ時ニ當ラズ、如令子當高帝時、萬戸侯豈足道哉」

【時ハ失フベカラズ】（時不可失）時機は一たび去れば復たかへらず、故に失ふべからず、書經に「爾尚弼予一人、永清四海、時哉弗可失」戰國策に「敵不可易、——

【時ハ得難クシテ失ヒ易シ】時機は失ふ可からざるをいふ、史記の淮陰侯傳に「蒯通曰ク、夫レ功ハ成リ難クシテ、而シテ敗レ易シ、時者難得而易失、時ナルカナ、時ハ再ビ來ラズ」とあり、また史記の齊世家にも「武王已平商而王天下、封師尚父於齊營丘、東就國、道宿行遲、逆旅之人曰、吾聞時難得而易失、客寢甚安、殆非就國者也云云」（尺璧ヲ貴バズ）を見よ、

【度曲】歌曲を製する義、漢書元帝紀贊に「帝多才藝、善史書、鼓琴瑟、吹洞簫、自度曲、被歌聲」また歌をうたひて曲譜に合はす義、文選の張衡の西京賦に「度曲未終、雲飛雪起」一解に度音タク野客叢書卷四に考說あり、參看せよ、

【德】廣韻に「——ハ行ナリ」集韻に「——ハ行ノ得ルナリ」正韻に「凡ソ——ト言フハ、善美正大光明純懿ノ稱ナリ」易の乾卦に「君子進德修業」詩經大雅に「民之秉彝好是懿德」書經洪範に「三德、一曰正直、二曰剛克、三曰柔克」また恩惠の義、詩小雅に「既飽以德」また恩に感ずる義、左傳成三年に「王曰、然則德我乎」疏に「德、彼ニ加ハリテ、彼、ソノ恩ヲ荷フ、故ニ荷恩ヲ謂ヒテ德ト爲ス」書經に「德無常師、主善爲師」呂氏春秋に「德也者萬民之宰也」史記商君列傳に、商書を引きて「恃德者昌、恃力者亡」左傳に「棄德崇姦、禍之大者也」說苑に「施德者貴不德、受恩者尚必報」

【德アル者必ズ言アリ】（有德者必有言）論語憲問篇に「子曰、——ハ——ニ、有言者不必有德」とあり、內に德ある者は、平生の涵養深く、和順の心外に發して、必ず能く言ふことあるものなり、されど能く言ふ人の中には、便佞にして巧に言ひまはして一時を閉に合すものもあれば、その內に德あることは必としては請合はれぬなり、

【得意】思ひ通りになりし義、司馬法に「天子——則愷歌史記蔡澤傳に「高宮室大廣囿以明——ニ

【德友】德を以て交る友をいふ、莊子に「吾與孔丘非君臣也、——而已矣」

【猶侑】侑は貴人に相伴して食事する義、また酬ゆる義、——は、一人にて酒を酌むをいふ、蘇軾の句に「——一尊綠」

【德音】善言の義、詩經大雅皇矣に「貊其——、其德克明」貊は莫なり、莫然として清靜なるをいふ、また令聞の義、詩經に「——不瑕、軼して後世天子の言を稱す、漢書董仲舒傳に「陛下發——下明詔」

【禿翁】頭髮の「ハゲ」たる老翁、史記の魏其武安列傳に「武安怒曰、與長孺共一老——、何爲首鼠兩端」長孺は韓長孺、一解に老禿翁は官位なきをいふ、

【樹ヲ買ヒテ珠ヲ還ス】（買櫝還珠）櫝は櫃なり、故事成語考に「貴ブ所ロヲ知ラザル之ヲ買、櫝還珠トイフ、楚人珠ヲ賣ルニ、木蘭ノ櫃ヲ爲リ、綴ルニ珠玉ヲ以テシ、飾ルニ玫瑰ヲ以テス、鄭人只櫝ノ美ヲ知リテ珠ノ貴キヲ知ラズ、其ノ櫝ヲ買ヒテ其ノ珠ヲ還ス」と委しくは、韓非子の外儲說を見よ、

【德ヲ立ツ】（立德）不朽を見よ、

【德ヲ樹ツルハ滋ヲ務ム】（樹德務滋）滋は長なり、益なり、德を樹ふたつるは滋益を期し、制限する所ろなきをいふ、書經泰誓に「——除惡務盡」また戰國策に「樹ル德莫如滋、除惡莫如盡」

【德ヲ樂ミテ刑ヲ惡ム】（太平ノ人）を見よ、

【犢ヲ舐ルノ愛】（老牛）を見よ、

【德ヲ度リ力ヲ量ル】（度德量力）我が德の稱ふ所ろを度り、我が力の能くする所ろを量るをいふ、左傳に「——而處之、——而行之」また「不——不——」

【德ヲ以テ怨ニ報ユ】（以德報怨）怨恨ある者に、恩惠を施すをいふ、論語憲問に「或人曰、——何如、子曰、何以報德、以直報怨、以德報德」

【獨眼龍】隻眼（カタメ）の英雄をいふ、唐書に「德宗ノ時、黃巢反ス、李克用之ヲ破ル、時ノ人其ノ一目眇ニシテ勇アルヲ以テ、號シテ獨眼龍トナス」と、五代史唐紀に「李克用少驍勇、軍中號曰「李鴉兒」其一目眇、及其貴也、又號——ト」我國にては伊達政宗を——と稱す、また隻眼の高德ある人をもいふ、五燈會元に見ゆ、

【德器】行の成るを德といひ才の成るを器といふ、淡書杜周傳贊に「張湯杜周竝起文墨小吏、致位三公、列于酷吏、而俱有良子、——自過爵位、尊顯繼世立朝」呂氏家訓に「故公——成就、大異衆人ニ

【德禽】 成語考に「雞有二五德一、故稱二之曰一德禽一」とあり、もと祕傳花錢に出づ（雞）を見よ、

【悳過】 悳は責め正すなり過ちをとがめ責むるをいふ、史記項羽紀に「聞二大王有一レ意一レ之、脫身獨去」

【讀韋】 韋を品評し、その題詩をも玩味する義（韋ヲ讀ムを見よ、

【踕跔科頭】 踕跔は、跣足なり「ハダシ」科頭は兜鍪を著けざるをいふ、史記張儀傳に「——貫頤奮擊者、至不可勝計」「ハダシ」て頭をあらはし、敵の箭に頤を貫かるるも顧みず、戟を執りて奮戰するもの多きをいふ、

【倚牀鶡】 名賢詩話に「宋ノ王素、筮仕ヨリシテ、至ル所稱シテ能吏ト爲ス、既ニシテ御史臺ニ升ル、風力愈ゝ勁シ、嘗テ同列ト事ヲ上ノ前ニ奏ス、事合ハザルコト有レバ、衆皆引キ去ル、素方ニ是非ヲ論列シ、旨ヲ得ルヲ俟テ乃チ退ク、帝曰ク、眞ノ御史ナリト、議者素ヲ目シテ倚牀鶡ト爲ス」鶡は「クマタカ」

【得業】 佛經の語、職を積みたる美稱、業は吳音にて「ゴフ」と讀む、

【獨孤及】 字は至之唐の洛陽の人、幼時孝經を讀む、父毓之曰く、兒何の語を志すかと、對へて曰く、立身行道、揚名於後世の語なりと、代宗の朝、左拾遺と爲り、常州刺史に遷る、貞元十二年卒す、年五十三著すところ毘陵集二十卷あり、

【德孤ナラズ】 （德不レ孤）德ある者は孤立せず必ず隣ありて之に應ずる義、易に「君子敬以直レ內、義以方レ外、敬義立而德不レ孤」また論語の里仁に「德不レ孤必有レ隣」とあり、隣は猶ほ親の如し、德は孤立せず、必ず類を以て應ず、故に德ある者は必ず其の類ありて之に從ふ、居の隣あるが如し、

【獨坐一榻ニ滿ツ】 隋書韋藝傳に「儀容貌瑰偉、每ニ夷狄參謁スルニ、必整二儀衛一、盛服以見レ之、獨坐滿二一榻一、番人畏懼莫二敢仰視一ニ」

【特操】 一定せる操をいふ、莊子の齊物篇に「罔兩景ニ問ヒテ曰ク、曩ニ子行ク、今子止マル、曩ニハ子坐ス、今ハ子起ツ、何ゾ其レ特操ナキヤ」景は影なり、罔兩は景外の微陰（ボンヤリトシタルカゲ）なり、

【禿山】 樹木なきはげ山をいふ、淮南子に「石上不レ生二五穀一——不レ遊二麋鹿一ニ」

【篤疾】 明律に「凡篤疾廢疾獨及——之人」とあり、便讀に「——トハ癲狂瘖瘂兩目盲シ二枝折ルルヲイフ」

【特進】 後漢書和帝紀に「賜二諸侯王公將軍一ニ特進一ニ」とあり、註に「諸侯功德優盛朝廷敬異スル所ロノ者ニハ位特進ヲ賜フ」——は位三公の下に在り、隋の文帝以て散官となす、

【讀朱隨筆】 四卷、清の陸隴其撰す、この書は朱子文集を讀み、筆に隨ひて劄記せるものなり、正集二十九卷以前の詩賦劄子は人の共に知るところなるを以て盡きて論ぜず、三十卷以後別集五卷に至るまでは、則ちその精要を摘み、各案語を加へて以て之を申明せり、

【得色】 「エタリガホ」陸游の老學菴筆記に「通判欣然有二得色一ニ」

【德色】 人に恩德を施したるをほこる意の面色に顯はるるをいふ、漢書賈誼傳に「借父耰鉏、慮有二德色一ニ」耰鉏は田器なり、

【讀非作文譜】 十二卷、清の唐彪撰す、家塾の教科書に充てんために編す、卷一は學基及び讀書總要、卷二三は讀書法、卷四は書法、卷五六は文章總論、卷七は文章諸法、卷八は諸題作法、卷九は文の體裁、卷の十、十一は古文の評及び文章の諸體、卷十二は作詩を論述し、秩序整然として紊れず、初學の參考に資すべし、和版あり、

【讀聖雜志】 八十卷、清の王念孫撰す、逸周書・戰國策・管子・荀子・晏子春秋・墨子・淮南子・史記・漢書・漢隸拾遺の十種に分ち、文字訓詁を釐正せり、この書皇清經解に收めたるは、僅に史漢の一部を抄錄せしのみなり、

【讀書人】 讀書に從事する人、學者をいふ、宋史太祖紀に「太祖謂二盧多遜一、作二宰相須レ用二儒者一ニ」とあると同義、

【讀書尙友】 書を讀みて古人を友とする義、孟子萬章篇に出づ（尙友）を見よ、

【讀書ノ三到】 書を讀むには眼と口と心と三つながら專一に到るべき義、朱子の童蒙須知に「凡讀書須レ整二頓几案一、令二潔淨端正一、將二書冊一整齊頓放、正二身體一對二書冊一、詳緩看レ字、子細分明、讀之須要讀得レ字字響亮、不レ可レ誤二一字一、不レ可レ少二一字一、不レ可レ多二一字一、不レ可レ倒二一字一、不レ可レ牽強暗記、只是要多誦遍數、自然上口、久遠不レ忘、古人云讀書千遍、其義自見、謂二熟讀則不レ待二解說一、自曉二其義一也、余嘗謂讀書有三到、謂二心到眼到口到一、心不在レ此、則眼不レ看レ子細、心眼既不レ專一、却只漫浪誦讀、決不レ能レ記、記亦不レ能レ久也、三到之中、心到最急、心既到矣、眼口豈不レ到乎」

【讀書ノ種子絕エン】 ほんをよむ人の「タネ」がされる、

明史紀事本末に「燕王發北平、僧道衍送之郊、跪而密啓曰、南有方孝孺者、素有學行、武成之日、必不降附、請勿殺之、殺之則天下讀書種子絶矣、燕王首肯之」鶴林玉露に「周益公イフ、士大夫ノ家、讀書種子ヲシテ衰息セシムベケンヤ」

【讀書亡羊】 書を讀みて羊を亡ふ、心、外に馳せて道を失ひたる喩、莊子駢拇篇に「臧與穀二人相與牧羊、而俱亡其羊、問臧奚事、則挾策讀書、問穀奚事、則博塞以遊、二人者事業不同、其於亡羊均也」

【讀書甚解スルヲ求メズ】 (讀書不求甚解)書を讀みて意味の通じ難きところは强て解することを求めず、姑く闕如し置くをいふ、陶潛の五柳先生傳に「好讀書、不求甚解」

【讀書萬卷ヲ破ル】 (讀書破萬卷)書を多く讀むこと、杜甫の贈韋左丞詩に「——下筆如有神」(杜甫)を見よ、

【讀書百遍義自ラ見ユ】 (讀書百遍義自見)書を讀むこと、百遍もくりかへさば、書中の意義自然に明了となるをいふ朱子の訓學齋規には「古人云、讀書千遍、其義自見」(三餘)を見よ、

【讀書分年日程】 三卷、元の程端禮撰す、端禮字は敬叔、畏齋と號す、鄱縣の人、薦を以て建平の敎諭より、台州路の敎授に遷る、この書朱子讀書法に因りて之を修す、朱子の原目なる、居敬持志・循序漸進・熟讀精思・虛心涵泳・切己體察・著緊用力の六條を以て綱と爲し、而してその課程を年月日に分ちて立つ、元史儒學傳に「端禮有讀書工程、國子監嘗以頒郡縣」と稱するは即ち此の書なり、

【讀書錄】 續錄共に二十三卷、明の薛瑄(字ハ德溫)撰す、明代の醇儒瑄を以て首と爲す、この二錄、一も門戶を詬爭する語なし、倫理學の參考とすべし、

【得髓】 敎法の奥義を悟り得たるをいふ、髓は骨髓なり、傳燈錄に「最後惠可禮拜後、依位而立、師曰、汝得吾髓、乃告之曰、昔如來以正法眼藏付迦葉大士、展轉囑累至於我、今付汝、當護持」

【德星】 書言故事に「人ノ訪ハルルヲ、——ノ照臨ヲ辱クストイフ漢ノ陳寔字ハ仲弓、荀淑字ハ季和、寔子姪ト共ニ淑ノ父子ニ造リ、討論ス、時ニ德星聚ル(德星は景星ともてたきほしなり)太史奏シテ曰ク、五百里ノ內、賢人ノ聚ルアラント」太史は天象を觀る官、この故事によりて道德ある人に喩へてもいふ、また歲星の一名を——といふこと、後漢書の註に見ゆ、

【德清】 縣の名、唐の江南道湖州、宋の兩浙路湖州に屬す、今の浙江湖州府——縣治、また宋の河北東路——軍は、今の直隸大名府淸豐縣の西北、

【德政ノ碑】 官吏の德政を頌美せし「イシブミ」水經濟水注に「昌邑有成人班孟堅碑、建和十年、從事秦閎等刊石、頌德政碑也」また白樂天の靑石の詩に「不願作官家道傍——不鐫賢錄鐫虛辭」

【得道】 (道ヲ得)を見よ、

【得脫】 生死の苦を脫して菩提に向ふをいふ、法華經に「——三界苦惱之患」遺敎經に「雖復出家猶未得——」

【獨斷】 二卷、漢の蔡邕撰す、制度文物を辨說せり、白虎通義・風俗通義等と共に漢學を講ずる者の參考とすべし、

【得度】 俗人を濟度して佛道に入らしむる義、また官制にて出家を許せし者に牒を賜ふ、之を受けたるを度者と稱し、牒を度牒といふ、故にその牒を受けたるを——といふ、法華經科註に「俱發菩提心、故云——也」

【得得トシテ來ル】 (得得來)得得は滿足して意氣の揚揚たる貌、碧巖錄一に「達磨遙觀此土有大乘根器、遂泛海得得而來、單傳心印云云」、天下を我物にしたる貌をいふ、東坡の詩に「知是多情——」の注に「僧貫休詩ニ、一餅一鉢垂垂老、萬水千山——」とあるを引けり、王建の詩に「親故應須——」

【德ニ在リ險ニ在ラズ】 (在德不在險)史記の吳起傳に「魏ノ武侯、西河ニ浮ビテ、而シテ下ル、中流ニシテ顧ミテ吳起ニ謂ヒテ曰ク、美ナル哉山河ノ固、此レ魏國ノ寶ナリト、起對ヘテ曰ク、在レ德不レ在レ險、昔、三苗氏洞庭ヲ左ニシ、彭蠡ヲ右ニセシモ、德義修セズ、禹之ヲ滅セリ、夏桀ノ居、河濟ヲ左ニシ、泰華ヲ右ニシ、伊闕其ノ南ニ在リ、羊腸其ノ北ニ在リ、政ヲ修ムルコト不仁、湯之ヲ放テリ、殷紂ノ國、孟門ヲ左ニシ、太行ヲ右ニシテ、常山其ノ北ニ在リ、太河其ノ南ニ經レリ、政ヲ修ムルコト不德、武王之ヲ殺セリ、此ニ由リテ之ヲ觀レバ、德ニ在リ、險ニ在ラズ、若シ君ニシテ德ヲ修メザレバ、舟中ノ人盡ク敵國トナラント」

【德ニ悖ヅルアリ】 (有悖德)德の人に及ばざるを愧づる義、書經仲虺之誥に「成湯放桀南巢、惟——、曰、予恐來世以台爲口實」台は予なり、

【德ノ輶キコト毛ノ如シ】 (德輶如毛)輶は輕なり、德の人に在ること、毛の如く輕し、故に能く之を擧げて行はんこと甚だ易しとの意、詩の大雅に「人亦有言、——

——レ、民鮮ニ克ク之ヲ。

【幞頭】 裹なり「シタオビ」今の「サルマタ」釋名に「裹ハ貫ナリ」兩脚を貫き、上、腰中に繫ぎ、下幞頭に當る、幞頭の穴は、膝下に至り、其の形の似たるによりて云ふ、漢書司馬相如傳に「相如身自著——褌、與ニ犢鼻雜作」次條を參看せよ、

【幞頭ヲ噬ス】（噬ニ幞頭ニ）世說に晉書阮咸傳を引きて「阮仲容、道南ニ居リ、諸阮ハ道北ニ居ル、北阮ハ皆富ミ、南阮ハ貧シ、七月七日、北阮盛ンニ衣ヲ曝ラス、皆綾羅錦綺ナリ、仲容竿ヲ以テ大布ノ幞頭ヲ中庭ニ挂ケテ曰ク、未ダ俗ヲ免カルル能ハズ、聊カ復タ爾ルノミト」仲容は咸の字、李商隱の詩に「明朝噬ニ幞頭ニ方信阮家貧」

【禿筆】 ささのきれたる筆をいふ、東坡志林に「筆禿ニ千枚、墨磨ス萬挺ニ、まだ抽筆の義にも用ふ、

【德風草ニ加フ】 太平記卷九に見ゆ、論語顏淵篇の「君子之德風、小人之德草、草上ニ之風ニ必偃ス」とあるに本づく、但し風草の喩は、書經君陳に「爾維風、下民維草」とあるを以て原とす、

【獨步】 才能衆にぬきでたるをいふ、事文類聚に「王禹偁能ク文ヲ屬ス、太宗方ニ文士ヲ奬拔ス、召サレテ右拾遺ニ拜セラル、禹偁謝拜箴ヲ上リテ以テ誡ト爲ス、尋デ知制誥タリ、上嘗テ之ヲ稱シテ曰ク、王禹偁文章ハ、當今天下獨步」曹植の書に「昔仲宣——於漢南ニ、孔璋鷹ニ揚江漢ニ」仲宣は王粲の字、孔璋は陳琳の字なり、知度論に「師子四足獸中——无畏、能伏ニ一切ニ」

【獨樂園】 宋の司馬光、相を罷め洛に居り、別業を爲り、——と名づけ、自ら記を作りて曰く、

「迂叟平日讀ニ書、上師ニ聖人ニ下友ニ羣賢ニ、窺ニ仁義之原ニ、探ニ禮樂之緒ニ、自ニ未ニ始有ニ形之前ニ、暨ニ四達無窮之外ニ、事物之理、衆人所ニ共集ニ目前ニ可ニ者學之、未ニ至ニ夫可ニ何求ニ於人ニ、何待ニ於外ニ哉、志倦ニ體疲ニ則投ニ竿取ニ魚、執ニ紝采ニ藥、決ニ渠灌ニ花、操ニ斧斤ニ伐ニ竹、濯ニ熱盥ニ水、臨ニ高縱ニ目、逍遙徜徉、惟意所ニ適、明月時至、清風自來、行無ニ所牽ニ止、無ニ所ニ拘ニ礙ニ、耳目肺腸、卷爲ニ己有ニ、踽踽焉洋洋焉、不ニ知ニ天壤之間、復有ニ何樂可ニ以代ニ此也、因合而命ニ之曰ニ獨樂ニ」

【獨立】 他に倚らずして自ら立つなり、荀子に「善用ニ之、則百里之國、足ニ以一ニ矣ニ」と、また易の大過の象に「——不懼」とあるは、天下の人之を非とするも顧みず、獨立して懼れざるをいふ、

【獨立彷ニ徨ス】 劉子新論に「遲疑不ニ以ニ晉行ニ變節ニ、顏回不ニ以ニ夜浴ニ改容ニ、獨立不ニ慚影ニ、獨寢不ニ愧衾ニ」とあり、わが心にくらきことなければ、獨り立ちてもわが影に對して慚づるところなく、獨りいねても衾には愧づる所ろなしとの意にて所謂愼獨の意にかなへり、

【特立獨行】 自ら信ずる所ろに由りて、一身を特立し、一世に獨行するをいふ、禮記の儒行に「其——、有ニ如此者ニ」漢書元帝紀に「舉ニ茂才特立之士ニ」

【都會】 人物の聚まる處をいふ、漢書地理志に「宛西通ニ武關ニ、東受ニ江淮ニ一都之會也」

【度外】 書言故事に「不ニ責ニ人過ニ置ニ之——」トイフ、漢ノ光武苦ヲ兵閙ニ積ム、時ニタダ隗囂公孫述未ダ平ガズ、諸將ニ謂ヒテ曰ク、且ツ當ニ此ノ兩子ヲ度外ニ置クベシト」詳しくは後漢書に出づ、度とは法度の義、

【土劍】 燹アツモノ）を盛る兩耳三足の祭器、——は土燒の粗末なるもの（土簋）を參看せよ、

【怒猊ノ石ヲ抉ルガ如シ】（如ニ怒猊抉ニ石ニ）佩文韻府に「徐浩草書、如ニ怒猊抉ニ石、渴驥奔ニ泉ニ」

【兎缺】 「ミックチ」をいふ、書言故事に「唇ノ缺ケタルヲ——トイフ」晉書に「魏詠之、生レテ——ナリ、後、醫ニ遇ヒ、藥ヲ以テ之ヲ補フ」

【杜鵑】 「ホトトギス」格物論に「——一名ハ杜宇、一名ハ子規、三四月ノ閒、夜啼キ旦ニ達ス、其ノ聲哀ム、而シテ吻ニ血有リ、草木ニ濆ス、初メ聞ケバ則チ離別ノ苦アリ、惟ニ田家其ノ鳴クヲ候ヒ、農事ヲ興ス、或ハイフ啼キ苦シメバ、自ラ樹ニ撻リ、自ラ謝翻思歸樂ト呼ブ、其ノ音ハ不如歸去」（杜宇）を參看せよ、

【杜元凱】 （杜預）を見よ、

【杜鵑花】 「サツキ」容齋隨筆に「——ハ乃チ今ノ映山紅ナリ、マタ紅躑躅ト名ヅク」また三柳軒雜識に「——ヲ仙客トナス」

【杜口】 （口ヲ杜グ）を見よ、

【徒杠】 說文に「石江石橋ナリ」と、徒歩して渡るべき小橋なり、孟子に「歲十一月——成」周の十一月は夏の九月なり、

【屠狗】 「イヌコロシ」史記樊噲傳に「以ニ——ニ爲ス」事」また刺客傳に「荊軻至ル燕ニ、愛ス燕之——者高漸離ニ」

【土工】 「ヤキモノシ」曲禮に「天子之六工、曰ク——金工石工木工獸工草工、典ニ制六材ニ」註に「——ハ陶旋ナリ」と、陶人に同じ、

【土功】 水土を治むる工事をいふ、書經益稷に「惟荒ニ度ル——、弼成ス五服ニ」

【杜工部集】 二十卷、唐の杜甫撰す、甫博く群書を極め、尤も詩を善くす、古詩・近體表・賦・記・說・贊・述・策問・文・

狀碑誌等を收む、古來註釋の書極めて多し、宋徐居仁編、黃鶴補撰の——千家注分類詩二十五卷文二卷首一卷、清の錢謙益の——箋註二十卷、同朱鶴齡の——輯註詩二十卷文二卷末一卷、沈德潛の杜詩偶評四卷、浦起龍の讀杜心解六卷、津阪東陽の杜律詳解三卷等參考すべし(杜甫)を參看せよ、

【奴才】劣れる才、晉書劉元海載記に「遂自奔潰——

也」

【斗筲ノ人】斗は量の名、十升を容る、筲は竹器、斗二升を容る、胸中鄙細なる人物をいふ、成語考に「斗筲ハ其器ノ小ヲ言ヒ、梁棟ハ是レ大材ヲイフ」論語の子路篇に「子貢問フ、今ノ政ニ從フ者ハ何如ト、子曰ク、噫斗筲之人、何足ニ算也」

【塗山】隋の縣名、揚州鍾離郡に屬す、今の安徽鳳陽府懷遠縣の東南に在り、

【土芝】芋の異名、本草に見ゆ、一に蹲鴟ともいふ、

【歲寒クシテ松柏ノ凋ムニ後ルルヲ知ル】(歲寒然後知松栢之後凋)世亂れて忠臣の操を知るに喩ふ、孔子の語、論語子罕に見ゆ、小人の治世に在る、或は君子と異なることなし、惟だ利害に臨み、事變に遇ひて、然る後に君子の守る所ろを見る可きなり、謝良佐曰く、士窮シテ節義ヲ見、世亂レテ忠臣ヲ識ル、學者必ズ德ニ周ネカランコトヲ欲ス」と、荀子に「歲不レ寒無以知松柏、事不レ難無以知君子」

【斗室】一斗「マス」ほどの室にて小室をいふ、清の黃中堅の蚊の詩に「——何來豹腳蚊、殷如雷鼓聚如雲」

【杜子美】(杜甫)を見よ

【杜審言】字は必簡唐の襄陽の人、晉の杜預の後、進士に擧げられ隰城尉となる、才高くして世に傲る、李嶠、崔融蘇味道と文章の四友たり、後ち事を以て官を免し、東都に還る、武后召し見て詩を賦せしめ、著作佐郎を授け、入りて國子監主簿修文館直學士となる、

【都人士】「ミヤコビト」詩經に「彼——、狐裘黃黃」

【賭射】(——)を見よ、

【都匠】だいくの「トウリヤウ」書敘指南に「作頭ヲ——トイフ」大匠作頭・土師・都料匠皆同じ、

【杜衍】爾雅に「——土鹵也」本草經に「——一名杜齊、味辛微溫、久服益氣輕身」楚辭に「山中人兮芳杜若、飲石泉兮蔭松柏」和名は「ヤブメウガ」なり、和訓「カキツバタ」にあつるは誤れり、朱熹の秋夕詩に「一雨涼生——湖、月波微漾綠溪流」

【居者ハ蓑蓍】淮南子に「居者蓑蓍、爲レ車者步行、陶者用鉄盆、匠人處狹廡」わが邦の諺に「紺屋の白袴」といふと同じ、

【徒取】功なくして官爵を取るをいふ、韓非子飾邪篇に「人臣又以——」

【斗酒學士】(王績)を見よ、

【杜荀鶴】字は彥之、牧の子、牧晉て秋浦を鎭す、妾孕むあり、妻之を逐ふ、妾荀鶴を生む、荀鶴官翰林學士知制誥に至る、其の詩律自ら一家を成す、世に晚唐格と號す、

【杜順和尚】唐の人、支那華嚴宗の鼻祖なり、三傳して賢首大師に至り、集めて大成せり、和尚は、太宗より帝心尊者の號を受く、佛祖統紀卷二十九に傳あり、

【圖讖】易の緊辭に「河出圖、洛出書、聖人則之」とあり、河水の中の龍馬の背に、河圖を出だし、洛水の中の、神龜の背に、洛書を出だしたりなり、また廣く書籍の義とす、韓愈の送石處士序に「坐——一室、左右——」

【杜如晦】字は克明、唐の杜陵の人、少くして英邁、事に臨んで善く斷ず、王佐の才あり、太宗引きて文學館の學士となし、僕射に進み、房玄齡と共に朝政を管す、萊國公に封ぜらる、

【斗食】賤吏をいふ、年俸百斛に滿たず、日に一斗二升を禀けて之を食む者、戰國策に「邑中自——以上至

尉内史ニ

【屠所ノ羊】人の死に近づくに喩ふ、摩訶摩耶經に「譬ヘバ旃陀羅ノ羊ヲ驅リテ屠所ニ至ルニ、步步死地ニ近ヅクガ如シ、人命モ亦是ノ如シ」とあり、名義集に「旃陀羅ハ屠者ヲイフ」とあり、涅槃經にも人命の「ハカナキ」に喩へていへり、

【蠹書ノ蟲】爾雅に「蟫白魚也」の注に「衣書中蠹蟲」とあり蠹魚ともいふ、韓愈の詩に「豈殊——一生死文字間」

【茶薺畝ヲ同ジクセズ】(茶薺不同畝)茶は「ニガナ」薺は「ナヅナ」にて味甘し、詩の豳風に「誰謂茶苦、其甘如薺」とあり、茶はもと苦しと雖も、我が棄てらるる苦に比すれば、反つて甘きこと薺の如しとの義、さて——レーレーは、茶薺は畝を同じくして倶に生ぜざるが如く、善人は惡人と倶に居らずとの喩、楚辭に「——レーレー兮」

【杜少陵】(杜甫)を見よ、

【圖籍】土地の圖と、戶口金穀の簿籍となり、史記張儀傳に「據九鼎按——、挾天子」以令於天下、天下莫敢不聽」

【賭射】賞を懸けて射る「カケユミ」をする、魏書楊播傳に上巳に宴を設けて——せしこと見ゆ、

【斗絕】（トゼツ）山の獨立して高峻なる貌、史記封禪書の「成山斗入海（トニウミニイル）」の註に「——シテ曲リテ海ニ入ルナリ」

【斗折蛇行】（トセツダコウ）北斗七星の折れまがれる如く、蛇の行く如く水流又は小徑などの屈折せる狀をいふ、柳宗元の至小邱西小石潭記に「潭西南而望（ミル）、——明滅可見（ミユ）」

【徒涉】（トセウ）水を「カチワタリ」する、白居易の句に「大軍——水如湯（ミヅノヤウナリ）」

【徒善】（トゼン）徒は空なり其の心ありて其の政なきをいふ、孟子離婁上篇に「——不足以爲政（マツリゴトトスルニタラズ）」

【徒然】（トゼン）動かざる貌、居然といふが如し、任昉の表に「瞻彼狀山（ヤマヲ）——望墓（ボヲ）」

【杜撰】（トセン）（——）を見よ、

【屠蘇】（トソ）荊楚歲時記に「正月一日ハ是レ三元ノ日ナリ、長幼次ヲ以テ拜賀シ、——酒ヲ進ム、椒勘イフ、正月酒ヲ飲ムニ、小者ヲ先ニスルハ、小者ハ歲ヲ得ルヲ以テ、先ヅ酒モテ之ヲ賀ス、老者ハ歲ヲ失フ、故ニ後ニ酒ヲ與フト、陳延之小品方ニ、——酒ハ、此レ華佗ノ方ナリ元旦ニ之ヲ飲メバ、不正ノ氣ヲ辟ク、少ヨリ長ニ至リ次第ニ之ヲ飲ム」また同書に「昔、人アリ、草庵ノ中ニ居ル、每歲除夕、里閭ニ藥一帖ヲ遺リ、聚ニシテ井中ニ浸サシメ、元日ニ至リ、水ヲ取リ酒樽ニ置キ、——酒ト名ヅク、合家コレヲ飲ムトキハ、溫疫ヲ病マズ」

【兜率天】（トソツテン）佛家にいふ六欲天の中の第四天なり、大藏法數に「梵語兜率、華言（ニフ）知足（トラフ）、謂其於五欲境（ニ）知止足（ル）、故此王依（リテ）空而居」妙足また止足とも譯す、

【都率ノ內院】（トソツノナイキン）太平記卷八に見ゆ、鈔に「佛說ノ意ハ、今ヨリ見ユル天ヲバ四王天トイヒ、ソノ上ニ忉利天・夜摩天・都率天トイフトナリ、此界ヘ出世シ給ヘル佛ノ、先ヅ必ズ此天ヘ出デ久シク、住シ給ヘル所ヲ內院トイフ、コノ內院ノ外ヲバ、外院トイフ」

【杜多】（トタ）（——）を見よ、

【斗大】（トダイ）斗ほどの大さをいふ、晉書周顗傳に「顗曰、今年殺諸賊奴、取金印如（キヤウニ）——繫肘後（ヒヂニ）」印などを——といふ時は大印をいふ、室などを——室といふ時は小室をいふ、

【塗炭之苦】（トタンノクルシミ）水火の苦をいふ、書經の仲虺之誥に「有夏昏德、民墜塗炭（ニ）」この註に「墜ハ陷イルナリ、塗ハ泥、炭ハ火ナリ、桀民ノ主トナリテ、反リテ昏亂ヲ行ヒ、民ヲ塗炭ニ陷イル」とあり、

【土著】（トチヤク）常居ありて、その土地に住著するをいふ、漢書西南夷傳に「其俗或——（ヘンス）、或移徙」また張騫傳の註に「城郭常居アリ、畜牧ニ隨ヒテ、移徙セザルヲイフ」龜鑑の「貴粟疏には「不地著（トチヤクセ）則離鄉輕家（ナンヅヲ）」とあり、地著も、土著と、義同じ、

【凸凹】（トツアフ）楊愼の丹鉛錄に「土ノ窪ムヲ凹トイヒ、土ノ高キヲ凸トイフ、古ノ象形字ナリ」東方朔神異經に「大荒石湖千里、無——（平滿無高下）」

【吶喊】（トツカン）多人數、一時に大聲にてさけぶ義、福惠全書卷二十三に「齊奏——（レウリツス）」通俗編に「戚繼光紀效新書有各兵吶喊語、元人兩世姻緣劇、搖旗納喊、作納、翟灝曰、按玉篇吶下聲也、言不出口也、與喊叫適相反矣、不若用納字、納致也、尙爲有說」

【突騎】（トツキ）つよくしく敵軍を衝突すべき騎兵をいふ、漢書韓信傳に「平原易地輕車——（ナビ）、則匈奴之衆、易撓亂（ミダス）也」

【訥言敏行】（トツゲンビンカウ）言ふは易く行ふは難し、故に言に訥にして行に敏ならんことを欲す、論語里仁に「子曰、君子欲訥（ニ）於言（ニ）而敏（ナラン）「テ」於行（ニ）」訥は言說の「ニブク」して敏捷ならざるなり、

【突兀】（トツコツ）突は出なり、兀は高なり、高く挺んで出づるをいふ、文選木華の海賦に「震海之鯨、——（トンヤ）孤游」

【咄嗟】（トツサ）「タチドコロ」の義、猶ほ呼吸の閒といふが如し、サシメ、元日ニ至リ、水ヲ取リ酒樽ニ置キ、——酒ト名ヅク、合家コレヲ飲ムトキハ、溫疫ヲ病マズ」

【兜率天】（トソツテン）佛家にいふ六欲天の中の第四天なり、大藏法數に「梵語兜率、華言（ニフ）知足（トラフ）、謂其於五欲境（ニ）知止足（ル）、故此王依（リテ）空而居」妙足また止足とも譯す、

【都率ノ內院】（トソツノナイキン）太平記卷八に見ゆ、鈔に「佛說ノ意ハ、今ヨリ見ユル天ヲバ四王天トイヒ、ソノ上ニ忉利天・夜摩天・都率天トイフトナリ、此界ヘ出世シ給ヘル佛ノ、先ヅ必ズ此天ヘ出デ久シク、住シ給ヘル所ヲ內院トイフ、コノ內院ノ外ヲバ、外院トイフ」

【杜多】（トタ）（——）を見よ、

【斗大】（トダイ）斗ほどの大さをいふ、晉書周顗傳に「顗曰、今年殺諸賊奴、取金印如（キヤウニ）——繫肘後（ヒヂニ）」印などを——といふ時は大印をいふ、室などを——室といふ時は小室をいふ、

【塗炭之苦】（トタンノクルシミ）水火の苦をいふ、書經の仲虺之誥に「有夏昏德、民墜塗炭（ニ）」この註に「墜ハ陷イルナリ、塗ハ泥、炭ハ火ナリ、桀民ノ主トナリテ、反リテ昏亂ヲ行ヒ、民ヲ塗炭ニ陷イル」とあり、

【土著】（トチヤク）常居ありて、その土地に住著するをいふ、漢書西南夷傳に「其俗或——（ヘンス）、或移徙」また張騫傳の註に「城

郭常居アリ、畜牧ニ隨ヒテ、移徙セザルヲイフ」龜鑑の「貴粟疏には「不地著（トチヤクセ）則離鄉輕家（ナンヅヲ）」とあり、地著も、土著と、義同じ、

【凸凹】（トツアフ）楊愼の丹鉛錄に「土ノ窪ムヲ凹トイヒ、土ノ高キヲ凸トイフ、古ノ象形字ナリ」東方朔神異經に「大荒石湖千里、無——（平滿無高下）」

【吶喊】（トツカン）多人數、一時に大聲にてさけぶ義、福惠全書卷二十三に「齊奏——（レウリツス）」通俗編に「戚繼光紀效新書有各兵吶喊語、元人兩世姻緣劇、搖旗納喊、作納、翟灝曰、按玉篇吶下聲也、言不出口也、與喊叫適相反矣、不若用納字、納致也、尙爲有說」

【突騎】（トツキ）つよくしく敵軍を衝突すべき騎兵をいふ、漢書韓信傳に「平原易地輕車——（ナビ）、則匈奴之衆、易撓亂（ミダス）也」

【訥言敏行】（トツゲンビンカウ）言ふは易く行ふは難し、故に言に訥にして行に敏ならんことを欲す、論語里仁に「子曰、君子欲訥（ニ）於言（ニ）而敏（ナラン）「テ」於行（ニ）」訥は言說の「ニブク」して敏捷ならざるなり、

【突兀】（トツコツ）突は出なり、兀は高なり、高く挺んで出づるをいふ、文選木華の海賦に「震海之鯨、——（トンヤ）孤游」

【咄嗟】（トツサ）「タチドコロ」の義、猶ほ呼吸の閒といふが如し、

【突怒偃蹇】（トツドエンケン）石の怒れるが如く傲れるが如きさまを狀する語なり、柳宗元の、鈷鉧潭西小邱記に「其石之——、負土而爭爲奇狀者、殆不可數偃蹇は、左傳の哀六年に「彼皆——將棄子之命」この註に「驕傲也」とあり、

【吶吶】（トツトツ）言ふことの難きなり、禮記檀弓に「其言——（シカモ）然如不出（ダサ）諸口（ヒト）」訥訥に作るも同じ、

【訥訥】（トツトツ）前條に同じ、

【咄咄怪事】（トツトツクワイジ）嗟歎すべく、怪むべき事の意、書言故事に晉ノ殷浩黜ケラルルモ、談咏シテ輟マズ、家人ト雖モ其ノ流放ノ慨アルヲ見ズ、但、終日空ニ書シテ、咄咄怪事ノ四字ヲ作スノミ」註に「咄咄ハ嗟嘆ナリ詳しくは晉書殷浩傳を見よ、後漢書嚴光傳に「帝即其臥所、撫光腹（ヲ）曰、咄咄子陵、不可相助爲理耶（ンヤ）」子陵は光の字、

【咄咄人ニ逼ル】（咄咄逼人）咄咄は驚き怪む辭、技藝の人を凌駕する勞あるを驚嘆するなり、事類全書に「衞夫人書曰、衞有一弟子王逸少、甚能學衞夫人書、咄咄逼

ル、此レ導引ノ士、養形ノ人、彭祖壽考ノ者ノ好ムトコロナリ」子華子陽城胥渠問に「滋液——」

【斗南一人】　天下第一の賢人をいふ、唐書狄仁傑傳に「薦仁傑曰ク狄公ノ賢、北斗以南一人ノミ」狄公は狄仁傑なり、

【圖南ノ翼】　大鵬の翼なり、大事業を企つるを、圖南の翼を張るといふ、莊子の逍遙遊篇に「鳥アリ、其名ヲ鵬トナス、背ハ泰山ノ若ク、翼ハ垂天ノ雲ノ若シ、扶搖ニ搏テテ、羊角シテ上ル者九萬里、雲氣ヲ絶チ、青天ヲ負ヒ、然シテ後ニ、南ヲ圖ル、且ニ南冥ニ適カントスルナリ」

【斗入】　山勢、斗(トマス)の隅の如く「カドダチ」曲りて海中に入るをいふ、史記封禪書に「成山——海ニ」

【土ノ毛】　土地に生ずる菜穀なり、左傳昭七年に「封略之內、何非君土、食土之毛、誰非君臣ニ」

【怒馬】　肥えて勢よき馬、後漢書第五倫傳の注に「——ハ馬ノ肥壯ニシテ其ノ氣ノ憤怒スルナリ」

【詢ハザルノ謀】　(弗)詢謀衆に問はざる謀をいふ、書經に「無稽之言勿聽、——之一勿庸」

【駑馬十駕】　才なき者も勉めて已まざるときは、賢人にも追ひ及ぶことを得る義、荀子勸學篇に「騏ハ一日而千里、駑馬十駕則亦及之矣」淮南子にも類語あり、

【塗抹】　「ヌリケス」「ナスル」趣環記に「信手——」

【怒髮冠ヲ衝ク】　(怒髮衝冠)甚しく憤怒せし狀なり、史記の藺相如の傳に「却立倚柱、怒髮上衝冠」同書刺客傳には「士皆瞋目、髮盡上指冠」また宋濂の秦士錄には「邪狗鬼不靈則已、若有靈、吾知其怒髮上衝也

【塗抹詩書】　塗抹は墨をぬりつける義、亂を塗といひ、直を抹といふ、詩書の如き大切なる經書にても幼兒は墨を塗りつくるなり、轉じて幼兒の異稱とす(塗鴉)を見よ、

【徒法】　徒は空なり、其の政ありて、之を行ふの心なきをいふ、孟子離婁上に「——不能以自行」

【屠敗】　(山林——)を見よ

【都鄙】　「ミヤコ」と「ヰナカ」周禮天官大宰に「以八則治——」左傳に「——有章」

【醍醐】　重釀(カサネテカモス)の酒、陛下歲時記に「寒食賜宰臣以下——酒」文選の蜀都賦に醍清とあるは——酒のことなり、玉篇には「——ハ澁ヲ去ラザル麥酒ナリ」とあり、

また菱生の灌木の名、一に茶醾とも書く、高さは丈餘に至る、枝に「トゲ」多し、葉は五葉一朵をなし薔薇に似て冬枯れず、花は夏初に盛開す、白くして香みあり、千瓣にして徑二寸許、山伏の袈裟の菊綴の如し、よりて誤りて「頭巾イバラ」の名あり、歲時記に「——ハ本酒ノ名、花色ノ似タルヲ以テ故ニ名ヅク」六書故に「或ハ謂フ、ソノ芽ヲ取リ以テ酒ニ漬ス、亦茶ノ如ニ作ル」一說に山吹をいふとあるは失考なり、

【奴婢】　周禮の「奚三百」の鄭玄の註に「古ハ從坐ノ男女ヲ沒シ、縣官ニ入レ、——トイフ、ソノ少シク才智アル者ヲ以テ奚ト爲ス、今時ノ侍史官婢是レナリ」と、說文に「男罪ニ入ルヲ奴トイヒ、女罪ニ入ルヲ婢トイフ」また風俗通に「古制ニ——ナシ、即チ事ヲ犯ス者ヲ以テ——ートス、臧ト、ハ臧罪ヲ被リ沒セラレテ官ノ——ートナル者、獲トハ逃亡シ獲ラレテ——トナル者ナリ」

【問ヲ宿ムルナシ】　(無宿問)時に當りて直ちに問ひ、宿を經るを俟たざる義、荀子に「無留善、——レ——」

【鳶飛ビテ魚躍ル】 道は、天地間在らざるところなきをいふ、中庸に「詩云、鳶飛戻天、魚躍于淵、言其上下察也」とある註に「戻ハ至ナリ、察ハ著ナリ、子思此ノ詩ヲ引キテ、以テ化育流行、上下昭著、此ノ理ノ用ニ非ザル莫キコトヲ明カス」とあり、

【銅拍子】 銅鈸子のあて字、俗家に用ふる樂器、延年舞には鼓をうち——をうつ、

【杜父魚】 「カハカジカ」の漢名(石伏)を見よ

【都府樓】 節度府の樓をいふ、正名緒言に「菅公謫居作ニ——一、唯有ニ瓦色句一、按職原太宰府、准ニ——一都督府一、因有ニ都府之稱一與、又按唐中葉置ニ節度府一、謂ニ之都府一ニ菅公の詩は不ニ出門一と題し、菅家後草に出づ、

【徒兵】 歩兵をいふ、左傳隱四年に「諸侯之師、敗ニ鄭一ー、取ニ其禾一而還」註に「時ニ鄭ハ車戰セズ」

【斗柄東ヲ指ス】 (斗柄指ニ東)春になりたるなり、鶡冠子に「斗柄東ヲ指シ、而シテ天下春ヲ知ル」と、柄は杓に通ず、杓は說文に「斗柄也」

【吐哺】 哺は食物の口中に入れるなり、——は口中の食物を吐き出すこと、史記魯世家に周公が賢を求むるに切なる樣を述べて「一沐三捉ニ髮、一飯三ニ——一レ、起以待ニ士一」とあるに出り、借りて賢者を延見する情のあつきをいふに用ふる語、捉は一に握に作る、韓愈の後二十九日復上ニ宰相一書に「周公之爲ニ輔相一、其急ニ於見ニ賢也、當ニ一食三ニ吐其哺一方ニ一沐三握ニ其髮一」

【杜甫】 字は子美、少陵と號す唐の襄陽の人、河南に徙る、父閑奉天の令となり、遂に杜陵に居る、甫進士に擧げられて第せず、因りて長安に遊び、玄宗の朝に賦を奏す、帝之を奇とし、集賢院に待詔せしむ、肅宗立ちて右拾遺に拜す、後ち官を棄て秦州に客たり、薪を採り橡栗を拾ひ自ら給す、大曆五年來陽に客として卒す、年五十九、性放曠にして好んで天下の大事を論ず、忠君憂國の情詩歌にあらはる、著す所ろ杜工部集二十卷あり、その詩涵渾汪洋千態萬狀、時事を陳するに至りては、格律精深、世に詩史と號す、元稹いふ詩人ありて以來、未だ子美の如き者あらずと(杜工部集)を參看せよ、左にその傑作一首を抄す、

贈ニ韋左丞一

紈袴不ニ餓死一儒冠多誤ニ身一、丈人試靜ニ聽一、賤子請具陳、甫昔少年日、早充ニ觀國賓一、讀書破ニ萬卷一、下ニ筆如有ニ神一、賦料ニ揚雄敵一、詩看ニ子建親一、李邕求ニ識一面、王翰願ニ卜ニ隣一、自謂頗挺出、立登ニ要路津一、致ニ君堯舜上一、再使ニ風俗淳一、此意竟蕭條、行歌非ニ隱淪一、騎驢三十載、旅食京華春、朝扣ニ富兒門一、暮隨ニ肥馬塵一、殘盃與ニ冷炙一、到處潛悲辛、主上頃見ニ徵一、欻然欲ニ求ニ伸一、青冥却垂ニ翅一、蹭蹬無ニ縱鱗一、甚愧丈人厚、甚知ニ丈人貧一、每於ニ百寮上一、猥誦ニ佳句一新、竊效ニ貢公喜一、難ニ甘原憲貧一、焉能心怏怏、不ニ愁ニ原憲貧一、馬能心怏怏、不ニ愁ニ原憲貧一、馬能心怏怏、不ニ愁ニ原憲貧一、馬

取りて之を焚く、行草を善くし亦甚に工なり、著すところ梵川文集十七巻あり、

【都穆】字は玄敬、明の長州の人、弘治の進士、太僕寺卿に歴官す、文名あり、好んで微隠を考索す、家居してより跡を公府に絶ち、意を山水に放ままにす、人皆之を敬せり、嘉靖四年卒す、年六十八、著すところ金薤琳琅二十巻あり、

【土木形骸】外貌を飾らざる義、晉書裴楷傳に見ゆ（形骸ヲ見よ、

【吐哺捉髮】賢を求むるに汲汲たるの意、史記魯世家に「周公戒伯禽曰、我文王之子、武王之弟、成王之叔父、我於天下亦不賤矣、然我一沐三捉髮、一飯三吐哺、起以待士、猶恐失天下之賢人、子之魯、慎無以國驕」

【土人】

【土毛】（土ノ毛）を見よ、

【土饅頭】墓の異稱、東坡集王梵志の詩に「城外一一一、陌上在城裡、范成大の重九日行營壽藏之地の詩に「縦有千年鐵門限、終須一箇一一一」

【屯行】屯は聚なり、大軍のあつまり進む義、史記李將軍傳に「大軍行、水草少、其勢不一一一」

【鈍漢】愚人を罵りていふ、五代史司空頲傳に「張彦之訛二王正言一曰、一一辱レ我」

【頓邱】兩漢の東郡に一縣、晉・北魏の郡縣名、隋・唐の縣名、今の直隸大名府濮豐縣の西南廿五清里に當る、歴朝同名異地あり、詳しくは地理志韻編巻十一を見よ、

【呑牛ノ氣】（牛ヲ食フ）を見よ、

【敦圉】氣激するをいふ「イキマク」文選左思の魏都賦に「白虎一一乎崑崙一」

【敦煌】兩漢・晉の府縣名、涼州に屬す、隋の郡縣名、雍州に屬す、唐の隴右道沙州の縣名、今の甘肅安西州一縣治これなり、

【豚犬】己の子を謙していふ、また豚兒ともいふ、三國志の吳志に「生子當如孫仲謀、劉景升兒子若一一耳」また五代史に「生子當如李亞子、克用爲不レ亡、吾兒一一耳」亞子は存勗の小字、留青日札には「越語ニ范蠡、國民ノ衆多ナランコトヲ欲ス、凡ソ國人丈夫子ヲ生メバ酒三壺犬一ヲ與フ、女子ヲ生メバ酒一壺豚一ヲ與フ、所謂一一ハ蓋シ幼ヲ幼トスルノ事ナリト」一說とすべし、

【豚肩豆ヲ掩ハズ】極めて節儉なるをいふ、豚は家なり、豆は祭器「タカツキ」の類、周人肩肉を貴ぶ、その肉微少、故に豆を掩はざるなり、晏嬰の傳に「以節儉力行重於齊一に見ゆ、

【頓挫】語句の遒かに轉折するを云ふ、陸機の文賦に「箴頓挫而清壯」また陳繹曾曰く「頓挫立意跳盪造辭起伏」

【豚兒】己の子を謙していふ、前の（豚犬）を見よ、

【遁思】猶ほ去意といふが如し、詩經に「勉尒一一二汝の去意を決するなかれとの義、

【遁辭】逃避の辭なり、孟子公孫丑上に「一一知其所レ窮」

【呑舟ノ魚ハ枝流ニ游ガズ】（呑舟之魚、不游枝流）舟を呑む如き大魚は、細流に游がず、大人物は、卑陋の地に居らずして常に高衆の志を抱くの意、列子に「一一一一一一鴻鵠高飛不レ集二汚池一」說苑に「呑舟之魚、不游淵、鴻鵠高飛不就汚池、何　則其志極遠也」

【呑舟ノ魚モ蕩シテ水ヲ失ヘバ螻蟻ニ制セラル】（呑舟之魚蕩而失水制於螻蟻）舟を呑む程の大魚も水を失へば、螻蟻の如き微物に制せらる、以て賢者も地位を失へば不肖者に辱めらるるをいふ、說苑の說叢篇に「呑舟之魚、蕩而失レ水制二於螻蟻一者、離二其居一也」とあり（淮南子泰族訓ヲ參看セヨ）また莊子の庚桑楚にも「呑舟之魚、碭而失レ水則蟻能苦レ之」とあり、碭は溢なり、

【頓舍】頓は止まるなり、舍は息むなり、陳取りする義、

史記李將軍傳に「李廣行無二部曲行陳一就二善水草一」

【敦牂】午の異名、爾雅釋天に「太歳在レ午曰一一一」（十二支を參看せよ、

【頓首】周禮九拜の一、拜して頭地に至り即ち擧く、對等の禮なり、周禮の注に「稽首ハ拜シテ頭、地ヲ叩クナリ」疏には「稽首一一俱ニ頭、地ニ至ル、但稽首ハ地ニ至ルコト多時、一一ハ地ニ至レバ即チ擧グ、故ニ地ヲ叩クヲ以テ之ヲ言フ、首ヲ以テ物ヲ叩クガ若ク然ルヲ謂フ」

【呑聲】（聲ヲ呑ム）を見よ、

【頓足】足にて地をふみ「バタバタ」するなり、また「アシズリスル」韓非に「初馬蔡に聞レ戰一一徒裼」漢書楊惲傳に「一一起舞」

【鈍賊】他人の語句をぬすむ詩人を罵る詞、詩苑類格に「詩有二三偷一偷」語最爲二下一一」

【沮漳】爾雅釋天に「太歳申ニ在ルヲ一一トイフ」沮一音キン俗にクンの音に讀む（十二支）を參看せよ、

【屯田】兵士をしてその地を守らしめつつ耕作せしむるをいふ、周禮冬官に「有二屯部一今曰一一司二また漢書昭帝紀に「二年秋八月調故吏將一一張掖郡二また趙充國傳にも見ゆ、

【敦厖】 厖は厚なり「アッシ」風俗の厚きをいふ、左傳に「民生——」

【蜻蜓】 古今注に「一名赤衣使者、亦、赤弁丈人ト名ヅク」杜甫の詩に「點水——款款飛」陸游の詩に「白晝苔香初過雨、赤——弱不禁風」杜甫の詩に「翡翠鳴衣桁、——立釣絲」

【富メルニ機ガズ】 (不機富)餘りある者に向ひては、重ねて施し與ふることなきの意、論語に「君子周急——」

【共ニ天ヲ戴カズ】 (不俱戴天)を見よ、

【都養】 衆人に食を供する役を執る者をいふ「マカナヒカタ」漢書兒寬傳に「貧無資用、嘗爲弟子——」

【杜預】 字は元凱、畿の孫、博學なりしかば、時に杜武庫と號す、晉の武帝の時、羊祜預を舉げて自ら代らしむ、よりて征南將軍に拜す、吳を平げし功を以て當陽侯に封ぜらる、嘗て春秋左傳集解を作る、

【杜預ニ碑ヲ爲ル】 晉書杜預の傳に「預好爲後世名、常言高岸爲谷深谷爲陵、刻石爲二碑一紀其勳績一、沈萬山之下、一立峴山之上、曰、焉知此後不爲陵谷乎」

【虎】 格物論に「——山獸ノ君ナリ、狀貓ノ如ク、大黃牛ノ如シ、黑章鉤爪鋸牙、舌ノ大掌ノ如シ、倒刺毳ヲ生ズ、硬尖ニシテ光レリ、夜視一目光ヲ放チ一目物ヲ看ル、獵人候ヒテ之ヲ射ル、光、地ニ墜チ聲雷ノ如シ、百獸之ガ爲メニ震恐シ、風從ヒテ生ズ」司馬遷答任安書に「猛虎在深山、百獸震恐、及其在陷穽之中、搖尾而求食、此積威約之漸也」王褒の頌に「一嘯而風生」左傳に「令尹子文、初生棄於夢澤、虎乳之、楚人謂乳穀、謂虎於菟、故命曰鬬穀於菟」風俗通に「一者陽物百獸之長也」吳志に「呂蒙欲從軍、母止之、蒙曰、不探虎穴、安得虎子」

猛虎行　明　高啓

陰風吹林烏鵲悲、猛虎欲出人先知、目光煜煜當路坐、將軍一見弧矢暨、幾家掃除高作門、未到日沒收豬豚、猛虎雖猛猶可喜、橫行只在深山裏

【土圜】 郭(クルワ)の外の土地、管子度地篇の注に「城外之ヲ郭ト爲シ、郭外之ヲ——ト爲ス」圜は空曠なり、

【虎ヲ畫キテ狗ニ類ス】 (畫虎類狗)豪傑の風を學びて、却つて輕薄の人となるに喩ふ、後漢書の馬援の傳に「馬援兄ノ子嚴、敦二人ヲ戒メテ曰ク、龍伯高ハ敦厚周愼、吾汝ノ曹ノ之ニ效ハンコトヲ願フ、杜季良ハ豪俠ニシテ義ヲ好ム、吾汝ノ曹ノ之ニ效ハンコトヲ願ハズ、伯高ニ效ヒテ得ザレバ、猶ホ謹勅ノ士トナル、所謂鵠ヲ刻ミテ成ラザルモ、尙ホ鶩ニ類スル者ナリ、季良ニ效ヒテ得ザレバ、陷リテ天下ノ輕薄子トナラン、所謂虎ヲ畫キテ成ラズ、反リテ狗ニ類スル者ナリ」鵠は和名クグヒ雁に似て大なり、

【虎ヲ刺ス】 (刺虎)「戰國策に「有二兩虎一爭レ人而鬬、管莊子將レ刺レ之、管與レ止之曰、虎者戾蟲、人者甘餌、今兩虎爭レ人而鬬、小者必死、大者必傷、子待二傷虎一而刺レ之、則是一舉而兼二兩虎一也、無レ刺二一虎之勞一而有二刺二兩虎之名一」

【虎ヲ養ヒ患ヲ遺ス】 (養虎遺患)己を害する者を、除かずして、後患をのこすをいふ、史記項羽紀に「今釋弗擊、此所二謂養一虎自遺一患也一」

【虎河ヲ渡ル】 錦字箋に「劉昆爲二弘農守一、郡多二虎暴一、昆仁化盛行、虎皆負二子渡一河、昆字は桓公、後漢の人、易に深く、弟子五百餘人を敎授す、光武帝に仕ふ、

【虎嶠ヲ負フ】 (虎負嶠)嶠は山の曲なり、負は依るなり嶠に依る所ろの虎は勇猛當るべからず、孟子註心下に「有レ乘レ逐レ虎——一、莫二之敢一レ攖」攖は觸なり、轉じて英雄の一方に割據せるに喩ふ、

【虎ニシク冠ス】 頭に衣冠を著くるも、心は殘暴にして、絕えて人情なきをいふ、史記の齊の悼惠王世家の字面、漢書の酷吏傳にも「其爪牙吏、虎而冠」とあり、註に「其ノ殘暴ノ甚シキ人情アルニ非ルヲ言フ」

【虎ニシテ翼アリ】 俚諺に「鬼に金棒」といふに同じ、書言故事に「已ニ強キノ勢ニ益スヲ、虎ニシテ翼アリトイフ」勢の強きが上に強くする義、揚子法言に「或ヒト酷吏ヲ問フ、曰ク虎ナル哉、虎ナル哉、角アリテ翼アル者ナリ」とあり、

【虎ノ威ヲ假ル狐】 (假虎威狐)主人の威を假りて「キバル」をいふ(狐)を見よ、

【虎ノ尾ヲ履ム】 (履虎尾)易經または書經君牙に見ゆ(虎尾ヲ)を見よ、

【虎ノ尾ヲ見テ其ノ鯉ヨリ大ナルヲ知ル】 說苑に「見二虎之尾一而知二其大一於レ鯉、見二象之牙一而知二其大一於レ虎、牛」この下に「一節見ルトキハ百節ヲ知ル、此ニ由リテ之ヲ觀レバ、見ル所ロヲ以テ、以テ未發ヲ占フベシ、小節ヲ視テ以テ大體ヲ知ルニ足レリ」

【虎ノ爲メニ翼ヲ傅ク】 (爲虎傅翼)猛惡の人に勢を添ふるに喩ふ、韓非子に「毋レ——一將二飛入一レ邑擇レ人而食之、夫乘不肖人於勢、是爲二虎傅一レ翼也」逸周書寤敬解にも見ゆ、また淮南子に「今乘二萬民力一、而反爲二殘賊一是——」

【虎ノ豚ヲ食フ若シ】(若虎之食豚)(猶ホ大魚ノ)を見よ、
【烏アリノ歌】(丁令威)を見よ、
【挈戮】妻子を併せて罪するをいふ、一説に、戮は辱なり、戮辱して挈とするをいふと、書經湯誓に「予則ーー汝帑」有攸赦」
【烏散ジテ餘花落ツ】(魚戲レテ)を見よ、
【烏起ツ者ハ伏ナリ】孫子の行軍篇に「烏起者伏也、獸駭者覆也」烏は本平かに飛ぶ、忽然として高く起つ者は、下に伏兵あるなり、
【烏ノ將ニ死セントスル、ソノ鳴クヤ哀シ】論語の泰伯に「曾子曰、烏之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善」烏は死を畏るるにより、將に死なんとする時はその鳴くこと殊に哀し、人の將に死なんとする時は不善の人と雖も、その本心の善に反るを以て、その言ふところは皆善言なりとの意、
【烏ノ目ヲ過グルカ如シ】(如烏過目)烏の目前を飛び過ぐるが如く、疾く過ぐるに喩ふ、隙の際を過ぐる如しと、義同じ、張協の詩に「人生苦海內、忽ーーーー」
【烏ハ則チ木ヲ擇ブ、木豈能ク烏ヲ擇バンヤ】(烏則擇木、木豈能擇烏)左傳哀十一年に「孔文子ノ將ニ大叔ヲ攻メントスルヤ、仲尼ニ訪フ、仲尼曰ク、胡簋ノ事ハ、則チ嘗テ之ヲ學ベリ、甲兵ノ事ハ、未ダ之ヲ聞カザルナリト、退テ駕ヲ命ジテ行ラントシテ曰ク、烏則擇木、木豈能擇烏」とあり、註に「胡簋ハ禮器ノ名、夏ニ胡トイヒ、周ニ簋トイフ、烏ヲ以テ自ラ喩ヘ、木ヲ以テ文子ニ喩フ」(良禽ヲ參看せよ、
【烏ハ高ク飛ビテ矰弋ノ害ヲ避ク】(鳥高飛以避矰弋之害)莊子の應帝王篇に見ゆ、下に「朕嘗深穴ニ乎神丘之下ニ以避ケ熏鑿之患ニ」とあり、矰弋は「イトユミ」なり、
【居龍ノ技】龍をほふる「ワザ」にて無用の技藝をいふ、莊子の說劍篇に「朱泙漫、龍ヲ屠ルコトヲ支離益ニ學ブ、千金ノ家ヲ殫シ、三年ニシテ技成リテ、其ノ巧ヲ用フル所ロナシ」
【努力】努は勉なり、勉力の義、李陵與蘇武ニ詩に「ーーー崇明德ニ」
【都料匠】大工の「トウリャウ」工師なり、柳文の梓人傳に見ゆ、
【吐露】隱さずして所思を述ぶる義、韓愈の答陳商書に「愈敢不ーーー情實ニ」
【都盧】身輕くして善く高きに緣る者をいふ、漢書西域傳に「武帝享ス四夷之客ヲ作ス巴渝ーー之戲ヲ」また「自合浦南有ーー國」また大康地志に「ーー國其人善緣」

【名】物または人の名稱、また、自ら名を呼ぶ、禮記の曲禮に「父前子名、君之前臣名」また名譽の義、孝經に「立身行道、揚名于後世」戰國策に「爭名者於朝」また大なること、勝れたることの義、書經の武成に「告于皇天后土所過名山大川」疏に「山川大ナレバ乃チ名アリ、名ト大トハ之ヲ互言スル耳」孫行錄に「大丈夫見善明故重名於泰山、用心剛故輕死生於鴻毛」
【內憂外患】國內に生ずる憂と外國より攻め來る患となり、左傳成十六年に「范文子曰、中罃唯聖人能內外無患、自非聖人、外寧必有內憂、書釋楚以爲外懼乎」また晉書にも「山濤告人曰、自非聖人、外寧必有內憂、釋吳爲外懼、豈非算乎」
【內訓】謂は請なり、告なり、漢書翟義傳の宇面、師古の註に「猶ホ今ノ通名ノ如キナリ」とあり、內は公然にあらずして內內その家の妻などにとりいりて面會するをいふ、
【內應】「ウラギリ」史記酈生傳ニ「足下擧兵攻之、臣爲ーーニ
【內行】平生家に居る時の品行をいふ、史記五帝紀に「舜居ル嬀汭ニーー彌謹」また國內の祕密をいふ、戰國策に「善爲計者不見ーーニ
【內翰】事物紀原に、唐書百官志竝に陸贄傳を引きて「今、翰林學士ヲ呼ビテ內相ト爲シ、亦ーートイフ」蘇洵に上歐陽ーー書あり、
【內御】女御の別名、儀禮既夕に「其母之喪、則ーー者洛」
【內外文官】(清朝現在ノ官制ニヨリ中央地方ノ文官中主ナル者ヲ掲グレバ左表ノ如シ)

內外文官品級表

一品		正	太師　太傅　太保　內閣大學士
		從	少師　少傅　少保　太子太師　太子太傅　太子太保
			各部院尙書　都察院左右都御史
二品		正	太子少師　太子少傅　太子少保　各省總督
			各部院左右侍郎
		從	各省巡撫　內閣學士　翰林院掌院學士　各省布政使
三品		正	都察院左右副都御史　宗人府府丞　外務部左丞
			商部左丞　大理寺卿　太常寺卿　順天府府尹
			奉天府府尹　按察使　翰林院學士

品		
從	光祿寺卿　太僕寺卿　各省驛運使	
四品	正	外務部左參議　大理寺少卿　商部左參議 太常寺少卿　國體寺卿　太僕寺少卿　順天府府丞 奉天府府丞　各省道差
	從	翰林院侍讀學士　同侍講學士　國子監祭酒 內閣侍讀學士　各省知府　各省驛運使運同
五品	正	光祿寺少卿　欽天監監正　六科給事中　各部院郎中 太醫院院使　各府同知　直隸州知州
	從	通體寺少卿　各道監察御史　翰林院侍讀　同侍講 各部院員外郎　各省知州
六品	正	國子監司業　內閣侍讀　翰林院撰文　各部院主事 京府通判　京縣知縣　各省通判
	從	翰林院修撰　各部院七品筆帖式　順天府學教授 同訓導　京縣縣丞　外縣知縣　各府學教授
七品	正	翰林院檢討　中書科中書　內閣中書　直隸州州判 州判
	從	部寺司務　各部院八品筆帖式　外縣縣丞　州學正 縣教諭
八	正	
	從	
九	正	各部院九品筆帖式　縣主簿
	從	翰林院待詔
品		府州縣副導

【內兄弟】（ナイケイテイ）母方の「イトコ」通鑑の梁紀に「母黨以兄弟」齡、謂之ー——ニ

【內顧】（ナイコ）首をめぐらして視る、論語鄉黨篇に「車中不ー——ニ」また生計の事に心をめぐらす、左思の詩に「外望無寸祿、ー——無斗儲」また妻子を思ふ、漢書楊僕傳の「失期ー——」の師古の注に「ーー八妻子ヲ思フヲ言フ」

【內訌】（ナイコウ）「ウチワモメ」內亂に同じ、詩經、大雅召旻に「潰潰回遹、ー——」潰潰とは穀を食ふ蟲なり、以て潰亂邪僻の小人に比す、根を食ふを潰といひ、節を食ふを賊といふ、

【乃公】（ナイコウ）乃漢音ダイ廼に同じ、乃は汝なり、汝の君といふ義にて、臣子に對して自ら稱する驕傲の語、史記留侯世家に「豎儒幾敗ー——事」（廼公）を參看せよ、

【乃至】（ナイシ）乃は「上ヲ承ケテ下ヲ起ス辭ナリ」と註す、因りて何より何に至ると中間を略する語とす、多く佛書に

用ふ、般若心經に「無無明、亦無ー——無老死、亦無老盡」敎行信錄に「ーー者、一多包容之言」戰國策の趙策に「天下之卿相人臣ーー布衣之士、莫不高賢大王之行義」

【內子】（ナイシ）卿大夫の適妻なり、禮記雜記の注に「卿之適妻也」また同書曾子問の注に「大夫之適妻也」適は嫡に通ず（ーー）を見よ、

【內室】（ナイシツ）妻なり、韻會に「房室爲內、又云夫以婦爲室」

【內賞】（ナイシヤウ）賓物及び妻妾なり、左傳襄二十八年に「以其ー——還于盧蒲嫳氏」

【內集】（ナイシフ）「ウチワノアツマリ」小名錄に「謝安寒食ーー兒女論文義」

【乃者】（ナイシヤ）乃漢音ダイーーは「サキニ」と訓む、曩者、嚮者に同じ、漢書に「ーー我使諫」君也」

【內豎】（ナイジユ）內庭に居りて使令に給する小臣（コモノ）なり、禮記文王世子に「至于寢門之外、ーー之御者」

【內助】（ナイジヨ）妻妾の內に在りてその夫に力を添ふる義、魏書郭后傳に「不惟外輔、亦有ーー」宋史孟后傳にも賢ーーの語あり、また內相ともいふ、類書纂要に「相ハ助ナリ、人ノ妻善ク家ヲ治ムルヲ稱シテ內相トイヒ、マタ內助トモイフ」

【內清 外濁】（ナイセイグワイダク）濁亂の世を渉る道なり、太玄經に「ーー、斂衣裹玉」

【內省疚カラズ】心に一點の愧づるところなき義、中庸に出づ、また論語顏淵篇の語（內ニ省ミテ）を見よ、

【內寵】（ナイチヨウ）嬖妾をいふ、左傳に「君多ーーにまた內官の君寵ある者をいふ同書に「因」ーー以殺」滓吏」

【內典】（ナイテン）佛家にて佛書を稱する語、佛書以外の書を外典といふ、唐の道宣の著に大唐ーー錄といふ書あり、日知錄に「佛敎之傳、寖盛、後之學者、遂謂其書爲ーー推其立言之旨、不將內釋而外吾儒乎、夫內釋而外吾儒、此自緇流之語、豈得士人亦云爾乎」これ儒者が佛書を內典といふの不見識を譏りたるなり、

【內嬖】（ナイヘイ）宮中にて君の寵愛をうくるもの、左傳僖十七年に「ーー如夫人」者六人」

【內命】（ナイメイ）朝議を經ざる君主の命令をいふ、翰林志に「專掌ーー」

【囊括】（ナウクワツ）「ヒキクルメテ」取る義、囊中に入れて、その口を括くるが如くするをいふ、羽獵賦に「野盡山窮ーー其雌雄」また易の坤卦六二に「括囊无咎无譽」とあるは、囊の口を結びて出さざる義、賈誼の過秦論に「有席卷天下、包舉宇內ーー四海之意、幷吞八荒之心」

【薬(ナヤ)(盆(ボン))】 (盆)を見よ、

【薬沙(ナヤサ)】 韓信齊を襲ひし時、楚の將龍且と濰水を夾みて陣す、信夜人をして萬餘の嚢をつくり、沙を滿盛し以て水の上流を壅がしめ、軍を引いて半ば渡りて龍且を撃ち、佯りて勝たず、還り走る、龍且の追撃して水を渡るに及び、信人をして、壅嚢を決せしめ、水大に至る、龍且の軍大半渡ることを得ず、即ち急に撃ちて龍且を殺し、大に之を敗る、詳しくは史記の淮陰侯傳を見よ、

【薬蒙(ナヤモウ)】 底のある「フクロ」を嚢といひ、底なくして兩端を結ぶを蒙といふ、また詩經大雅の「于嗟于嚢」の毛傳には「小ヲ蒙トイヒ、大ヲ嚢トイフ」

【薬中ノ錐(ナカノキリ)】 内に才能ある人は、忽ち外にあらはるるに喩ふ、史記平原君傳に「平原君曰ク、夫レ賢士ノ世ニ處スルヤ、譬ヘバ錐ノ嚢中ニ處ルガ若シ、其ノ末立ロニ見ハル、今先生勝ノ門下ニ處ル、此ニ三年ナリ、勝未ダ聞ク所ロアラズ、是レ先生有スル所ロナキナリト、毛遂曰ク、臣乃チ今日嚢中ニ處ランコトヲ請フノミ、遂ヲシテ蚤ク嚢中ニ處ルヲ得シメバ、乃チ穎脱シテ出デン、特ニ其ノ末ノ見ハルルノミニアラズト」勝は平原君の名、

【名ヲ爭フ者ハ朝ニ於テス(ナヲアラソフモノハテウニオイテス)】 (爭名者於朝)史記張儀傳の語、下に「爭利者於市」とあり、

【名ヲ策ス(ナヲサクス)】 (策名)策は簡策なり、己の名を君の策に書し、以て臣たるの義を明かにするをいふ、左傳に「一一委質(シツ)、貳乃辟也」

【名ヲ正ス(ナヲタヾス)】 (正名)を見よ、

【名ヲ竹帛ニ垂ル(ナヲチクハクニタル)】 (垂名於竹帛)己が名を史上にかがげて不朽に傳ふる義、後漢書に「鄧禹曰、願效尺寸功、以垂名於竹帛ニ」

【名ヲ釣ル(ナヲツル)】 (釣名)つとめて虚名を得んことをつとむるをいふ、管子法法篇に「釣名之人、無賢士焉」漢書公孫弘傳に「以三公爲布被、誠飾詐欲以釣名」

【名ヲ徼ム(ナヲモトム)】 (徼名)「ホマレ」を得んと思ふ、釣名に同じ、漢書に「不修廉隅(シヂ)以徼名于當世ニ」

【長ク英雄ヲシテ淚襟ニ滿タシム(ナガクエイイウヲシテナミダエリニミタシム)】 (長使英雄淚滿襟)杜甫の蜀相の詩の末句なり、曰く「丞相祠堂何處ニカ尋ン、錦官城外柏森森、映階碧草自春色、隔葉黄鸝空好音、三顧頻繁天下計、兩朝開濟老臣心、出師未捷身先死、——ーーーー」二の句、蜀相諸葛孔明の祠堂は、正に錦官城外老柏の森森たる處に在り、三四の句は、祠に入るの感をいふ、草は自ら春色、鳥は空しく好

音、而も侯が音容は聞見するを得ず、妙は自空二字に在り、五六以下四句は、先主侯を草廬に顧みること凡そ三たび、是の如く頻繁にして、實に謀るに天下を恢復する大計を以てす、侯すでに先主に事へ、又後主に事へ、兩朝を開濟し、天下を以て己が任と爲す、その言に曰く「竭二股肱之力一、效二忠貞之節一、繼レ之以レ死」と、眞に老臣の龜鑑なり、大衆を悉し斜谷を出て、司馬懿と、渭南に對壘するに及び、懿の侯を畏るること虎の如く、恢復の形宛然として目に在り、相持すること百餘日、軍中に卒す、長く天下後世の英雄をして、淚の襟に滿ちて自ら禁ずる能はざらしむることは、曷ぞ痛恨に勝へんとの意、眞成に一字一淚といふべし、錦官城は成都府城の名、

【長ク君王ノ笑ヲ帶ビテ看ルヲ得(ナガククンワウノエミヲオビテミルヲエ)】 (沈香亭北)を見よ、

【梨(ナシ)】 (梨花)を見よ、

【梨ニ主ナキモ吾ガ心獨リ主ナカランヤ(ナシニシユナキモワガコヽロヒトリシユナカランヤ)】 元史の許衡傳に「河陽ヲ過ギテ渴スルコト甚シ、道ニ梨アリ、衆爭ヒ取リテ之ヲ啖フ、衡獨リ樹下ニ危坐シテ自若タリ、或人何故ニ取ラザルカト問フ、曰クソノ己ノ有ニアラズシテ之ヲ取ルハ不可ナリト、或人曰ク、世亂レテ此ノ梨ニ主ナシト、曰ク梨無二主、吾心獨無一主乎一」

【夏(ナツ)】 月令に「其ノ帝ハ炎帝、ソノ神ハ祝融」また梁の元帝の纂要に「夏ヲ朱明トイフ、マタ朱夏・炎夏・三夏・九夏トイフ、マタ天ヲ昊天トイフ(昊は音カウ元氣博大の義、風ヲ炎風トイヒ、節ヲ炎節トイフ、草ヲ茂草トイヒ、木ヲ喬林・茂林トイフ」唐の太宗の詩に「人皆苦二炎熱一、我愛二夏日長一、薰風自南來、殿閣生二微涼一」王粲の大暑賦に「仰二庭槐一而嘯レ風、風既至其如レ湯、氣呼吸以祛レ暑、汗雨下而沾レ裳」陶淵明の詩に「夏雲多二奇峯一、畏日(イジツ)を見よ、

【夏ノ蟲ノ火ニ入ルガ如シ(ナツノムシノヒニイルガゴトシ)】 己の危害を知らず進んで死地に陷るに喩ふ、智度論に「愚痴多者如二燈蛾赴一レ火」また「諸欲樂甚少、愛苦毒甚多、爲二之失一身命一如二蛾赴一レ燈火一」

【蕖(ナツ)】 廣志に「一ニ雞心・牛頭・羊角・狗牙・細腰ノ名アリ」史記に「安邑千樹ノ一、燕秦千樹ノ栗、蜀漢江陵千樹ノ橘、ソノ人皆千戸侯ト等シ」漢書王吉傳に「王吉長安ニ居ル、東家ニ一樹アリ、吉ノ庭中ニ垂ル、吉ノ婦一ヲ取リテ以テ吉ニ啖ハシム、吉之ヲ知リ、乃チ婦ヲ去ル、東家聞キテ其ノ樹ヲ伐ラントス、隣里共ニ之ヲ止ム、因リテ固ク吉ニ請ヒ婦ヲ還サシム、里中語シテ曰ク、東家有レ樹、王吉婦去、東家一完、去婦復還ト」本草に「凡

一九月採曝乾、稍中益、寂」風俗通に「鮑焦耕田而食、穿レ井而飲、居山中、惟食一、或曰、子所植邪、遂強吐之、立枯而死」梁簡文帝の詩「風搖羊角樹、日映雞心枝」歐陽修の詩に「甘辛楚國赤萍實、磊落韓嫣黃金丸」

【名ト器トハ以テ人ニ假スベカラズ】 左傳成二年の傳に「新築ノ人、仲叔于奚、孫桓子ヲ救フ、桓子是ヲ以テ免ル、既ニシテ衛人之ヲ賞スルニ邑ヲ以テス、辭ス、曲縣繁纓(馬の飾にて諸侯の服なり)シテ以テ朝センコトヲ請フ、之ヲ許ス、仲尼之ヲ聞キテ曰ク、惜也不レ如レ多與レ之邑、唯器與レ名、不可以假レ人、君之所司也」と、器とは車服、名とは爵號をいふ、この二者は尊卑を表し、上下を分つ所以にして、みだりにこれを臣下に與ふるときは、國家の秩序は紊るるに至る、故に爾いふ、

【名ハ實ノ賓】 (名者實之賓)莊子の逍遙遊篇に「堯讓レ天下於許由一曰、子治二天下一、天下既已治也、而我猶代レ子、吾將レ爲レ名乎、名者實之賓也、吾將レ爲レ賓乎」

【納衣】 僧の著る「コロモ」廣韻に「宗門披レ之」「袈裟」迦葉尊者に

【納言】 舜の時、命令政教を審かにして、下に達する官の名、周の内史、漢の尚書、魏晉以來の中書門下といふ者は、皆此職なり、書經舜典に「帝曰、龍朕堲レ讒說珍行

震驚朕師」命汝作二納言一、夙夜出二納朕命一惟允」納

漢音ダフ

【納采】 采は擇なり、男女婚を結ぶとき、物を納れて采擇の禮を爲すなり、禮記の昏義に「昏禮ハ…問名、納吉、納徵、請期」とあり、問名は、女の生母の名氏を問ふ、納吉は吉トを得て之を納るるなり、納徵は、幣を納れて昏姻の證とするなり、請期は、昏姻の期日を請ふなり、漢書平帝紀に「爲二皇帝一…安漢公莽女」莽は王莽、

【衲子】 僧をいふ、一に衲僧ともいふ、衲衣(コロモ)を被るによりていふ、老衲は老僧なり、

【納日】 まさに沒せんとする日なり、書經堯典に「寅餞

【納職】 方物を貢獻するをいふ、淮南子に「海外賓伏、四夷一レ」

【納幣】 結納(ユヒナフ)婚姻の約束のしるしに、かねて互に物を贈りかはすをいふ、禮記の雜記に「一束、束五兩」

【猶ホ魚ノ水アルガ如シ】 (猶魚有レ水(水魚ノ)を見よ、

【直キコト紘ノ如キモ、道邊ニ死シ、曲レルコト鉤ノ如キモ封侯ヲ得】 (直如レ紘死二道邊一曲如レ鉤得二封侯一)漢書に見ゆ、世事は顚倒多く、君子かへりて困窮し、小人かへりて榮達することあるをいふ

【猶ホ虎口ヲ去リテ慈母ニ歸スルガ如シ】 (猶レ去二虎口一歸二慈母一)後漢書劉盆子傳に「今日得降、一一一一一一、誠歡誠喜無所恨也、帝曰卿所謂餓中餌鍾、傭中使使者也」危險の場所を逃れ去りて安樂の地に歸するに喩ふ、

【猶ホ石田ヲ獲ルガ如シ】 (猶獲二石田一)物を得て用ふる所ろなきをいふ、左傳の哀十一年に「志ヲ齊ニ得ルモ、猶ホ石田ヲ獲ルガ如シ、之ヲ用フル所ロナシ」の註に「石田ハ耕スベカラズ」とあり、

【猶ホ大魚ノ小魚ヲ呑ムガ如シ】 (猶大魚之呑小魚)說苑に「大之伐小、强之伐弱、猶大魚之呑小魚也、若虎之食豚也、弱肉强食の狀態に喩へていふ、

【猶燕ノ幕上ニ巢フガ如シ】 身の安からざるに喩ふ、左傳襄二十九年に「夫子ノ此ニ在ルヤ、猶ホ燕ノ幕上ニ巢クフガ如シ」の註に「至危ヲイフ」

【懋ニ一老ヲ遺サズ】 (不レ懋遺二一老一)懋は音ギン心に欲せずして自ら强ふる辭なり、左傳哀十六年に「孔丘卒公誄之曰、旻天不レ弔、不レ懋遺二一老一俾二屛余一人一以在レ位」とあり、屛は蔽なり、魯の哀公が孔子を追悼せし語、明道先生墓表にも、この語を引用せり、詩經の小雅に「不レ懋遺二一老一俾二我王一」とあるは、心には欲せずとも、强ひて一賢人を留めて我王を衛らしめざると國民が權臣の忠良を殘害するを怨みていへるなり、

【南無】 名義集に「或ハ那謨、或ハ南摩、此ニハ歸命ト翻ス」要律儀に、恭敬と翻す、善見論には歸命覺と翻し、或は信從と翻す、南無阿彌陀佛は淨土宗にて六字の名號と稱す、阿彌陀如來の號、觀无量壽經に「具二足十念一稱二南無阿彌陀佛一」註に「天台云、阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖教」

【南安】 縣名、漢晉・南宋・南齊は犍爲郡に屬す、今の四川嘉定府夾江縣西北二十清里に在り、また晉の郡名、秦州に屬す、今の甘肅鞏昌府隴西縣の東北に在り、また晉の荊州南平郡の縣名、今の湖南岳州府華容縣の西に在り、また南宋・南齊の郡名、秦州に屬す、今の陝西漢中府南鄭縣の地、また隋唐・宋元・明の縣名、今の福建泉州府——縣治これなり、右の外歷朝地を異にして名を同うするもの少からず、一一錄すべからず、

【南威ガ色】 (儀狄ガ酒)を見よ、

【南康】 晉・南宋・南齊・隋の郡名、今の江西贛州府贛縣の西南に在り、また晉以後今日に至るまでの縣名、今の江西南安府——縣治これなり、また宋の江西南東路

——軍、元の江西省——路、明の——府は、今の江西——府星子縣治これなり、

【南岳】 五岳の一なる衡山の異名、書經舜典に「至于——(ニ)五嶽」を參看せよ、

【南柯ノ夢】 異聞集に「淳于棼、廣陵ニ家居ス、宅ノ南ニ古槐樹アリ、棼酔ヒテ其ノ下ニ臥ス、夢ミラク、二使者曰ク、槐安國ノ王邀ヘ奉ルト、棼使ニ隨ヒテ穴中ニ入ル、榜ヲ見ル、曰ク、大槐安國ト、其ノ王曰ク、吾ガ南柯郡ノ政事理ラズ、卿ヲ屈シ守トナシテ、之ヲ理メシメントテ、棼郡ニ至リテ凡ソ二十載、遂リ歸ラシム、遂ニ覺ム、因リテ古槐下ノ穴ヲ尋ヌルニ、洞然トシテ明朗ナリ一榻ヲ容ルベシ、一大蟻アリ、乃チ王ナリ、又一穴ヲ尋ヌルニ、直チニ南柯ニ上ル、即チ棼ガ守リシ所ロノ郡ナリ、佐藤一齋の楠廷尉贊に「南柯ト夢、非熊非羆、爰啟王嬪萬夫之雄」とせしは、後醍醐帝が笠置山に於て南木の夢を見たまひしことを、この故事に通はせて用ひたるにて巧手段といふべし、

【南洽北暢】 天子の恩威の四方に被るをいふ、終軍の白麟奇木對に「大將軍乘鉞、單于幕、稟騎抗旌、昆邪右袒、是澤南洽而威北暢也」

【南宮】 縣名、西漢は信都國、東漢は冀州安平國、北魏は、冀州長樂郡、隋は冀州信都郡、唐は河北道冀州に屬す、宋金元亦皆冀州に屬す、今の直隸冀州南宮縣の西北に當る、明の南宮縣は即ち今の南宮縣治是れなり、地理韻編による、

【南橘北枳】 風土の異なるによりて人品の善惡あるに喩ふ(江南ノ)を見よ、

【南金】 最も貴き黃金、荊州(湖南湖北兩省ノ地揚州(江蘇省揚州府ノ邊)地方より産す、詩經魯頌泮水に「憬彼淮夷、來獻其琛、元龜象齒、大路——琛は寶なり、賂は遺なり、

【南無歸命頂禮】 南無は梵語、譯して歸命といふ、梵漢を取り合せていふ、即ち佛の敎命に歸就する義なり又救我、度我とも譯す、頂禮とは、圓覺經の疏に「以己最勝之頂、禮佛最卑之足、敬之至也」とあり、

【軟脚病】 脚氣病なり、韓愈の祭十二郎文に「比得——往往而劇」

【南極】 南のはて、また老人星の一名、漢書に「老人星曰——、北辰を北極といふに對していふ、史記天官書にも見ゆ、杜甫の句に「——老人主壽昌」

【軟玉】 豆腐の異名、蘇東坡の豆腐の詩に「鎗中——香」また天祿識餘に「豆腐ハ淮南王劉安造ル、マタ黎鄂

ト名ヅク」

【南郭濫竽】 その實力なくして、みだりにその位に在るものを稱して——といひ又濫吹ともいふ、韓非子內儲說に「齊ノ宣王人ヲシテ竽ヲ吹カシムルニ、一吹必ズ三百人ナリ、南郭先生竽スルコト能ハズシテ、三百人ノ內ニ濫シ、以テ祿ヲ食メリ、宣王死シテ子文王位ニ卽ク、曰ク、寡人竽ヲ吹クコトヲ愛スルモ、一一之ヲ聽カンコトヲ欲スト、先生辭イテ乃チ逃グ、是ヲ以テソノ濫タルコヲ知レリ」と、竽とは、笛の類、古は三十六管なりしが後世に至りて十九管となす、管の排列は參差として鳥の翼にかたどる、

【南華之悔】 上官に忤ひてそれが爲めに試驗に及第することを得ざりしをいふ、唐詩紀事に「令狐綯爲相、以崔邠門溫庭筠曰、事出南華經非僻書也、裴相公璩理之暇、時宜覽古、綯忽卒不得第、庭筠有詩曰、因知此恨人多積、悔讀南華第二篇」また陸游の詩に「從宦只思乘下澤、忤人常悔讀南華」

【南華ノ篇】 莊子の書の別名、唐の玄宗の時、莊子を封じて南華眞人となす、唐書藝文志に「天寶元年詔號莊子爲南華眞經」(莊子)を見よ、

【南冠】 楚國の冠、左傳成九年に「——而繫者誰也」即楚人鍾儀が——して囚はれし故事に本づき囚虜の意とす、趙嘏の詩に「鱸魚正美 不歸去 空戴——學楚囚」(楚囚)を參看せよ、

【南華老仙】 莊周の別名、李白の大鵬賦に「————發天機于漆園」(南華ノ)を參看せよ、

【難月】 「ウミヅキ」臨月に同じ、儒門事親に「臨——」病

【南軒先生】 (張栻)を見よ、

【南山】 終南山をいふ、周の都なりし豐鎬の南に在り、詩經の小雅天保に「如——之壽 不騫不崩」

【南山ノ歌ヲ唱ヘテ寧戚ガ行ヲ學ブ】 太平記卷二十一に見ゆ、三齊略記に「寧戚候齊桓公出、扣牛角歌曰、南山粲粲、白石爛爛、中有鯉魚、長尺有半、生不遭堯與舜、短布單衣纔至骭、從昏飯牛至夜半、長夜漫漫何時旦、桓公召之、因以爲相云云」戚は衞人、家貧にして資なし、故に人の爲めに車を挽きて齊國に至りしなり、ここに引くところの詩は琴操に出づるのと異なり(牛角ノ歌)を見よ、

【南山ノ影ヲヒタサネドモ青クシテ混濛タリ】 東關紀行に見ゆ、これは白氏文集三の昆明春水滿に「春池岸古春流新、影浸南山青混濛」とあるに本づく、混濛は

水のひろびろとたたへたる貌、

【南山之壽】（ナンザンノコトブキ） 長壽を祝する辭なり、詩の小雅天保篇に「如月之恒、如日之升、如南山之壽、不騫不崩」

【南山虎】（ナンザンノトラ） 藍田縣（陝西省西安府）の南山に棲める虎にて極めて猛き虎をいふ、李白の詩に「弓摧ー（ユミクダケ）ーー（ナンザンノトラ）元の郝經の句に「南山射虎曾得名」（周處）を見よ、

【南山可移】（ナンザンハウツスベキモ） 判不可移唐書に「李元紘、字ハ大綱、雍州ノ司戸參軍ト爲ル、時ニ太平公主、勢天下ニ震フ、有司風指ヲ順望ス、皆テ僧ト碾磴ヲ爭フ、元紘之ヲ寺僧ニ還ス、長史竇懷正、大イニ慙キ、趣（ウナガ）シテ之ヲ改メシム、元紘判後ニ大書シテ曰ク、南山ハ移スベキモ、判ハ移スベカラズト、累遷シテ尚書侍郎ニ至ル」

【南史】（ナンシ） 八十卷、北史一百卷と共に唐の李延壽が南北八朝の正史に就きて繁を刪り闕を補ひて纂修せしものなれば、大に學者に益あり、既に此の二書あれば、必ずしも八朝の正史を讀むを要せず 殊に北史は力を用うること深く、南史の闕略なるに似ず、二書共に志表なし、

【南至】（ナンシ） 冬至をいふ、秋分の日より太陽南に廻りて、冬至の日にはその極に至るの義、左傳僖五年に「春王正月辛亥朔、日ー（ニチー）」注に「周ノ正月ハ今ノ十一月ナリ、秋分ヨリ、日南陸ニ行ク、冬至ニ至リテ、日南極ス、極ハ即チ至ナリ」

【南州ノ源】（ナンシウノミナモト） 暑酔ニテ酒ノ如シ】 南州は「ムシアツク」して酒に醉ひたる如しとの義（日午）を見よ、

【南宗北宗】（ナンシウノホクシウ） 禪宗の二派、傳統錄に「弘辯禪師曰、禪宗本無二南北一、如來以二正法眼藏一付二迦葉一、傳至二達磨一來、此爲二初祖一、曁二五祖一、二弟子慧能住二嶺南一、神秀住二北一、得法雖一、而開導發悟、頓漸不レ同、故曰二南頓北漸一、また畫人の二派、容臺集に「禪家有二南北二宗一、唐時始分、畫之南北二宗亦唐時分也、但其人非二南北一耳、北宗則李思訓父子、著色山水、南宗則王摩詰始用二渲淡一變二鈎斫之法一、荊浩筆畫編に「前古之畫、多作二古賢故實及圖像一而已、故論レ畫者、未レ嘗及二山水一、自二王右丞・李將軍父子各擅一レ宗派一、乃始有二南北之分一云云」なほ學畫編によれば二派の系統左の如し

唐 王維（字摩詰、官至右丞）—宋 董源（字叔達、又字北苑）—釋 巨然

南宗
- 米芾（字元章）—米友仁（字元暉、芾之子）—元 倪瓚（字元鎭、號二雲林子一）
- 黃公望（字子久、號二大癡道人一）—王 蒙（字叔明、號二黃鶴山樵一）—明 董其昌（字元宰）

北宗
- 唐 李思訓（號二大李將軍一）—李 昭道（號二小李將軍一、思訓之子）—宋 郭 遠
- 馬遠—夏珪（字禹玉）—劉松年—趙伯駒（字千里）
- 李唐（字晞古）—劉 安（字晞道）—周 臣（字舜公、號二東村一）

【南枝北枝ノ梅開落已ニ異ル】（ナンシホクシノウメカイラクすでにことなる） 慶滋保胤が春逐地形序（本朝文粹八ニ出ヅ）の句、曰く「東岸西岸之柳、遲速不レ同、南枝北枝之梅開落已異」春の來るは地の陰陽寒暖によりて遲速先後の差あるをいへり、保胤は圓融帝の時の人、この句、朗詠集にも抄せり、

【南城】（ナンジヤウ） 西漢以後、明に至るまでの縣名、今の江西建昌府ー縣治これなり、別に東漢・南宋の兗州、北魏の北徐州にー縣あり、今の山東沂州府費縣の西南九十里、その他、同名異地あれども略す、

【軟弱】（ナンジヤク） 軟は輭の俗字なり、一音センーは柔弱に同じ、戰國策に「李園ーー人也」史記春申君傳にも見ゆ、また史記貨殖傳に「妻子輭弱」

【軟聲】（ナンセイ） 「ヤサシキ」聲、梁簡文帝の詩に「嬌歌逐ーー（フテ）ニ」

【南蠻雲】（ナンバンウン） 唐の魏州頓丘の人なり、少くして微賤なり、祿山の反する、人の爲めに使して張巡を見る、退いて曰く、張公心を開き人を待つ、眞に吾が事ふる所なりと、遂に留る、巡圍を破り、室を築きて萬死一生の者を募る、敢日敢て應ずる者なし、俄にして噎鳴して來る者あり、乃ち蠻雲なり、後ち巡と共に節に死す（南八男兒）を參看せよ、

【南齊書】（ナンセイシヨ） （齊書）を見よ、

【南詔】（ナンセウ） 唐の初、雲南の蠻族六部に分かる、之を六詔といふ、詔とは蠻語王の謂なり、蒙舍詔最南に在り、故に又ーーといふ、玄宗の朝、ーーの舍長に、皮邏閣あり、勇武にして他の五詔を脅服し、太和城（雲南太理府太和縣ノ南）に據る、玄宗之を冊して雲南王となす、ーー是より唐に服せしが、後ち事を以て唐を怨み、吐蕃と通じ、安祿山の亂後、屢ー四川を侵せり、已にして吐蕃は唐及び回紇と連年兵を構へ、國庫空乏して、頻にーーに責求せしかば、ーー怨みて遂に吐蕃と絕ち、復唐と通じ、屢ー吐蕃を破りて大に領土を開けり、皇紀千五百十九年、皮邏閣六世の孫、舍龍ーー王たるに及びて、國を大理と號し、皇帝を稱す、唐の兵備の嚴ならざるを察し、盟に背きて四川を侵し、又交趾を侵して、安南都護府を陷れしが、唐將高駢之を恢復せり、この時南詔の領土、交趾より東印度の閉に跨りしが、舍龍の死後、

國勢漸く振はずして、遂に和を唐に請へり、

【何ゾ一日モ此ノ君ナカルベケンヤ】（此君）を見よ、

【何ゾ燭ヲ乘リテ游バザル】文選の古詩に「生年不滿百、常懷千歲憂、晝短苦夜長、何不秉燭游」

【涙ヲフルヒテ馬謖ヲ斬ル】諸葛亮、政を爲すに私なし、馬謖は素より亮の知る所ろとなる、敗軍に及び、流涕して之を斬り、而して其の後を恤みき、詳しくは三國志の蜀志を見よ、

【南道ノ主人】（東道ノ）を見よ、

【難中ノ難】難き中にて、最も難しといふ義、无量壽經に「若聞斯經信樂受持、難中之難、无過此難」

【禍ニ出ヅル者ハ福ニ反ル】（出乎爾者反乎爾）禍も福も皆自ら取る所ろたるをいふ、孟子梁惠王下に「曾子曰、戒之戒之、出乎爾者也、反乎爾者也」と有ると、意相似たり、

【欽塵】「ヤハラカキチリ」花柳界のはてに、にぎやかなる事に用ふ、許有壬の句に「東華足ー塵」

【南朝】晉室が南に遷りて東晉と號せしより、その後を受けし宋齊梁陳の四朝を合せてーーと稱す、江北に國を立てしものを北朝といふに對していふ、杜牧の句に「自古ーー多曠達」（南北朝）を見よ、

【南朝四百八十寺】南朝は佛法を崇べり、故に佛寺多し、この多くの寺塔が烟雨の依稀たる中に立ちて景致を添ふるをいふ、十の字、江南地方の音シンにて平韻に用ひたりとの說あれども、轉句は必ずしも平仄に拘せず、矢張りシフの音に讀み仄三連とするも差支なし、この詩は唐の杜牧の江南春の詩の轉句なり、曰く、

千里鶯啼綠映紅、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中、

【南天燭】植物の名、ナンテン、本草綱目に「本名南燭、俗謂之ーー、木而似草、凡有八名」

【喃喃】喋喋に同じ、「ベチャベチャ」と「シャベル」北史房陵王勇傳に「奢頭ーー細語」また讀書の聲、寒山の詩に「仙書一兩卷、樹下讀ーー」

【南八男兒終ニ屈セズ】南八は、もと唐の張巡が南霽雲を呼びて共に節に殉ぜし故事により男兒の氣節ある者の稱とす、霽雲は南家の排行にて第八に當れり故にいふ、韓愈の張中丞傳後序に「城陷、賊以刃脅降巡、巡不屈、即牽去、將斬之、又降、霽雲雲未應、巡呼雲曰、南八、男兒死耳、不可爲不義屈、雲笑曰、欲將以有爲也、公有言雲敢不死、即不屈、謝枋得の初到建寧」

賦詩に

雪中松柏愈青青、扶植綱常在此行　天下公無雙勝潔、人間何獨伯夷清、義高便覺生堪捨、禮重方知死甚輕、南八男兒終不屈、皇天上帝眼分明、

【南贅缺舌】（缺舌）を見よ、

【南皮】縣名、漢晉は勃海郡に屬し、南宋は冀州河閒郡に屬す、今の直隸天津府ーー縣の東北八清里、北魏隋唐宋金元明の時は即ち今のーー縣治これなり、

【南風競ハズ】（南風不競）南風は、南方の國風の詩なり、其の詩を歌ふに、其の音衰弱して競はざるは、以て南方の國勢の衰へて振はざるを知るべし、左傳の襄十八年に「晉人楚ノ師アリト聞ク、師曠曰ク、害アラズ、吾レ樂北風ヲ歌ヒ、又南風ヲ歌フ、南風競ハズ、死聲多シ楚必ズ功ナカラン」とあり、楚は南方なり故にいふ、また世說に「王獻之嘗看諸門生楸蒲見有勝負因曰、南風不競」これは南方に坐せし者の負に歸することをいへり、また日本外史楠公論贊に「笠置夢兆、於是益驗、而南風不競、俱傷共亡」とせしは南朝の衰へたるをいへるなり、

【南風ノ歌】孔子家語に「昔者舜五絃ノ琴ヲ彈ジ、南風ノ詩ヲ歌ヒ而シテ天下治ル、ソノ詩ニ曰ク、南風之薰兮、可以解吾民之慍兮、南風之時兮、可以阜吾民之財兮」南風は夏の風なり、阜は厚なり、史記の樂書にも見ゆ、これより天下のよく治りしを南風之薰といふ、

【南豐】縣名、晉南宋南齊のは今の江西建昌府廣昌縣の東、唐以後のは今の建昌府ーー縣治これなり、

【南北朝】東晉の末、劉裕、晉の祚を簒ひ、建康に都し、江南を領し、國を宋と號せしより以後隋の一統までを南朝といふ、また北方にては五胡十六國次第に亡び拓跋氏江北を領し國を魏（三國ノ魏ニ對シテ後魏トイフ）と號せしより北朝といふ、これより兩朝各帝と稱して相下らず、後ち隋に合せらるるまでを南北朝の世といふ、

南朝　宋——齊——梁——陳　隋
北朝　後魏（西魏、東魏——北齊）——後周

【南冥】南海なり、冥は溟に通ず、莊子逍遙遊に「北冥有魚、其名爲鯤、鯤之大不知其幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背不知其幾千里也、怒而飛、其翼若垂天之雲、是鳥也、海運則將徙於ーー、ーー者天池也」

【南面孤ト稱ス】（南面稱孤）南は陽なり、南面は人君治を聽くの位なり、孤は王侯自ら謙するの稱にて、即ち帝王となるの意、莊子に「凡人有レ此一德者足レ以南面稱孤矣」史記荊燕世家に「劉澤卒――レ者三世」また呂氏春秋士容篇には「南面稱寡」とあり、寡は寡人なり、

【南面之尊】　天子の位をいふ、易の繫辭下傳に「聖人南面而聽二天下一嚮レ明而治」とあり、南面は陽に向ふの義なり、漢書貢禹傳に「處――――」

【南面百城ノ樂】　南面は人君の位なり、人君となりて、百城を領する如き富貴の樂をいふ、北史李謐傳に「鳩二集諸經一校二異同一（中略）每曰、丈夫擁二書萬卷一、何假二南面百城一」

【南陽】　兩漢の郡名（荊州）晉の國名（荊州）南宋南齊北魏の郡名、北魏以後の縣名、以上は今の河南――府――縣治これなり、別に南宋南齊の縣名（益州）今の成都府什邡縣の西二十三清里に在り、この外歷朝同名異地多し、詳しくは地理志韻編卷八上を見よ、

【南陽縣菊水】　風俗通に「南陽ノ酈縣ニ甘谷アリ、谷中水甘美ナリ、上ニ大菊アリ、水ニ落チテ山ヨリ流レ下ル、ソノ流液ヲ得テ、谷中二十餘家此ノ水ヲ飲ム、上壽八百二三十、其ノ中壽八百餘歲、七十八十ノ者ハ之ヲ夭ト爲ス」荊州記にも「酈縣北有二菊水一、其涯芳菊被レ岸、水甘香美、胡廣久患二風羸一、飲二此水一遂瘳」と、因にいふ、東鑑承久三年七月の條に「十日壬辰、中御門入道前中納言宗行、相伴小山左衞門尉朝長一下向、今日宿二于遠江國菊河驛一、終夜不レ能レ眠、獨向二閑窓一讀二誦法華經一、又有二書付旅店之柱事一、昔南陽縣菊水、汲二下流一而延レ齡、今東海道菊河、宿二西岸一而失レ命」とあり、承久軍記物語にも見ゆ、

【南陽ノ草廬】　諸葛孔明は初め南陽（河南省南陽府）の草廬に住せり、故にその舊居を指していふ、孔明の出師表に「臣本布衣、躬耕二南陽一、苟全二性命於亂世一、不レ求レ聞達於諸侯一、先帝不レ以二臣卑鄙一、猥自枉屈二三顧臣於草廬之中一」

【南容ハ日ニ白圭ヲ三復ス】　孔子の弟子南容が言語を謹むことのあつかりしをいふ、論語の先進に「南容三二復白圭一、孔子以二其兄之子一妻レ之」朱註に「詩大雅抑之篇曰、白圭之玷、尙可レ磨也、斯言之玷、不可レ爲也、南容一日三二復此言一、事見二家語一、蓋深有二意於謹レ言也一」ありと、孔子家語弟子行篇に「獨居思レ仁、公言言義、其於レ詩也、則一日三二復白圭之玷一、是宮縚之行也、孔子信二其能仁一、以爲異士一、而容は名は縚、また名は适、字は子容、南宮に居る、敬叔と謚す、孟懿子の兄なり、

【軟輪】　蒲にて車輪をつつみて柔軟ならしむるなり、安車蒲輪といふに同じ、後漢書明帝紀に「安車――」

【南呂】　八月の律の名（十二律）を見よ、

【南樓嘯咏】　秋の月を弄びて詩を嘯き咏ずる故事（庾亮）を見よ、轉じて秋夜觀月の宴を開くを南樓之會といふ、李白の詩に「清景南樓會、風流在武昌」また曹唐の詩に「月滿二前山一風不レ動、更邀二詩客一醉二南樓一」

【那羅延】　天上の力士、勝力、又は堅固又は人種神と譯す、俱舍廿七の疏に「――此曰二人種神一、十九象力當二一香象力一、十香象力當二一太露形神力一、十太露形神力當二一勝藴神力一、十勝藴神力、當二一妙支神力一、十妙支神力、當二一執持神力一、十執持神力、當二一人種神力一」翻譯名義集に「維摩經――菩薩、涅槃經翻爲二金剛一」

【那落】　那落迦の轉、地獄なり、不可樂と譯す、また泥犁耶ともいふ、墮落また无赦とも譯す、

【捺落】　前の那落に同じ、名義集に「捺落迦、或那落迦、此云二不可樂一、亦云二苦具一、亦云二苦器一云云」

【習性トナル】　書經の太甲篇に「伊尹曰ク、茲乃不義習與性成」の註に「乃ノ不義ノ事、惡ニ習ヒテ性トナルモノナリ」

【那爛陀寺】　施无厭と譯す、宋高僧傳に「――――周圍四十八里、九重一門是九天王所造、西域伽藍无レ如二其廣一矣、また祖庭事苑に「那蘭陀地本菴沒羅長者園、五百商人、以二十億金一、買以施レ佛、佛於二此處一三月說法云云」

格言五則

喜二名者必多一怨一、好二與一（與譽通）者必多一辱一　（韓詩外傳）

名者名レ形者也、形者應レ名者也　（尹文子）

名不二與一利期一、而利歸レ之、利不二與一爭期一而爭及レ之　（列子）

諺二夏必長一、而麥多枯一、諺二冬必凋一、而松柏茂　（抱朴子）

夏則資レ皮、冬則資二綈、旱則資レ舟、水則資レ車　（范蠡子）

【二酉】 多く書を藏せし處の名、類書纂要に「小酉大酉、二山名、在古辰州府城西、石穴中有書千卷、相傳秦人于此而學、因留焉」と、この事荊州記又は郡國志にも見ゆ、轉じて著書の多きことを「二酉ノ書」又は「二酉ノ富」などといふ、

【乳虎】 子を乳養せる虎は最も兇暴なり、以て猛烈の威を形容するに用ふ、漢書寧成傳に「寧見——無値」寧成之怒、其暴如此」

【乳臭】 成語考に「口尚乳臭トハ、世人年少クシテ無知ナルヲイフ、漢書の高祖紀に「漢王以韓信擊魏王豹、問鄒食其、魏大將誰、對曰柏直、漢王曰、是口尚乳臭、安當吾韓信」

【二儀】 天地なり、梁元帝纂要に「天地曰二儀、以人參之曰三才」

【二簋以テ享スベシ】 二簋可以享」易の損卦の語、簋は祭に黍稷を盛る器にて、內圓に、外方につくる、苟も心に敬を存ずるあれば、二簋の節約なる「ソナヘモノ」も、亦鬼神を享すべきの義、

【肉ヲ割ク】 (割肉)(東方朔)を見よ

【肉ヲ以テ蟻ヲ去ル】 (以肉去蟻)禍害を除くにその術を誤るに喩ふ、韓非子外儲說に「——魚腥蠅蠅愈至」

【肉ヲ以テ餓虎ニ委ス】 (以肉委餓虎)徒死して益なきをいふ、史記張耳陳餘傳に「今必俱死、如——何益」また信陵君傳に「譬若以肉投餓虎、何功之有哉」

【肉好】 美聲をいふ、史記樂書に「寬裕——」註に「——音ノ洪美ヲイフ」肉は人の口より出づる聲をいふ、

【肉角】 麒麟の一名、後漢書班彪傳の注に見ゆ、

【肉腐リテ蟲ヲ出ス】 (肉腐出蟲)身怠るときは、禍のおこるに喩ふ、荀子勸學篇に「——」——魚枯生蠹」

【肉刑】 身體を傷くる刑罰なり墨劓刖宮などをいふ、漢書刑法志に「禹承堯舜之後、自以德衰、而制——」——また「至于戰國、韓任申子、秦用商鞅、連相坐之法、造參夷之誅、增加——大辟有鑿顚抽脇鍵烹之刑」荀子の正論篇に「治古無——」

【肉山】 黃庭堅の詩に「六月火雲蒸——」註に「張文潛ガ體ノ肥エタルニ戲ルルナリ」

【肉山脯林】 脯は乾肉(ホジシ)なり、山林は肉の多きを形容していふ、帝王世紀に「夏桀爲——、殷紂爲酒池肉林」また文選の曹植與吳質書に「願學泰山以爲肉、傾東海以爲酒」

【肉陣】 開元遺事に「楊國忠、冬月選婢妾肥大者、行列于前、令遮風、謂之——」——肉屏風)を參看せよ、

【肉食】 美食するもの、世人をいふ、左傳莊十年に「——者謀之、又何閒焉、劇曰——者鄙未能遠謀」

【肉盛盤】 宴飲に多くの妓女を侍せしむるをいふ(肉屏風)を見よ、

【肉袒】 上衣を去りて、肢體を露はすなり「ハダヌグ」謝罪の時に之を爲す、左傳宣三年に「鄭伯——牽羊以逆、また戰國策に「田單免冠徒跣——而進、退而請死罪」史記廉頗傳に「廉頗聞之——負荊至門謝罪」

【肉陣】 開元遺事に「楊國忠、冬月婢妾ノ肥大ナル者ヲシテ、前ニ行列シ、風ヲ遮ラシム、之ヲ——トイフ」陣一に障に作る、

【肉屏風】 書言故事に「唐ノ楊國忠家富ム、凡ソ客アリテ酒ヲ設クルニ、妓女ヲシテ各一其ノ事ヲ執ラシム、肉盞盤ト號ス、冬月妓女ヲシテ之ヲ圍マシム、肉屏風ト號ス、又妾ノ肥大ナル者ヲ選ビテ、前ニ行列セシメテ風ヲ遮ラシム、之ヲ肉障トイヒ、マタ肉陣トイフ」また事類全書に「南唐ノ孫晟、官司空ニ至ル、食フ每ニ几案ヲ設ケズ、衆妓ヲシテ各一器ヲ執リテ環立シテ侍セシム、肉盞盤ト號ス、時ノ人多ク之ニ效フ」とあり、

【肉味ヲ知ラズ】 (不知肉味)深く或る事物に心を專にして、他事に氣付かざるをいふ(三月肉ノ)を見よ、

【二喬】 二人の美女をいふ、周瑜、孫策に從ひて皖城を攻め、喬公の兩女を得たり、皆國色なり、策自ら喬を納れ、瑜小喬を納れぬ、

【二月ニ新絲ヲ賣リ、五月ニ新穀ヲ糴ル】 二月は方に蠶桑の時にして未だ絲あらざるに、先づ豫め絲を賣り、五月は方に田をくさざる時にして未だ穀あらざるに、先づ穀を賣るは農家貧苦の狀あはれむべし、これは唐の時の語、

【二南】 周召南の總稱、詩の國風の中、周南召南の二部を指す、

【二天】 (二儀)を見よ、

【二豎】 病魔なり、左傳成十年に「晉侯夢大厲、被髮及地、搏膺而踊曰——爲虐於我」

【二毛】 白髮交りの頭髮なり、禮記檀弓に「——者不鬪」

【二名】 二字の名なり、禮記曲禮に「——不偏諱」

【二陵】 (二酉)を見よ、

【二流】 (二儀)を見よ、

【二儀】 天地なり、梁元帝纂要に「天地曰二儀、以人參之曰三才」

【二簋以テ享スベシ】 (二簋可以享)易の損卦の語、簋は祭に黍稷を盛る器にて、內圓に、外方につくる、苟も心に敬を存ずるあれば、二簋の節約なる「ソナヘモノ」も、亦鬼神を享すべきの義、

【肉ヲ割ク】 (割肉)(東方朔)を見よ

【肉ヲ以テ蟻ヲ去ル】 (以肉去蟻)禍害を除くにその術を誤るに喩ふ、韓非子外儲說に「——魚腥蠅蠅愈至」

【肉ヲ以テ餓虎ニ委ス】 (以肉委餓虎)徒死して益なきをいふ、史記張耳陳餘傳に「今必俱死、如——何益」また信陵君傳に「譬若以肉投餓虎、何功之有哉」

【肉好】 美聲をいふ、史記樂書に「寬裕——」註に「——音ノ洪美ヲイフ」肉は人の口より出づる聲をいふ、

【肉角】 麒麟の一名、後漢書班彪傳の注に見ゆ、

【肉腐リテ蟲ヲ出ス】 (肉腐出蟲)身怠るときは、禍のおこるに喩ふ、荀子勸學篇に「——」——魚枯生蠹」

【肉刑】 身體を傷くる刑罰なり墨劓刖宮などをいふ、漢書刑法志に「禹承堯舜之後、自以德衰、而制——」——また「至于戰國、韓任申子、秦用商鞅、連相坐之法、造參夷之誅、增加——大辟有鑿顚抽脇鍵烹之刑」荀子の正論篇に「治古無——」

【肉山】 黃庭堅の詩に「六月火雲蒸——」註に「張文潛ガ體ノ肥エタルニ戲ルルナリ」

ズ、婚姻序ヲ失スレバ即チ此ノ氣ヲ生ズ（中略）詩ニ曰ク蝃蝀在レ東ト、蝃蝀ハ虹ナリ（中略）凡ソ虹雙出シテ色鮮盛ナル者ヲ雄ト爲ス、雄ヲ虹トナス、闇キ者ヲ雌ト爲ス、雌ヲ蜺ト爲ス」白虎通に「天弓ハ虹ナリ、又之ヲ帝弓ト謂フ」李白の詩に「安得五彩虹、架天作長橋」

【錦ヲ織リ詩ヲ題ス】（織錦題詩）回文ノ詩）を見よ、

【錦ヲ衣テ駿衣ス】（衣錦駿衣）錦は文衣なり、駿は單衣なり、錦を被て駿を加ふるは、其文の大に著るるをにくむが爲めなり、詩經衞風に「碩人其頎、衣錦褧衣」と、頎は長き貌、中庸に「衣錦尚絅、惡其文之著也」

【錦ヲ著テ故郷ニ臨ル】太平記卷十七に見ゆ、漢書に「富貴不歸故郷、如衣錦夜行」とあるに本づく、

【錦ヲ衣テ昼行ク】（衣錦晝行）富貴にして故郷に歸るをいふ、魏志に「張既、雍州ノ刺史トナル、太祖既ニ謂ヒテ曰ク、君ヲ本州ニ還ス、繡ヲ衣テ晝行クト謂フベシ」と、繡ヲ衣テ夜行ク）を見よ、

【二十一史】（二十二史）を見よ、

【二十一史約編】清の鄭元慶（字ハ芷畦、歸安ノ人）二十一史の文を摘錄して康熙三十五年この編を成す、この書卷首及び金石絲竹匏土革木の八部に分つ、

【二十五菩薩】觀世音、大勢至、藥王、藥上、普賢、法自在王、陀羅尼、白象王、虛空藏、寶藏、德藏、金藏、光明王、金剛藏、山海慧、華嚴、日照王、月光王、衆寶王、三昧、獅子吼、定自在王、大威德、大自在王、无邊身の諸大菩薩をいふ、十往生經に「若シ衆生アリテ阿彌陀佛ヲ念ジ、往生ヲ願ハン者ハ、彼ノ佛、即チ一一ヲ遣シテ行者ヲ擁護シ、若クハ行、若クハ座、若クハ臥、若クハ晝、若クハ夜、一切時、一切處ニ、惡鬼惡神ヲシテソノ便ヲ得シメザルナリ」

【二十四孝】古今の孝子二十四人を撰びていふ、大舜・漢文帝・曾子・閔損・仲由・董永・剡子・江革・陸績・唐夫人・吳猛・王祥・郭巨・楊香・朱壽昌・庾黔婁・老萊子・蔡順・黃香・姜詩・王褒・丁蘭・孟宗・黃山谷 是れなり、山崎美成の世事百談に「二十四孝は元の郭居業が作なるよし典籍便覽に見えたり云云」要するに一一一一の稱は、撰擇當を失し、怪異の語多く、世俗の說たるを免れず、

【二十四氣】一年中の氣節を分ちて稱す、一に二十四節ともいふ、立春・雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨（以上春）立夏・小滿・芒種・夏至・小暑・大暑（以上夏）立秋・處暑・白露・秋分・寒露・霜降（以上秋）立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・大寒（以上冬）淮南子天文訓を見よ、

【二十四史】清の乾隆帝の四庫館を開くや、舊唐書を

索め、薛五代史を補修し、之を二十二史に加へて一一一といひ都て三千二百四十三卷とし武英殿にて合刻せり（二十二史）を見よ、

【二十二史】史記（司馬遷）前漢書（班固）後漢書（范曄）以上を三史といふ、これに三國志（陳壽）晉書（房玄齡）宋書（沈約）南齊書（蕭子顯）梁書（姚思廉）陳書（同上）後魏書（魏收）北齊書（李百藥）周書（令狐德棻）隋書（魏徵等）南史（李延壽）北史（同上）唐書（歐陽修）五代史（同上）を加へて十七史といひ、更に遼史（托克托）金史（同上）宋史（同上）元史（宋濂）を加へて二十一史といひ、明史（張廷玉）を加へて二十二史といふ、唐書と五代史とには、新舊二種あり、すべて合して二十四史ともいふ、清の錢大昕の廿二史考異一百卷、趙翼の二十二史劄記三十六卷、參考の資とすべし、

【二十二史劄記】三十六卷、清の趙翼が史記より明史に至る二十二史に就きてその誤謬を訂正し、また政事の得失、治亂興亡の故に關するある者は、論評を付せり、錢大昕がこの書を評して「記誦ノ博、義例ノ精、論議ノ和平識見ノ宏遠ナル、洵ニ儒者體アリ用アルノ學ニシテ坐シテ言フベク、起チテ行フベキ者ナリ」といへるは當れりといふべし、

【二十八將】後漢の光武帝を助けて天下を定めたる功臣二十八人をいふ（雲臺ノ）を見よ、

【二十八宿】支那の古代天文學にて周天の星を二十八に分ちて稱す、四方各、七星あり、

東方（蒼龍）角（スボ）亢（アミ）氐（トモ）房（ソヒ）心（ナカ）尾（アシ）箕（ミ）

北方（玄武）斗（ヒツ）牛（イナ）女（ヲトメ）虛（トミ）危（ウミ）室（ハツ）壁（ナマ）

西方（白虎）奎（トカ）婁（タタ）胃（コキ）昴（スバル）畢（アメ）觜（トロ）參（カフ）

南方（朱雀）井（ヨナ）鬼（タマ）柳（ヌリ）星（ホトリ）張（コヨリ）翼（タマ）軫（ミツヤ）

なほ星宿の事は、史記の天官書、漢書の天文志等を參看せよ、

【二十四番花信風】清繁露に「二月花開ク時ノ風ヲ花信風ト名ヅク、按ズルニ、呂氏春秋ニ春ノ風ヲ得ル風信ナラザレバ則チ其ノ花成ラズ、乃チ知ル花信ノ風トハ、風花期ニ應ジ、其ノ來ル信アルナリ」焦氏筆乘に「唐時ニ、一一一一一一一一一一一一、一ケ月ニ二氣六候アリ、小寒ヨリ穀雨ニ至ル迄四月八氣二十四候トシ、候ゴトニ五日ニシテ、一花ノ風信ヲ以テ之ニ應ズ、小寒ノ一候ハ梅花、二候ハ山茶（ツバキ）三候ハ水仙、大寒ノ一候ハ瑞香、二候ハ蘭花、三候ハ山礬、立春ノ一候ハ迎春（ウウバイ）二候ハ櫻桃（ユスラ）三候ハ望春（コブシ）雨水ノ一候ハ菜花、二候ハ杏花、三候ハ李花、啓蟄ノ一

候ハ桃花、二候ハ棣棠、三候ハ薔薇、春分ノ一候ハ海棠、二候ハ梨花、三候ハ木蘭、清明ノ一候ハ桐花、二候ハ麥花、三候ハ柳花、穀雨ノ一候ハ牡丹、二候ハ酴醾、三候ハ楝花ノ風、楝花竟レバ則チ立夏ナリ」

【二豎】 病魔なり、轉じて疾病の義とす、左傳に「晉侯疾、病求醫于秦、秦伯使醫緩爲之、未至、侯夢疾爲二豎子、曰彼良醫也、惧傷我、焉逃之、其一曰、居肓之上、膏之下、若我何、醫至曰、疾不可爲也、在肓之上、膏之下、攻之不可、達之不及、藥不至焉、不可爲也、侯曰、良醫也、厚爲之禮而歸之」とあるに本づく、

【二松ヲ對樹ス】 韓愈の藍田縣丞廳壁記に「崔斯立藍田縣丞トナリ二松ヲ對樹シ、日ヽニソノ閒ニ哦ス」

【二世皇帝】 嬴姓趙氏、名は胡亥、秦始皇の少子、始皇崩じ、詔を詐り、太子扶蘇に死を賜ひ、立て太子と爲り、尋で位を襲ぐ、趙高を郎中令と爲して之に信任し、謀りて己に服せざる大臣諸公子を誅戮し、宗室振恐す、大に土木を興し、調賦を重くし、法を用ふること刻深なり、元年陳勝吳廣等反す、天下響應し、劉邦沛に起り、項梁兵を會稽に擧げ、その他自立して王と稱する者多し、秦の兵屢敗らる、趙高二世に白していふ、關東の盜能く爲すこと無し、憂ふるに足らずと、三年諸侯の兵益ゝ關に迫り秦の將軍多く降るに及び、趙高自ら誅せられんことを恐れて、その壻閻樂をして二世を望夷宮に弑せしむ、

【二千石】 太守をいふ、その年俸二千石なり、漢書の百官表に「郡守秦官掌治其郡、秩二千石」また循吏傳に「庶民所以安其田里而亡歎息愁恨之心者、政平訟理也與ゝ我共此者、其唯良二千石乎、以爲太守吏民之本也」註に「二千石ハ郡守ヲ謂フ」

【二千里ノ外ノ故人ノ心】 月に對して二千里外に在る故人をしのぶ義なり、白氏文集十四の卷に「八月十五夜禁中獨直對月憶元九」と題して「銀臺金闕夕沈沈、獨宿相思在翰林、三五夜中新月色、二千里外故人心、渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深、猶恐清光不同見、江陵卑濕足秋陰」とあり、名高き句なれば、源氏須磨の卷、增鏡新島守、東關紀行等の國文に多く引用せり、元九とは元稹(微之)をいふ、

【二諦】 佛教の語、眞諦・俗諦をいふ、釋氏要覽に「佛所說法、皆假二諦一」

【二桃三士ヲ殺ス】 (二桃殺三士)壽計を以て勇士を殺すをいふ、事文類聚に「齊ノ景公、勇士三人アリ、功ヲ恃ンデ天下ニ恣行ス、公之ヲ患フ、晏子曰ク二桃ヲ賜ヒテ功ヲ計リテ而シテ食ハシムベシト、三士初メ爭ヒテ後讓リ、皆自殺ス、故ニイフ二桃三士ヲ殺スト」事は晏子春秋に詳かなり、諸葛亮の梁父吟に云ふ「一朝被讒言、二桃殺三士、誰能爲此謀、相國齊晏子」三子は公孫接、田開疆、古冶子なり(梁甫ノ吟)を參看せよ、

【日域】 日の出づる處をいふ、文選揚雄の長楊賦に「東震ニ——ニ」

【日昳】 「ヒガサ」昳は正韻に「日旁氣也」と日月の周圍をとりまける雲氣をいふ、晉書に「——五重」

【日午】 正午の頃をいふ、柳宗元の夏中偶作に「南州溽暑如酒、隱几熟眠開北牖——獨覺無餘聲、山童隔竹敲茶臼」

【日暮道遠】 (日暮レ)を見よ、

【日用】 常に用ふるところをいふ、文選左思の魏都賦に「世業之所日用、耳目之所開覺」

【日角】 庭中骨起りて、その狀日の如きをいふ、貴人の相貌なり、後漢書光武紀に「隆準——」また南史梁武帝紀にも「生而有異光、狀貌奇特、——龍顏」

【日下五色ノ雲見ル】 宋史韓琦傳に「弱冠舉進士、名在第二、方唱名、太史奏、日下五色雲見、左右皆賀」

【日晷】 「ヒカゲ」隋書に「揆測——」

【日官】 天文者をいふ、古儀考略に「——ハ史官ナリ」晉紱指南に「司天官ヲ——トイフ」

【日觀峯】 泰山の峯の名、錦字箋に「雞一鳴ノ時、日ノ始メテ出デント欲シ、長サ三丈所ナルヲ見ル」また「秦觀ハ長安ヲ望見シ、吳觀ハ會稽ヲ望見ス」とあり、

【日計足ラズ、歲計餘リアリ】 (日計不足歲計有餘)目前の利は少なけれども、久しきを積みてその益、大となる義、文子の精誠篇に出づ、莊子の庚桑楚篇に「吾日計之而不足、歲計之而有餘、庶幾其聖人乎」とあるに本づく、

【日至】 冬至をいふ、孟子離婁下に「天之高也、星辰之遠也、苟求其故千歲之——可坐而致也」朱註に「日至ヲ言フハ、曆ヲ造ル者、上古十一月甲子朔、夜半冬至ヲ以テ曆元ト爲セバナリ」一說に、——は冬至夏至を合せいふと、亦通ず、

【日就月將】 就は「ナル」なり、將は「ススム」なり、學業の日に月に進歩するをいふ(日ニ就リ)を見よ、

【日新】 日日に舊染の汚をあらひて、自ら新たにする義、大學に「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新」また易の大畜の卦に「大畜剛健篤實輝光、日新其德」また繫辭傳に「富有之謂大業、——之謂盛德」書經仲虺之

詰に「徳日新、萬邦維懐」

【日者】 昔日なり、戰國策に「——樓緩坐ㇾ魏三月」また吉凶を卜する者の稱「ウラナヒシヤ」史記に日者傳あり、索隱に「古人占候卜筮通ジテ之ヲ——トイフ」

【日出三竿】 (日出——)を見よ、

【入朝記】 六卷、宋の陸游著す、乾道(孝宗ノ年號)五年十二月、報を得、差して夔州に通判たり、方に久しく病む、遠役に堪へざるを以て、六年閏五月十八日を以て郷を發し、沿道勝を探り、古を弔し、十月二十七日夔州に至るまでの紀行なり、行文極めて簡潔、考據また精確遊記の上乘とすべし、范成大の吳船錄と竝稱せらる、天明年閒柴野栗山この書を翻刻せり、

【日精】 菊の異名、藝林伐山に「菊有二兩種一、花大氣香、蕊者、爲二甘菊花一、此日精也、花小氣烈、莖青、味苦、爲二野菊花一、其花相似、惟以二甘苦一別之、其葉可レ羹、其花可レ釀、其實可レ枕、其實可レ憑」註に「菊モ亦實アリ、但ダ得難キ耳」とあり、また周禮の「后服鞠衣、其色黃也」の註に「日精ナリ」とあり、また治聾帝女花節花等の異名あり、

【日知錄】 三十二卷、清の顧炎武撰す、乃ち書を讀みて得るところあれば隨時劄記す、故に日知を以て名づく、炎武の學博贍にして能く通貫す、一事毎に必ずその始末を核にし、その異同を究め、參するに證左を以てし而る後之を書に筆す、故に歿稿を易へ、三十年を積みてこの書を成すといふ、その精力を注ぎしことを知るべく隨筆中必讀の好書とす、この書門を分たずと雖も、大抵類を以て編次せり、即ち一卷より七卷までは經義、八卷より十二卷までは政事、十三卷は世風、十四、十五卷は禮制、十六、十七卷は科舉、十八卷より二十一卷までは藝文、二十二卷より二十四卷までは名義、二十五卷は、古事眞妄、二十六卷は史法、二十七卷は注書、二十八卷は雜事二十九卷は兵及び外國の事、三十卷は天象術數、三十一卷は地理、三十二卷は雜考證を述ぶ、清の黃汝成の箋註せし——集釋三十二卷を參考すべし、

【日本研】 倭研に同じ、宋景濂集 ——銘に「夷而華、四海一家、此非文明之化邪」

【日本刀ノ歌】 宋の歐陽修の作なり曰く、

昆夷道遠不復通 世傳切玉誰能窮 寶刀近出日本國 越賈得之滄海東 魚皮裝貼香木鞘 黃白閒雜鉚與銅 百金傳入好事手 佩服可以攘妖凶 傳聞其國居海島 (海一作大) 土壤沃饒風俗好 其先徐福詐秦民 採藥淹留丱童老 百一五種與之居 至今器玩皆精巧 前朝貢獻屢往來 士人往往工詞藻 徐福往時書未焚 逸書百篇今尚存 令嚴不許傳中國 擧世無人識古文 先王大典藏夷貊 蒼波浩蕩無通津 令人感激坐流涕 鏽澁短刀何足云云

【二帝三王】 二帝は唐堯と虞舜と、三王は夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王をいふ詳しくは史記の本紀を見よ、

【二程全書】 六十八卷、宋の程顥(明道)程頤(伊川)二人の遺著を萬曆三十四年、徐必達の合刻せしところにて、吏部右侍郎葉向高竝に必達の序あり、一卷より二十八卷までは二程遺書、二十九卷は遺書附錄、三十卷より三十九卷までは二程外書、四十卷、四十一卷は二程粹言、四十二卷より四十五卷(闕)までは易傳(闕)四十六卷より五十三卷までは經說、五十四卷より五十八卷までは明道文集、五十九卷より六十六卷までは伊川文集、六十七卷は遺文、六十八卷は續附錄とす、

【似テ非ナル者】 (似而非者是に似て實は非なる者をいふ、孟子に「惡ムㇾ紫ヲ恐ㇾ其ㇾ亂ㇾ朱也、惡ムㇾ鄭聲ヲ恐ㇾ其ㇾ亂ㇾ雅也、惡ムㇾ利口ヲ恐ㇾ其ㇾ亂ㇾ信也、惡ムㇾ鄭聲ヲ恐ㇾ其ㇾ亂ㇾ樂也、惡ムㇾ紫ヲ恐ㇾ其ㇾ亂ㇾ朱也、惡ムㇾ鄉愿ヲ恐ㇾ其ㇾ亂ㇾ德也」莠は「ハグサ」穀に似て實のらざる一種の穢草なり、また戰國策に

「夫物多ㇾ相類而非ㇾ也、幽莠之幼也似ㇾ禾、螳牛之黃也似ㇾ虎、白骨疑ㇾ象、武夫類ㇾ玉、此皆似ㇾ之而非ㇾ者也」象は象牙、武夫は碔砆なり、

【二天】 人の恩を謝して仰いで二天の庇に賴るといふ、後漢の蘇章、順帝の時、冀州の刺史に遷る、故人清河の太守たり、章、部を行り、其の奸贓を按ず、太守爲めに酒殽を設け、平生の好を陳し、甚だ歡べり、太守喜びて曰く、人皆一天あり、我獨り二天ありと、章曰く、今日蘇孺文故人と飮むものは、私恩なり、明日冀州の刺史事を按ずるものは、公法なりと、遂に其の罪を擧正せり、

【二典ノ文】 駿臺雜話「天下の賓」の條に見ゆ、書經の堯典舜典をいふ、今の舜典は、もと堯典中の文なりしを僞古文の作者が中斷して舜典を設け、篇首の語を僞作せしことは、閻百詩の古文尚書疏證の說の如くなるべし、

【二無シ】 (無二)他にならぶ物なき義(無二)を見よ、

【二南】 詩經の周南召南をいふ、詩の關雎の序に「周南召南正ㇾ始之道、王化之基」文王都を豐に徙すに及び、岐周の故地を分ちて周公旦、召公奭の采邑となし、二公をして政敎を國中及び南方諸國に宣布せしむ、是に於て德化厚く國中及び南國に洽し、其の國中に得

たる詩に、雞ふるに南國の詩を以てせしを周南といひ、南國に得たる詩を召南といふ、詩經國風の註に「一ニ爲二正風一、所以用二之閨門鄉黨邦國一而化二天下一也」

【二雞】 文選謝靈運の文に見ゆ、賢主嘉賓の二はあはせ得難き義、王勃の滕王閣序に「四美具、二人心ヲ同ジクスレバ其ノ利金ヲ斷ツ」朋友相交るの堅きをいふ(金蘭ノ)を見よ、

【二八】 二列なり、國語に「公賜二魏絳一女樂二八、歌鐘一律ニ公は晉の悼公、魏絳はその大夫なり、大夫は一列の樂あり、故に二列の樂を賜ひたるなり、また十六歲の義、多く女子に用ふ、李白の詩に「正見二當壚女一、紅粧二八年」

【雞】 格物論に「雞ハ丹白烏ノ三色アリ、時ヲ知ルノ畜ナリ」禮記に「祭二宗廟之禮一、雞曰二翰音一」古今注に「雞一名二獨夜一」玄中記に「桃都山有二大樹一、曰二蟠桃一、枝相去三千里、上有二天雞一、日初出、照二此木一、天雞即鳴、天下雞皆隨之鳴(雞雲中ノ寧ロ雞口ノ雞窓ノ函谷ノ)等を參看せよ、

【雞ヲ盡ク】 (韭雞)漢飽宣傳に「正月雞ヲ盡キテ戶上ニ貼シ、葦索ヲ其ノ上ニ懸ケ、符ヲ傍ニ插ム、百鬼之ヲ畏ル」

【雞ヲ割ク】 (雞ヲ割ク)を見よ、

【雞鳴イテ起キ、孳孳トシテ善ヲ爲ス者ハ舜ノ徒ナリ】 孟子盡心上篇に「雞鳴而起、孳孳爲善者、舜之徒也、雞鳴而起、孳孳爲利者跖之徒也」とあり、孳孳は孜孜に同じ、

【雞ニ五德アリ】 (雞有二五德一)韓詩外傳に「田饒謂魯哀公一曰、君不見夫雞乎、頭戴冠者文也、足搏距者武也、敵在前敢鬪者勇也、見食相呼者仁也、守夜不失時者信也、夫是謂之五德」雞の異名を德禽といふは此に本づく、

【二碑功ヲ紀ス】 晉書に「杜元凱好爲身後名、常云高岸爲谷、深谷爲陵、刻二碑一、紀平吳功一、一立峴山之上一、一沈峴山之下一」

【二百年來此ノ詩ナシ】 齊書謝朓傳に「朓善草隸、長五言詩、沈約常云二百年來無此詩也」

【二百六韻】 二百六韻とは文字に四聲即ち平上去入の別あり、之を音韻といふ、一一一一は平聲五十七韻、上聲五十五韻、去聲六十韻、入聲三十四韻あるを合せていふ、古代には自然の音韻に協へ詩を詠ぜしことは詩經三百篇を見て明かなり、齊梁の際に至りて音韻の學興り、周顒は四聲切韻を著し、沈約は四聲譜を著し、皆盛に世に行はる、隋に至りて陸法言切韻

を著して分ちて一一一一と爲せり、その後ち或は百七韻とし、或は百六十韻とし、或は七十六韻とし、分合一ならず、清の毛奇齡に至りて定めて百六韻と爲せり今日詠詩に用ふるもの即ち是れなり(韻)を見よ、

【入道】 佛の正道即ち菩提道に入るをいふ、高僧傳に「法顯云、本不以有父而出家也、今正欲遠塵離俗、故一一而已」出家して僧となるをいふ、

【二不能二短】 後山叢書に「蘇明允詩ヲ能クセズ、歐陽永叔賦ヲ能クセズ、曾子固韻語ニ短、黃魯直散語ニ短ナリ」

【入幕ノ賓】 特に親む所ろの賓客をいふ、晉書郗超傳に「郗超、桓溫ノ參軍タリ、謝安、王坦之溫ニ詣ル、溫、超ヲシテ帳中ニ臥シテ其ノ言ヲ聽カシム、風動イテ帳開ク、安笑ヒテ曰ク、郗生ハ入幕ノ賓トイフベシト」

【二柄】 二つの權柄をいふ、魏元忠曰く「天下ノ柄二アリ、文武ノミ」と、また劉毅が新論に曰く「賞罰ヲ以テート爲ス、賞ハ功ヲ勸メ、罰ハ過ヲ懲ス」

【入木】 「ジュボク」と訓む、墨の木にしみこむこと、筆力のつよきによる、轉じて習字の義にも用ふ、書斷に「王羲之、晉帝時、祭二北郊一更二祝版一、工人倒二之一、筆入レ木三分一とあるに本づく、

能ク重任ニ勝ヘテ遠ニ到ル」

【任俠】「ヲトコダテ」相與に信ずるを任と爲し、是非を同じくするを俠といふ、漢書季布傳に「爲ニ一有名」註に「俠ノ言タル挾ナリ、權力ヲ以テ、人ヲ俠輔スルヲイフ」

【人閒ノ一炊】太平記卷三に見ゆ、人世の「ハカナキ」事、黄粱の飯を炊く閒ほどなるに譬ふ(邯鄲ノ夢)を見よ、

【人閒萬事塞翁ガ馬】人の禍福は、定まりなきをいふ、淮南子人閒訓に「塞上ニ近キ人、術ヲ善クスル者アリ、馬故ナクシテ亡ゲテ胡ニ入ル、人皆之ヲ弔ス、其ノ父曰ク、此レ何ゾ乃チ遽ニ福トナラザルヲ知ランヤト、居ルコト數月、其ノ馬胡ノ駿馬ヲ將キテ歸ル、人皆之ヲ賀ス、其ノ父曰ク、此レ何ゾ乃チニハカニ禍トナラザルヲ知ランヤト、家良馬ニ富ム、其ノ子騎ヲ好ミ、墮チテ其ノ髀ヲ折ク、人皆之ヲ弔ス、其ノ父曰ク、此レ何ゾ乃チ福トナラザルヲ知ランヤト、居ルコト一年、胡人大ニ塞ニ入ル、丁壯者ハ、弦ヲ引イテ戰フ、塞ニ近キノ人死スル者十ニ九、此レ獨リ跛タルノ故ヲ以テ、父子相保ツ、故ニ福ノ禍トナリ、禍ノ福トナル、化極ムベカラズ、深測ルベカラザルナリ」元の伊熙晦機の詩に「人閒萬事塞翁馬、推枕軒中聽雨眠」推枕軒は、晦機の

住持たりし仰山の方丈の寢室の名、

【任子】高官の子、父の廕に由りて、官に任ずる者、漢書王吉傳に「宜ク明ニ選求賢除ニ一之令ニ庇蔭子孫同じ、

【任人】心に兇惡を包み藏くす佞人をいふ、書經舜典に「柔遠能邇通ニ惇德允ニ元而難ニ一ニ黜ニ夷率服ニ」難とは拒絕する義、

【任他】從他に同じ「サモアラバアレ」とよむ「ママヨ」とうちまかす義、詩に多く用ふ、

【忍冬】草の名、古名「スヒカヅラ」本草別錄に「一ト金銀花、一名鴛鴦藤」とあり、藥用とす、

【蒜】音サン古名「オホビル」韻會に「葷菜ナリ」清異錄に「一ハ五代宮中ニ麝香草トイフ」

【忍辱】屈辱の事に遇ふも能く安忍して、恨み怒ることなきをいふ、佛經の語、法界次第に「內心能安ニ忍外所辱境ニ故名ニ一ニ袈裟を一ニ鎧といふも、之を服して能く一ニを持する義に取る、

【忍之一字衆妙之門】宋元通鑑に「宋ノ富弼、子弟ニ訓ヘテ曰ク、忍ノ一字ハ衆妙ノ門ナリ、若シ淸儉ノ外ニ、更ニ一ノ忍ノ字ヲ加ヘバ、何事カ辦ゼザラント、其ノ少時、人之ヲ詬罵スル者アリ、弼佯リテ聞カザルマネス、或人之ヲ告グ、弼曰ク、恐ラクハ是レ他人ヲ罵リシナラン、告グルモノ曰ク、否、明カニ公ノ名ヲ呼ベリト、弼曰ク天下豈名ヲ同ジクスルモノナカランヤト、罵リシ者之ヲ聞キテ大ニ慙ヅ」また呂本中の官箴に「一一一一一、當官處事尤是先務若能淸愼勤之外、更行ニ一忍字ニ何事不ニ辦」

【任罷】任は事に使役せらるるをいひ、罷は疲なり、役使に疲るる義、漢書賈山傳に「賦斂重數ニ百姓ニ一ス」

【如意】佛家の具、心の表として菩薩これを取るといふ、玉・鐵・骨・角・木・竹等にてつくる、長さ尺餘、端、卷曲すること篆書の心の字の如し、釋氏要覽に「一ハ元來梵語、阿那律の譯字にて古の爪杖(マコノテ)なり、脊に痒ありて手のとどかざるところを掻くに、人の意の如くなるに取るといふ、齊垣榮祖傳に「高帝鐵ヲ以テ、脊鎭ニ一ヲックル、甚ダ壯大ニシテ以テ不虞ニ備フ」

【如意寶珠】この珠を執持すれば、所願意の如くなりといふ、智度論に「如意珠出自ニ佛舍利ニ法華經に「摩尼珠瓔珞如意珠瓔珞」とあり、

【如意輪】觀世音の像の六臂ありて如意寶珠を持ちたる者の稱、

【如是我聞】「是ノ如ク我聞ク」なり、一切經の首には必ずこの一句あり、これは佛將に入滅せんとせし時、阿

難尊者が佛に向ひ、佛滅後に、經藏を結集(編輯ノ義)せんに、如何なる語を以て發端とせんと問ひけるに、佛答へて外道婆羅門の經には、阿(非有ノ義)偃(非無ノ義)の二字を置く、かくの如く理窟に渉りし語を用ふるは諍論の基なり、佛經は必ず一一一一の句を以て發端とせよ、これ一は他と諍論を招く患なく、又汝弟子等が佛に信順せし意を示すなりと敎へられしに由る、

【如夫人】(如夫人)を見よ、

【韭】音キウ、菜の名、禮記曲禮に「一ヲ豐本トイフ」爾雅釋草に「蕦ハ山韭ナリ」疏に「一ノ山中ニ生ズル者ヲ蕦ト名ヅク」爾雅翼に「一ハ蝯人ノ菜ナリ、其ノ歲一ニ種ウルヲ須ヒザルヲ以テナリ」郭林宗、友の來るにより夜雨を冒して韭を剪りて饌せり、杜甫の詩に「夜雨剪春韭ニ來ノ劉子翬の詩に「一畦春雨足、翠綾剪還生」明の周翼の題「華季充剪韭軒」に

吳下有ニ田宜ニ種ニ韭　高風莫ニ笑庾郎貧　翬飛ニ畫棟ニ靑林表　玉洗ニ行盤ニ綠水濱　夜雨剪來葅自長　春風吹起碧初勻　客來一節分ニ淸供ニ　不ニ與區區肉食人

【二卵ヲ以テ千城ノ將ヲ棄ツ】(以ニ二卵ニ棄ニ干城之將ニ)小過あるを以てすぐれたる大將を用ひざるをいふ、

齊治通鑑の周安王二十五年に「子思言荀變於衛侯曰、其才可將五百乘、公曰、吾知其可將然變也嘗爲吏賦於民而食人二鷄子故弗用也、子思曰、夫聖人之官人猶匠之用木也、取其所長棄其所短、故杞梓連抱而有數尺之朽、良工不棄今君處戰國之世選不牙之士而以二卵棄千城之將此不可使聞於鄰國也、公再拜曰、謹受教矣」千城を見よ、

【楡】 說文に「一ハ白枌ナリ」格物論に「三月ニ莢落ツ、小錢ノ如シ」白樂天の句に「楡莢抛錢柳展眉」鄴中記に「進鄴門夾道種楡、人行其下」周禮夏官に「掌取楡柳之火」また枌楡は鄉名、漢の高祖、社を此に立つ、楡林は塞名、水經注に見ゆ、

【二王】 晉の王羲之とその第七子王獻之とをいふ、齊の王僧虔の能書錄に「王羲之、晉右軍會稽內史、博精群法、特善草隸、古今無二、王獻之、晉中書令善隸蓁、骨勢不及父而媚趣過之」と、羲之字は逸少、王曠の子、骨鯁を以て稱せらる、書法を衛夫人に學ぶ、子の凝之徽之獻之竝に盛名あり、獻之字は子敬、幼にして父に學び、次て張芝に習ひ、別に一家を成す、

また佛法守護の二神の稱、寺門に立てる金剛力士なり、左輔を密迹金剛といひ、右狗を那羅延金剛といふ、共に勇猛獰惡の相を爲す、正法念經に「梵王執蓋請轉法輪、金剛揮杵護衛敎法」

詠虹　唐　蘇味道

紆餘雲屋結　窈窕架天津
空因壯士見　還共美人沈
遊勞含貝玉　神光藥瑞金
獨留長劒影　寧負昔時心

ヌ

【糠ヲ舐リ米ニ及ブ】 （舐糠及米）糠をねぶり盡せば米に至る、以て土を削り盡せば、國を滅すに至るに喩ふ、史記呉王濞傳に「里語有之、一呉一呉、呉與膠西、知名諸侯也、一時見察、恐不得安卑矣」

【盜ニ糧】 俚諺なり、戰國策に「范雎說秦王曰、此所謂藉寇兵而齎盜食者也」敵を助けて勢を增さしむるに喩ふ、

【蓴】 水草「ジュンサイ」の古名、池澤等の中に生ず、葉は楕にして深綠色、厚くして「ツヤ」あり、莖は紫がかりて長く連なれる形繩の如し、葉莖共に滑かにして冰の如き涎あり、嫩葉は卷きて荷の卷葉の如し、夏時採りて食ふ、又の末小花を開く、細瓣にして紅紫なり、蓴一に蒓に作る、通ず、綱目集覽に「一生水中、葉似鳧葵、採莖可啜、三月至八月、莖細如釵股、名曰絲蓴」韻會に「水葵也」陸佃云ふ「一水ヲ逐ヒテ性滑ナリ、故ニ亦之ヲ淳菜ト謂フ」（蓴、遵）を參看せよ、

【白膠木】 木の名、古名ヌリデ」山野に多く生ず、高さ丈餘、春新葉を出す、漆の葉に似て廣くして粗齒あり、對生す、夏一尺許の穗を生ず、枝多くして細白花を開く、數百千むらがること漆の花に似たり、夏以後葉背に泡を生じ、中に蟲あり、常には生五倍子といひ、粉とせるを五倍子粉といひ、「ハグロメ」に用ひ、又藥用ともして五倍子といふ、秋に至り早く紅葉して落つ、

（說文池也、一說回曰池、曲曰沼、詩大雅鳧鷖篇曰、
王在靈囿　麀鹿攸伏、麀鹿濯濯、白鳥鶴鶴、王
在靈沼、於牣魚躍　召南采蘋篇曰、于以采蘋
于沼于沚　于以用之　公侯之事

【佞巧】「クチマヘヨク」利口なる義、史記周本紀に「爲人ー」

【年號】事物紀原に「ー始自漢武帝建元元年」

【寧馨兒】寧馨は如此(コノヤウナ)といふ義、晉宋閒の俗語、世說に、晉世を引きて「山濤見王衍曰、何物老嫗生此ー兒、然誤天下蒼生者、必此人也」

【年所】年數をいふ、所は助辭、文選張衡の西京賦に「多歷ー載」

【寧靜】心安らかにして、靜かなる義、諸葛亮の「戒子書」に「君子之行、靜以修身、儉以養德、非ー無以明志、非ー無以致遠云云」

【寧戚】(南山ノ歌ヲ)を見よ、

【寧都】南宋南齊の縣名、今のーー州の北に在り、明の縣名、江西省贛州府に屬す、今の江西ーー州治是れなり、

【寧都三魏文集】八十二卷、清の林時益編す、魏際瑞(伯子)、魏禧(叔子)魏禮(季子)三兄弟の詩文集なり、兄弟共に文名あり、就中叔子最も著る、寧都は三魏の鄉里の名、時益は字を確齋といふ、南昌の人、叔子の門人なり、

【佞媚】「クチマヘヨク」して「コビヘツラフ」禮記の曲禮に出づ、

【寧武子】(寧兪ガ)を見よ、

【佞佛】(佛ニ)を見よ、

【寧兪ガ成公ニ從フ】駿臺雜話「歲寒知松柏」に見ゆ、寧兪は、衛の大夫武子なり、成公、晉に叛き楚に與せんと欲し、國人の出す所ろとなる、城濮の戰に楚師敗るると聞き懼れて楚に奔り、遂に陳にゆく、寧武亡に從ひ百方之を救護せり、左傳僖公二十八年を見よ、また萬世統譜に「武子、文公有道ノ時ニハ、事ノ見ルベキナシ、成公無道、國ヲ失フニ至リテ、乃チ能クソノ閒ニ周旋シ艱險ヲ避ケズ、卒ニ其ノ身ヲ保チ、以テソノ君ヲ濟フ、孔子之ヲ稱シテ曰ク、邦有道則智、邦無道則愚、其智可及也、其愚不可及也ト」

【寧王】天下を安ずる王といふ義、書經大誥に「ー遺我大寶龜」

【饒舌】多言(シャベル)をいふ、人天眼目に「維摩纔點頭、文殊便ーー」(饒舌)を見よ、

【饒鉞】佛家の樂器なり、銅にて作る、圓くして皿の如く、中凹めり、二枚掌ち合せて聲を發せしむ、僧史畧に「初集鳴ーー、唱佛歌讚」もと鐃と鈸と二種の樂器の名なりしが、後世混じて一種の樂器の名稱とせり、

【猫】格物論に「猫ハ鼠ヲ捕フル獸ナリ、斑文一ナラズ、目睛旦暮ハ圓ナリ、午ニ及ビ竪斂シテ樣ノ如シ、ソノ鼻端常ニ冷カ、タダ夏至ノ一日暖カナリ」と、李林甫人と爲り柔にして心險し、人之を李猫といふ、揮麈譚に「萬濟寺ニ、彬師トイフ僧アリ、善ク戲言ス、嘗テ客ニ對ス、猫其ノ旁ニ踞ス、彬師客ニ謂ヒテ曰ク、雞ニ五德アリトイフ、今吾ガ此ノ猫ニモ亦コレアリ、客其ノ說ヲ問フ、曰ク、此ノ猫、鼠ヲ見テ捕フルコトナシ、是レ仁ナリ、鼠來リテ其ノ食ヲ奪ヘバコレヲ諉ル、義ナリ、客至リテ饌ヲ設クル時、驅ケ出ルハコレ禮ナリ、能ク食ヲ藏シ盜ク雖モ、竊ミテ之ヲ食フ、コレ智ナリ、冬來レバ則チ窟ニ入ル、コレ信ナリト、客之ヲ聞キテ絕倒シテ大ニ笑フ」

【根ヲ深クシテ蔕ヲ固クス】(深根固蔕)根本を堅固にするをいふ、老子五十九章に「有國之母、可以長久、是謂ーーー長生久視之道」とあり、

【頗ク】ハ長風ニ乘ジテ萬里ノ浪ヲ破ラン】(長風)を見よ、

【葱】古名「キ」一音なれば異名一文字といふ、根を賞するによりて「ネギ」といふ、群芳譜に「一一名ハ菜角、一名ハ知事草、一名ハ鹿胎」酬世錦囊に「ーヲ菜伯ト曰フ、能ク五味ヲ和スルヲ以テ故ニイフ」

【葱ヲ斷ズルニ寸ヲ以テ度トナス】(斷葱以寸爲度)後漢書陸續傳に續の獄中に在りし時、母來りて饋食を作りて門卒に付して之を進めし事を敍して曰く「續、食ニ對シテ悲泣シ自ラ勝フル能ハズ、使者怪ミテソノ故ヲ問フ、續曰ク、母來リテ相見ルヲ得ズ、故ニ泣ク耳ト、使者大ニ怒リ以テ門卒ノ意氣ヲ通傳セルト爲シ、召シテ將ニ之ヲ案ゼントス、續曰ク、倘羹ヲ食フニ因リテ、母ノ自ラ調和セシ所ロタルヲ識ル、故ニ母ノ來リシヲ知ルノミ、人ノ告ゲシニ非ルナリト、使者何ヲ以テ母ノ作リシ所ロタルヲ知ルカト、續曰ク、母嘗テ葱ヲ以テ肉未ダ嘗不ル方ーーーーーー是ヲ以テ之ヲ知ルト」

【鼠】格物論に「鼠ハ善ク盜ヲ爲ス、族類一ナラズ、鼯鼠アリ善ク飛ブ、兎首鹿耳音嘷ユル如シ、大鼫鼠アリ、地ヲ穿チテ窟中ニ行ク、火鼠アリ、火ニ入リテ焚ケズ、毛ハ布ニ爲クルベシ、水鼠アリ、水ニ入リテ溺レズ、魚ヲ捕ヘテ食フ、云云」漢書五行志に「鼠者小蟲性盜竊」

張湯、兒たりし時、舍を守る、鼠、肉を盜む、掘りて盜鼠及び餘肉を得たり、鼠を劾して掠治し、爰書を傳て訊鞫論報し、獄を具して鼠を磔す、抱朴子に「鼠壽三百歲、滿百歲則色白、善憑人而下、名曰仲、能知一年中吉凶及千里外事」俗に白鼠家に棲めば福とし、又奉公人の老實なる者を「シロネズミ」といふは此に本づく、

【鼠ヲ以テ璞ト爲ス】（以鼠爲璞）つまらぬ物を寶とする義、事文類聚に「晉鄭人乾鼠ヲ以テ璞トナシテ、之ヲ周ニ鬻グ、宋ノ愚夫、亦燕石ヲ寶トシテ、緘櫝スルコト十重」とあり、璞は玉の未だ琢かざるものなり、尹文子曰く「鄭人ハ玉ノ未ダ琢カザル者ヲ謂ヒテ璞トナシ周人ハ鼠ノ未ダ腊セザル者ヲ謂ヒテ璞トス、周人、鄭ノ賈人ニ過ヒテ曰ク、璞ヲ買ハント欲スル乎ト、鄭ノ賈曰ク、之ヲ欲スト、璞ヲ出シテ之ヲ示ス、乃チ鼠ナリ、因リテ謝シテ取ラズ」㊟

【鼠ダニ皮アリ】禮儀なき人を惡む、「コトバ」詩經の鄘風に「相鼠有皮、人而無儀、人而無儀不死何爲」また「相鼠有齒、人而無止、人而無止不死何俟」また「相鼠有體、人而無禮、人而無禮胡不遄死」とあるに本づく、

【鼠捕ル猫ハ爪ヲ匿ス】俚諺なり「能ある鷹は爪をかくす」と義同じ、淮南子に「猛獸之擾也、匿其爪」また說苑に「君子愛口、虎豹愛爪、古諺曰、將飛者翼伏、將噬者爪縮」とあるなどに本づく、

【鼠ニ投ゼント欲シテ器ヲ忌ム】（欲投鼠而忌器）漢書の賈誼傳に「里諺ニ曰ク、鼠ニ投ゼント欲シテ器ヲ忌ムト、此レ善諭ナリ、鼠器ニ近ヅクヲラ尙ホ憚リテ投ゼズ、其ノ器ヲ傷ケンコトヲ恐ルレバナリ、況ヤ貴臣ノ主ニ近クニ於テヲヤ」と、鼠に物を投げつけて擊ち殺さんとすれども、傍に器物ありて、之を傷はんことを恐る、以て君の近習の奸臣を除かんと欲するも君を傷はんことを恐るるに喩ふ、

【鼠ハ社ニ憑リテ貴シ】穴をふすべて鼠を捕らんとするも社の燒けんことをおそれてふすべず、君の威をたのみて恣にする小人に喩ふ、文選に「鼠憑社貴、狐籍虎威」とあり、古語に「社鼠不ㇾ灌、城狐不ㇾ熏」とあるも同じ意なり（社鼠）を參看せよ、

【女貞】實は鼠糞に似て葉は冬青に似たり、春して「ネズモチ」ともいふ、多く庭際に植ゑ又籬とす、葉は「サカキ」に似て兩對し、厚くして「ツヤ」あり、夏月枝の梢毎に四五寸の穗を生じ、枝を分ちて白花を開く、實は楕圓にして熟すれば黑し（——）を見よ、

【熱ヲ執リテ濯ハズ】（執熱不濯）熱を執る者は、水を以て手を濯ふべし、若し之を濯はざれば、熱を救ふこと能はず、徒勞を厭ひて、大事を遂げざるに喩ふ、左傳に「詩云、誰能執熱逝不以濯、禮之於政、如熱之有」濯也、濯以救熱、何患之有」と、詩は大雅なり、また孟子に「今也欲無畔於天下而不以仁、是猶執熱而不以濯也」

【熱官】要路に當りていそがはしき官をいふ、北齊書王晞傳に「性實疎緩、不堪時務、非不愛——、但思之煩熱爾」

【熱鬧】人衆くしてさわがし、雜沓して靜かならざる義、白居易の句に「——漸知隨念盡」喧鬧に同じ、

【熱中】躁急にして心の熱するをいふ、孟子萬章上篇に「仕則慕君、不得於君則——」

【涅槃】名義集に「涅ヲ不生トイヒ、槃ヲ不滅トイフ、不生不滅ヲ、太涅槃ト名ヅク」とあり、釋氏要覽に「釋氏ノ死ヲ——ト謂フ、圓寂・歸眞・歸寂・滅度・遷化・順世皆一義ナリ、便ニ隨ヒテ之ヲ稱ス、蓋シ俗ニ異ニスルナリ」

【念】俗朋に廿の字と音を同くす、故に廿の字の代用とす、丹鉛總錄に「廿ノ字韻書皆音入、惟市井商賈音念、而學士大夫亦從其誤也云云」韓愈に後念九日復上宰相書あり、金石文字記に「開業碑陰多宋人題名、有曰元祐辛未陽月念五日題、以廿爲念、始見於此」ことあるは金石文に念を用ふる始をいへるなり、

【拈香】拈は撮なり、指にて物をツマムなり、又「ヒネル」燒香に同じ、祖庭事苑に「釋氏之作佛事、未嘗不以——爲先、是所以記香者而表信、經曰信是道源、功德母、長養一切諸善根、此其意也云云」

【年紀】年齡なり、後漢書光武紀に「不計優劣、不論——」

【拈華】拈は「ヒネル」義、五燈會元に「世尊靈山ノ會上ニ在リテ、華ヲ拈シ衆ニ示ス、是ノ時衆皆寂然タリ、惟ダ迦葉尊者破顏微笑ス、世尊イフ、吾ニ正法眼藏、涅槃妙心、實相無相微妙ノ法門アリ、不立文字敎外別傳、摩訶迦葉ニ付囑ス」とあり、世尊は釋迦なり、迦葉はその弟子なり、釋迦蓮華を拈りて衆に示したれども、衆その何の意たるかを解する能はざりしに、迦葉獨りその意を悟りて微笑したり、所謂以心傳心の妙處なり、

【燃犀】「サイカク」を「モヤス」明かに幽暗を照すをいふ（牛渚）を見よ、

【念珠】佛を祈念する時手につなぎもつ「タマ」一に數珠ともいふ、舊唐書の李輔國傳に「輔國不茹葷血、常

爲(スル)レ行(ヒ)レ視(ル)レ事之暇、手持(ニ)レ——(ヒ)ニ

【然燃】(ネンレン)（燃ヲ燃ク）を見よ、

【念書】(ネンショ)讀書に同じ、雙槐雜書に「韓忠定、過(ギ)レ冬寒(ニ)レ命(ジ)レ小孫(ニ)温(メシ)レ足、敎(フ)レ其(ニ)——(ヲ)ニ

【年年歳歳花相似タリ】(ネンネンサイサイハナアイニタリ)　唐の宋之問の有(ル)所(ト)レ思(ヒ)と題する詩の句なり、今全詩を擧ぐ（唐詩選萬マタ唐詩別裁集ニハ題ヲ代(ル)悲(ノ)白頭翁(ノ)ニ作リ、劉希夷ノ詩トス從フベシ）曰く

洛陽城東桃李花　飛來飛去落(ツ)誰家、幽閨兒女惜(ム)顔色、坐見(テ)落花長嘆息、今年花落顔色改　明年花開復誰在、已見松柏摧(レ)爲(ル)レ薪(ト)、更聞桑田變成(ル)レ海(ト)、古人無(シ)復洛城東、今人還對(ス)落花風、年年歳歳花相似、歳歳年年人不(レ)同、寄言全盛紅顔子、須(ラク)憐(ム)半死白頭翁、此翁白頭眞可(レ)憐、伊昔紅顔美少年、公子王孫芳樹下、清歌妙舞落花前、光祿池臺文錦繡、將軍樓閣畫神仙、一朝臥病無(シ)相識、三春行樂在(リ)誰邊、宛轉蛾眉能幾時、須臾鶴髮亂如(レ)絲、但看古來歌舞地、惟有(リ)黄昏鳥雀悲、

【年年ニ春ノ草ノミ生ヒタリ】(ネンネンニシュンノクサノミオヒタリ)　東關紀行に見ゆ、人死してすでに久しく、ただ年年春草の墓邊に生ずるのみなるをいふ、白氏文集二に、

掩(フ)レ淚別(ル)鄉里(ヲ)、飄風將(テ)遠行(ク)、茫茫綠野中、春盡孤客情、驅馬上(ル)丘隴(ニ)、高低路不(レ)平、風吹棠梨花、啼鳥時(ニ)一聲、古墓何代人、不(レ)知(ル)姓與(ト)名、化作(テ)路傍土、年年春草生、感(ジ)彼忽自悟、今我何營營、

とあり、因にいふ、古事談一に「顯基中納言者、後一條院龍臣也、天皇崩御之後、忠臣不(レ)仕(ヘ)二君(ニ)ト云テ、七七聖忌之後、登(リ)天台楞嚴院(ニ)落飾入道、云云、發心之根源天皇晏駕之期、梓宮不(レ)供(セ)燈(ヲ)、問(ハ)其由(ヲ)、所司皆依(リ)勤(メ)新主之事(ヲ)云云、聞(テ)此事(ヲ)、忽發心云云、尋常之時、常詠(ジ)白樂天詩、古墓何世人不(レ)知(ル)姓與(ト)名、化爲(テ)道傍土(ト)、年年春草生(ト)、又イフ、アハレ罪ナクテ、配所ノ月ヲ見バヤ云云住(ム)大原山(ニ)決定往生人也法名圓照」とあり　㊞

【合歡木】(ネムノキ)　古名「ネブリノキ」今は又「ネムノキ」ともいふ、高さ二三丈、枝繁茂し、細小の葉對生す、暮に至れば、その葉兩兩相合ひて眠るが如し、朝に至りて復、開く、夏日枝の梢毎に花開く、形細絲を聚めたるが如し、色半は白く、半は淡紅にして長一寸餘、後に莢を結ぶ、長さ三四寸、子は米粒の如し、格物論に「夜合一名ハ合歡、亦合昏ト名ヅク、圖經ヲ按ズルニ、五臟ヲ安和シ、心志ヲ和ゲ、人ヲシテ歡樂セシム、人家多ク庭除ニ植ウ、枝莖ダ柔弱ナリ、葉ハ皂莢(サイカチ)・槐ニ似テ、極メテ細クシテ密ナリ、ソノ葉暮ニ至リテ合ス云云」宋の韓琦の詩に「葉葉自相對、開斂隨(フ)陰陽、不(レ)慚曆草滋、獨擅(ニス)レ蘐階祥(ヲ)、得(ル)此合歡名(ヲ)、愛忘誠可(レ)忘、茸茸紅白態、百和從(ヒ)風颺(ル)」

【年譜】(ネンプ)　その人、一代の年代記、韓柳——八卷、朱子——四卷、陸象山——二卷等あり、

【念佛】(ネンブツ)　佛を念ずる義、又南無阿彌陀佛の六字の名號を唱へて祈ること、法華經に「以(テ)深心(ヲ)念佛(シ)、修(シ)持淨戒(ニ)、資(ケ)積經に「高聲念佛魔軍退散」

【念佛三昧】(ネンブツサンマイ)　一心不亂に佛を念ずる義、華嚴經に「——爲(ニ)見(ル)佛(ヲ)、命終之後、生(ル)佛前(ニ)

【念力】(ネンリキ)　心を一點にあつめて餘念なきなり、遺敎經に「若(シ)レ——堅強(ナレバ)雖(ドモ)レ入(ル)五欲賊中(ニ)、不(レ)爲(ニ)所(ト)レ害(セ)、譬(ヘバ)如(キ)著(テ)鎧(ヲ)入(レ)陣(ニ)、則(チ)无所(ト)レ畏(ル)、是名(ヅク)不忘念(ト)、法華經科註に「得(ル)念力(ヲ)故不(レ)嗔(ラ)、得(ル)定力(ヲ)故不(レ)恨(ム)、大藏法數に「念(ジ)正道及助道、若念根增長則(チ)能破(ス)諸邪想(ヲ)、成就一切出世正念功德(ヲ)、此爲(ル)——(ノ)レ力(ト)也」

【念力岩ヲ通ス】　偶談なり、事を爲すに至誠を以て專心に力むれば成らざること無きに喩ふ、朱熹の語に「陽氣發處、金石亦透、精神一到、何事不(ン)成」劉向の語に「誠之至也、金石爲(ニ)之開、況人乎」韓詩外傳に「楚熊渠子、夜行見(テ)寢石(ヲ)、以爲(ヘラク)伏虎(ト)、射(テ)之(ニ)沒(シ)レ金(ヲ)、飲(テ)羽(ヲ)、視(レバ)レ之(ヲ)石也、因復射(ル)レ石(ヲ)、矢摧(ケ)無(シ)レ迹(ヲ)、漢書に「李廣守(リ)北平(ニ)、出獵、見(テ)草中石(ヲ)、以爲(ヘラク)虎(ト)、射(テ)レ之(ヲ)、中(テ)沒(シ)レ鏃(ヲ)、視(レバ)レ之(ヲ)石也、明日復(タ)射(ル)レ之(ヲ)石不(レ)能(ク)入矣」と、あるなどその例とすべし、

乞(ネ)猫　　明文徵明

珍重(シ)從(ヒ)レ君(ニ)乞(フ)二小貍(ヲ)一　女郎先已(ニ)辦(メ)二氈氍(ヲ)一
自(リ)緣(フ)夜(ル)榻思(フ)二高枕(ヲ)一　端(ニ)要(ス)山齋護(スルテ)二詩書(ヲ)一
迢聽自將(テ)鹽裹(ミ)レ去(ルヲ)　簷(ニ)前莫(レ)道(フ)貪無(シ)レ魚(ト)
花陰滿地春堪(タリ)レ戲(ルルニ)　正是(レ)晝眠二月餘(ノ)